



Title	2005年度(若手研究集合)報告書
Author(s)	報告書編集委員会
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13160
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学 / Interface Humanities
Note	

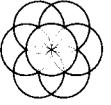
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Osaka University
The 21st Century COE Program
Interface Humanities
Research Activities

インターフェイスの人文学
2005年度<若手研究集合>報告書



目 次

はしがき 1

第一部

序論 共同研究プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」における本報告書の位置

森 宣雄 5

遠き眺めを見つめる —ナショナリズムの「臨床的」研究のためのおぼえがき—

上田 達 17

「近世帝国」概念と東南アジア：世界システム論との対話

蓮田 隆志 25

Celebrating colonial encounters:

An examination of the postcolonial discourses and the socio-cultural politics of historical education in the Netherlands, in terms of the 400th anniversary of the Dutch East India Company, 2002

Kayoko FUJITA 39

民主主義の民族誌と民族誌の民主化

——人文学における臨床的アプローチのために

加藤 敦典 57

言語調査を内観する —調査者の思いとフィールドの声—

李 吉鎔 79

学知の還元 —調査報告を通して学ぶこと—

高阪 香津美 101

1970年代以降の科学社会学の展開 ～「横断性」の観点から

家高 洋 119

社会心理学の「歴史」とく横断性>

——人文学のインターフェイスの「道具」として——

加藤 謙介 139

隠された歴史との対話

——実証主義の限界についての方法的考察——

森 宣雄 157

考現学の混沌から討議空間のデザインを考える

——「研究」の〈経験〉とく表現>

伊藤 遊 183

To Be or not To Be… Interesting

- A Hamlet Soliloquy on the Choices of Patterns for Social Interaction:

The Cases of a Musician and a Musicologist -

Stella ZHIVKOVA ……199

ふたつの研究会をめぐるエスノグラフィック・ノート

アイロニーを超える力

田沼 幸子 ……215

Finding meaning in ‘yama nashi, ochi nashi, imi nashi’

- women and girls creating alternatives to homosocial and heterosexist pornography

Jessica BAUWENS ……225

ディシプリンという場：「非-場」を生きる研究対象と、それへのアプローチ方法

樋上 千寿 ……239

資料：2005年度個別論文検討研究会概要

……259

第二部

「対話」をめぐるグループ・ダイナミックス

——地域における人と動物の関係の事例より——

加藤 謙介 ……267

在日ブラジル人の子どもたちが直面している現実

—母語による会話力調査を通して—

高阪 香津美 ……297

はしがき

本報告書は、大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」に参加する若手研究者の活動報告書である。

第一部には、2004年度から開始した共同研究会、〈若手研究集合〉における共同研究プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」（研究代表者：家高洋・森宣雄）の活動から生まれた諸論文を収録した。また第二部には、共同研究とは別に、個々の研究会メンバーが本COE事業の一環として行った個人研究活動の報告論文を収めた。

第一部の諸論文が書かれた経緯および背景については、序論を参照されたい。第二部については、それぞれの論文が各プロジェクトの概要を説明しているので、個別に参照いただきたい。

なお、本報告書に収録した論文等の書式は、各執筆者が属するそれぞれ異なる専門分野の様式を反映しているか、もしくは新たな形式への試行を含むものであるが、これらの差異を浮き彫りにすることもまた、この〈若手研究集合〉の趣旨に合うものと考え、あえて統一を求めなかった。

第一部

序 論

共同研究プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」 における本報告書の位置

森 宣雄

目 次

はじめに

- 1 「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」について
- 2 人文学にとっての異分野共同研究の意義
 - 2.1 人文学とはなにか
 - 2.2 研究の越境横断と〈臨床の知〉
 - 2.3 人文学にとっての他者
 - 2.4 学と学との臨床的な越境横断
 - 2.5 もうひとつの他者との出会いにむけて
- 3 人文学の討議空間創出のためのメソッドとツール
 - 3.1 討議支援ツールとしてのディスカッション・ペーパー
 - 3.2 キーワード・マッピング
 - 3.3 デジタル・メディアをととした討議空間

おわりに

はじめに

大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」に参加する若手研究者（特任助手、特任研究員およびリサーチ・アシスタント他）は、全員参加の共同研究会、〈若

手研究集合)を2004年度から開始した。本報告書の第一部は、この若手研究集合における共同研究プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」(研究代表者:家高洋・森宣雄)の活動から生まれた諸論文を収録した。この序論では第一部の諸論文が書かれた経緯および背景を説明するものとして、本プロジェクトの概要を述べていきたい。

というのも、この共同研究プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」は、2005年度から2006年度まで継続実施され、包括的な活動報告は2006年度最終報告書において公表する予定である。そのため、この報告書の第一部は、本プロジェクトにとっては部分的な中間報告としてあり、プロジェクトの全体像における本報告書の位置づけを明確にしておく必要があるからである。

1 「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」について

本プロジェクトは、これまでに類例を見ないような冒険的な問題の投げかけに端を発して生まれたものである。

私たち若手研究集合は、大卒では同じく人文学に属するとはいえ、研究領域や対象地域、ディシプリン、依拠する理論などでなんらの共通点も持たない人文諸学の若手研究者の集合体である。文学、歴史学、哲学、人類学、民俗学、社会学、美学、言語学、心理学など、専攻を異にする研究者約20人が、2004年春、一堂に集められた。そして「人文学についてのまったく新たな問いを発見せよ」との課題を与えられた。

本研究会はここから出発し、そもそも人文学とはなにか、われわれの共通点とは何で、何ゆえに通じあえないのか、議論を重ねた。そして1年近くの模索をへて構想するにいたったのが、本プロジェクト「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」である。

一言でいうと、本プロジェクトは、人文学の共同研究のあり方を検討し、人文学の特長とされる問いの総合性の力を発揮するような理念と方法論を、実践的に作り出そうとするものである。つまり、人文学内の異分野研究者の集まりである私たち自身の通じあえなさ、それ自体を研究テーマとするのである。そしてそれぞれの専門領域の自立性、高度な専門性とメンバーの個性を尊重すると同時に、越境横断的な共同研究をも可能にする条件とは何かを、

じっさいの共同研究実践のなかから探り出していこうとするものである。

近代的な自己同一性原理にもとづく共同性の設定に替わる、ヘテロニアスな非同一性の原理にもとづいた共同性原理の構築——本プロジェクトを発案し提唱する段階で、筆者の念頭には、こうした現代思想・哲学上の問題関心が明確にあった。だが原理を観念的に提起することと、それを実践のなかで験し、さらにはその実験結果をまとめあげること、これは別物である。

プロジェクトを進め、成果を報告にまとめあげる推進力として、私たちは5人程度の報告書編集委員会を組織した。だがそもそも非同一性原理に立つ本プロジェクトの経験は、この共同研究実践に参加するメンバーの複数の視点によって多面的に描かれるべきものである。そのため、本報告書をプロジェクト半ばの中間報告としてまとめるにあたっては、さしあたり本プロジェクトの主たる理論設定を推進してきた編集委員のひとりの視点から、この共同研究で生み出された中間的成果と展望について提起することとした。

もちろん本稿で述べる議論の全責任は筆者が負うものであるが、紹介する共同研究実践の成果は、本研究会の共同研究のなかから生み出されたものであり、筆者ひとりの功績に帰するものではない。本プロジェクトに参加する〈若手研究集合〉メンバーおよび研究会の推進に不可欠なコラボレーターとしての本COEメディアラボ・スタッフ、その全員の成果である。このことをお断りした上で、本プロジェクトの理論設定と現段階までの到達点、そして今後の展望——そこには複数の視点から共同研究実践を多面的に切り取る報告のあり方についての展望も含まれる——を紹介することにしたい。

2 人文学にとっての異分野共同研究の意義

2.1 人文学とはなにか

人文学とは人間と文化についての総合的な学問とされるが、はやくから指摘されているように、専門研究の深化・高度化にともない、人文諸学科間の交流は困難になってきている。同一分野内であっても、研究成果をかみあわせた共同討議の場を開くことが困難な場合も少なくない。だがこうした専門分化・細分化のなかでも、人間と文化にたいする人文学の総

総合的な省察は、おのおのの研究において深められているはずであり、人文学の総合性は、専門の細分化のなかでこそ、新たに構成され見出されなければならない。

人文学は、各研究成果（論文）が個別的なテーマを立てて、それぞれ人間と文化についての普遍的な問いを掘り下げていくものであるが、その普遍性と総合性への志向を土台として、これをからみ合わせ、触発し触発されあう空間を開くことによって、総合的な学としての人文学はたえず更新されつづけるものとして成立すると考える [森 2004]。

2.2 研究の越境横断と〈臨床の知〉

ディシプリンの専門分化・細分化から総合性をとりもどす、あるいは人文諸学に内在する総合性を顕在化・活性化・前景化させるためには、ディシプリンを越境横断した総合的な共同研究が必要であることは、これまでくり返し提唱され、また実施されてきた。だが実質はそれぞれの土俵の外に出ることのない研究の並立的提示に終わることが少なくなかった。学際的な共同研究によって学の総合性がもたらされるとは必ずしもいえず、この点はたえず疑問に付されてきたといえる [徳川 2000。鷺田 2003 116 頁]。

単に形式的に、越境横断の場を用意するだけでは、既存の学問体系のすみ分けや、諸学科間の通じあわなさを克服するには、圧倒的に不十分だという現状がある。では専門化された学知の体系の枠外から、新たな問いを発見しつづけ、学知が総合性と自己革新の力を獲得していくには、なにが必要なだろうか。そのなにかをあらわす概念のひとつとして、〈臨床の知〉というものがある。

〈臨床〉とは、ひとが特定のだれかとして他のだれかに会う場面であり、そしてその具体的対面関係のなかで、たがいが自己の同一性を揺さぶられ、自分自身が変えられる経験の場面であるとされる [鷺田 1999 108・139 頁]。このような臨床の場面を、学知の生成・展開のなかのクリティカルなモメントとしてとらえ、近代の普遍主義・論理主義・客観主義に偏した学知の展開をとらえなおし刷新しようとする取り組み、それが〈臨床の知〉の学問論である [中村 1992]。

このような臨床をめぐる問いを、ここでの問題関心に沿わせてもう一步おし進めてみよう。すなわち、専門性が、ある学知体系の他者との抜き差しならない出会いのなかで解体され、未分化な問いの原点に立ち戻ることを可能にする〈臨床の知〉のモメント——これを越境横

断的な共同研究の場に重ねあわせ、組み入れるとき、人間と文化についての根源的かつ総合的な問いの学問としての人文学は、立ちあらわれてくるのではないか。

2.3 人文学にとっての他者

ある人文学の学知にとっての他者をひとまずあげるとすれば、さしあたって次の3者が想定できる。

- a. 研究対象・フィールドの人びと（学知に完全に包摂されない研究対象）
- b. 研究成果を伝える相手としての非専門家
- c. 人文諸学の異分野の研究者

aは「現場の声を」、bは「社会への還元」といったスローガンのもとに、一般に対話や説明の相手として認識されてきた。だがcは、実質的にすみ分けが容認されるアカデミズムの諸制度のもとでは、出会いのために新たな回路を設定する必要も、その試みも、とぼしかった。ところがこの隣接する他者は、もっとも厳しく、ある学知がその専門的体系性の分立・自立の存否をかけて、対峙する相手でもあるだろう。

人文諸学の学知が、その専門性の利点と弊害を十全に対自化しながら専門性の解体と再構成をすすめるには、〈人文学の内なる他者〉としての異分野研究者とのあいだでも、専門vs.専門の臨床的な対話が、何らかのかたちで必要なのではないか。それがなければ、ややもすると、aとbの他者との臨床的な出会いは、それをある専門性のなかに取り込む運動として機能し、臨床的出会いから問いを再構成する場として諸ディシプリンが並立する状態は維持温存されることになる。そこでは、現場や社会の声をそれぞれの専門分野が汲み上げればよいという、専門家による専門家のための自己刷新へと、臨床的問いは回帰していくかもしれない。

2.4 学と学との臨床的な越境横断

学問研究の制度化が問いの形骸化や囲い込みにいたる弊害を克服するためには、専門性を、その明らかな外部（現場・社会）からの衝撃によって揺さぶるだけでなく、その揺さぶりから専門性を再構成するプロセス・経験についても、同じく専門家とされる者同士の内部分で自己検証を相互にはかる必要があるはずである。そしてその相互検証を、専門を異に

する人文学の異分野研究者のあいだで、いわゆる「入れ子構造」——モデルとして単純化していえば、あるディシプリンにおける専門家が同時に別の分野における非専門家となることから、専門家／非専門家の断絶を循環的に相互言及しあい、双方向から断絶と交渉しあう関係性——のもとで行ない、人文学の内なる他者とも対峙する空間を開いていくとき、ディシプリンの分立する人文学体系総体をも根底的に問いなおす自己刷新のモメントが生まれるかもしれない。

それは臨床的な他者経験の衝撃を、専門性を構成する内的な論理世界にまで深く浸透させ、学知に内在化させる回路の設定である。このディシプリン横断的な回路の設定があるとき、臨床的な他者経験は、学知の外からの衝撃にとどまることのない、また専門家の内部的な自己満足に収束することのない位相に届いていくかもしれない。

こうした問題設定のもと、私たちは現状としてある人文諸学のあいだの通じあわなさ、ディスコミュニケーションを前提とした、人文学の共同的な討議空間のあり方を新たにデザインする実験的な試みを構想し、その設計に着手するにいたった。これが本プロジェクト、「〈人文学の討議空間〉の創造とデザイン」の、設計者のがわから見た、理論的な骨子であり、論理的な成り立ちである。

より具体的にいうと、私たちは、臨床性と越境横断という本COEのキーコンセプトを活用し、これに何らかのかたちでかかわるものならばどんなテーマ・方法論の研究でもよいとして、メンバーから論文を募り、異分野の共同討議にかけることとした。そうしてこの共同討議の場自体が、あらたに、学と学との〈臨床〉的な出会いの場面——他者の前に身をさらすことによって自己の学問的同一性、専門家としての領域性が揺さぶられる経験——としてあらわれ出す可能性を、探りはじめたのである。

2.5 もうひとつの他者との出会いにむけて

ところで、近年、文系と理系の垣根を越えた、いわゆる文理融合型もふくめ、異分野間研究者の交流促進事業が、官民を問わず活発に取り組まれている。とうぜん、私たち人文諸学の研究者が、社会科学から理工系までの異分野研究者と共同研究をおこなう機会も、個別的には増えてきている。だが汎用性の高い客観的法則性を設定するよりも、一回的な経験の独自性ととも、それに連関する地域性、時代性、作家／作品性や人間の創造性

をあわせて把握し、また主として文献学的手法をもちいる、〈人文学的な知〉は、そうした異分野交流の場で真に他者と出会う交流をとげているのだろうか。

先にあげた人文学にとっての他者には、じつはもうひとつ、〈d. 人文諸学外の異分野の研究者〉があるはずであった。しかしこれを人文学の総体にとっての他者としてすぐさまあげることには、まだいくらかのためらいを覚えた。

専門領域の細分化が進行するなかで、人文諸学が、隣接する人文諸学のみならず、社会科学から理工系にいたる人文学外の異分野領域との共同研究をおこなうとするならば、なぜ異分野との共同研究は必要なのか、それはどのようにしたら有効な機能を自他においてもつのか、共同研究をおこなう基盤的な理由づけ、理論設定が不可欠であろう。人文学の内部においてさえ異分野との越境横断が困難なまま、人文学の外部との共同研究に進むのでは、異分野間交流が自己の専門性を固守したままの表面的なすり合わせや、教養的知識の一時的な増加と忘失で終わってしまう可能性の方が高いであろう。さらには、たとえ真の融合が生み出されたとしても、それは偶発的な経験相でのみとらえられてしまうかもしれない。

人文学外の異分野研究者とのあいだで、たがいに実のある共同作業をおこなうためにも、〈人文学的な知〉の特性と限界をふまえた共同研究の論理や可能性を、内側から掘り起こしていく作業が不可欠なのである。この意味で本プロジェクトは、人文学とは何かという問いを、人文諸学内の異分野交流から掘り下げることによって、その問いのなかから、理系をふくむ他者とも多面的に出会いうる共同討議の空間を人文学の内部に開いていこうとするステップとして位置づけることができる。

3 人文学の討議空間創出のためのメソッドとツール

では人文学を開くと同時に深めることにもつながるような越境的な共同討議は、どうしたら可能になるのか。

本研究会は、2005年秋から冬にかけて、ディスカッション・ペーパーの検討会を6回にわたり実施した(第一部末尾資料参照)。先にも述べたように本報告書第一部に収録した諸論文は、この共同討議のなかから生まれたものである。そしてまたこの検討会は、前章

に述べたような異分野間共同研究の理論設定が実践をくぐり、具体的な方法論へと転換されうるか否か、それが験される場ともなった。

研究会の実践のなかで理論から転換され、しだいに彫琢されていった方法論とツールの検討開発はどのようなものであるか。以下に、研究会の経緯もかいつまんで紹介しながら、提起しよう。

3.1 討議支援ツールとしてのディスカッション・ペーパー

ディスカッション・ペーパーの検討会にいたる前に、その前提として、私たちは、自分の研究およびディシプリンにとって、臨床性とは、越境横断とはなにかについて検討するプロセスを踏んだ（特任研究員加藤謙介の発案・主導のもとで05年5月に開催された『「臨床性」を語る会』）。そのうえでメンバーは、臨床性と越境横断という論点に何らかのかたちでかわるディスカッション・ペーパーを各自執筆し、研究会での共同討議に付した。

ディスカッション・ペーパーとは、文字どおり、ある特定の場の討議に付すために提示される論考であるが、いわゆる草稿（未定稿）とは異なる含意をもち、むしろ積極的に、ある機能を担うもの（つまりツール）として、本研究会では設定されている。臨床性と越境横断をめぐる検討から発した思考を、完成された論文として、それぞれのディシプリンに対応したかたちで固める前の、不定型な状態のままで、異分野の研究者との共同討議にかけること、そこに固有の意味と機能が生まれることが想定されているのである。

あるディシプリンの学術論文としては未完成であるという、ある種のその弱さから、異分野の研究者同士がたがいに討議をさし込みあう余地が生まれてくること、それがひとつである。ディスカッション・ペーパーをめぐる検討会で、異分野の研究者から出されるコメントには、あるディシプリンにとっては「初歩的」といわれるようなものもあれば、思いもよらなかったような意外な問いかけもある。ディシプリンのなかでは出会うことのない問いにさらされ、応答し、通じあわなさに直面し自問する経験をメンバーが折り重ねていくなかで、触発し触発される関係が開かれる、これが討議支援ツールとしてのディスカッション・ペーパーに期待された役割と機能である（異分野間討議にむけたこうした設定とは若干異なるが、研究コミュニケーション・ツールとしてのディスカッション・ペーパーについては〔伊藤 2005〕を参照）。

研究会におけるディスカッション・ペーパーの討議を終えたメンバーは、各自で自分のディ

スカッション・ペーパーを改訂する作業に入った。その際、研究会における異分野討議の経験をどのように反映させるか、させないかは、おのおのの判断にゆだねられた。すなわち自己の学問体系やディシプリンに即するか、いくらかなりとも逸らせるか、〈交渉〉(negotiate)をへてまとめられた論考、それが本報告書第一部に掲載した諸論文である。

本研究会の活動は、まだ終わってはいない。今後私たちは、6回にわたるディスカッション・ペーパー検討会の共同討議で出されたいくつかのキーワードをめぐって、一方では厳密な概念的検討を人文諸学の各方面から加えるとともに、他方では分野を越境横断する新たな問いの構成を試みていく計画を立てている(特任研究員家高洋の発案と主導による)。本報告書第一部に収録した諸論文は、そのなかで再問に付され、変容をとげ別のかたちに生まれ変わることがあるかもしれない。この意味で、第一部の諸論文は、それぞれ独立して読むことのできる、それ自体で自立した学術論文、あるいは学問論にかかわるエッセイである一方で、別の面では、臨床性と越境横断という論点をめぐって、異分野の研究者がたがいに他者として問いを重ねあった、臨床的な出会いと越境横断の討論経験を物語るものでもある。そしてさらには、その討論のプロセスを本プロジェクトの最終報告段階において提示するための材料のひとつでもある(この点については後述)。

以上、個別的なテーマをあつかい、表面上は何の連関も見いだせない第一部の諸論文が、共同研究においてどのような問題意識のもとに位置づけられているか、背景にあるプロジェクトの設定を説明した。

3.2 キーワード・マッピング

本プロジェクトは、人文学にまつわる個別的研究と学問論、異分野間共同研究論のほか、これと並行して、こうした革新的な討議空間の成立を可能にするためのコミュニケーション・ツールの開発や、アウトプットの表現方法についても、本COEプログラムのメディアラボ・スタッフとの協働のもと、研究開発を進めている。ディスカッション・ペーパーはその一つであるが、もうひとつ核となるコミュニケーション・ツールとしては、近年コンピュータソフトとしてもさまざまに開発が進められているシンキング・マップ(概念図)の考え方をベースにした、キーワード・マッピングの活用がある(メディアラボ久保田美生の発案、および特任研究員森宣雄との共同研究のもとで設計)。

このマッピングの方法は、ある分野の専門用語・概念から、断片的な感想、感覚的な印象まで、討議中に出された発言を、討議と同時進行で随時マップ上にキーワード化して落とし、またそれぞれの論理の筋道も、線や言葉でマップに書き込んでいくことで、異なる論理が共在し、出会いや誤解、すれ違いをも生み出している討議空間のありさまをヴィジュアル的に可視化するものとしている。

容易には相容れない論理と世界観を背後にもった異なる分野の専門用語を、無理の一つに整理し統合するのではなく、それぞれの論理に即して独立させながら、それら多様な考えをマップ上に配置し、それらが共在する討議空間を参加者が目に見える形で共有すること——そこから、ただ一つの法則的真理に収斂するのではない〈人文学的な知〉が、さまざまなレベルの他者と出会い、交錯し触発をとげる討議空間の成立も可能になると考える。

このようなキーワード・マッピングの方法論は、当然ながら、情報処理工学などの成果や、他の文理融合プロジェクトの取り組みを積極的に参照している[大平ほか 2000。大平 2003。草野 2003 14頁]。2005年9月、私たちはディスカッション・ペーパー検討会の開始に先立って、メディアラボ主催第1回「LABO SALON」とドッキングするかたちで本研究会を開いた。そして異なる文化背景や異なる専門分野をもつ人間間のコミュニケーションについてソフトウェア工学の見地から研究する大平雅雄氏（奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科 助手、東京大学先端科学技術研究センター 知識創造研究室 協力研究員）を講師とする講演・開発ソフトの紹介ののち、本プロジェクトの基本構想（若手研究集合の2005年度研究計画書「〈人文学討議空間〉の創造とデザイン」、および森宣雄「討議方法・ドキュメント篇作成方法についての素案」）について、大平氏を交えた意見交換を行なった。

このあと本研究会では、ディスカッション・ペーパーをめぐる検討会以降、キーワード・マッピングの方法実験を継続している。

3.3 デジタル・メディアをとおした討議空間

いま述べたキーワード・マッピングの方法論は、模造紙に描かれるマップ上に擬似的に討議空間を可視化するものであるが、討議をへてできあがったマップを見ることだけでは、その場において生まれた発見、意味、その経験を十分に把握することはできない。そして同じこ

とが、本プロジェクトが目標にかかげる討議空間のデザインの表示方法についても言えるのである。

私たちはどのように人文学の討議空間を作り出したか、それを表示するには、理論づけ、道具立て、そして討議空間をくぐって生み出された成果物としての論文などを示すだけでは不十分である。その実際のプロセス、討議空間の生成過程が、その場に居合わせていない者にも理解でき、別の場にも一定程度応用可能なかたちで提示されなければ、本プロジェクトの実験は私たち参加メンバーの外に広がることのない、閉じた1回きりの実験で終わってしまうだろう。

そのため、本プロジェクトはその総合的な報告媒体としては、時間的連続的な変化を複眼的に伝え、読者がたどりなおす上で有効な、デジタル・メディア（CD-ROM）を活用する方針を立て、その研究活動を開始している。すでに現代の共同研究実践においては、Eメールはもちろん、ソーシャル・ネットワークなどの電子メディアが浸透しており、本研究会もまた文書の配布のみならず、討論自体も一部は電子メディアを利用して行なっている。つまり討議空間自体がすでに部分的にはデジタル・メディアのなかに移行しているのである。

すでに一般化している電子メディア上の討論と、メンバーが参会する対面的討議の並行的な実施を包括的に提示する上でも、デジタル・メディアを活用した研究報告書づくりは、今後ますます必要度を増し、効果的なアウトプットのあり方が求められるであろう。この面の研究活動について、本報告書では触れられなかったが、2006年度最終報告書において総括的に報告し、またその電子版報告書の制作をもって、作品表現として提起する計画である。

最終報告書は論文を収めた冊子報告書およびCD版の二本立てとなる計画だが、CD版においては、本報告書第一部に収めた諸論文がどのような討論と葛藤をくぐって書かれたか、研究会における討議空間生成のダイナミズムを開示する予定である。この点からいえば、本稿をふくむ本報告書第一部は、最終報告の完成を待ってはじめてその意味を明らかにするものだけといえる。

おわりに

以上、プロジェクト半ばでの中間報告であるため、研究途上にある側面についても触れることになったが、本プロジェクトの理論設定、および共同研究実践の試行錯誤のなかで洗練をとげていった方法論とツールについて述べた。本プロジェクトはきわめて独創的かつ挑戦的な実験としてある。文理融合にわたる理論構成のもと、人文学が、その特性に向き合いながら、専門分野の越境横断と〈臨床の知〉の機能を活かした共同研究理論を実践的に作り出そうとする取り組みである。

そうした独創性と挑戦性のゆえに、今後も多くの困難が予想される。最終報告書にむけて、本報告書を手にとられた諸賢からの忌憚のない感想、提案、アドバイスなどをいただくことができれば幸甚である。

(ご意見、お問い合わせは、奥付にある本 COE 事務局までお願いいたします)

(特任研究員)

参考文献

- 伊藤遊「『イメ』 ワークショップの実験報告——ディスカッション・ペーパー、インスタレーション」大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」ニューズレター『Interface Humanities』06、2005 年。
- 大平雅雄「対面異文化間コミュニケーションにおける相互理解構築とアイデア創発の支援に関する研究」奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科博士論文、2003 年。
- 大平雅雄・山本恭裕・蔵川圭・中小路久美代「EVIDII：差異の可視化による相互理解支援システム」『情報処理学会論文誌』41 巻 10 号、2000 年。
- 草野剛編『平成 15 年度異分野研究者交流促進事業報告書「科学技術と芸術——知の創造に向けて ワークショップ——学び方を形にする パブリッシング&ラーニング』科学技術振興事業団、2003 年。
- 徳川宗賢「日本語研究における学際的研究の流れ 九学会連合の光と影」変異理論研究会編刊『20 世紀フィールド言語学の軌跡：徳川宗賢先生追悼論文集』、2000 年。
- 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書、1992 年。
- 森宣雄「〈人文学〉共同研究の方法論」大阪大学文学研究科 2004 年度「インターフェイスの人文学」ワークショップ、ディスカッション・ペーパー（於大阪大学中之島センター、2004 年 12 月 21 日）。
- 鶴田清一『〈聴く〉ことの力』阪急コミュニケーションズ、1999 年。
- 鶴田清一責任編集『岐路に立つ人文科学』大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」2002・2003 年度報告書、2003 年。

遠き眺めを見つめる

—ナショナリズムの「臨床的」研究のためのおぼえがき—

上田 達

<要旨>

これまで数を重ねてきた研究会を貫くキーワードの一つである「臨床性」と、筆者が関心を持ってきたナショナリズムとを繋ぐための足掛かりを築くことを本稿は目指す。国民国家の相対化が進む現代において、国民を作り上げることが目指されている地域としてマレーシアをとりあげ、いくつかの示唆的な例を示す。マレーシアのナショナリズムに関して言うならば、政府の言説のみに着目して論じることは故なきことではない。しかし、一方で、ナショナリズムを日常性の中で対象化することも模索されねばならない。「臨床」という語の持つニュアンスを吟味することで、その際にとりうるスタンスを示す。

<キーワード>

ナショナリズム、「臨床性」、マレーシア、「マレーシア人」、愛国歌

1. はじめに

2004年12月まで約二年の間、マレーシア留学していた筆者は、2005年11月から12月にかけてマレーシアを再訪する機会を得た。到着してしばらくは意識的にローカルなメディアに接して情報を収集しようとした。そこで目にしたのは、マレーシアの女子スカッシュ選手が香港で行われた国際大会で優勝したとの報だった。世界ランキング上位の選手を退け、高々と優勝杯を掲げる写真が印象的だった。その後、彼女は帰国し、閣僚に出迎えられ、故郷のペナンに帰った折には州首相の歓待を受ける。国や州からは臨時ボーナス、貴金属に住宅が与えられたようだ。戴冠から賞与まで、彼女のニュースは盛大に報じられた。しかし、それは、一個人のアスリートの成功のストーリーというよりは、マレーシアのアスリートの成功のストーリーとして文脈づけられていた。

彼女についての報道を見て、筆者は以前にも同様のものを見たことを思い出した。2003年から

2004年にかけてだけでも、例えば、ドーバー海峡を泳いで横断して国民的英雄になった人がいた。彼が出発地に着いてからの様子は、毎日、詳細に伝えられた。天候が不順で横断開始を延期したことや、トレーニングが順調に進んでいたことなどがメディアで重要なニュースとして報じられるのだ。彼の写真はしばしば新聞のトップを飾った。明け方に、彼が横断を終えてまさに対岸にたどり着かんとしたときの写真は、朝焼けを背景にした美しい写真だったのを覚えている。また、エベレスト登頂を成功させた二人組の大学生もいた。彼らがエベレスト山頂にマレーシア国旗をなびかせたことも大きなニュースとして報じられる。彼らのこうした偉業は、もちろん個人的に報償されつつも、国民の成功として広く喧伝される。政府の発するスローガンである「マレーシアはできる(Malaysia boleh!; bolehはcanの意)」の実例として、つまり、国民の成功の物語として、メディアではしばらくの間、語られ続ける。

例えば、マレーシアに行くまでの間に、マレーシアにおいて国民が生成されつつあることは知っていた。あとにふれることになる、2020年までの国の発展のプランを描いた「ワフサン2020」や「マレーシア国民」を意味する「バンサマレーシア」は、予備知識として頭の片隅に置いてあった。しかし、上記のようなアスリートの例を見るにつけ、マレーシアにおける国民が徐々に自身の関心の狙上になってきた。「おそらく、これが国威の発揚というものなんだろう」、という現場での驚きによって、マレーシアのナショナリズムは筆者の研究テーマの一つになった。また、後に紹介することになる愛国歌も筆者をナショナリズムに引き付ける契機となった。毎時0分からのニュース放送の後の短い時間に流れる妙にキャッチーで耳に残るメロディーは、ナショナリズムに関心を持たせるには十分なほどの不思議な力を持っていた。いうならば、これらが私の関心の方向付けを行った現場での出会いである。

2. マレーシアの「ナショナリズム」

人やモノや情報が従来の境界を越えて往来する状況を人文科学の問題系に捉える試みがなされて久しい。トランスナショナリティ研究もまたそれらの研究に触発されて進められてきた。しかし、私がマレーシアで見たような、ナショナルなものの希求もまた、トランスナショナルな現象と表裏一体であるといえる。境界が揺らぐためには、境界を維持しようとする「何か」がなければいけない。トランスナショナルな側面に目を向けるときに、同時に、ナショナルなものを作り出そうとする側面にも同様の注意が向けられなければならないと筆者は考えている。マレーシアでの筆者の経験は、ナショナリズム

がなお重要な政治的アジェンダとして語られていることの一例にすぎない。

マレーシアは1957年にマレー半島諸州からなるマラヤ連邦として英国からの独立を達成している。1963年にはマレー半島部に加えてボルネオ二州とシンガポールを加えて今のマレーシアを形成した。「マレーシア国民」を形成するのは、教科書的にいうと、マレー半島の「先住民」たるマレー人、植民地労働者の子孫として、華人、インド人であり、ボルネオ二州の諸民族集団がこれに続く。独立前後から、こうした複雑な民族構成が国民統合の問題を顕在化させていたものの、1969年の民族衝突以後は、民族間の差についての議論は回避されるようになる。しかし、マハティール前首相が90年代からマレーシア国民について述べるようになって、再びマレーシア国民はマレーシアの表舞台に現れることになる。

冒頭に記したような英雄譚の他に、国民構想の具体例は他にいくつか挙げられる。例えば、国家サービスプログラムがそれである。2004年から始まったこの制度は、愛国心の涵養と若年世代が抱える種々の社会問題解決を目的としていた。同プログラムは18歳になった者の中からランダムに三分の一を選び、彼らを全国の「キャンプ地」に割り振り、心身を鍛える。選抜された者の発表には、新聞や、携帯電話のショートメッセージングサービス(SMS)が用いられる。とりわけ、全マレーシアの被選抜者名簿が掲載される全国紙は圧巻である。州ごとにABC順に名前が載せられ、身分証明書の番号が本人であることを示す。さまざまな問題を孕みながらプログラムは実施された。このサービスプログラムはマレーシア国民をつくり出すプロジェクトの一つの例である。

国家サービスプログラムの他に、各民族集団の宗教的祝祭を共に祝い合うことを目的とした、「オープンハウス」という国家イベントも年数回行われる。2003年の場合は合計で6回実施された。例えば、マレー人の宗教であるイスラム教の断食明けの祝祭「ハリラヤブアサ」や、華人達による「中国正月」、インド系住民の大多数を占めるヒンドゥー教の「ディーパバリ」が共同の祝祭であるとして政府がこれらをプロモートするのだ。これらがマレーシア内部の特定の民族集団の祝祭ではなく、我々全てがわかちあうのだ、と政府は喧伝する。我々とは、すなわち、マレーシア人である。オープンハウスでは、無料で飲食物が配布され、舞踊や歌謡などの文化ショーが上演される。また、その時々的人气歌手が招かれ、ヒット曲を唄い、聴衆の歓心を得る。イベントは夜12時近くまで続き、数万人が参加する。

統合されたマレーシア国民を目指して、こうした政府のプロジェクトが、次々に実施されている。

しかし、なぜ、今、ナショナリズムなのか。マレーシアにおいてナショナリズムが至急のものとされるのは何故なのか。たとえば、マレーシアのナショナリズムに関するディスコースを分析している人類学

者、ウィリアムソンは経済の領域においてマレーシア人が要請されているのだ、という (Williamson 2002)。また、ある人は内憂というかもしれない。インドネシアのアチェや東ティモールへの対処を見ると、国民統合の重要性が再確認できるのかもしれない。また、国内の移民の増加が社会不安を呼び起こしているためだ、と。あるいは、外患も理由の一つに挙げられるかもしれない。タイ南部やフィリピン南部の政情の不安定は国境を再び作らせ、内的な統合を要請しようとしているのかもしれない。もっと大きな文脈、すなわち、世界大の資本主義の拡大とそれに伴う文化的均質性の拡張への反動を挙げる者もいるだろう。

筆者には、なぜ今、ナショナリズムなのかをすぐに答えることはできない。しかし、それはマハティール前首相の言葉に端を発するといえるだろう。マハティールは先進国並に発展しているマレーシアを担う者として、マレーシア国民の誕生を祈念している (Mahathir 1999)。その後、上記の種々のプロジェクトは実行されるようになっていく。

ところで、マレーシアにおいてナショナリズムを研究する、といったときに、生じうる誤解がある。ナショナリズムという語は既に特定の地域の、ナショナルなものではなく、様々な国や地域で使われる。便利な述語ではあるが、語の持つニュアンスには自覚的でありたい。マレーシアにおける特徴を示し、その偏差を共有することで、誤解は回避が可能であると思う。

ナショナリズムという言葉によって、大衆動員的な運動を想起するのであれば、マレーシアにそれが不在であることを告げねばならないだろう。マレーシア人が主体となって前面に出るような運動は、マレーシアにはない。既にいくつか例を挙げたように、マレーシアのナショナリズムといったときに、それは全て「上からの」運動なのだ。また、日常会話においても、マレーシア人が使われることは稀である。例えば、筆者の調査するサバ州は、マレーシア諸州の中でも人間の往来が盛んなことで知られる。隣国のフィリピンやインドネシアと地理的に近接しているために、合法/非合法を問わず、人が国境を越えて移動する (Miyazaki 2002)。筆者も、しばしば「外国人」に関する画一的な語りを耳にした。しかし、「外国人」という他者を指定することで、内側の同質性を強調するナショナリズムのロジックが使われたとしても、その境界を作るのはマレーシアという国民国家ではない。彼らが「外国人 (移民)」と対比させる際に用いる語彙は「ローカル」や「ネイティブ」である。ここでいう「ローカル」なり「ネイティブ」は、サバ州のそれであり、マレーシアのそれではない。「ローカル」は、サバ州のイスラム系住民と非イスラム系住民を包接するカテゴリーとして使用されるのであり、マレーシアを構成する他の諸州の住人が「ローカル」に含まれるわけではない。

人々の生活の中でマレーシア人であると語ることが問題になる局面はまだまだ少ない。しかし、そ

れにもかかわらず、あるいは、それゆえに、政府はマレーシア人をつくり出すことに躍起になる。手を変え品を変え、分け隔てられた民族集団を統合して国民をつくり出そうとするのだ。もちろん、他の地域でいわれるナショナリズムが、民衆主導で、政府の関与がない、と言っているわけではない。どこにおいても、政府が息を吹き込むことでナショナリズムは生命力を維持する。しかし、マレーシアのナショナリズムは、今のところ歴史の浅い政府のプロジェクトにすぎず、マレーシアのネーションは今なお、政府の掲げる目指される目標にとどまっている。

また、マレーシアでは、これまでマレー人、華人といった想像の共同体が人々に「共同の聖餐のイメージ」(アンダーソン)をもたらしってきた。それぞれがそれぞれのナショナリズムの歴史を持ち、今なおその歴史の中にある。これらが作られたカテゴリーであることを指摘するのは容易い。植民地時代の分割統治の賜だ、と。マレー人などは想像のものにすぎず、多様性が内在している、など。しかし、繰り返し語られることによって、それらの人為的なカテゴリーはパターンとして「沈澱」(中川1996)して、自然化されてきた。しかし、これらの共同体を包摂する形で新たに政府が導入した想像の共同体は、どのようなかたちでそのナショナリズムを喚起するのか。マレーシアでいくつもの国民形成を模索するプロジェクトを見るにつけ、筆者はマレーシアのナショナリズムについて関心を寄せるようになった。

こうした問題意識をもとに、筆者はマレーシアのナショナリズムの語り方に関して「遠き眺め——マレーシア・ナショナリズムの語り方」(21世紀COEプログラム報告書「ポスト・ユートピアの民族誌」所収)としてまとめた。その中で、筆者は先に挙げた愛国歌と呼ばれる歌を題材として、その中でマレーシア人がどのように表象されているかを、とくに時間の捉え方に注目しつつ論じた。愛国歌は、政府が作り、政府の所有するチャンネルを通じて流される。そこに歌われているのは、来る未来に現れるマレーシア国民の姿である。

3. 「臨床性」について——むすびにかえて

筆者のマレーシアのナショナリズムに関する上記の論考は、すべて国の語り方の分析である。国がつくり出し、管理する「国家言語システム」(中川1994)のみが論文の射程にあった。ここでは、愛国歌がどうやって唄われているのかは分析の埒外であった。つまり、政府の発するメッセージがどのように解釈されているのか、が問われていない。筆者は、同論文をこうした受容の問題の前

段階と位置づけて、言説の分析にとどめた。

しかし、ハッキング (Hacking 2004) のいうように、言説を分析するのみで、それが人々に受け入れられるプロセスを見なければ、人間を分節化する種々のカテゴリーの生成、すなわち「人々を作り上げる」ダイナミクスは捉えることが出来ないだろう。ハッキングはゴフマンを例として取り上げ、言説分析にとどまるフーコーのスタンスに対置させて論じる。彼の主張は、人類学の議論が想像の共同体へ傾倒していることを指摘するアミット (Amit 2002) がいう対面的状況を見ていくことの重要性と相同である。言説分析のみならず、人々の日常的な対面状況においてそれらがどのように用いられているかを論じる必要がある、と彼らはいう。筆者もまた、そうした主張に異を唱えるものではない。上記のような言説分析の重要性を認めつつ、そうしたアプローチの方途を探っている。歌に表れる政府の「語り方」と、人々による愛国歌の「歌い方」とを繋げる視座を確保しないとイケないだろう。

そうしたアプローチは研究会のテーマのひとつであった「臨床性」と通底するものがあるかもしれない。人文学の「臨床性」というキーワードをめぐって若手研究会で検討が重ねられたが、未だ共通の理解はない。しかし、少なくとも、「臨床性」という語をめぐって議論し合うことで各々がディスクリンを含めた自身を見つめ直す機会になったことだけは確かである。私に関していうならば、メディアを通じて得た現場の知識を考察する。そこから生じた問題系を再度現場に差し戻す。この往復運動こそが臨床的な研究と呼ばれるものなのだと筆者は捉えている。また、私見では、「臨床」という語を、それが持つ医学的な「治療」のニュアンスを含むものとして理解すべきではないと考えている。現場で得たものをもとに考えたものを再び現場において捉え直す。往復運動を可能にする現場での発見が、「臨床」の場面に求められているものではないか。それは「治療」を含めた広義での「介入」を必ずしも必要としない。

現場への戻り方に関していうならば、古典的ではあるが、人類学の学徒として、ギアツ (Geertz 1973) のいう「ネイティブの肩越しに見る」姿勢を貫きたい。政府が発し続けるナショナルなディスコースを反射的に批判するのは避けたい。しかし、同時に、ネーションの創造がマレーシア国内の諸問題の処方箋であるかのように語る政府の語り方に距離を置かねばならない。ナショナリズムが常に包含する暴力性を認識しつつ、政府の織りなす希望のディスコースをどのように人々が読み込んでいくのか。その解釈の解釈を行うことが、言説分析にとどまった筆者の論考の踏み出す次の一步である。国営ラジオで流れていた、愛国歌のキャッチーなメロディーを楽しみつつ、しかし、コーラスのパートに加わることなく、流れ続ける愛国歌のメロディーを彼らの肩越しに聞き続けること。対象を「治療」

しようとするのではなく、観察を続けること。容易ではないが、そうした姿勢が「臨床」的な研究に要請されていると筆者は考えている。

(リサーチ・アシスタント、人間科学研究科博士後期課程)

参考文献

Amit, Vered, ed.

2002 *Realizing Community: Concepts, Social Relationships and Sentiments*. London and New York: Routledge.

アンダーソン、ベネデクト

1997 『増補想像の共同体』 NTT 出版。

Geertz, Clifford

1973 "Deep Play: Notes on the Balinese Cockfight." in Geertz ed. *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.

Hacking, Ian

2004 "Between Michel Foucault and Erving Goffman: Between Discourse in the Abstract and Face-to-Face Interaction." *Economy and Society*. 33(3): 277-302.

Mahathir, Mohamad

1999 *Jalan ke Puncak*. Subang Jaya, Malaysia: Pelanduk Publications.

Miyazaki, Koji, ed.

2002 *Making of Multi-cultural Sabah*. Tokyo: Research Institute fo Languages and Cultures of Asia and Africa.

中川敏

1994 「インドネシア語政治作文入門」『国民文化が生れる時—アジア・太平洋の現代とその伝統』関本照夫・船曳建夫編、リプロボート。

中川敏

1996 「オリエンタリズムと数学の直観主義」『社会人類学年報』 22: 1-22。

Williamson, Thomas

2002 "Incorporating a Malaysian Nation." *Cultural Anthropology*. 17(3): 401-430.

「近世帝国」概念と東南アジア： 世界システム論との対話¹

蓮田 隆志

<要旨>

ヨーロッパ中心史観を批判する理論的著作と従来型の実証史学とはどのような形で協働・対話が可能であるのか。本稿では日本での実証史学の蓄積を生かした形で世界システム論を刷新した山下範久の議論、とりわけそのキー概念である「近世帝国」を採り上げる。システム論的観点は従来の発展史観に代わって近年の学校教育で存在感を増している。

広域圏（近世帝国）ごとに空間的想像力が形成されそして固定化していくという近世のとらえ方は日本のアジア史研究の到達点と共通性を持つ。「近世帝国」概念を導入することで、実際の政治的統合度ではなく、世界認識の型と「内外」の弁別基準を縛る枠組み・ロジックとが及ぶ範囲を世界規模で問題にすることが可能になろう。後半では、この様な議論を近世後期ベトナムにおける具体的事例に即して試みる。15世紀以降のベトナムが東アジアにおける近世帝国の中心へと近づいていった一つの帰結を看取することができる。

<キーワード>

ベトナム、近世帝国、世界システム論、東アジア、世界観

はじめに

ヨーロッパ中心主義克服の必要性が叫ばれて久しい。とくにアジア史研究者は異口同音に世界史におけるアジアの重要性を訴え、ヨーロッパに軸足をおいたグランドセオリーを批判してきた。そしていくつかの理論的研究 [e.g. フランク 2000; アー＝ルゴド 2001] がそれに応えるべく提唱されてき

1 小論の前半は [Hasuda 2004]、後半は [蓮田 2005] をベースにしており、本プロジェクトの趣旨に合わせて改稿したものである。

た。だが依然としてそこにはいくつかの問題があるように思われる。ひとつはアジアの多様性と広大さである。「アジアの視点を取り入れた」と称する研究は、ほぼ例外なくアジア内の特定の地域や文明圏をもって事実上アジア全域を代表させてしまっている。そのうえアジア史研究の内部では、中国中心主義という別のドグマ²がまだまだ大きな影響力を保持している。

本稿では主として前者に関わる理論的著作から山下範久『世界システム論で読む日本』（講談社選書メチエ、2003）、とりわけそのキーコンセプトである「近世帝国」を採り上げる。世界システム論は近年高校世界史の教科書にも掲載されるなど、学界での議論を超えてその存在感を増している。そのような中で歴史学はどのような形での対話があり得るのかを検討する必要があるだろう。

I 東南アジアと近世帝国

本章ではまず山下の議論を要約したうえで、近世大陸部東南アジア諸国の歴史展開と学説史を、主として東アジアとの関係から跡づけ、次いで両者の関わりを検討する。

山下はウォーラステインの世界システム論を土台としつつ、その西洋中心主義と日本例外論を克服した形での新たな理論構築を目指しており、そのキー概念が「近世帝国」である。基本的認識として、15 - 18 世紀 (= 近世) の世界は共通する基本構造をもつ複数の単位 (近世帝国³) が並立していたと理解する。近世帝国は「帝国」と呼称はするが、地理的実体をもった領域という側面がその本質ではない。その内部の諸国・諸勢力が世界認識の型について同じ様式を共有するような地域システムであり、近世帝国の内部に対する場合と外部に対する場合とでは交渉の論理・方法が異なるとする。逆に実際の政治的統合度に差があることは、それぞれの近世帝国のいわば個性と認識されて質的な差異とはみなされない。人々の世界認識を規定する参照枠組み・ロジックが重要視されるが、(やや分かりにくいのだが) その参照枠組みやロジックも儒教やイスラム教、資本主義といった特定の实体としては措定されない。儒教なら儒教を世界認識の基準として採用させるような背景・構造の存在を主張している事になる。別言するならば、人々にある特定の世界観を抱かせ

2 中国中心主義あるいは中華主義に対する批判は多様で一律に論ずるわけにはいかないが、たとえば杉山正明に代表される中央ユーラシア史 (内陸アジア史) 家は遊牧民族・遊牧国家の役割や漢文史料が持つバイアスを強調する。また、中国史内部からも (あらゆる史料がバイアスを持つという以上の意味を込めて) 指摘がある [礪波 et al. 2006]。

3 中国を中心とした東アジア、ロシアを中心とする北ユーラシア、オスマン帝国を中心とした西アジア、インド亜大陸、そしてヨーロッパ・環大西洋の5つ。

たりある規範に則った振る舞いをさせるような構造が機能する範囲が近世帝国の範囲となる。

近世帝国の生成・展開の時間的推移は次のように要約できる。まず近世帝国以前にモンゴルによるユーラシア規模での広域統合とその崩壊があり、そこからの回復過程が近世の開始を告げる。近世自体は大きく2つに分れ、前半（1450頃～17世紀前半）を「長期の16世紀」と名付け、近世帝国の生成期と位置づける。「長期の16世紀」はさらに2分割され、その前期（1450頃-16世紀中葉）は拡大と再編の時代と評価される。具体的には世界的な経済回復、人口や生産の拡大を基調として、それに触発される形で域際交通の拡大と交通路の再編が起る。これに対して後期（17世紀前半）は安定と固定化の時代で前期で発達・多様化した交通路の選別と制度化がおこり、域際交通の域内への影響力を極小化しようとする動きが強まる。それにつれて空間的想像力は固定化され、近世帝国の範囲が固まることになる。また、この時期に近世帝国形成に失敗した地域は衰退するとされる。その後、1800年頃までが近世帝国の展開期とされるが、この時代については殆ど議論されていない。近世帝国の解体時期は1800年前後とされ、各近世帝国の近代参入における世界的同時性を強調する。近代への参入時期（18世紀末～19世紀初頭頃）は世界史の分水嶺として「グローバリティーの句切れ」と呼称されるが、各近世帝国の性格とそこでの位置こそが、近代における各国・各地域の位置を決定する要因として重視される。

以上の如く、従属理論から発展した世界システム論がそうであるように山下の議論もまた構造主義的アプローチだが、世界の多様性にできるかぎり配慮しようとしている。実際、秩序理念としての近世帝国の並立というコンセプトは多中心的近世像を提供する。このような議論を実証史学の成果に応用する場合、いくつかの方法が考えられる。一つはある地域・国家の近世帝国内での位置を考察した上で、他の近世帝国の特定地域・国家と比較することである。いまひとつはある特定の広域圏の歴史展開、あるいはより狭い地域・国家の広域圏内部での動向を説明する上で近世帝國的発想を取り入れることである。本稿は後者の試みということになる。

東南アジアでは、遠隔地交易の拡大に牽引された好況（交易の時代）という大状況の下、15～17世紀に新しいタイプの国家（近世国家）が叢生した [Reid 1993]。18世紀の華人大量流入は辺境地域の大開発を伴い、東南アジアと南シナ海地域交易圏の政治・経済地図を塗り替えた。辺境の新開地に生まれた自律的政体を含めた近世国家間の抗争は、大陸部においては1800年前後に相次いで成立した3つの大国（コンバウン朝ビルマ、トンブリー～ラタナコーシン朝シャム、阮朝ベトナム）に収斂することとなる。これらの国家の領域は植民地期を経由して、現在の国民国家に引き継がれるのみならず、現在我々が「伝統」と見なすものの多くが、この近世国家抗争期に形成さ

れ定着した。3つの国家は同じ世界観を共有しなかった（＝近世帝国を形成しなかった）が、似たような時代と過程を経験したといえる。

第二次大戦後の東南アジア史研究は、インド化論に代表される外在論に対する批判という共通する傾向を有していた。アンソニー・リードの交易の時代論 [Reid 1988-93] はその一つの到達点と理解することができる。また東南アジア各国の経済成長もこの傾向を後押ししたと言える。しかし、このアプローチは東南アジアの独自性を強調するあまり、周辺世界との関係や外部の影響力を過小評価する可能性があった。そのため90年代中葉以降、他地域との共時性への注目が高まってきている。リーバーマンは15世紀後半～19世紀初頭の大陸部について、日本やヨーロッパなどユーラシア縁辺地域 rimlands Eurasia とリズムを共有していると主張した [Lieberman 1999, 2003]。リードも東アジア史との対話を通じて自説を更新している⁴。このような周辺地域との関係やより広い地域に共通する時代状況を重視する傾向は東アジア史や日本史においても見られる [e.g. 荒野 1988; 岸本 1998, 2001; 杉山 2001]。東南アジア史における中国の直接的／間接的影響力を再評価する機運の出現はその一環であり、華人／華人社会を地域の内在的要素として考察する環境が整ってきたと言える⁵。

このような流れの中で近世は一貫して注目されてきた⁶。但しその焦点は移動している。当初のリード [1988-93] は17世紀危機を重視したが、近年ではむしろ19世紀前半までは東南アジアの各政体は自律性を維持していたと主張している。近年シャム湾岸を舞台として華人勢力の重要性を提起した論文集 [Cook&Li 2004] も出版されたが、そこでも18世紀後半から19世紀前半が注目されている。日本のアジア史研究においても、岸本美緒が15-19世紀の東アジアと東南アジアとが変動リズムを共有しそのなかで各地域が「伝統」社会を形成していった時代として近世を定義している⁷。桜井由躬雄は岸本の問題提起を受けつつ、現在に繋がる政治的枠の形成期として18世紀に注目すべきだと主張している⁸。その一方で従来 of 地域区分に異議を唱える論者も登場した。

リーバーマンは東南アジアにおける大陸部と島嶼部との歴史展開のズレを強調し、大陸部は島嶼部

4 E.g. Reid 1997, Workshop on Northeast Asia in Maritime Perspective: A Dialogue with Southeast Asia. 2004/10/29-30, Naha, Okinawa.

5 リードは東南アジア史におけるヨーロッパ勢力など外部勢力の役割を適正に評価するためにもヨーロッパ中心主義の克服が必要だと指摘している [Reid 1993:6-7]。また Reid 1995 や 蓮田 2004 も参照せよ。

6 ただしリーバーマンはこの概念の有効性に疑問を呈している [Lieberman 2000:79-80]。

7 [岸本 1998:3-73]。また吉澤誠一郎は中国近代史の立場から、世界規模の時間設定において各地域の多様化・分化する近世に対し、世界各地で類似性が拡大する近代という対比を行っている [吉澤 2002:5-7]。

8 [桜井 2001]。なおこのシリーズにおいて「近世」はほぼ15～19世紀初頭に設定されている。

よりもむしろ日本やヨーロッパなどユーラシア縁辺地域と歴史展開のリズムを共有していると主張した。

これらの研究はいずれも従来よりも広い地域を設定しているが、山下の近世帝国論は世界システム論の観点からこのような広域圏と世界全体との関係をより強く意識していると言えよう。山下の議論の直接の目的は世界システム論の刷新による新しい世界史の構築であって、直接に東南アジア史に働きかけるものではない。しかし、広域圏（近世帝国）ごとに空間的想像力が形成されそして固定化していくという近世のとらえ方は岸本の議論と共通性を持つ。近世帝国導入のメリットとしては、世界史を考える上で、新たな補助線が得られることであろう。実際の政治的統合度ではなく、世界認識の型と「内外」の弁別基準を縛る枠組み・ロジックとが及ぶ範囲を世界規模で問題にすることが可能になろう。

山下の議論は個々の地域の個性を記述することに主眼をおいていないのだが、近世帝国概念を導入する場合、通常は特定の国や地域を扱う歴史研究者はどうしても専攻地域が山下の議論において如何なる位置を占めているのかを問題にせざるを得ない。東南アジアはベトナムを除いて近世帝国が存在しない地域とされているが、そのベトナムを含む東アジアの近世帝国については特に清朝に関して問題がある。中国史研究における通説的理解に基づいて、清朝を漢化した中華王朝として理解しているが、近年強調される清朝の中央ユーラシア国家としての性格 [e.g. 濱田 1998; 石濱 2001; 杉山 2001; 平野 2004; cf. 茂木 1997] に配慮が及んでいない。清朝の東アジア・東南アジア向けの顔が漢字と儒教に代表されるコンベンショナルな「中国」であっても、清朝の多面的性格を見逃すわけにはいかない。北京の宮廷は全周360°、すなわち今日の中国本土 (China proper) だけでなく西北のモンゴルや西方の中央アジア・チベットまで見回してその政策を決定している⁹。17世紀後半から18世紀初頭にかけて今日のモンゴルから新疆にかけての地域で起ったジュンガルとの戦争はチベット仏教世界及び中央ユーラシア世界における関ヶ原であった [宮脇 1995; 石濱 2001]。山下は清朝の西方への拡大を18世紀中葉以降におきた東南アジアへの華人移住の波に同質の、近世帝国不在地域への拡大と見なすが、それは不適当である。また、世界観および世界観を縛る構造を問題にするからには宗教的要因の検討が不可欠だが、特にイスラームなどの宗教ネットワークの位置づけについてはまだ検討の余地が大きい。次に問題となるのは世界認識を共有する範囲である。山下は琉球や蝦夷など外部世界との中継地が近世帝国の成熟に伴って外部との摩擦を緩和・隠蔽する緩衝地帯 buffer zone の役割を押しつけられたとする。確かに政体の役割については妥

9 例えば1717-1727年に行われた海禁は遙か遠く内陸アジアでのジュンガル遠征に伴い背後を固めるための予防措置として行われたのであり、基本的に海上貿易や海域世界の論理で実行されたものではない [柳沢 1999]。

当すると思われるが、それが琉球や蝦夷の人々の世界認識までも縛ったかどうか、さらなる検討が必要であろう¹⁰。

山下によれば、近世帝国を形成しなかった/するだけの凝集力を持ち得なかった地域は17世紀後半以降衰退するという。東南アジアもリードの交易の時代論によって17世紀後半以降衰退したとする。しかし、上で紹介したようにリード自身は意見を変えている(もちろん、このことについて山下には全く責任がない)。一方で、東南アジアに近世帝国と呼びうるような秩序が形成されなかったことも歴史的事実として認定してよからう。

確かに東南アジアにおいて17世紀中葉に危機は存在したが、18世紀にはいと経済は復調し再び繁栄を享受した。だがそれは交易の時代の再現ではない。18世紀を通じてマレー半島内陸部やメコンデルタなど辺境の開発が進み、東南アジアの政治経済地図が刷新された。再び門戸を開放した中国市場の購買力が経済を牽引した。そのため、全体として東南アジアの対外貿易の構造は対中国貿易に大きくシフトしたと言える。そこで、中国向けの輸出・中継基地としてシヤム湾岸の重要性が増し、ここを焦点とした新たなる動乱が開始された。辺境開拓の中心は華人であり、かれらの政治的経済的プレゼンスが増大し、ハティエンの様な独立政体を形成した〔桜井 2001; 蓮田 2003〕。そのため、何人かの東南アジア史研究者は18世紀中葉から19世紀中葉を華人の時代と名付けた。17世紀後半、遷界令による国際交易不振のため華人は生き残りのために現地社会へ参入し、たとえば徴税請負人の様な形で、政権と中国を繋ぐ存在から政権と在在を繋ぐ存在への役割を変えた。彼らは18世紀後半以降に流入した華人の受け皿ともなった〔Reid 1995, 1997; Trocki 1997, 2002; Cooke & Li 2004〕。このような動きは当然東アジアの動向とも連動している。中国から見た場合、東南アジアへの人口移動は明の海禁解除～明末清初における「華人が外夷に入る時代」〔岩井 1996〕や中世後期日本における各地の唐人町と媽祖廟の広がり、そしてその後の辺境開拓〔横田 1938; 鈴木 1952; 山田 1995〕と連動した一連の動きと言える。但し、岸本が指摘するように、18世紀の東アジアは移民や開発が進行する一方で政治的には安定してゆく〔岸本 1998: 44-68〕。それに対して東南アジアはむしろ新たなる動乱の時代を迎える点で大きく異なる〔蓮田 2003〕。たしかに現実レベルでも理念レベルでも近世帝国に匹敵する広域統合は成立しなかったが、「急速に衰退した」とは言えない。

しかし、いかなる統合も成立しなかったわけではない。リーバーマンが指摘するように18世紀末から19世紀初頭の大陸部には前例のない広域統合を実現した三つの大国が成立した

10 琉球に関しては〔渡辺 2003, 2005〕など参照。

[Lieberman 1997, 2000]。桜井もこれを現在に繋がる政治的枠組みとして重視している [桜井 2001]。それぞれの国家はその領域内に一定の文化的統合を試みており、領域だけでなく言語や習俗などで主要民族の影響力が増し、《タイ人らしさ》あるいは《ベトナム人らしさ》といったものが形成された。これらは近代において取捨選択されつつも「伝統」と意識されるようになる。島嶼部においては領域統合は見られなかったものの、ムラユ語とイスラム・マラッカ王国の正統性とを共有するムラユ世界とも呼ぶべき緩やかな文化的枠組みが17世紀以降漸進的に形成された。さらに国家形成の遅れたフィリピン南部から東部インドネシア地域においても海域イスラム世界 [早瀬 2003] と早瀬が名付けた一定のまとまりが形成されている。これらの国家や地域がどの程度、世界認識を共有していたか十分な研究がなされたわけではないが、シャムとビルマとの長期に亘る戦争は真の転輪聖王の座をめぐる争いとみる見解もあり、両国の間で一定の世界観の共有があった可能性は高い。だが一方で、少なくとも阮朝ベトナムとコンバウン朝ビルマが世界認識を共有していたとは考えられない。これらの小規模・緩やかな統合・地域性の形成は東南アジアの特徴と言える。これが近世帝国との関係においてどのように位置づけられるのか。現在、明確な答えは出せないが、ヨーロッパ(スペイン領フィリピン、VOC、マカオなど)の位置づけと同様に今後探求せねばならないだろう。

II 近世ベトナムに見える近世帝国

本章では上記の議論をいま一步深めるため、地域を限定しベトナムについて考えてみたい。そこでまずは当時のベトナムに関する基礎的事項を確認しておく。1428年、明の成祖永楽帝によるベトナム遠征と胡朝打倒、それに続く20年余りの支配(属明期)を打ち破って黎朝大越国は建国された。王朝は16世紀に一旦篡奪されて中絶するが(前期黎朝:1428-1527)、すぐさま再興されて18世紀末葉まで存続する。これが後期黎朝(中興黎朝 Lê Trung Hưng:1533-1789)である。だがこの後期黎朝においては皇帝は早くに実権を失い権臣鄭氏が代々王号を名乗って事実上の君主として君臨した。これを鄭氏政権と呼ぶ(西洋人はトンキンTonkinと呼んだ)。これに反対する勢力は南方の順化・広南(現在の中部ベトナム)に拠り、黎朝の正朔は奉じるものの独自の政権として自立し鄭氏に対抗し続けた(広南阮氏政権、阮氏広南国。西洋人による呼称はコーチシナCochinchine)。

山下は近世のベトナム(トンキンとコーチシナ双方)が東アジア近世帝国の一部であったとする。

桃木の「脱中国化のための中国化」論¹¹に依拠しつつ、東アジア近世帝国の重力がそこから離脱しようとする遠心力に勝利してベトナムを引きずり込んだと考えた。15世紀後半黎聖宗治下および19世紀前半明帝治下での中国的国家体制構築はその典型とみなされる。山下が強調するのは人々の発想を縛るロジック・構造である。それ自体は直接に検討できないので、事例をとおしてそのような構造がいかなる形で作用していたのか／しなかったのかを観察してみたい。

とりあげる事例は1778年に起った越境事件である。事件の概略は次の通り。1778年(景興39/乾隆43)2月、ベトナムから朝貢使節に同行して一儲けしようと清人に化けて密入国した怪しい輩が捕まった。ベトナム人二人(陳廷暄・阮文富)・清人二人(鄒文章・周貴)、計四人の犯人のうち三人はその場で捕まったが、残る一人、在越清人の周貴は逃亡した。犯人の一人である周貴はベトナムに逃げ帰ったものの、清側も人をベトナムに派遣し御用となる。連絡を受けたベトナム側は直ちに人を派遣し、清側に協力して彼を清に引き渡した。その後、清はベトナム側が周貴逮捕に協力したとの名目で、犯人のうちベトナム人である陳廷暄・阮文富の二人を送還した。残りの二人には死刑判決が下された。周貴の供述を含み事件の全容が要領よく纏まっている呉虎炳摺三(『史料旬刊』第18期、p.343)の和訳を示す¹²。

廣西巡撫である呉虎炳が謹んでその後捕らえた重要犯人周貴の罪を定めることについて申し上げるために上奏致します。

愚考いたしますに、「安南(ベトナム)の陳廷暄・阮文富が髪を剃って服装を改め、密入国した事件」については、賂を受けて道案内をした周貴はまだ捕まっていませんでした。その後、太平府同知の考順阿が、坵黎地方で周貴を捕らえたと報告しましたので、私は早速部下を派遣して受領するよう指示し、あわせて上奏致しましたのはご承知の通りです。

7月21日、部下が周貴を廣西省治(桂林)に連行しましたので、私は(按察)司・(分巡)道を監督して一緒に逐一訊問いたしました。それによると周貴は元々広東省南海縣のもので、曾祖父の周幼庚が安南の諒山城の搭蓋草房に赴き、荷運びをやっていました。その後周幼庚とその子周治が相次いで病死しました。乾隆43年(1778)正月には搭蓋草房は火事に遭い、周貴は諒山に家を借り、そこに父周大王・母黎氏と妻張氏を残し、自らは坵黎地方に行行って豆腐を売って生計をたてていました。

11 10世紀以降のベトナム諸王朝が中国王朝から独立を維持し干渉を防ぐため中国的な国家体制を選択したことを称したもの[桃木2001:117-120]。

12 内容に従って適宜段落を区切った。

2月10日、安南人の陳廷暄・阮文富が、内地に入り朝貢使節に付き従おうと思ったが、道を知らないので周貴に相談を持ちかけた。周貴は報酬を求めたので両人は（二人合わせて）銀十両を渡した。周貴は承諾したものの、安南に生まれ育ったので道を知らず、偶々安南に来ていた医者で以前からの知り合いで国に帰ろうと思っていた鄒文章に同道して案内するよう頼み、銀四両を渡したところ、鄒文章は即座に同意した¹³。周貴はまた、陳廷暄・阮文富に辮髪させ、内地の服を仕立ててこれに与えた。2月22日、南寧府城外の茶屋に着いて茶を飲んでいるところを、宣化縣の衙役に問い詰められて捕まったが、周貴は隙を見て逃走し、忠州の遷隆の小道を通過して、27日には近くの隘店隘の扒山からベトナムへ入り、29日には坵黎に逃げ戻った。太平府明江同知の考順阿は（ベトナムに）部下を遣わして、（周貴を）廣西省治（桂林）に護送して訊問した。先に私はこやつ等が何か別の目的で今回のことを起こした可能性を恐れて厳しく問い詰めましたが、その結果供述内容は確かであります。

陳廷暄・阮文富は共に旨（皇帝の勅命）に従いまして刑を軽くして絞監候（縛り首）としてこれ以上議論せぬこととします。加えて、周貴につきましては調べましたところ内地（中国）の民であるにもかかわらず、久しく外夷に住んでいるからにはもとより善人であるはずもなく、さらに大胆にも賂を受けて陳廷暄・阮文富の髪を剃り服装を（清風に）改めさせ、鄒文章に頼んで密入国の道案内をさせ、役人に問い詰められたときには先んじて逃亡するなど不法を究めております。鄒文章につきましては、利を図ろうとして賂を受けて手助けして道案内し、周貴が逃亡中であることをいいことに嘘の供述をして偶々道で出会ったかのように供述して重罪になるのを避けようとするなど、狡猾なこと甚だしい。周貴・鄒文章ともに主犯・従犯を分かつたず、両人ともに明知逃匿故行引送例にひきあてて、絞立決とし、受け取った賂賂は没収することと致したいと思います。

周貴の父母・妻子につきましては安南に咨してこちらに護送させておりますので、到着を待って別に処理したく存じます。周貴が逃亡したのを捕らえられなかった途上（にある）関係する文武の役人につきましては別に捜査して明らかにし、咨して弾劾を行います。加えて周貴を捕らえて詮議し罪を定めた全ての経過について供述を記録し、別に書類をそろえて陛下の御覧に呈します。伏して陛下のご観慮を仰ぎ、該部（刑部）に勅を下して議論・答申させて実行させて頂きたく存じます。謹んで奏上します。

乾隆 43 年 7 月 26 日

13 鄒文章は捕まった当初、清朝領内の新寧州において偶々陳廷暄らと出会ったと偽証していた（呉虎炳撰『史料旬刊』第18期、pp.341-342）。

では、この事件から見えてくるものを検討してみよう。ある意味で主役とも言える周貴だが、本籍は広東省南海縣¹⁴で曾祖父周幼庚の代にベトナムに移住している。正確な年次は不明だが遅くとも18世紀のかなり早い時期と推定される。父と祖父の生業は不明だが、曾祖父は荷運びの工夫であった。1778年（景興39/乾隆43）1月の火事で家を失い父母と妻張氏とを諒山城に残して坵黎地方で豆腐を売りの商売を始めた¹⁵。坵黎地方の位置は不明だが¹⁶、公的に華人が滞在を認められていた驢廬（駝廬）は諒山城と淇瀾川を隔てた北岸にあり別の場所と思われる。また陳延暄・阮文富に辮髪させ内地の服を仕立てたとあるが、自らがあらためて辮髪したとは書いていない。ここから周貴はベトナムにおいても普段から辮髪して清風の衣服を身につけていたと考えられる。別言すれば一見して華人¹⁷と分かる形態で日常生活を送っていたのだ。

ベトナム側は15世紀以来、華人を識別しその中で定住するものは入籍させた上で課役して同化を強いる一方、定住しないものにはマーケットタウンに集中させて管理する政策を採ったが、18世紀には破綻をきたしていた〔藤原1980, 1991〕。周貴はまさにその具体例である。陳延暄と阮文富が移住から四代も経た人間にもかかわらず周貴に嚮導を依頼した理由も、このような華人性の保持にあると考えられる。史料上からは判然としないものの、マンダリンはともかく広東語など中国語の方言は解し得たのではないかと推測される。

かなり早い例だが、1658年（永壽元/順治15）11月に出示された申明禁置非例額巡司令に「一つ、巡司所は異言異服の人を取り締まっても商人から税を取り立てない（取り立ててはいけぬ）」とある¹⁸。「異言異服之人」という表現からは後期黎朝が治安維持に際して言語や衣服を基準の一つとしていたことが窺える。また周貴の母黎氏も出境した華人の子孫であるが、その名がベトナムの女性に一般的な「氏○」という形式であることも注目される¹⁹。一方では華人のベトナム化（キ

14 呉虎炳摺三（『史料旬刊』第18期、pp.341-342）では三水縣とするが、こちらは周貴本人に訊問した結果であり、父親の周大譽も本籍を「廣東南海縣黃鼎司上沙亭村」と供述している（『宮中檔』第47輯、pp.358-359）こちらを採る。

15 呉虎炳摺三（『史料旬刊』第18期、p.343）。一方、周貴の家族に対する取り調べ（『宮中檔』第47輯、pp.358-359）によると、周貴の妻は章氏莫に作りかつ周貴は妻と坵黎地方に移ったとする。張と章とは中国語でもベトナム語でも同音であり、どちらも姓としてあり得るが決め手はない。

16 呉虎炳摺二（『史料旬刊』第18期、p.342）「附近關隘之坵黎地方」とあり、国境にほど近い場所であることは確かだろう。

17 本稿では華僑や華人といった語の厳密な定義や用法の歴史的変遷については踏み込まずに《華人》という語を用いる。それは華僑や華人といった語の区分が基本的に国籍と近代的意味での民族とが問題となる近現代史の文脈によっているからである。史料上での呼称としては「清人」「唐人」「北人」などの語に対応する。

18 『詔令善政』巻2 戸属。引用史料からも分かるように、巡司所はもともと治安維持のための関所であったが、後には事実上関津税の徴収所、すなわち流通課税の基地として機能することとなる〔Đang 1969:107-108〕。

19 『宮中檔』第47輯、pp.358-359。

ン族化)があったことも窺える。

鄒文章は周貴の供述によればベトナムに来ていた医者で帰国しようとしていたところだった。鄒文章らが容易に南寧にたどり着けたところをみてもベトナム側だけでなく、清側の出入国管理体制もその気になればいくらかでも往来できる程度のものであったようだ。ところでベトナムの家譜(族譜、family chronicle)や筆記小説類あるいは風水関係史料に登場する華人はしばしば特殊な技能(特に地理風水 geomancy を見る能力)を持ち、その能力をもって祖先や主人公に何らかの禍福をもたらす。また彼らは定住者ではなくしばらくの滞在の後去过ってゆくことが多い。このようなイメージが定着する背景には、鄒文章の如く両国を往来する技術者や商人の存在があったと考えられる。

このほかにも当時ベトナム塩が広西に広く流入²⁰する一方、流通課税のための課税台帳である『貨簿』²¹には中国雑貨が多数掲載されている。保泰4年(1723)における巡司所の税額は中越国境の高平・諒山両鎮のみが銀立てになっているが²²、これも中国での銀経済がベトナムに波及してきた現れと考えられよう。北部の鉱山地帯では鉱夫として大量の華人労働者が押し寄せていた[和田1961; 鈴木1975]。華人移住の波と南中国の経済的影響力が18世紀北部ベトナムを覆っていたことは確かである。正和17年(1696/康熙35)発布の令には、清が辮髪を強制したため中国では「宋明の衣冠・礼俗はそのためにすっかり失われた」とする一方で、「長年にわたって北商(中国商人)が両国を往来しており、わが国の人間にも彼等(の風俗習慣)を真似する者がある。」とし、さらに「沿辺の民はその(=北商の)言葉や衣服を真似してはならない。違う者はこれを罪す。」とある²³。

18世紀以降、ハノイの中央政府は北部村落の把握を事実上放棄して中央政府は村落から遊離してゆく[桜井1987:181-221; 八尾2001b]。華人統制や華人の流入・往来に対応する形での風俗・習慣統制令は15世紀以来発布され続けたが、その内容は微妙な変化を見せている。15世紀初頭の宰相である阮廌の文集『抑齋集』巻6輿地には「国人は呉(=明)・占(占城=チャンパ)・牢(哀牢=ラオス)・暹(暹羅=シャム)・真臘(クメール)の諸国語を話したりその服装を纏ったりして国俗を乱してはならない。」とあり、15世紀前半の段階では中国以外にも様々な《外国》が意識されている。だが1696年(正和17/康熙35)に出された令では「北人の来寓せる者」²⁴と

20『大清実録』乾隆10年(1745)2月末条。

21 漢文チューノム研究所蔵 VHv.2672 本。

22『黎朝会典』(漢文チューノム研究所蔵 A.52 本) 戸属。

23『欽定越史通鑑綱目』巻三十四 正和十七年(1696)秋七月条。

24『欽定越史通鑑綱目』巻34 正和17年秋七月条。

あってもつばら華人のみが意識されるようになる。すなわち北部ベトナムにおいては「外国人」が事実上華人に収斂してゆく過程が看取される。これは別の側面から見ると、それまで文化的に一定の親和性を保ってきた西方のタイ・ムオン世界からの離脱である [八尾 2001a]。史料状況の制約から断言は難しいが、15世紀においてはハノイの王権は対中関係とは別のロジックで西方のタイ系・ムオン系勢力と関係を結んでいたふしがある。黎王朝はその創業の際(15世紀前半)も中興の際(16世紀前半)もラオスの援助を受けており、当初は黎朝自体がランサーンの先兵と呼べるような状況であったことも、間接的にこれを支持しよう。

中国的な華夷秩序的世界観に従ってタイ系・ムオン系勢力の人々を蕃夷 barbarian とみなす言説自体はすでに13世紀に成立したと思われる史書に遡って確認されるものの、それが支配層全体の認識として定着するのは18世紀を待たねばならなかったと思われる。

おわりにかえて

前章で確認した世界観の変化を近世帝国の文脈で解釈した場合、18世紀の北部ベトナムは東アジア近世帝国の周縁からその中心部へと引き込まれていったと解釈される。従来の文脈では中国化の進展あるいは中国モデルのより積極的な受容と呼称されようが、実際上の政治的關係で言えば、中国との関係は清朝の成立以降形骸化が進行していた。中国王朝への政治的従属や同化を想起しやすい中国化論と区別してベトナムにおける東アジア的な力学を説明する上で、近世帝国(この呼称自体は検討の余地があるが)的視角は有効ではなかろうか。

また、国家のサイズが桁違いに異なる中国とベトナムという《国家》同士を制度史や社会経済史の観点から比較しても事実上無意味だが、世界観や人々の振る舞いという点では、北京に君臨する満洲王朝としての清朝²⁵と黎朝ベトナムとのいずれが東アジア近世帝国の中心に近い位置にあったのかは必ずしも自明ではない。近世帝国の観点から見れば、黎朝ベトナムや(『朱子家礼』を中国よりも忠実に実践したとされる)朝鮮王朝の方こそ東アジア近世帝国の中心に位置していたという刺激的な結論もあり得るかも知れない。

(特任研究員)

25 満洲王朝としての清朝の側面については [Sugiyama 2005]。

【文献目録】

- アブー＝ルゴド, ジャネット・L. 2001: 『ヨーロッパ覇権以前 ——もうひとつの世界システム——』(上下)、佐藤次高ほか(訳)、岩波書店。(Abu-Lughod, Janet L. *Before European hegemony: the world system A.D. 1250-1350*. New York: Oxford UP, 1989.)
- 荒野泰典 1998: 『近世日本と東アジア』東京大学出版会。
- Cooke, Nola & Li Tana (eds.). 2004: *Water Frontier: Commerce and the Chinese in the Lower Mekong Region, 1750-1880*. Singapore: Rowman & Littlefield Publishers.
- ĐẶNG Phương Nghi: *Les Institutions Publique du Vit-Nam au X^{VI} e siècle*. Paris: EFEO.
- フランク, アンドレ・グンダー 2000: 『リオリエント ——アジア時代のグローバル・エコノミー——』、山下範久(訳)、藤原書店。(Frank, Andre Gunder. *ReOrient: global economy in the Asian Age*. Berkeley, Calif.: University of California Press, 1998.)
- 藤原利一郎 1980: 「黎朝後期鄭氏の華僑対策」『東南アジア史の研究』、京都:宝蔵館、pp.236-256(原載『史窓』38)。
- 藤原利一郎 1991: 「ヴェトナム歴朝の対華僑政策」『史窓』48、pp.45-62。
- 濱田正美 1998: 「モグール・ウルスから新疆へ」岸本美緒(責任編集)『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』(岩波講座 世界歴史 13)、岩波書店、pp.97-119。
- 蓮田隆志 2003: 「東南アジアの近世をめぐって」『東南アジア 歴史と文化』32、pp.88-104。
- Hasuda, Takashi. 2004: *Seeing Mainland Southeast Asian Experiences from the Early Modern Empire Perspective*. Paper presented at panel 3-6: Critical Dialogues between Maritime Asian Studies and the World-System Theory: The “Early-Modern Empire” Concept from the Viewpoint of Asian History. The 18th IAHA Conference, 8 Dec. 2004, Academia Sinica, Taipei.
- 蓮田隆志 2005: 「『華人の世紀』と近世北部ベトナム —— 1778 年の越境事件を素材として ——」『アジア民衆史研究』10、東京: アジア民衆史研究会、pp.76-94。
- 平野聡 2004: 『清帝国とチベット問題』名古屋大学出版会。
- 茂木敏夫 『変容する近代東アジアの国際秩序』(世界史リブレット 41)、山川出版社、1997。
- 石濱裕美子 2001: 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。
- 岩井茂樹 1996: 「十六・十七世紀の中国辺境社会」小野和子(編)『明末清初の社会と文化』京都大学人文科学研究所、pp.625-659。
- 岸本美緒 1998: 「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」『東アジア・東南アジア伝統社会の形成』(岩波講座 世界歴史 13)、岩波書店、pp.3-73。
- 岸本美緒 2001: 「一八世紀の中国と世界」『七隈史学』2、pp.1-15。
- Lieberman, Victor. 1997: *Mainland-Archipelagic Parallels and Contrasts, c.1750-1850*. In *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*, edited by Anthony Reid, London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press, pp.27-53.
- Lieberman, Victor. 1999: *Trascending East-West Dichotomies: State and Culture Formation in Six Osensibly Disparate Areas*. In *Beyond Binary Histories: Re-imagining Eurasia to c.1830*, edited by Victor Lieberman, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp.19-102.

- Lieberman, Victor. 2000: *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c.800-1830. Vol.1: Integration on the Mainland*. Cambridge: Cambridge UP. Vol.2 has not been published yet.
- 宮脇淳子 1995: 『最後の遊牧帝国 ジューンガル部の興亡』 講談社選書メチエ 41。
- 桃木至朗 2001: 「ベトナムの「中国化」」池端雪浦(編)『変る東南アジア史像』(第2刷)、山川出版社、pp.109-129。
- 茂木敏夫 1997: 『変容する近代東アジアの国際秩序』(世界史リブレット41)、山川出版社。
- Reid, Anthony. 1988-93: *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680*. 2vols. New Haven & London: Yale UP.
- Reid, Anthony. 1993: Introduction: A Time and a Place. In *Southeast Asia in the Early Modern Era: Trade, Power, and Belief*, edited by Anthony Reid, Ithaca: Cornell UP, pp.1-19.
- Reid, Anthony, ed. 1995: *Sojourners and Settlers: Histories of Southeast Asia and the Chinese*. NSW, Australia: Allen & Unwin.
- Reid, Anthony, ed. 1997: *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*. London: Macmillan Press; New York: St. Martin's Press.
- 桜井由躬雄 2001: 「総説 東南アジアの原史——歴史圏の誕生」山本達郎(責任編集)『原史東南アジア世界』(岩波講座 東南アジア史 1)、岩波書店、pp.1-25。
- 杉山清彦 2001: 「大清帝国史のための覚書——セミナー「清朝社会と八旗制」をめぐって」『満族史研究通信』10、pp.110-126。
- Sugiyama, Kiyohiko. 2005: The Ching Empire as a Manchu Khanate: The Structure of Rule under the Eight Banners. *Acta Asiatica*. 88, pp.21-48.
- 鈴木中正 1975: 「黎朝後期の清との関係(一六八二—一八〇四年)」山本達郎(編著)『ベトナム中国関係史』山川出版社、pp.405-492。
- 和田博徳 1961: 「清代のヴェトナム・ビルマ銀」『史学』33-3/4、pp.119-138。
- 渡辺美季 2003: 「琉球と中国——近年の研究動向——」『中国史学』13、pp.133-158。
- 渡辺美季 2005: 「清に対する琉球関係の隠蔽」『アジア民衆史研究』10、pp.49-67。
- Wolters, O. W. 1999: *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Ithaca, NY: Southeast Asian Program, Cornell Univ.
- 柳沢明 1999: 「康熙五六年の南洋海禁の背景——清朝における中国世界と非中国世界の問題に寄せて」『史観』140、pp.72-84。
- 八尾隆生 2001a: 「山の民と平野の民の形成史——15世紀のベトナム」石井米雄(責任編集)『東南アジア近世の成立』岩波書店(岩波講座 東南アジア史 3)、pp.205-231。
- 八尾隆生 2001b: 「収縮と拡大の交互する時代——一六—一八世紀のベトナム」石井米雄(責任編集)『東南アジア近世の成立』(岩波講座 東南アジア史 3)、岩波書店、pp.233-259。
- 吉澤誠一郎 2002: 『天津の近代』東京大学出版会、2002。

Celebrating colonial encounters:
An examination of the postcolonial discourses and
the socio-cultural politics of historical education
in the Netherlands, in terms of the 400th anniversary
of the Dutch East India Company, 2002

FUJITA Kayoko

Abstract:

The primary aim of this paper is to examine the recent debates in the Netherlands and Asia regarding the 400th anniversary of the Dutch East India Company or the VOC (*Verenigde Oost-Indische Compagnie*) in 2002, based chiefly on a series of interviews with museum curators, and history students and scholars in the Netherlands. Stress will be upon the diversity of ways in which the European colonial heritage is being (re)presented in the national celebration/commemoration project, and upon the contrasting ways in which people at home and abroad have responded towards the representation of the VOC in each event (e.g., the commemorative ceremony, museum exhibitions). The analysis of the paper will lead us to a wider discussion on the roles and the responsibilities of academics, historians in particular, in postcolonial societies of our time.

Key words:

The Dutch East India Company, Netherlands, historical education, museum, commemoration, socio-cultural politics, postcolonialism, being “clinical”

“Historical events are too complex to be celebrated.
To remember them on the other hand is useful,
because forgetting them is costly”

Sanjay Subrahmanyam
The Rediff Interview, June 1997¹

1 Introduction:

How can historians be “clinical” in contemporary societies?
(And should they?)

Racial and ethnic issues are widely recognised as the external trigger for a number of violent incidents in Europe and Australia, such as the London bombings (July), the civil unrest in France and neighbouring countries (October), and the attacks on Muslim community members in Sydney (December), which made headlines around the world during the latter half of the year of 2005. At the same time, although Japan is predicted at this dawn of the 21st century to gradually shift towards a multiracial, multiethnic, and multicultural state due to the increasing figures of the overseas labour force in particular, which western societies have been experiencing during the last centuries, there is not much discussion among Japanese historians on the ways in which they should be committing themselves to the coming social and cultural transformation.

Compared to adjacent disciplines in the humanities and social sciences, history, as a discipline, often seems to lag behind in making a solid action plan for the application of its disciplinary knowledge to improve the quality of human conditions in contemporary societies, partly for being a branch of learning that deals with past events in essence.² Take sociology, one

1 Sanjay Subrahmanyam, “The Rediff Interview / Professor Sanjay Subrahmanyam,” *Radiff on the Net*, 9 June 1997, e-mail interview by Archana Masih; available from <http://www.rediff.com/news/jun/09gama2.htm>; Internet; accessed 2 September 2003.

2 Also the self-regulation on the side of historians on the use of the discipline as social engineering should be pointed out as the cause, considering the past cases of the abuse of history during the process of (modern nation) state building and the territorial expansion to neighbouring countries. See, for example, Oguma Eiji’s *A Generalogy of ‘Japanese’ Self-Images* (1995; Trans Pacific Press, 2002), in which the author examines various cases in which academics (e.g., historians, sociologists, and anthropologists) had a part in creating the myth of “Japan as a homogeneous nation”.

of history's closest neighbouring disciplines, for example; in combination with "applied sociology", which is a research-oriented sociological practise, "clinical sociology" is defined as "the application of the sociological perspective to facilitate change", and the clinical sociologist is "primarily a change agent who is immersed in the client's social world" and who works in the areas "such as health promotion, sustainable communities, social conflict or cultural competence"³, which naturally include racial and ethnic disparities.

The purpose of my paper is to analyse the recent debates in the Netherlands and Asia⁴ regarding the 400th anniversary of the Dutch East India Company or the VOC (*Verenigde Oost-Indische Compagnie*) in 2002, as an introduction to the cases in which scholars were forced to confront the bitter legacy of a nation's past, for the wider discussion on nationalism, colonialism, and the roles of academics in our contemporary society. The anniversary was "celebrated" in the Netherlands throughout the year with hundreds of cultural and commercial events, including around fifty museum exhibitions. The main event of the whole commemoration project was the commemorative ceremony on 20 March 2002, broadcast nation-wide in the Netherlands, which was held in the presence of the Queen of the Netherlands, the Crown Prince and Princess, and the Cabinet members, at the Ridderzaal, or the Knights' Hall, of the Binnenhof Palace in The Hague, where the VOC had been granted a charter exactly 400 years before.

I will first clarify why the celebration/commemoration of the VOC's establishment appeared on the Dutch political agenda and how the diverse dimensions of the VOC's activities were commercially and academically represented in the various events in connection with the 400th anniversary, with particular emphasis on museum exhibitions that visualised the diversified range of existing perspectives towards the Dutch colonial past in and outside the current Dutch nation⁵. I will also describe how people at home and abroad have responded towards the national

3 American Sociological Association, *Careers in Clinical Sociology* (2003), 2. Available from http://www.asanet.org/galleries/default-file/clinSOC_45575v2.pdf, Internet.

4 When I say "Asia" in this paper, I refer to (i) the broad area from Cape Town to Nagasaki where the trading networks of the VOC covered before its bankruptcy in 1799 and (ii) the Dutch East Indies (roughly current Indonesia) in the modern period. As space is limited, I will focus on Indonesia, where the VOC had a number of branch offices including Batavia Castle or the Company's Asian headquarters.

celebration/commemoration project and the representation of the VOC in each event. My analysis will be chiefly based on a series of interviews with museum curators and students and scholars at various higher educational institutions and research organisations who voluntarily committed themselves to, chose not to commit themselves to, or were unavoidably involved in the commemorative events in diverse situations, which I had conducted during my intermittent stay in the Netherlands from 2002 to 2005.

2 *Viering* (Celebrating) or *herdenking* (commemoration): The 400th Anniversary of the VOC in the Netherlands

2-1 Why did the Dutch celebrate/commemorate the VOC's founding?: The prospectus "What We Shall Celebrate"

Let us begin with an examination of the meanings of the events regarding the 400th anniversary of the VOC in terms of contemporary Dutch politics of identity.

Why did the Dutch people celebrate/commemorate the founding of the VOC in the first place? Let us see the prospectus entitled "What We Shall Celebrate" of Stichting Viering 400 Jaar VOC (literally the Foundation for the 400-Year VOC Celebration; hereinafter referred as "Stichting"), which was a specially constituted board of well-informed independent personalities (including university scholars and curators specialising in the history of Dutch eastward expansion) established to "promote, co-ordinate, and support the activities organised in purpose of the celebration" sponsored by the de Dutch government, ABN-AMRO, Euronext, Fugro, Heineken and IHC.

⁵ In recent years, the importance of museum education as a part of cultural politics became more and more stressed in the West. Museum educators, including museum teachers, curators, and volunteer staff, are required to take the postcolonial conditions of their societies into consideration when they compose exhibits in order to help the general public to learn about the histories and cultures of ethnic minorities and to cultivate a perspective of the current multiethnic world. See Eilean Hooper-Greenhill, "Education, communication and interpretation: Towards a critical pedagogy in museums" in Hooper-Greenhill, ed., *The Educational Role of the Museum*, 2nd ed. (London and New York: Routledge, 1999).

What we shall celebrate

On 20 March 1602, the States-General issued a charter to the VOC.... This successful unification of powers [of the various trading companies ahead of the VOC]: The disposition of the V [of *Verenigde* or United] in front of the OC, which is what we are going to celebrate.

During the celebration, the emphasis shall be laid on the foundation of the VOC: the period from 1595 to around 1620. Besides the foundation, attention will also be paid to the development that has directly followed the foundation of the VOC.... At the same time, the development of the VOC in the later period, including the dark side, will be examined.

In order to make the VOC and its history clear to the broad public, a light shall be shed also on a number of themes such as spices, porcelain, flora, fauna, the art of navigation, music, acquainted VOC poems, and ethnology.

The significance of the VOC did not lie only in the past but also in the present and the future. Therefore, in connection with the celebration, special attention will be paid to the importance of a world-wide orientation and of entrepreneurship, craftsmanship, and innovation for the future of the Netherlands.⁶

In 1602 the VOC was founded with a capital of six million guilders from issuing shares, receiving a charter from the States-General (*Staten-Generaal*) of the United Provinces, the highest authority of the Republic of the Netherlands, to monopolise the trade to the east of Cape Town. The economic and cultural prosperity of the Dutch Republic in the 17th century, which is described as “*de Gouden Eeuw*”, or literally “the Golden Century”, was largely based on the success of this first multinational trading enterprise in history. Therefore, the VOC has been regarded as far more than a mere private mercantile company. Rather, it has been seen as a splendid national symbol of the Dutch Golden Age, which faded as the country tumbled in the following three centuries into a political and economic downfall. This downfall was marked by successive wars against England, annexation by France, the separation and independence of current Belgium, occupation by Nazi Germany, and finally a post-war depression.

6 Originally in Dutch. Stichting Viering 400 Jaar VOC, *Viering 400 Jaar VOC 1602/2002: Programma van activiteiten* [the pdf-version of the official brochure on-line]; available from <http://www.voc2002.nl/download/brochure.pdf>; Internet; accessed 5 July 2003, 1. The Internet homepage of the Stichting Viering 400 Jaar VOC was closed and the documents on the page are no longer accessible. The prospectus is not included in the printed version.

In addition, behind the controversial attempts to commemorate the founding of the VOC, we should notice a firm political intention to establish a new Dutch national identity at the dawn of the 21st century. The prospectus elevates the VOC to a symbol of the current Dutch nation, stressing “the importance of a world-wide orientation and of entrepreneurship, craftsmanship, and innovation for the future of the Netherlands”⁷. Thinking of the size, population, and productivity of the current Dutch nation, and the importance of Schiphol Airport and the Ports of Rotterdam and Amsterdam for the transport infrastructure of Europe, we can say that reflecting the glory of the VOC onto the current and future images of the nation that was then at the last phase of the Dutch Miracle, or the economic boom starting with the Wassenaar Agreement in 1982⁸, is easily comprehensible among ordinary citizens and thus an effective tactic to direct popular will towards a national identity.

2-2 How did the Dutch celebrate/commemorate the VOC's founding?:

Statistics on museum exhibitions

Although the prospectus states that “the dark side” of the Dutch presence will be displayed, it was unavoidable that most of the exhibitions held as a part of the 400-Year VOC Celebration, which received the governmental subsidy through the Stichting, turned out to be in praise of the “glorious past” of the VOC.

Let us take a glance at how Dutch curators gave effect to the Dutch-centralised framework. Here is a grouping of the museum exhibitions mounted in association with the 400-year VOC celebration, made by a Japanese historian who then was working on Indonesian history in the Netherlands:

7 These catchphrases can be found in other governmental publications to this day. For example, *Oranda ni fòkas* (Focus on the Netherlands), an introductory brochure on the current Dutch nation published by the Ministry of Foreign Affairs, uses the iconic signs that represent the four catchphrases that “indicate the typical Dutch characteristics”. Ministerie van Buitenlandse Zaken, Afdeling Voorlichting en Communicatie Buitenland, ed., *Oranda ni fòkas* (The Hague, 2004) 5.

8 The economic bubble was officially collapsed in the year 2001, as the economic growth rate indicates (1999 3.9%, 2000 3.3%, 2001 1.3%, 2002 0.2%).

Grouping of the museum exhibitions (forty-six in total*)

The activities and development of the VOC	15
Imported commodities from Asia (e.g. spice, tea, coffee, silk, porcelain)	13
Materials related to the VOC (e.g. coins, ships)	10
The Achievements of individual VOC employees	9
The Great Ambonese War 1651-1656	
(The military conflicts between the VOC and the locals in Ambon, the Moluccas)	1
Other (grouping impossible)	1

*An exhibition may be grouped into more than one category.⁹

From the viewpoint of Asia, we can point out at least two drawbacks; firstly, the ways in which the exhibitions depict the colonised. Regions in Asia were presented merely as production centres of natural products and handicrafts, and thus not as agents with a history and culture of their own. Consequently, the entrepreneurship of the Dutch who had embarked on great ventures to Asia was emphasised. While stressing the trade-oriented nature of the VOC, the exhibitions almost completely neglected the ways in which the Asian products were collected. In reality the VOC had urged upon local Asian rulers the Dutch monopoly of trade in natural and agricultural products and the strict control of cultivation in order to protect their business profit. The second drawback was the neglect of the historical continuity between the mercantile/early modern and imperialistic/modern periods. Many of the exhibitions failed to exploit the obvious analogy between pre-modern Dutch-Asian relationships, in which Asian products and technologies had contributed to enrich European material culture, and the relationship between the colonial regime and the people who had been colonised from the 19th century onwards.

The above Dutch-centralised tendencies were thoroughly visualised in the form of the National Jubilee Exhibition, "*De kleurrijke wereld van de VOC*" (The Colourful World of the VOC) that was held simultaneously at the Netherlandish Shipping Museum in Amsterdam (16 March to 27 October 2002) and the Maritime Museum in Rotterdam (16 March to 15 September 2002). Markus Vink, a Dutch historian at the State University of New York working on Dutch

⁹ Ota Atsushi, "Conflicts and Dialogues Concerning the Recognition of the History of the Netherlands and Indonesia: The 400th Anniversary of the Dutch East India Company and Its Repercussions in 2002," *Journal of Asia-Pacific Studies* 5 (2003): 84.

colonisation to the Caribbean, harshly criticised the exhibition by starting his review of the official exposition catalogue¹⁰ that, “Whereas the quincentennial of Columbus’ discovery of the New World in 1992 led to a critical re-evaluation, at least among some Euro-American scholars in the United States, of the repercussions of European expansion for Native Americans, the quadric-centennial of the founding of the Dutch East India Company a decade later in 2002 produced a virtually unanimous outpour of nationalist pride in the Netherlands (if not in the former colonies, such as Indonesia).”¹¹ I agree with Vink when he points out that neither Dutch academics, nor the Dutch public in general, will share the severe sense of self-reflection that has been required of their colleagues in the United States through the spread of postcolonialism since the 1990s.

3 How people responded towards the VOC events: Voices from the Inside and the Outside

3-1 “Indonesia Spurns VOC Party” (Radio Nederland, 20 March 2002)

Let us now take a look at the reactions from the former Dutch colonies.

In advance of the ceremony, in the former Dutch colonies, Indonesia in particular, as well as among Indonesian residents and refugees in the Netherlands¹², protests broke out in reaction to the way in which the Dutch were commemorating the establishment of the VOC in 1602, since the VOC’s presence was regarded as having allowed the introduction of 19th-century colonial domination and consequent underdevelopment and political conflicts.

The Indonesian government made its attitude towards the VOC and the commemoration of its 400th anniversary clear by making a statement entitled “Bilateral Relations” on the Internet

10 Leo Akveld and Els M. Jacobs, *De Kleurrijke wereld van de VOC: Nationaal jubileumboek VOC, 1602-2002* (Bussum: THOTH, 2002).

11 Markus Vink, “Review: Leo Akveld and Els M. Jacobs, *De Kleurrijke Wereld van de VOC: Nationaal Jubileumboek VOC, 1602-2002*,” *Itinerario*, no.2 (2003): 155.

12 For the protest movements by the Moluccans in the Netherlands, see Ota, “Conflicts and dialogues”.

homepage of its embassy in The Hague.

“Bilateral Relations: Indonesia’s View on the Commemoration of the Dutch East India Company’s 400th Anniversary”, The Hague, the Netherlands, 19 February 2002

Indonesia’s perception of the Dutch East India Company or the VOC (Vereenigde Oost-Indische Compagnie) and the commemoration of its 400th anniversary this year is different than that of the Dutch. To many people in Holland, the VOC represents the golden age of Dutch commerce. For Indonesians, however, the VOC’s arrival in 1602 marked the beginning of 300 years of Dutch rule in Indonesia, a time of oppression which brought great suffering and hardship to the Indonesian people.

*If this commemoration intends to present a true picture of the VOC to the public, the VOC related exhibitions and seminars to be held in various cities in Holland throughout 2002 should not only highlight the VOC’s role as a successful trading company, but also include a healthy dose of the dark side of its history. There should be a fair presentation of facts so that people are made aware that the VOC carried out policies which far exceeded those of a mere trading company.*¹³

In this statement, it was emphasised that the Indonesian people recognise the VOC as the predecessor of the Dutch colonial state and that that nature of the VOC presence should be presented to the Dutch public through the museum exhibitions and public and academic lectures held as a part of the commemorative project. The government concluded the statement, while acknowledging the Dutch right to commemorate the founding, by stating that Indonesia would *not take part in the festive commemoration. Consequently, the Indonesian Ambassador to the Netherlands, Abdul Irsan, did not attend the commemorative ceremony at the Ridderzaal on March 20th. Explaining his government’s perspective, he responded to interviewers, “I just wanted to ask you, suppose a country which had occupied your country then asked your people to celebrate together in connection with their occupation, [sic] what will be your reaction?”*¹⁴

13 “Bilateral Relations: Indonesia’s View on the Commemoration of the Dutch East India Company’s 400th Anniversary,” [document on-line] (The Hague, the Netherlands, 19 February 2002); available from the Internet homepage of the Indonesian Embassy in The Hague, the Netherlands, <http://www.indonesia.nl>; Internet; accessed 2 September 2003.

14 “Indonesia Spurns VOC Party,” Radio Nederland Wereldomroep, 20 March 2002; available from <http://www.rnw.nl/hotspots/html/netherlands020320.html>; Internet; accessed 2 September 2003.

In the comment by the Indonesian ambassador, we can sense an ill-concealed exasperation at the nationalistic view of history being expressed by its former coloniser. Actually, we can hear precisely the same tone in the newspaper article “*Als ik eens Nederlander was*”(If I were for once to be a Dutchman) written by an early Javanese-Indonesian nationalist back in 1913, when the Dutch colonial regime in Batavia enforced both physical participation and financial contributions for the festivities to celebrate the centennial of the “national liberation” of the Netherlands from Napoleonic imperialism:

“*Als ik eens Nederlander was*” (If I were for once to be a Dutchman)

In my opinion, there is something out of place - something indecent - if we (I still being a Dutchman in my imagination) ask the natives to join the festivities which celebrate our independence. Firstly, we will hurt their sensitive feelings because we are here celebrating our own independence in their native country which we colonize. At the moment we are very happy because a hundred years ago we liberated ourselves from foreign domination; and all of this is occurring in front of the eyes of those who are still under our domination. Does it not occur to us that these poor slaves are also longing for such a moment as this, when they like us will be able to celebrate their independence? Or do we perhaps feel that because of our soul-destroying policy we regard all human souls as dead? If that is so, then we are deluding ourselves because no matter how primitive a community is, it is against any type of oppression. If I were a Dutchman, I would not organize an independence celebration in a country where the independence of the people has been stolen.¹⁵

This article became well-known among non-Dutch speaking readers through being quoted in Benedict Anderson’s now classic *Imagined Communities*, as an example of European “national histories” violently brought into the consciousnesses of the colonised, in Anderson’s words, “via occasional obtuse festivities” (and also through reading-rooms and classrooms, he emphasises).

I should note, however, that the response of the Indonesian public towards the VOC was not as acute as that of their government. Gerrit Knaap, a Dutch historian at the Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies (KITLV) who attended the symposium in

15 Originally appeared in *De Expres*, 13 July 1913. Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, revised ed. (1983; London and New York: Verso, 1991), 116-17.

Jakarta in 2001 on the history of Dutch presence in Indonesia organised by the Indonesian embassy, witnessed that the Indonesian audience was enraged with an Indonesian historian who proposed the revision of merits and demerits of the Dutch colonial occupation of their county while the audience took the VOC issue in a calm manner.¹⁶ Among the Indonesians in general, the 200-year period of the VOC belongs to the historical past that is hard to draw a direct connections with their daily life, in comparison with Dutch imperialism and colonialism that are commonly regarded as the most principal source of suffering of the nation.

3-2 De Nederlandse ontmoeting met Azië/ The Dutch Encounter with Asia

It would be far from fair if I neglected the efforts of a few Dutch curators to present the latest academic achievements in the historiography of the Dutch expansion, particularly in Asia. “The Dutch Encounter with Asia 1600-1950” presented at the Rijksmuseum Amsterdam (12 October 2002 to 9 February 2003) occupies an outstanding position among the exhibitions held in connection with the 400-year anniversary of the VOC’s establishment, with its vigilant avoidance of the nationalistic preoccupation that I have described. Kees Zandvliet, the curator at the Rijksmuseum Amsterdam who was in charge of this exceptional exhibition, states in his contribution to a newspaper, “the Netherlands has not really worked on the colonial past nor takes an interest in it. Instead, it desires to celebrate the ‘good and romantic’ history of the VOC. Therefore, the year 1800 functions as a cover to keep awkward history at a distance.¹⁷”

The Stichting approached the Rijksmuseum while it was nominating institutions and organisations that would participate in the national celebration in the year 2002, and was naturally troubled with the keynote of the exhibition that the Rijksmuseum had been planning, which addressed the “dark side” of the VOC history directly. After a series of negotiations, the Rijksmuseum, the most prestigious museum of the nation, decided to hold the exhibition that

16 From an interview with Knaap by the author on 30 August 2005.

17 Kees Zandvliet, “400 jaar VOC: Viering met bijmaakje,” NRC Handelsblad, 19 March 2002 [newspaper on-line]; available from <http://www.nrc.nl>; Internet; accessed 6 September 2003.; Zandvliet contributed the article with the consent of the authorities of the Rijksmuseum. From an interview with Zandvliet on 26 August 2005. Unless otherwise noted, all Zandvliet quotations are taken from this interview.

thoroughly examines the Dutch past in Asia without governmental subsidy.¹⁸

Let us look at the composition of the exhibition based on the catalogue, which was contributed to by more than twenty Dutch museum curators and researchers at educational and research institutions. Contrary to *De kleurrijke wereld van de VOC*, the Jubilee exhibition catalogue that belongs to the genre of the glossy “coffee table book”, *The Dutch Encounter with Asia 1600-1950* is full of a critical tone against the exploitative and the militaristic orientations of the Dutch presence in Asia from the early modern period to the end of the war after the declaration of Indonesian independence in 1945:

The composition of the exhibition “The Dutch Encounter with Asia 1600-1950”

Time	Section
1600	1 The arrival of the Dutch in Asia
1602-1785	2 Bureaucracy from Batavia
	3 Governor-General portraits, 1609-1945
	4 Diplomacy and indirect rule
	5 Maritime power and control
	6 The Dutch perspective on Asia
	7 The Asian market
	8 Life in the East Indies
1785-1825	9 Before and after the bankruptcy: Change and continuity
1825-1941	10 From diplomacy and indirect rule to direct rule
	11 From limited force to subjection
	12 The East Indies market, 1825-1950
	13 Life in the East Indies after 1825
1945-1949	14 Four Years of transition ¹⁹

18 The Rijksmuseum Amsterdam was not the only institution that raised an objection to the nationalistic events to praise the colonial past. I was informed by some archaeologists, who wished to be anonymous, that the National Service for Archaeological Heritage (Rijksdienst voor het Oudheidkundig Bodemonderzoek or ROB, Amersfoort, the Netherlands) decided, through the internal discussions after the ROB had been contacted by the Stichting, not to hold exhibitions in relation to the VOC400 because of the VOC’s problematic character.

19 Based on Kees Zandvliet, ed., *The Dutch Encounter with Asia 1600-1950* [Exhibition catalogue at the Rijksmuseum Amsterdam] (Amsterdam: Rijksmuseum and Zwolle: Waanders, 2002). Thanks to Zandvliet and the Rijksmuseum’s efforts, a Dutch and an English edition of this catalogue are now available.

The significance of this exhibition is, firstly, that it captured the 350-year continuity of the Dutch existence in Asia before and after the fall of the VOC in 1799 except for the period of Japanese military occupation of Indonesia from 1941 to 1945. Secondly, it paid considerable attention to the fact that the VOC in Asia was far more than a mere commercial enterprise and practised all the wiles of diplomacy and appeal to arms if necessary.

I should note that the Rijksmuseum's unique approach towards the VOC did not stir debate among the general public in the Netherlands, whether a positive or negative response. Zandvliet explains that it was due to the unspoken but widely shared feeling among the Dutch that the VOC is after all far past. It was actually the dealing with the Japanese occupation period, during which thousands of Dutch inhabitants in the Dutch East Indies had been interned and killed at the *Jappen-kampen* (Jap's camps) or the concentration camps, that provoked an argument, as is seen in the review of the exhibition written by the critic Rudy Kousbroek known for his work *Het Oostindisch Kampsyndroom* (J.M.Meulenhoff, 1992).

3-3 The VOC events and Education: Reactions from young scholars

The commemorative project also introduced serious confusion into the field of research and higher education in the Netherlands. Let me show you a fragment from the theatrical performance played during the commemorative ceremony at the Ridderzaal, in which three Indonesian postgraduate students at Leiden University refused to play the role of labourers. Briefly, it is a silent drama, in which men and women of various ethnicities in native costume (implicitly Indonesians) walk in a line and show tributes or trade goods that they are carrying to the members of the Dutch royal family, accompanied by peaceful and romantic 17th-century Dutch music played by an Indonesian gamelan and Western instruments.

The three Indonesian postgraduate students who boycotted this play belonged to a training programme that was a part of a large-scale heritage project associated with the Memory of the World Programme of UNESCO, that was established "to preserve the VOC archives as a component of the mutual heritage of the three continents [of Europe, Africa, and Asia]" actually mainly

subsidised by the Dutch government.²⁰ Once they had shown their intransigent attitude, the program coordinator told in a discussion with them that they should not politicise the issue unnecessarily and that the performance in front of the royals and the political leaders at the Ridderzaal was nothing more than a practical attempt to assure the future budget of the program.²¹

The reasons for the boycott are varied; one refused to play in order to clarify his disapproval for the purport of the ceremony, which he evaluated was just to celebrate the founding of the VOC, which paid no regard to the later colonial rule. Another decided not to play after a rehearsal because he felt humiliated to play a role of labourer and was displeased with the play in which it was utterly neglected that the VOC had often used armed force on the natives in Asia. The third student was afraid that Indonesian residents in the Netherlands would have thought that he had aligned himself with the Dutch view of history if he had performed in the play in question or even attended the ceremony.²²

The students were asked to participate by their supervisor, who sat on the organising committee of the Stichting. Suppose that we were Asian students working hard in an advanced masters programme to achieve a scholarship for a Ph.D. programme; would it be an easy decision to say “no” to our supervisor? In my opinion, we can see here that the notion of the VOC which derived from the official Dutch viewpoint, and which had caused political conflicts with the Indonesian government and people, was well embodied in this abstract play and was being imposed upon the weakest stratum of the academic hierarchy.²³

20 For the entire picture of the project, Towards A New Age of Partnership, A Dutch-Asian-South African Heritage Programme (TANAP), see <http://www.tanap.net>.

21 A student who wished to be anonymous, interview by author, March 2002, Leiden University, Leiden.

22 Based on the oral interviews conducted by Ota Atsushi, a Japanese TANAP student at Leiden University working on 18th-century Banten, Java. Ota, “Conflicts and dialogues,” 86.

23 I would like to emphasise, however, that all of my interviewees and informants stated that they believed that students’ resistance did not prejudice their marks for the selection of Ph.D. candidates that took place after the event.

4 Discussion:

“All history is contemporary history” (Benedetto Croce)

Whether in the Netherlands or not, the encounters between West and East in the 21st century won't be as peaceful as the one that was (rather naively) depicted at the end of the commemorative ceremony at the Ridderzaal: The ceremony was closed with the silent meeting of West (represented by a Dutch female adult cellist in a tail-coat) and East (a little Indonesian boy holding a white paper boat, wearing a black Muslim cap and a sarong, with the upper body naked). The VOC year of 2002 witnessed the burst of the economic bubble, the assassination of the flamboyant anti-immigrant right-winger Pim Fortuyn, the devastating defeat of Prime Minister Wim Kok and his Labour Party, and the transfer of power to the centre-right coalition. Those events were backed up by the rise of anti-immigrant feelings among the Dutch, which had been actually prepared in the aftermath of the September 11 attacks in the preceding year. Although the revolts in the Paris *banlieux* in October 2005 did not spill over into the Netherlands, unlike its neighbouring countries of Belgium and Germany, the Dutch nation is still undeniably on a path to identify potential flashpoints for ethnic-related violence and to contain and resolve social unrest.

There have indeed been some on-going changes in politics as well as in academia during the short period after the year 2002. As for coloniser-colonised relations, the summer of the year 2005 will be remembered for the historical Dutch recognition of the independence declaration of the Republic of Indonesia on 17 August 1945, with the visit of Dutch Foreign Minister Ben Bot, who was born and raised in the then Dutch East Indies and survived the Japanese concentration camp, which was extensively broadcast in the Netherlands (and in Indonesia). At the same time, one of the significant current trends in history studies in the Netherlands, which initiated around the commemoration year, is the increasingly animated debate about the VOC's active commitment to the *slavenhandel* or the slave trade (and the ever-increasing funds for research and education). At Leiden, for example, a new inter-faculty course on immigrants and minorities study, which covers the Faculties of Arts (history), Social Sciences, Law, and Theology, was introduced, which enables students to learn today's racial/ethnic-related social problems in the light of

historical contexts.²⁴ This can serve as a practical reference for Japanese academia in terms of the application of historical knowledge to current society.

By quoting Croce, curator Zandvliet, a rebellious art historian who had been unsatisfied with “romantic art history”, says, “In the sense that all history is in fact contemporary history – after all, history is necessarily experienced and rewritten from a contemporary perspective”²⁵. The point that should be asked here is “whose perspective?”. Forgetting historical events is, as Sanjay Subrahmanyam says, indeed costly. At the same time, however, remembering historical events became literally costly, particularly after the World Conference Against Racism (WCAR) organised by the United Nations in Durban, South Africa, from 31 August to 8 September 2001, where the subject of compensation for slavery and colonialism (e.g., monetary payments, debt relief) polarised the representatives from the West European states and African states. Historians are, in the West at least, requested to fulfil their social responsibilities more than ever to provide the fruits of their research to the public who belong to a wide range of social strata for determining the future courses of their own communities and societies.

(Designated Researcher / 特任研究員)

Acknowledgements

Thanks to Professor Dr. John Bintliff (Faculty of Archaeology, Leiden University) for his encouragement and discussion, and to the European Association of Archaeologists which gave me the opportunity to present an earlier version of this paper at its 9th Annual Meeting (10th-14th September 2003, St. Petersburg, Russia). This paper was completed based on various comments and suggestions from my colleagues, which I had received via discussion during and after the COE Junior Researchers meeting on 13 October 2005. I appreciate Professor Dr. Gerrit Knaap (head of the Department of Archives and Images and curator of the special collections of The KITLV/Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies, Leiden University,

24 For the latest information on the study of the slave trade in the Netherlands, see, P.C. Emmer, *De Nederlandse slavenhandel 1500-1850*, 2nd ed. (Amsterdam: Arbeiderspers, 2003) and his short article, “Migranten en minderheden,” in *Forum der Letteren: Nieuwsbrief Faculteit der Letteren* Vol. 2, No. 2 (April 2002). Available from http://www.let.leidenuniv.nl/forum/02_2/onderwijs/4.htm; Internet; accessed 23 August 2005.

25 Kees Zandvliet, “Note from the compiler,” in *The Dutch Encounter with Asia 1600-1950*, 427.

the Netherlands) and Dr. Kees Zandvliet (head of the Dutch history department, the Rijksmuseum Amsterdam, the Netherlands, and curator of the exhibition “The Dutch Encounter with Asia 1600-1950”) for making time to answer my various questions during my stay in the Netherlands in August 2005. I also would like to thank all of my interviewees and informants who chose to remain anonymous. I am most grateful to Ota Atsushi (Keio University), my then-colleague at Leiden, who has provided much needed printed materials regarding the VOC2002 events including his own article. Without his generous support and a number of discussions with him, I could not have finished this paper. Any remaining errors are entirely the responsibility of the author.

References

Printed Materials

- Akveld, Leo, and Jacobs, Els M. ed. 2002. *De kleurrijke wereld van de VOC: Nationaal jubileumboek VOC, 1602-2002*. Bussum: THOTH.
- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Rev. ed. London and New York: Verso.
- Emmer, P.C. 2003. *De Nederlandse slavenhandel 1500-1850*. 2nd ed. Amsterdam: Arbeiderspers.
- Hooper-Greenhill, Eilean. 1999. “Education, communication and interpretation: Towards a critical pedagogy in museums.” In *The Educational Role of the Museum*, ed. Eilean Hooper-Greenhill. 2nd ed. London and New York: Routledge.
- Ministerie van Buitenlandse Zaken, Afdeling Voorlichting en Communicatie Buitenland. ed. 2004. *Oranda ni fòkas*. Den Haag.
- Vink, Markus. 2003. “Review of *De kleurrijke wereld van de VOC: Nationaal jubileumboek VOC, 1602-2002*, by Leo Akveld and Els M. Jacobs.” *Itinerario* 2 (Summer): 155-8.

Zandvliet, Kees. ed. 2002a. *De Nederlandse ontmoeting met Azië 1600-1950*. Amsterdam: Rijksmuseum and Zwolle: Waanders.

Zandvliet, Kees. ed. 2002b. *The Dutch Encounter with Asia 1600-1950*. Amsterdam: Rijksmuseum and Zwolle: Waanders.

太田淳. 2003. 「オランダとインドネシアにおける歴史認識をめぐる軋轢と対話：2002年、オランダ東インド会社400周年記念行事とその反響」『アジア太平洋討究』5, 81-96. [Ota, Atsushi. 2003. "Conflicts and Dialogues Concerning the Recognition of the History of the Netherlands and Indonesia: The 400th Anniversary of the Dutch East India Company and Its Repercussions in 2002." *Journal of Asia-Pacific Studies* 5. 81-96].

Online Materials

American Sociological Association. 2003. *Careers in Clinical Sociology*. Available from http://www.asanet.org/galleries/default-file/clinsoc_45575v2.pdf.

Blussé, Leonard. 2002. "Drie vergeten jubilees en een omstreden herdenking." *Forum der Letteren: Nieuwsbrief Faculteit der Letteren* 2, no. 2 (April). Available from http://www.let.leidenuniv.nl/forum/02_2/personalia/3.htm.

Emmer, P.C. 2002. "Migranten en minderheden." *Forum der Letteren: Nieuwsbrief Faculteit der Letteren* 2, no. 2 (April). Available from http://www.let.leidenuniv.nl/forum/02_2/onderwijs/4.htm.

Indonesian Embassy, The Hague, the Netherlands. 2002. "Bilateral relations: Indonesia's view on the commemoration of the Dutch East India Company's 400th anniversary." 19 February 2002. Available from <http://www.indonesia.nl>.

Radio Nederland Wereldroep. 2002. "Indonesia Spurns VOC Party." 20 March 2002. Available from <http://www.rnw.nl/hotspots/html/netherlands020320.html>.

Stichting Viering 400 Jaar VOC. [2002]. *Viering 400 Jaar VOC 1602/2002: Programma van activiteiten*. 1-4. Originally available from <http://www.voc2002.nl/download/brochure.pdf>. Currently inaccessible.

Zandvliet, Kees. 2002c. "400 jaar VOC: Viering met bijmaakje." *NRC Handelsblad*. 19 March 2002. Available from <http://www.nrc.nl>.

民主主義の民族誌と民族誌の民主化

——人文学における臨床的アプローチのために

加藤 敦典

<要旨>

本論では、人類学者ジュリア・パレイによる「民族誌の民主化」の試みをとりあげ、人文学の臨床性を支える「現場」経験の記述のあり方を検討する。人文学の臨床性とは、C. ギアツによれば、事例の外側で一般的理念を研究するのではなく、「事例の中で一般化すること」である。いっぽう、私たちの研究会では、臨床性とは、「問題」とともに抱え込み、ともに考え、それにより学知を問い直しの可能性にさらすことである。パレイは、チリの事例から、「参加」をめぐる意味の争いを民主主義の「統治性」やそれを支える専門知の問題として描き出す。彼女は調査地の人々が作成した民族誌を自分の著作に挿入する。この試みは専門知としての民族誌の公共化には貢献したが、民族誌的表象スタイルの問い直しには結びつかなかった。そこから得られる人文学の臨床性にとっての教訓は、「現場」の知を欠如によって表象するのではなく、肯定による表象すること、すなわち「現場」の「特異性」を損なわずに、「否定なき差異」として描くことの重要性である。

<キーワード>

民主主義、民族誌、臨床性、特異性、人文学

人文学はもっと臨床的であるべきだ、というとき、臨床医学の比喩を使うと論点がずれてしまうことがある。人文学者が「現場」で出会うのは、病に苦しむ「患者」ではない場合が多いし、人文学者が「現場」に出ていくのは、「治療」のためではない場合が多い。本論でも臨床医学の例を使うので、この点は冒頭で指摘しておきたい。

また、人文学者は「現場」の問題解決のニーズにもっと積極的に応答すべきだという議論があるが、本論では、このような議論からも少し距離をとっておきたい。人文学と「現場」との出会いの意義を社会的ニーズへの応答という方面に限定してしまうと、学問的な知が「現場」から受け取るさ

まざまなインパクトを十分に生かすことができないのではないか、と思うからである。

臨床医学の比喩や社会的ニーズの議論を離れて、もっとも概括的に人文学における臨床性の問題をとらえるならば、それは、人文学の学問的な知が「現場」のインパクトをきちんと受け取るためにはどうすればよいか、という問題だといえるだろう。このようなことが問題になるのは、人文学者が「現場」から遊離した問いを立てて、それに答えることで学問を成り立たせてしまうことがよくあるからである。

私が専攻している文化人類学は、このような広い意味での臨床性の問題について考えるうえで豊富な蓄積を持つ分野である。本論では、民主主義の問題を人類学的なアプローチから研究するジュリア・パレイの『マーケティング・デモクラシー』（Paley 2001）に焦点をあててみたい。とくに注目したいのは、この本のエピソードの部分である。そこには、調査対象の人々が民族誌的調査手法を身につけて作成した報告書が掲載されている。パレイが「民族誌の民主化」の試みと位置づけるこの実験は、民主主義の「現場」における民族誌的な調査と、学問的な知としての民族誌の制度的な問い直しを結びつけようとする試みであり、人文学の臨床性のありかたとその課題について考えるための格好の事例であるといえる。とはいえ、私が彼女の試みを取り上げるのは、それが私たちの臨床性への関心（これについては後述する）を満足させるような成功を収めているからではない。彼女の試みは、専門知識としての民族誌的調査手法の公開ということでは、知の「民主化」に成功した。しかし、結局、それが民族誌という知のありかたの問い直しには結びついていかなかった。その理由を問うことで、人文学における臨床的アプローチの課題について考えてみたいと思うのである。

「民族誌の民主化」の試みについての検討を通して私をもっとも強調したいことは、「現場」で見たり聞いたりしたことを、何かが欠けているもの、つまり、「無知」、「無力」、「絶望」といった欠如の徴候として表象することの問題性である。もちろん、欠如や喪失の感覚を表象してはいけない、ということではない。「現場」におけるリアリティとしてそういうものが「ある」ならば、それは重要な考察の対象となるべきである。それでも、あえて、彼らは何かを持っている、彼らは何かを知っている、という肯定的なかたちによる表象の可能性を試してみることは、言い換えれば、「現場」のもつ「特異性」を「否定なき差異」（ドゥルーズ 1992:14, 19-20）としてとらえることが可能かどうか試してみることが、「現場」のインパクトを減退させずに学問的な知に結びつけるためには有効なのではないか、と思うのである。この点については、本論の最後であらためて検討したい。

なお、本論で民主主義の問題を取り上げる背景には、私たちの研究会のプランに関わるローカル

な理由がある。私個人の考え方が、この研究会が掲げる「討議空間のデザイン」という企図は、これまで民主主義という概念のもとに思考され、実践されてきた社会的営為と深く関連しているのではないかと思う。私たちがこの研究会のプロジェクトを批判的に検討するうえで、民主主義の理念と実践のあり方について意識的に考察することが必ず重要になってくるはずである。ただし、本論では、民主主義と研究会のプロジェクトとの関係については直接的には扱えなかった。本論が来年度の研究会での議論のための布石のひとつとなればと考えている。

1 臨床性

私たちの研究会のテーマが「臨床性」になると決まったとき、私は、自分が専攻する文化人類学にとって、これはあまり刺激的なテーマではない、と思った。人類学的研究が臨床的なアプローチをとるべきだ、ということは、ずっと以前から言われてきたことであるように思ったからである。いまさら臨床性を“お題”に持ち出すのは、書齋にこもって、本を読んだり頭をひねったりするだけで、人間の顔を見ずに人間についての論文を書いてきたと自戒する哲学者のためであって、人類学者にとっては、さらにこれといって考えるべきことはないのではないか、と。

クリフォード・ギアツの臨床性

アメリカの人類学者クリフォード・ギアツは、1973年に書いた論文のなかで、人類学を文化解釈の学として位置づけた場合の個別事例と理論的一般化との関係について論じている。そのなかで、文化の解釈における理論化とは「いくつもの事例を通じて一般化することではなく、事例の中で一般化すること」（ギアツ 1987a:44）だと論じ、そのようなアプローチはひろく臨床推理（clinical inference）と呼ばれていると指摘している。

事例の中で一般化することは、普通、医学や深層心理学では臨床推理と呼ばれている。この臨床推理は、一連の観察から始めて、それらを準拠法則に包摂しようとするものではなく、一連の（推定上の）意味するものから出発して、それを理解可能な枠のなかに置いてみようとするものである。測定は理論的予測に則しておこなわれるが、症状は（それが測定される場合でも）、理論

的な特異さゆえに調べられる——つまり診断されるのである (Geertz 1973:26; cf. ギャーツ 1987a:45)。

ここでギャーツが臨床推理ということばで示そうとしているのは、ギャーツが使っている「はしか」の診断の例に則して言えば次のようなことだ。「はしか」を診断する医師たちは、いくつもの似たような症例のなかに、一般的な「はしか」を発見するのではない。そうではなく、医師たちは、個別・具体的それぞれの症状を理解するために、「はしか」という一般化を通じてその臨床ケースを診断もしくは解釈しているのである。その意味で、具体的な臨床例の診断のあとにも先にも、一般化された理念型としての「はしか」そのものの研究や診断というものには存在しえない。それが、臨床と関わる学としての医学や深層心理学、そして人類学における、個別事例と理論的一般化のあいだの関係だ、というのである。つまり、ギャーツが主張するのは、もし、人類学が、「臨床」医学や「臨床」心理学と同様に、個別事例の意味の解釈をおこなう学問であると認めるなら、個別事例の研究がまず先にくるべきであり(というより、それしかないのであり)、一般化された理念型をそこに見いだすために個別事例を研究するような態度はありえない、ということである。ギャーツがこのよう主張をおこなうのは、単一的な理性の担い手としての「人間」を(科学主義的に)探求しようとするアカデミックな好奇心に警鐘を鳴らすためだった(ギャーツ 1987c:275, 285, 290)。その後も、ギャーツは、コンテキストから独立した「人間の本性」や「人間の心性」の概念を相対主義への防御のために再興しようとする試みへの反論として、同様の主張をおこなってきた(ギャーツ 2002:71)。

このように、人類学はまず何よりも個別事例に出会うために「現場」に出ていくべきだという臨床のすすめは、30年以上前からすでになされていたことになる。そして、人類学者の多くは、どこにもない理念型としての「はしか」の研究よりは、どこかにいる「はしか」の疑いのある患者の問診のほうに精をだしてきたのではないかと思う。

なお、ギャーツが言おうとしているのは、人類学は医学と同様に「患者」を治療しようとするものだ、ということではない。文化の研究において、「現場」で解釈を待っているのは症状や症候群ではなく、象徴的行為や象徴的行為群といったものであり、その目的は治療ではなく、社会的対話の分析である(ギャーツ 1987a:45)。

COE若手研究集合の臨床性

では、私たちの研究会が、いま、臨床性を考察することの意義はどこにあるのだろうか。ここでは、研究会の身近から臨床性についてのコメントを拾いながら、私たちのあいだで何が話し合われているのかを確認していきたい。研究会のメンバーのあいだで、臨床性とは何かについての合意はないが、私たちのあいだで話し合われている臨床性のおぼろげな核心にあるのは、容易に解決できない「問題」（苦しみ）を学問的な知と「現場」がともに抱え込み、ともに考えるというスタンス、言い換えれば、「問題」をめぐる知を「ともに」生産するというスタンスなのではないかと思われる。そして、それによって学問的な知のあり方が改変される可能性に期待しているのではないかと思われる。

まず、私たちの21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」の拠点リーダーである鷺田清一による臨床概念の理解のしかたを見てみよう。鷺田によれば、「<臨床>は、ある他者の前に身を置くことによって、そのホスピタブルな関係のなかでじぶん自身もまた変えられるような経験の場面」（鷺田1999:139）である。ここでいうホスピタブルな関係とは、鷺田の理解によれば、他者を<客>として迎え入れるとき、その<客>を自分の管理下に置こうとするのではなく、むしろ、自己を差し出し、<客>を主人の位置につけることであり、それによって自分のほうの同一性が傷つけられることもいとわれないような、抜き差しならない関係に入ることである（鷺田1999:136）。

次に、私たちのCOEプログラムのなかの「臨床と対話」班のアジェンダを見てみる。そこには次のようにある。

専門的な知識で武装した専門家や研究者と「無知」な素人、このイメージにおいて欠落しているのは、相互浸透する知のあり方である。“病床に臨む”と書くその字が示すのは“人々の苦しみに出会う場所”。

(http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/modules/ih/index.php/ih_group6_j.html)

ここでクローズアップされているのは、専門家と非専門家が出会いの場面である。専門家や研究者はそこで「人々の苦しみに」出会うことになる。そして、その苦しみをめぐって、専門家、当事者、そのほか立場の異なるさまざまな人々が対等な「知」の主体としてコミュニケーションをとりあひし、そのなかで「相互浸透する知」が現れる。この「相互浸透する知」の生成過程において、専門家の知の枠組みは、鷺田が指摘するようなかたちで、侵犯され、改変されていくはずである。

次に、私たち若手研究者集合の研究計画書からの引用である。私たちは、各ディシプリンのあいだの「横断」と、学問的な知の「臨床性」を可能にするような、討議空間のデザインをテーマに研究会をおこなってきた。

各科学間での「横断性」を突き詰めることは、その専門性を越えて行くことになるが、そこに現れるのは人間存在の根底に関わる諸問題系の呈示であり、この地点から「臨床性」を再検討することが可能になる。

ここで私たちが問題にしているのは、まず、第1に、研究会のメンバーのあいだでの「横断性」である。われわれは自分のディシプリンに対しては、いちおう「専門家」として振舞う。しかし、他のメンバーのディシプリンに対しては「素人」になる。この「専門家」と「素人」のあいだの対話をどのように構築するか。それが私たちにとっての具体的な問題となっている。この問題に依って、ディシプリンの専門性を越えた討議空間を私たちが生み出すことができれば、その空間は「人間存在の根底に関わる諸問題系」と直（じか）につながる可能性を持つようになるのではないか。私たちが考えているのは、学問的な知のなかでの「横断」を通じた、「臨床」への回帰である。

学問的な知と人間存在の諸問題との出会いにおいて生成する臨床の場では、問題の解決より、むしろ問題が容易には解決しがたい状況のなかで話し合いを継続する知的耐久力のほうが重視される、と私たちは考えている。私たちは次のように書いている。

「社会のニーズ」に即応して「問題」を解決する「臨床性」とは別に、差し当たって「答え」が見出されないような「課題」を継続的に討議・考察できるような場としての「臨床性」が創造されることになるであろう。

私たちは、自分たちの研究会もまた、ひとつの臨床の場面であるにとらえている。私たちにあってのさしあたっての「問題」は、先程述べたように、ディシプリンの違いに基づくメンバー同士の「通じ合わなさ・ディスコミュニケーション」であった。しかし、私たちは、これを「解消」すべき「問題」とは捉えない。むしろ、私たちが目指すのは、「現状としてある人文諸学の『通じ合わなさ・ディスコミュニケーション』を前提とした、人文学の共同的な討議空間・ネットワークのあり方を新たにデザインする実験的な試み」なのである。

「問題」に対する私たちのこのスタンスは、「問題としての『苦しみ』を解体するのではなく、〔……〕問題をともに抱え込み、分節し、理解し、考えるといういとなみをつうじてそれを内側から越えてゆくこと、あるいは越えてゆく力と呼び込むこと」(鷺田 1999:55)に通じている。ただし、ここでの「苦しみ」は、その場で解決が必要な急病患者の苦痛 (pain) というよりは、もっと慢性的でじっくりと付き合っていく必要のある「苦境」(predicament) として理解するべきだろう。

「ともに」考えること

「問題」をともに抱え込むこと、そこでともによく考えること、それによって自分たち自身が変わられる可能性に身をさらすこと。臨床性を“お題”にすえて考察することの意義は、ここでの「ともに」のあり方について考えることにあるようだ。

もっとも、「問題」をめぐる知を「ともに」生産するあり方については、人類学でも、すでに長いあいだ議論がおこなわれてきた。ギアツは、人類学者と現地の人々が象徴的行為の解釈の解釈……を「ともに」おこなっていることに言及していた。また、この論点は『文化を書く』(クリフォード& マーカス 1996) の筆者たちによってさらに展開されている。文化はそこに「ある」ものではなく、解釈されながら「書かれる」ものであり、そのようにして書かれたテキストは、人類学者がひとりですいたものではなく、現地での複数の解釈と人類学者自身の解釈が折り重なった共著書のようなものであるはずだ。このような民族誌的リアリズム批判と共著性の問題意識を顕在化させてくれる民族誌として、すでに古典的な作品となっているが、クラバンザーノの多声的民族誌の試み(本論の文脈では、民族誌家=臨床心理士パラダイムの試みと言ったほうがよいかもかもしれない)を挙げることができる[クラバンザーノ 1991]。

本論でジュリア・パレイの『マーケティング・デモクラシー』の議論をとりあげるのは、彼女の民族誌において、「問題」をめぐる知を「ともに」生産する共著的試みが、調査対象に民族誌を書かせるというかたちで端的に実践されているからである。しかし、そのような彼女の試みには危うさも感じられる。彼女の民族誌のなかで実践される共著的試みは、解釈の重層化、競合、対立を含みこむようなテキストを生産するというよりは、むしろ、同じスタイルで知を生産する主体を増やすためのプロジェクトのようにも見えてしまうことがある。別の言い方をすれば、彼女自身が議論の対象としている「民主主義」や「参加」といった概念の危うさが、彼女(たち)の民族誌的実践の場において再浮上しているようにも見えるのである。

2 民主主義の民族誌

パレイの議論の紹介に入る前に、まず、彼女の議論を含めた、民主主義の民族誌的研究の背景と動向を紹介しておきたい。

相対主義的アプローチ

人類学による民主主義研究の特徴は、民主主義が何であるかをあらかじめ設定せず、民主主義の定義をめぐる争いそのものが民主主義の意味をつくりあげていくプロセスに注目する点にある (Paley 2002:471)。それは、民主主義に対する相対主義的アプローチ、あるいは臨床推理的スタンスであると言えるだろう。人類学者は、民主主義の多様な意味の拡がりを、厭うべき定義の混乱としてではなく、学問的に検討すべき文化現象であるにとらえる。人類学者は、それらの民主主義の多様な意味がどのように表現され、また、それらの民主主義が具現化される時、どのような表象と結びつくのかを検討すべきだと考える (梶原 1998b: 5)。そのスタンスは、たとえばロバート・ダールのような政治哲学者が、デモクラシーとは何かについての「基準 (スタンダード)」(ダール 2001:37)をまず明らかにし、そのうえで、民主主義をめぐる現実を検討しようとする態度とは大きく異なっているといえるだろう¹。

ここで、第1に注意したい点は、この相対主義的アプローチの歴史性である。民主主義とは何かという問題を多様でローカルな意味の展開のなかで考える傾向が人類学における研究のスタンスとして定着したのは、「体制移行」と「民主化」がグローバルな時代の趨勢となった1990年代以降のことである。第2に注意したい点は、人類学による民主主義研究の相対主義的な傾向 (あるいは臨床推理的スタンス) への批判に、人類学者はどう答えようとしているか、という問題である。以下では、まず、第1の論点から見ていきたい。

1 ただし、ダールの1961年の著作である『統治するのは誰か』(ダール 1988; Dahl 1961)は、アメリカの地方都市における指導者選びや政策決定に見られる権力構造を徹視的な視点から歴史的にあとづける作品で、ほかのどの人類学者の著作よりも早い時期に書かれた、民族誌的な匂いのする民主主義研究であるといえる。

「あちらがわ」の民主主義へ

人類学的著作における民主主義への言及は、第二次大戦後の早い時期からすでにみられた。しかし、それらの研究では、定義がある程度はっきりした記述的なタームとして民主主義の概念が用いられている。また、民主主義とは何かという問題は主題化されないか、主題化されるとしても「こちらがわ」（西洋文明がわ）の問題として扱われていた。

たとえば、フランスの社会（人類）学者ルイ・デュイモンは、『ホモ・ヒエラルキクス』（デュモン 2001; 原著は 1966）のなかで、「近代人」の個人主義的・平等主義的イデオロギーを、ヒンドゥーのカースト体系の位階制イデオロギーとの対比によって批判している。このデュモンの著作では、冒頭にアレクシス・トクヴィルの『アメリカの民主政治』（1987）の文章が引かれていることからわかるように、民主主義の問題が中心的な主題となっている。しかし、デュモンにとって重要だったのは、民主主義的イデオロギーが自分たちの社会に何をもたらしたかであり、「あちらがわ」のヒンドゥー世界は、民主主義が（肯定的な意味で）ない世界として表象されていた。

時期は前後するが、イギリスの社会人類学者エドモンド・リーチは、1954年に著した『高地ビルマの政治体系』（リーチ 1995; Leach 1954）のなかで、高地ビルマのカチン地方における政治システムが、ふたつの理念的社会構造、すなわち、シャン型「独裁政治」とグムラオ型「民主主義」（あるいは無政府・平等主義）とのあいだを行ったり来たりする、きわめて動的なプロセスのなかにあることを示してみせた（リーチ 1995:10）。いってみれば、わざわざヒンドゥー世界と「近代人」の世界を対比させなくても、ひとつの社会のなかで位階制と民主制のせめぎあいを見ることができる、ということである。しかし、リーチの場合も、西洋における民主主義の概念を、現地の社会構造の理念型を理解するために比喩として用いたにすぎず、民主主義の概念そのものの問い直しは主題化されていなかった。また、高地ビルマの文脈で民主主義とは何であるかを問うこともなかった。

民主主義の人類学的研究が最初にブームになり、人類学者たちが「あちらがわ」の民主主義に注目ようになったのは、植民地から独立した新興国の政治に大きな希望が寄せられた1960年代初頭のことである。1959年、アメリカでは、カーネギー財団の支援を受けて「新興国比較研究委員会」が設立され、人類学者もそれに参加した。メンバーのなかには、新興国における民主主義の阻害要因や促進要因の理解を重要課題に掲げる研究者もいた。また、新興国へのアドバイザーの養成や、政治問題への直接的な介入に関心を持つ研究者もいた（Paley 2002:472）。ギアツもこの委員会のメンバーだったが、政治問題への直接的な介入には関心をもっていなかったようである。

しかし、これらの研究も、民主主義が「あちらがわ」にあるかどうかを問題したものであって、「あちらがわ」の文脈で民主主義とは何かを考察するものではなかった。

また、1970年代、80年代になると、新興国の民主主義に対する夢は醒めてしまい、民主主義を主題にした人類学的研究はみられなくなる。

周辺世界のジレンマとトランスナショナルな政治経済の再編

民主主義の人類学の第2次ブームが訪れるのは、世界各地で「体制移行」と「民主化」が進められた1990年代のことである(Paley 2002:472)。それは同時に、民主主義の概念が「さながら係留所を離れた舟のように漂流しはじめた」(ネグリ&ハート 2005b:78-79)時期でもあった。民主主義の人類学的研究における相対主義的なアプローチが定着したのは、この時期のことである。人類学者たちは、公的な政治機構の外側で、表面的な政治体制の転換を越えて推移するローカルな民主主義言説の複数的な競合や、それにとまなう権力のあり方の変化などに注意を向けるようになった(Paley 2002:469-470)。1990年代以降、民主主義を研究する人類学者たちは、グローバルに拡散する民主主義の理念・制度と交渉する周辺世界のジレンマや、国民国家と市民社会の枠組みを分断する(そして、それに対抗する)複数のローカルな民主主義のかたちを描き出していった。

この時期の民主主義の人類学を文脈づけていたものは、まず、「西洋」型民主主義がユニバーサルに適用可能だという見方への批判的な態度であった(Paley 2002:474)。人類学者たちは、次のふたつの問題に注目していった。

第1は、「普遍」的な制度・理念としての民主主義の「移植」や「土着化」、あるいは「土着」の民主主義への注目である。これは、文化人類学の理論的枠組みのなかでは、「文化接合」の問題としても扱われた。

たとえば、コマロフ夫妻(Commaroff & Commaroff 1997)は、ボツワナでは、よりよい参加型民主主義をもたらすものとして一党制を支持する世論があると報告する。逆に複数政党制は機会主義的な選択を助長すると考えられているという。いわゆる伝統的なボツワナの政治理念によれば、よき統治とは、チーフが人民とともに支配することであった。人民はチーフの周囲で自由なディベートをおこなうことで、アドバイザーとして政治に参加するべきものとされてきた。そのため、現代でも、人々は選挙の機会に討議をすることや、チーフに対して政治的な説明責任を要求することには関心を持つが、投票そのものには関心を持たない。コマロフ夫妻は、そこに参加型政治についての「アフリ

カのオルタナティブ」(Commaroff & Commaroff 1997:141)の可能性を指摘する。

カールストレムは、ウガンダにおける「民主主義」の土着的理解について報告している(Karlstrom 1997; cf. 梶原 1998a:135-137)。ウガンダのことばで民主主義にあたる *eddemberery'obuntu* という概念は、自由で健全な人間としての民衆についての倫理的な理想を表現するものであるという。ウガンダの人々は統治者と被統治者がともに適切で礼儀正しく、調和している状態を自由で公正な社会と考える。そのため、親子や親族のあいだの調和に亀裂をもたらす政党政治は反倫理的な制度であると考えられている、とカールストレムは指摘する。

また、この時期、東アジアの政治的指導者たちは、急速な経済発展に支えられながら、「アジアの価値」をととなえ、西洋型の個人主義的な民主主義の理念と制度が、アジア社会になじまないことを主張するようになった。アイワ・オング (Ong 1997) は、それが「アジア」の本質論につながるべきではないとしながらも、中国やアジア諸国においては、民主主義の意味づけが選挙制度と個人主義的平等主義に必ずしも結びつかないことを指摘している。

民主主義のユニバーサルな適応可能性を批判する第2の論点は、宗教・民族対立の問題である。国内に宗教対立や民族対立が見られる場合、複数政党システムや選挙制度を政治にもちこむことが、かえって多数派の権力を極端に承認し、対立を助長することもある(梶原 1998a:77)。たとえば、ホロヴィッツによれば、民族的分裂を抱えた社会では、多数決の原理によって政治プロセスから排除される民族がでてしまう。いっぽう、多民族的でありながら民主主義制度が機能している社会では、連邦制や地方分権、自治制度などが実施されたり、選挙前に集団間で事前に妥協と調整をおこなったりしているという(Horowitz 1994; 梶原 1998a:128-132)。また、ガーナ出身の人類学者で、母国で政治アドバイザーをおこなうオプスは、アフリカ各地の事例に基づいて、政党政治を導入する場合には、一定の合意のもとで党派の争いが繰り広げられるように「民主主義の飼いならし」(Owusu 1997:141)をおこない、民族対立を助長しないようにすることが必要である、と論じている。

民主主義の「土着」化、「土着」の民主主義の問題、あるいは民主主義によって民族対立が助長される状況に注目したこの時期の研究は、「西洋」型民主主義の批判であるとともに、伝統的な権威のシステムと外来の民主主義を結びつけようとする試みの困難についての報告でもあった(Paley 2002: 475)。梶原がいうように、そこからみえてくるのは、ギアーツが指摘した第二次世界大戦後の新興国における「本質主義」と「新時代主義」のあいだの緊張(ギアーツ 1987b:86)が、数十年を経たのちもあまりかわっていなかった、ということである(梶原 1998a:141)。

1990年代以降の民主主義の民族誌を文脈づけたもうひとつの時代の趨勢は、トランスナショナルな人や資本の流れにより、国民国家を分断する社会的な「乖離」現象が顕著になり、そこに自由主義や分離主義と結びついた民主主義の言説が接合していくという状況であった。1990年代には、国家主権の弱体化や、いわゆる新自由主義的な経済再編成が進んだ。そのため、国民国家の枠組みのなかで市民社会が民主主義制度を支える、という構図が成立しなくなっていった。たとえば、ホルストンとアパデュライは、トランスナショナルな資本と労働力の移動が集積するサンパウロなどの都市において、階層的に分断された閉鎖的な居住自治区が構築され、市民権と民主主義の名もとて住民の排除と包摂をめぐる暴力が発生していることを指摘している (Holston & Appadurai 1996)。

民主主義の戦略的利用への注目と権力論的アプローチ

ローカルで多様な民主主義の意味づけを考慮に値するものとして評価する議論は、とくにそれを政治的指導者たちが主張する場合には、文化的差異を理由に非民主的な強権政治や人権侵害を糊塗し、正当化するための言い訳である、との批判を受けやすい (梶原 1998a:124-125)。

たしかに、人類学者として、あらかじめ民主主義を定義しないという立場をとるなら、民主主義の「誤用ないし悪用の問題」(千葉 2000:vi) について、政治哲学者のようにディシプリンの内部から見解を提示することは難しい。しかし、人類学者たちも、民主主義には悪い使い方があるという問題に目をつぶっているわけではない。多くの人類学者は、それぞれの事例ごとに何らかの基準を探して、むしろ積極的に告発をおこなってきた。たとえば、軍事政権が民主制を名乗ることや、民主制の名のもとに暴力が肯定されることを告発する研究は数多く見られる (Paley 2002:476)。

むしろ、ここで議論すべきことは、誤用にせよ奪用にせよ、民主主義の概念は(文化概念などと同じく)戦略的に使用されうるものであるということに人類学者が注目しはじめたことである。とくに、これから紹介するパレイの議論にみられるように、多くの人類学者が、民主主義の使いかたに含まれる権力関係に注目すべきだと考え始めたことは注意されるべき点である (Paley 2002:475)。

そのほか、民主主義を支える専門知の問題性に注目する研究もみられるようになった。たとえば、コールズは、ラトゥールの科学論を援用しながら、国際機関の支援で運営される投票所が住民の意思という「事実」を構築する「実験室」としての性格を持つことを論じている (Coles 2004)。

以上でみてきたように、パレイの議論をはじめとする近年の民主主義の民族誌を文脈づけているの

は、民主主義の使われ方や意味の争われ方に注目する相対主義的(臨床推理的)アプローチ、継続する(旧)新興国のジレンマ、トランスナショナルな政治経済の再編と民主主義言説が接合する状況、さらには、民主主義の概念の戦略的利用への注目や、その背後にあるとされる権力関係への注目、民主主義を支える専門知の問題などである。

3 ジュリア・パレイの『マーケティング・デモクラシー』

パレイの『マーケティング・デモクラシー』は、ピノチェト大統領独裁政権が崩壊した直後の1990年代初頭のチリを舞台にした民族誌である。彼女はチリ政府の民主化政策の分析や、首都サンディアゴの貧困地区で保健衛生促進活動をする住民組織の参与観察をおこない、民主主義の文脈で語られる「参加」の意味をめぐって政府や住民組織のあいだで繰り広げられる争いを描いていく。彼女は、選挙キャンペーン、世論調査、住民への「参加」の呼びかけといったものが、「それを受け入れるか、抵抗するかに関わらず、ある種の主体を生産するには十分強力」(Paley 2001:5-6)であり、そこには「市民が自分自身の統治のエージェントとなるような、ある種の『統治性』」(Paley 2001:6)が見出されると論じている。

「統治性」の概念

「統治性」の概念は、ミシェル・フーコー(Foucault 1991)が提起した概念である。フーコーによれば、16世紀のなかばから18世紀にかけて、ヨーロッパにおいては、新ストア派による自己管理の観念や、カトリックやプロテスタントにおける魂の管理の観念、あるいは子供の管理としての教育の観念などから、あたらしい管理のための観念と技術が現れた。その特徴は、家計管理の精神をもって、人やものを管理しようとする考え方であった。その考え方は君主による国家管理にも持ち込まれた。その国家管理の基本精神は、領域として囲まれた土地の管理ではなく、物や人(の心のなか)をきちんと配置しておくことによって支配することであった。その後、商業資本主義の失墜、人口の増大などの状況により、領域的行政国家(あるいは国民国家)が統計学、経済学、政治学などの技術と結びついて発展するようになると、「統治術」的な国家管理の考え方は影を潜めていく。しかし、フーコーによれば、国民国家の統合性が機能しなくなりつつある現状では、「統治性」が再び

重要になってくるという。ゴードンの理解によれば、「統治性」の概念は、国家による支配と権力行使の問題を、制度的国家論の視点から、国家がマイクロなレベルでの実践のなかでいかに統治しているかという視点に移し替えるものであるという（Gordon 1991:4）。

「参加」の意味

パレイの議論の内容をみていこう。パレイによれば、現代のチリ社会において、世論調査などの政治的マーケティングは、政治家たちが公共の願いに耳を傾けているようなみせかけを作っているが、実際には、質問票を用いて人々の意見を聞き、それを「世論」として公表することで、市民ひとりひとりに政治参加の感覚をもたせ、それによって市民を政治システムに取り込む手段となっているのだという（Paley 2001 第4章）。

また、このような、政治からの「動員解除」（demobilization）を促進する権力は、同時に、ある特定の形式での市民参加だけを奨励するものでもある。パレイは国家レベルで展開されたコレラ撲滅キャンペーンの事例や、ゴミの撤去についての代議士と住民との対話集会の事例をとりあげ、そこで「参加」「組織化」「動員」などの意味がどのように争われているのかを描きだす。

たとえば、コレラ撲滅キャンペーンの事例では、個人（家庭）レベルでの衛生管理や生活様式の改善などによるセルフ・ケアをコレラ撲滅のための国民の責務であるとして奨励する国家側のキャンペーンに対して、パレイが調査する住民組織のメンバーたちは、住民たちが衛生問題を克服できないのは貧困などの社会的事情によるものである（たとえば飲料水の熱処理のための燃料費が負担になるなど）と反発した。彼女たちは、コレラの発生が個人の衛生管理の問題だけではなく、政治的・経済的な問題でもあることを訴え、国家の応答責任（accountability）を要求していった²。

また、ゴミの撤去についての対話集会の事例では、住民の手でゴミを撤去することが「参加」であると説く代議士や役人たちに対して、住民たちは、ゴミを撤去するのは行政の責任であると主張する。住民たちの望む「参加」とは、専門家がデザインしたプロジェクトへの「参加」ではなく、最初から最後まで決定者として「参加」することである、とパレイは分析する。対話集会のあと、住民組織のメンバーたちは、行政にゴミの撤去を要求する署名運動を展開する。そこでは、住民がゴミを片付けるのではなく、行政に対してゴミを片付けるよう働きかけるというかたちで、住民の「参加」の意味が定義されていく。

2 パレイはオルタナティブな民主主義の理念として、「応答責任の民主主義」の定式化を試みている（Paley 2004）。

国家が民主主義や「参加」の問題を提起して、草の根住民組織に行政サービスの肩代わりをさせるようとするとき、そういった草の根活動への「参加」が、市民に何らかの意味の感覚を与えることは確かである、とパレイは言う。しかし、そのような「参加」は市民の行動のバリエーションを制限し、民主主義と市民権の名のもとに時間と労働の供出を志願するような自己規制的主体（self-regulating subject）をつくりだしてしまう。パレイはそこに「参加のパラドクス」が見だされると指摘する（第5章）。

さらに、パレイは、住民組織のメンバーたちが専門家の知識を奪用し、自分たちを取り巻く政治的状况を最初から最後まで自分たちで分析できる「知識人」として振舞いながら、彼らにとっての「真の参加」を模索する姿を描いていく（第6章）。

4 民族誌の民主化：民族誌のなかにある民族誌

私が、臨床性の問題との関連でとくに注目するのは、この本のエピローグ部分である。そこには、住民組織のメンバーが、パレイの指導を受けながら書いた民族誌が掲載されている。

住民組織のメンバーたちによる民族誌

パレイは、あるとき、現地の人たちに向けて、自分の調査結果をもとにしたレクチャーをおこなった。内容は、住民組織の保健セミナーの様子を描写し、それを国家の統治政策を奪用する住民たちの戦略として解釈するというものであった。

レクチャーに参加した住民組織のメンバーたちは、パレイの民族誌的手法に関心を示した。彼女たちが関心を持った理由は、第1に、民族誌的手法によって、自分たちをとりまく政治状況の分析を自分たちでできるということ、第2に、民族誌的手法によって地域住民の世界観をとらえることで、地域住民とのコミュニケーションを円滑にし、彼らが参加しやすい活動の形態を作りだすことができる、ということだった。

パレイは、彼女たちからの依頼を受け、民族誌的手法についてのレクチャーをおこなった。そのレクチャーの最後のステップは、住民組織のメンバーが自分たちで調査をおこない民族誌を書くことだった。

住民組織のメンバーたちは、自分たちの地域の運動場がゴミ捨て場になってしまっていることを調査テーマに選んだ。彼女たちはゴミ捨て場の近くに暮らす住民の視点から問題を理解することを目標に、近隣住民へのインタビューをおこなった。

住民組織のメンバーたちが住民に向けて「ゴミ捨て場についてあなたはどうか考えるか」と質問すると、インタビューを受けたある女性は次のように答えた。「ええ、つまり市長はそこにいるのに、彼はそれ〔ゴミ〕をどかさそうとしないってこと（彼女は神経質そうに笑った）。何もしないのは行政側です。彼らにとってみれば、財源などないということ。いつもそう。いつだって、何のための財源もない」（Paley 2001:221）。その女性はゴミの問題について市長と行政は何もしてくれないのだ、と神経質そうに笑うばかりだった、と住民組織のメンバーたちは報告する。この女性の発言について、住民組織のメンバーたちは次のように指摘する。

これは権力側が解決を生みだす意志をもっている可能性についての失望を示すものである。というのも、住民たちは、どのようにしてこのゴミ捨て場が維持され続けてきたのかを、何年にもわたって見ているので、解決を約束する政治の語り口を信じていないのである。この無能さに直面して、彼らは何らかの対策を講じようとする。しかし、私たちがすでに見てきたように、彼らは自分たちの対策が失敗に終わるという事実ですでに疲れてしまっている。そして、彼らは個人的な解決を選択する。「だから、もし今ここを離れなければならないなら、私はためらいなくここを離れるだろう。この場所への愛着はもうない。以前は埃（ほこり）のせいだったが、いまはこのものすごい臭いのせいだ」。住民たちの失望はひどく、もはや別の観点からこの問題を眺めることもできず、また、責任が誰にあるのかを明らかにすることもできなくなっている。そして、発展や新しいイニシアチブが生まれる余地もほとんどなくなっているのである（Paley 2001:221）

住民組織のメンバーたちが見出すのは、無力感にさいなまれ、もはや問題を自分で分析する能力も失った住民たちの姿である。住民組織のメンバーたちによる考察は、さらに、この地区の住民がスポーツから遠ざかり、運動場が放置されるようになった原因の分析へと進んでいく。そこでは、若者のドラッグ問題、福音主義の教会の進出により若者が「神への奉仕」に時間を吸い上げられるようになったこと、メンバーシップの欠如、ダブルシフト体制の労働のため余暇の時間がとれないこと、社会組織の減少などが背景として指摘されていく。

民族誌の民主化は成功するか?

パレイが自分の民族誌のなかに住民組織のメンバーによる民族誌を挿入することを試みた理由はふたつあった。第1は、住民組織のメンバーたちが自分たちで調査・分析をおこなうことで知る主体として彼女たちをエンパワーすること、第2に、民族誌を書くという実践を開かれたものによって、民族誌を民主化する契機にしたいと考えたからである。パレイは次のようにいう。

この「民族誌のなかにある民族誌」は、都市の貧困層、なかでもとりわけ女性たちが、自分たちで調査をおこない、自分たちによる政治分析を作り出す能力をシステムティックなやりかたで過小評価してきた知の正当化のありかたへの適切な応答であると私は考える。また、それは、民族誌的手法がいかんにしてより民主的なやり方で作動しうるかをうらなう試みでもある。(Paley 2001:20)

しかし、住民組織のメンバーたちが自ら知る主体として立ち上がるために書いた民族誌のなかには、知られる客体として、虚脱状態の住民たちが再び書き込まれてしまう。民族誌という知の生産のスタイルをより開かれたものにするための努力は、結局、知る主体と知られる客体をつくり出す民族誌的な表象のスタイルを「民族誌のなかにある民族誌」のなかに再び出現させるという結果をもたらした。

5 人文学の臨床性のために何を教訓とすべきか

私が問題にしたいのは、パレイ住民組織のメンバーたちが「ともに」考え、「ともに」つくった「民族誌のなかにある民族誌」が、パレイの著作全体の構想や主題を脅かすようなインパクトを発揮することができなかったのはなぜか、ということである。

欠如による表象

「民族誌のなかにある民族誌」が民族誌のあり方を脅かすようなインパクトを発揮できなかった最大の原因は、住民組織のメンバーたちが、民族誌の対象としての地域住民を、何かが無いものとして、つまり欠如によって表象しているためではないだろうか。ゴミ捨て場のまわりに暮らす住民たちは、ゴ

ミが処理されない状況にあきれ、できることならここから逃げ出したいと言っている。そのことを住民組織のメンバーたちはしっかりと書きとめている。しかし、彼女たちがそれを解釈する段階になると、それらは「失望」や「疲れ」など、何かが欠けている状態として分析されてしまう。住民組織のメンバーがもっている何かを、住民は持っていない。そこに、彼らを私たちと同じにしたい、という意識が入り込む。パレイから住民組織へ、住民組織から地域住民への知の広がり、ときとして、安易な啓蒙のプロジェクトに見えてしまうのはそのためではないだろうか。

肯定による表象、特異性、概念創造の企てとしての経験論

ゴミ捨て場のまわりに暮らす住民たちが語ることを、欠如の徴候としてではなく、彼らが持っているものとして肯定的に語るができるとすればどうか。彼らは行政に誠意がないことを知っており、可能ならばこの貧困地区から脱出したいという意志もっている。彼らの示す諦念や逃避願望は、「参加」という問題意識の圏外で思考し、生活することの広がり示唆しているのかもしれない。住民の語ることに耳を傾けて、「ともに」考えることは、「民主主義」的な「参加」の促進というプロジェクトそのものを問題化する可能性をはらむ実践であってよい。

「現場」の知を欠如の徴候として表象するのではなく、肯定による表象を試みることは、「現場」のインパクトの際立った「特異性」を「否定なき差異」として捉えるためのアプローチであるといえる³。この「特異性」の概念から、ギアツが臨床推理の問題として提起した具体的な事例と理論の一般化との関係を、別の観点から理解しなおすことができる。

ドゥルーズによれば、「特異性」は、「反復」する出来事のなかにあらわれる。「反復」は「一般性」とは全く違った概念である。「交換が一般性の指標だとすれば、盗みと贈与が反復の指標である」（ドゥルーズ 1992:19）。たとえば、経済的人間という理念型は、欲望の交換可能性のうえになりにたっている。これに対して、反復的に大量生産されたぬいぐるみですら、持ち主の手元では一

3 ネグリとハートは、「特異性」の概念に立脚した学問として、これからの文化人類学に期待をよせている（ネグリ & ハート 2005:210-211）。しかし、それはやや買いかぶりなのではないかと感じる。「否定なき差異」や「特異性」の概念に立脚した人類学とは何かについては、人類学者のなかでも、まだあまりはっきりしたことは言えていないからである。ネグリとハートが言うように、他者を時間的に遅れた存在として理解することが、差異それ自体としての文化的他者の表象を妨げてきた根本的な問題であるという見解は不十分であるように思われる。他者の「特異性」を同時代的に結び付けて、「全員が共存する共通の現在への平等な参加」（ネグリ & ハート 2005:211）として考えることも、「特異性」を描くという観点からは、同様に、危うい見かたであるといえる。なぜなら、自分たちがヨーロッパに比べて「遅れている」という現状（認識）そのものは、必ずしも時代遅れになっているわけではないからである。

匹ずつにそれぞれの来歴があり、場合によっては店先に並んでいる時点で、すでにその来歴を感じることもある。それが独特な顔つきを持って語りかけはじめれば、もはやその共通のフォルムをもってしても交換可能なものではなくなる。そのような、交換不可能で、かけがえのない、「特異性」をもった出来事は、それがいくら同じような出来事の繰り返しであっても、「一般性」に対して反発する(ドゥルーズ 1992:25)。

ドゥルーズによれば、そのような「特異性」をとらえる方法は「未見にして未聞の、このうえなく発狂した概念創造の企て」(ドゥルーズ 1992:15)としての「経験論」的アプローチである。それは、「はしか」のたとえに戻るなら、世界で最初に「はしか」の患者を診察した医者が、驚きと困惑をもって、それだけに真摯な姿勢で患者の容態や患者に向き合うためにベッドサイドに立つときの気持ちであるといえる。その気持ちを保ち続けることは、ギアツの時代から言われてきた、人文学における臨床的アプローチの基本的な構えである。「現場」のインパクトを受け取って、「問題」をめぐる知を「ともに」生産するために私たちがやるべきことは、それほど変わっていないのではないだろうか。

民主主義の人類学の有用性

最後になるが、民主主義の人類学にとって、それぞれのローカルな民主主義の「特異性」を研究するというのは、民主主義の普遍的な性格を否定し、文化的特殊論を擁護することではない。民主主義は概念としての普遍性をもつことができるはずである。しかし、その普遍性は、民主主義の概念をとりまくさまざまな「現場」のなかで鍛えられた一貫性としての普遍性であるはずだ。「それぞれの概念は、それらだけで一貫性を維持しなければならないのだが、しかしこの一貫性は、それらの概念に由来したものであってはならない。諸概念は、おのれの一貫性を、ほかから受け取らなければならないのだ」(ドゥルーズ 1992:15)。

ヨーロッパのある場所、ある時代における特異な理念としての民主主義は、グローバルに流通するなかで普遍性を獲得していった(梶原 1998b:8-9)。そして、それぞれの場所で、多様な状況と接するなかで、新たな「特異性」をもった民主主義が生成した。それぞれの「特異性」がまた流通しはじめることによって、民主主義はさらに違った普遍性(一貫性)を獲得していくかもしれない。民主主義の人類学は、その流通を促進するための学問的な知でありうるだろう。

(日本学術振興会特別研究員 (21 世紀 COE)、人間科学研究科博士後期課程)

参考文献

- ◇ 梶原景昭 1998a 「民主主義と文化の課題」『岩波講座 文化人類学 13 文化という課題』岩波書店、119-142 頁。
- ◇ 梶原景昭 1998b 「民主主義のディスコースと表象：文化人類学的研究」（平成 8 年度～平成 9 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書）、北海道大学。
- ◇ ギアーツ、C. 1987a 「厚い記述——文化の解釈学的理論をめざして」『文化の解釈学 I』吉田・柳川・中牧・板橋（共訳）、岩波書店、3-56 頁。（Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books）
- ◇ ギアーツ、C. 1987b 「革命のあと——新興国におけるナショナリズムのたどる道」『文化の解釈学 II』吉田・柳川・中牧・板橋（共訳）、岩波書店、75-111 頁。（Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books）
- ◇ ギアーツ、C. 1987c 「頭脳の野生——レヴィ=ストロースの業績について」『文化の解釈学 II』吉田・柳川・中牧・板橋（共訳）、岩波書店、265-294 頁。（Geertz, Clifford 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books）
- ◇ ギアーツ、クリフォード 2002 「反=反相対主義——米国人類学会特別講演」『解釈人類学と反=反相対主義』小泉潤二（編訳）、みすず書房、59-94 頁。
- ◇ クラパンザーノ、ヴィンセント 1991 『精霊と結婚した男：モロッコ人トゥハミの肖像』大塚和夫、渡部重行（訳）、紀伊国屋書店。
- ◇ クリフォード、ジェイムズ & ジョージ・マーカス（編）1996 『文化を書く』春日直樹ほか（訳）、紀伊国屋書店。（Clifford, James & George E. Marcus (eds.) 1986 *Writing Culture: the poetics and politics of ethnography*. Berkeley: University of California Press）
- ◇ ダール、ロバート A. 1988 『統治するのはだれか：アメリカの一都市における民主主義と権力』河村望、高橋和宏（監訳）、行人社。（Dahl, Robert A. 1961 *Who Governs? --- Democracy and Power in an American City*. New Haven: Yale University Press）
- ◇ ダール、R. A. 2001 『デモクラシーとは何か』中村孝文（訳）、岩波書店。（Dahl, Robert A. 1998 *On Democracy*. New Haven & London: Yale University Press）
- ◇ 千葉真 2000 『思考のフロンティア デモクラシー』岩波書店。
- ◇ デュモン、ルイ 2001 『ホモ・ヒエラルキクス カースト体系とその意味』田中雅一、渡辺公三（共訳）、みすず書房。
- ◇ ドゥルーズ、ジル 1992 『差異と反復』財津理（訳）、河出書房新社。
- ◇ トクヴィル、アレクシス 1987 『アメリカの民主政治（下）』井伊玄太郎（訳）、講談社。
- ◇ ネグリ、アントニオ、マイケル・ハート 2005a 『マルチチュード（上）：＜帝国＞時代の戦争と民主主義』幾島幸子（訳）、水嶋一憲、市田良彦（監修）、日本放送出版協会。（Hardt, Michael & Antonio Negri 2004 *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*. Penguin Press）
- ◇ ネグリ、アントニオ、マイケル・ハート 2005b 『マルチチュード（下）＜帝国＞時代の戦争と民主主義』幾島幸子（訳）、水嶋一憲、市田良彦（監修）、日本放送出版協会。（Hardt, Michael & Antonio Negri 2004 *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*. Penguin Press）
- ◇ リーチ、エドモンド R. 1995 『高地ビルマの政治体系』関本照夫（訳）、弘文堂。（Leach, Edmund R. 1954 *Political System of Highland Burma*. Bell & Son）
- ◇ 鷺田清一 1999 『「聴く」ことの手——臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ。

- ◇ Coles, Kimberley A. 2004 "Election Day: The Construction of Democracy through Technique." *Cultural Anthropology* 19(4):551-580.
- ◇ Commaroff, John L. and Jean Commaroff 1997 "Postcolonial Politics and Discourses of Democracy in Southern Africa: An anthropological reflection on African political modernities." *Journal of Anthropological Research* 53(2):123-146.
- ◇ Foucault, Michel 1991 "Governmentality." In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Graham Burchell, Colin Gordon & Peater Miller (eds.), Harvester Wheatsheaf, pp. 87-104.
- ◇ Gordon, Colin 1991 "Governmental rationality: an introduction." In *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Graham Burchell, Colin Gordon & Peater Miller (eds.), Harvester Wheatsheaf, pp. 1-51.
- ◇ Holston, James and Arjun Appadurai 1996 "Cities and Citizenship." *Public Culture* 8:187-204.
- ◇ Horowitz, D. L. 1994 "Democracy in Divided societies." In *Nationalism, Ethnic Conflict, and Democracy*. L. Diamond & M. F. Platter (eds.), The Johns Hopkins University Press.
- ◇ Karlstrom, Mikael 1996 "Imagining Democracy: Political culture and democratization in Buganda." *Africa* 66(4):485-505.
- ◇ Ong, Aiwai 1997 "Chinese modernities: narratives of national and of capitalism." In *The Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*. A. Ong and D. Nonini (eds.), New York: Routledge.
- ◇ Owusu, Maxwell 1997 "Domesticating Democracy: Culture, Civil Society, and Constitutionalism in Africa." *Comparative Studies in Society and History* 39(1):120-152.
- ◇ Paley, Julia 2001 *Marketing Democracy: Power and Social Movements in Post-Dictatorship Chile*. Berkeley and Los Angeles; London: University of California Press.
- ◇ Paley, Julia 2002 "Toward an Anthropology of Democracy." *Annual Review of Anthropology* 31:469-496.
- ◇ Paley, Julia 2004 "Accountable Democracy: Citizen's impact on public decision making in postdictatorship Chile." *American Ethnologist* 31(4):497-513.

言語調査を内観する

—調査者の思いとフィールドの声—

李 吉鎔

<要旨>

本稿は、社会言語学の言語調査における研究者とフィールドとの関係のあり方について、臨床性・横断性という視点から問い直したものである。言語調査を内観すると、研究者とフィールドとの対話の不足が指摘できるのである。さまざまな臨地調査に対するフィールドの声について聞き取り調査を行った結果では、「フィールドは研究者のさまざまな調査に協力するが、フィールドは研究者からは協力してもらえない」とまとめることができる。

こうした研究者とフィールドとの不平等な関係を改善し、互恵的パートナーシップを確立することが望まれよう。その実践的な言語調査のあり方について、本稿では具体的に次の3点を指摘した。(1)フィールドとの対話の臨床性という視点から、研究者は言語調査の計画段階からフィールドの声を聞くことが大事である。(2)研究者およびディシプリンの横断性という視点から、フィールドを共にする研究者やディシプリン間でデータの共有を含む交流が望まれる。(3)これまでの言語調査は、調査のデザインや資料収集、報告書刊行に重点を置いてきたが、臨地調査終了後の研究者とフィールドとの対話の継続が重要である。

<キーワード>

社会言語学、臨地調査、臨床性、横断性、内観、フィールドの声、対話、資料の共有

0. はじめに

欧米の sociolinguistics からのインパクトによる、1970年代初頭の第二のエポック(真田他1992)を、日本における社会言語学の隆盛の起点¹⁾としても、日本の社会言語学は、現在まで約35年にわたり、量的にも質的にも著しい成果をあげてきた。一重に言語調査に快く資料を提供してくれた

人々のおかげである。日本各地の人々にことばに関するさまざまな情報を提供してもらい、日本語の生き生きとした姿の輪郭を描けるようになったのである。

社会言語学はそもそもことばをめぐる社会問題の解決を研究課題の一つとしてきた実践的な学問であり、また生身の人間と向き合う学のはずである。しかし、これまで言語そのものに関するミクロレベルの分析に傾倒していたことを指摘しなければならない。たとえば、資料提供を受けたフィールドに対してどのようなもの（こと）を返してきたか、また返そうとしてきたのだろうか。こうした情報提供をするフィールドと情報提供を受ける研究者という非対称性の問題について、他ディシプリンにおいては、ディシプリンの発展期に議論されてきた歴史があるが、新興学問の社会言語学ではようやく議論の土台ができあがりつつあると言えよう（§1で詳述する）。

本稿では、筆者の専門分野の社会言語学における言語調査²⁾を題材にして、研究者とフィールドとの関係のあり方を、臨床性・横断性という視点から考察する（臨床性および横断性については§1で後述する）。社会言語学では主に臨地調査による資料収集を行う。研究の目的により、また言語調査の日程や経費、報告書の刊行予定など、さまざまな制約の中で緻密に計画された臨地調査がなされる。ここで、社会言語学における臨地調査の一般的な様子について、真田（2004:36）より、共同研究者の文化人類学者から「そんな短い期間の滞在でよく論文が書けるものですね」と皮肉を言われたときのエピソードを引用することで、簡単に紹介しよう。

言語の場合、ある仕組みが発見できると一気に見えてくるものがある、時間をかけることだけが重要なわけではない、などと反論したのだが、何かやはり引っかかるものがあったことも事実です。たしかに、言語研究の場合は調査の指標とすべき基本マニュアルが存在します。しかし、そのような調査リストからだけの結果に満足しては、本質はとえられないのではないか、体を張るといったことが言語学ではあまりにも少ないのではないか、という反省の気持ちがあるのです。（下線は引用者による）

このように、通常、言語研究の場合、臨地調査は短期集中的な形態で行われる。未知の言語を音声から一つ一つ解き明かしていき、その全体像を記述する場合もあるが（呉人 2004）、文化人類学などのように住み込みなどの長期間にわたるフィールドワークとは手法が異なる³⁾。なお、上の真田氏のエピソードの下線部は、フィールドを深く理解することの重要性を示されたものであると思うが、本稿の視点の一つである「研究者とフィールドとの対話の臨床性」につながる指摘でもある。

ここで、これまで研究者とフィールドとがどのように対話をしてきたか、対話の方向性という観点から考えてみよう。たとえば臨地調査を実施するときは、データの使用に関して現地の研究参加者（従前のインフォーマント・資料提供者のこ）の許諾を得る。貴重な資料を使わせてもらうことについて、研究参加者の許可をいただくという点ではよい趣旨だと思うが、データ使用許諾書の存在は「これでも思う存分資料として使える」という研究者側の安心材料になる側面がある。一方、研究参加者にとって、データ使用許諾書は果たしてどのような意味や価値を持つものなのだろうか。この事例からもわかるように、研究者とフィールドとの対話が断絶され、研究者側からの一方通行的な研究が行われてきたことを指摘することができよう。

社会言語学の言語研究における倫理的な問題の喚起を促した但し書きや、臨地調査における研究者の心得や調査方法に関するマニュアルは数多く存在するが、管見の限りにおいてフィールドの声を盛り込む姿勢はない。そこで、筆者は臨地調査を中心に言語研究を見つめ直し、「言語調査および研究者に対するフィールドの声」⁴⁾を盛り込んで、研究者とフィールドとの関係のあり方について臨床性・横断性という側面から問い直す。多分に理想的ではあるが、ウェルフェア・リングイスティクス *welfare linguistics* (徳川 1999) のための試論と位置付けたい⁵⁾。なお、本稿の執筆動機は、筆者自身がこれまでに行ってきた調査過程への反省から出発した、極めて私的なものである⁶⁾。したがって言語調査一般に当てはまる問題ではないかもしれない。また、本稿ではコミュニティー単位のフィールドを対象とするため、少人数を対象とした個人研究などとは異なり得ることを予め断っておく。

1. 先行研究と問題のありか

本節ではまず、本稿の視点である「臨床性および横断性」について検討し、次に先行研究から臨地調査のあり方を簡単にまとめ、問題点を明確にする。問題点はさまざまな形があろうが、ここでは臨床性と横断性に焦点を当てることにする。

まず、臨床および横断という概念について検討する。本稿では、「臨床」という概念を、鷲田(1999: 139)にならい、「ある他者の前に身を置くことによって、そのホスピタブルな関係のなかでじぶん自身もまた変えられるような経験の場面」とする。ここでいう「ホスピタブルな関係」とは、他者を迎え入れるとき、他者をサボロプリエする (*s'approprier*= 同化する、専有する、横領する) ことではなく、むしろ、自己を差しだし、自分の同一性が傷つけられることもいとわぬようなぬきざしならない関係の

中にみずから挿入していくことである(同、p.136)。そして、「臨床」の本質は、「問題としての『苦しみ』を解体するのではなく、問題をともに抱え込み、分節し、理解し、考えるというとなみをつうじてそれを内側から越えてゆくこと、あるいは越えてゆく力と呼び込むこと」である(同、p.55)。こうした「臨床」について社会言語学の言語調査を例にとれば、研究者は臨地調査を通して「フィールドの苦しみ」に出会うことがある。その苦しみをめぐって、研究者とフィールドとがコミュニケーションをとろうとするなかで「相互浸透する知」が現れる。この「相互浸透する知」の生成過程において、研究者側の知の枠組みは侵犯され改変されていく可能性を持つのである。

次に、「横断」については、基本的にディシプリン間の越境・横断を指すが、従来の寄せ集めのものではなく、臨床性を基盤とした学際的な越境・横断を指すものである。

さて、現地の研究参加者との接し方、臨地調査における注意事項などを盛り込んだ調査マニュアルは数多く存在することは先に述べたが、一般には、具体的な調査法やその背後にある論理・思想を解説した典型的な調査法入門書(パンチ著・川合隆男監訳 2005、など)や、言語学と社会学、人類学などの専門家が自らの行っているフィールドワークの楽しさ・厳しさを紹介する啓蒙書(岩波書店編集部編 2004、など)を目にすることが多い。しかし、なかには、データの扱い方について重要な知見を提供したり(呉人 2004)、現地への還元についてその問題点を指摘したり(真田 2004、土岐 1999)、また研究者の社会的責任や調査研究における倫理的問題を喚起するものもある(真田 2005、ネウストブニー 2002、ヒックス 1998)。

そんな中で、宮岡伯人・崎山理編／渡辺己・笹間史子監訳(2002)は、消滅の危機に瀕した言語の研究における研究者の使命、任務、倫理などについて極めて重要な提案を行っている。たとえば、角田氏は研究者(ここでは言語学者)の任務の一つとして「研究の成果を現地社会に還元すること」を挙げ(p.284)、その具体的な方法として、次の4点を挙げている(p.287-8)。

- (1) フィールドテープ、フィールドノート、単語カードなど(あるいは、そのコピー)を関係の組織や団体に送ること(角田氏も実践している)
- (2) 以下のことに協力すること：(i) その言語の教育、(ii) 教材などの作成、(iii) 言語に関する資料などの刊行、(iv) その言語でのラジオやテレビの放送、(v) その言語と文化に関する情報を一般社会に広めること
- (3) その言語と文化について、現地社会の住民以外の人たちに講演などを行うこと
- (4) 研究成果を現地社会の人たちが読める言語で書くこと

また、研究者の倫理については、オーストラリアの例をいくつか挙げている。以下のことがらは「原

住民文化研究の倫理ガイドライン」が扱うものである (p.289)。

- (i) 調査に対するの現地社会の承諾、 (ii) 個人のプライバシー、
- (iii) 現地社会への還元、 (iv) 知的所有権、 (v) 研究成果の刊行の方法

角田氏は、危機に瀕した言語を研究する立場からの理想的な研究、研究者の姿勢であると断り書きを添えているが (p.280)、こうした研究者の任務や倫理は、これから社会言語学の研究を志す若手研究者に対する一つの指針となるであろう。その他に、日本民族学会研究倫理委員会は、民族学者の研究倫理に関する諸問題について、調査者と非調査者の関係や研究成果の還元はどこまで可能か、など7つの項目を取り上げ、包括的に整理している(祖父江他1992)。また、井上(2002)は環境問題の解決を目指したフィールド研究の可能性について重要な提言を行っている。

しかしながら、以上に見てきた多くの論考は、研究者の立場から考えられる問題点を指摘した、調査マニュアルあるいは啓蒙書の域を出ないものと言わざるを得ない。たとえば、現地への還元の仕方は、研究者側の議論のみで決められるものなのだろうか。研究者とフィールドとの対話が断絶しているため、フィールドがさまざまな調査や研究者をどのように考えているのか、現地への還元はどのような形が良いか、などといったフィールドの声が見落とされている。

そこで、次の2つの問題点が見出される。

- (a) 言語調査における対話不足の問題
- (b) 研究成果の受益性の問題

まず(a)について、上述したように、言語研究の目的によった計画での臨地調査がなされ、フィールドの語りたいことは聞かないということがほとんどである。たとえば社会言語学が、移民や外国人労働者などが抱える言語問題に興味を持つことはあるが、彼らが語りたい、研究者に知ってほしい社会的問題については耳を傾けてこなかったのも事実である。中村(1992)にならえば、社会言語学における言語調査は研究者がフィールドに対して働きをかけるばかりであり、フィールドの「働きを受けつつ行う働き」は受けることのない、一方通行的なものである。研究者の働きを受けつつ行われるフィールドの働きに研究者が再度応じるという双方向性や相互浸透する知の生成が望まれるのである。

(b)は、調査の成果をどのように現地に還元するのかという問題である。学術的な報告書などは研究者の業績にはなっても、フィールドに喜ばれるとは限らない。研究者は研究の成果をどのような形でフィールドに還元すべきなのか、これらについてフィールドの声に耳を傾けつつ、深く吟味するのが今のフィールドワーカー、とくに若手研究者に課せられた課題ではないだろうか。

研究成果の受益性の問題は、臨地調査のあり方とも関連する。フィールドの共感を得ない言語調

査は、基本的に研究者側の身勝手な行動である。これまで、フィールドにとって、研究者は、「良くてお客さん、普通でヨソ者、悪くすればドロボウ」という構図が成り立ってきたように思われる。「ヨソ者、ドロボウ」は論外とし、研究者が「良くてお客さん」ではなく、現地と融和し、互恵的なパートナーとして研究を遂行することはできないだろうか。研究者側の都合によって行われてきた言語調査の是非について、ここで立ち止まって議論する必要がある。

以上から、フィールドにとって研究者とはどのような存在なのか、フィールドの望む還元の仕方はどうのようなものなのか、などについてフィールドの声を聞くといった研究課題が立ち現れる。今必要なのは、臨地調査における研究者のマナーに関する指摘でもなければ、フィールドで何をどうすればよいかという調査マニュアル作りでもないのである。

以下では、まず§2で調査の概要について述べ、§3ではフィールドおよび2003年度COE調査の活動概要をまとめる。続く§4では聞き取り調査の結果を要約し、§5で議論をする。

2. 調査のデザイン

2.1 研究の方向性

本研究で目的とするところは、次の2点である。

- (1) フィールドの声を具体的に聞き取り、記録する
- (2) 研究者とフィールドとの関係のあり方について考察する

本研究で対象とするのは、大阪大学21世紀COEプログラム〈インターフェイスの人文科学〉の「言語の接触と混交」班の一環として、2003年度に行った「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」調査（以下、COE調査とする）におけるフィールドである（§3.1で詳述する）。

研究の形としては、フィールドの声を忠実に記録していく、実態記述型となる。フィールドとの対話の臨床性へのアプローチは、内観法と聞き取り調査を用いる。

まず、内観の手法により、フィールドが（筆者を含む）研究者に対してどのような存在だったのかを記録していく。ここで内観法について簡単に紹介しておこう。内観とは自己の内に沈潜して、過去から現在に至るまでの対人関係の中で、自分がどのようなあり方をしてきたかを、「してもらったこと、

して返したこと、迷惑をかけたこと」という3つの観点から具体的に観照することである⁷⁾ (三木 1976)。言語調査を見つめ直す手段として内観法を用いるのは、社会言語学の内部の視点からは、問題点を的確に捉えきれないと思われ、外部の視点からの自己相対化の必要性を感じたためである。内観は、生身の人間と向き合うフィールドワークや臨地調査のあり方に親和性の高い方法であり、とくに言語調査を臨床的に考える場合、自己省察の原動力となり得る。井上 (2002) のいう、ハイブリッド・アプローチの一つの形である。本稿では、日常内観的な手法を、言語調査を見つめ直す手段として用い、2003年度 COE 調査に焦点を当てて、筆者の思いを記録する。

次に、聞き取り調査では、フィールドでインタビュー調査を行い、フィールドの声を傾聴し、録音・録画およびフィールドノートをつける。インタビュー調査は約1週間を予定にし、協力者は次の要件により選定した。

- (1) 当該コミュニティにおいて、さまざまな調査や研究者との接触が多いこと
- (2) 当該コミュニティ構成員の意見の代弁者と位置づけられること
- (3) §3.2 で詳述するが、2003年度 COE 調査の研究協力者・参加者であること

2.2 聞き取り調査の概要

- (a) 実施日：2005年7月31日～8月5日(6日間)
- (b) 協力者：2地点計5名：スザノ市福博村2名(A氏・B氏)、アリアンサ移住地の弓場農場3名(C氏・D氏・E氏)
- (c) 調査項目：以下の項目を中心に、幅広く意見を求めた
 - (i) フィールドは、言語調査を含むさまざまな調査や研究者をどう思うか
 - (ii) 調査への協力を通して、フィールドが得るものは何か
 - (iii) フィールドにとって、どのような還元が望まれるか
 - (iv) フィールドが研究者に期待することは何か

3. フィールドおよびCOE言語調査の概要

ここでは、本稿で対象とするフィールドの概略的な民族誌的、歴史的背景を述べ、2003年度COE

調査の活動概要をまとめる。

3.1 フィールド

フィールドは、COE プログラム〈インターフェイスの人文学〉の「言語の接触と混交」班が 2003 年度に調査を行った、ブラジル日系社会（スザノ市福博村およびアリアンサ移住地）とする。ブラジルサンパウロ州のスザノ市福博村およびアリアンサ移住地は、比較的規模の大きい日系人コミュニティであるため、さまざまな目的をもった研究者が頻繁に訪れる。そのため、言語調査を含むさまざまな調査に対する幅広い意見が得られると考えられた。

3.1.1 スザノ市福博村

福博村は、サンパウロ市から東に向かって約 30 キロの距離に位置するスザノ市南部の近郊農村型日系地域共同体である。サンパウロ人文科学研究所の『日系社会実態調査報告書』によれば、2000 年度時点でこの地域では約 140 戸の日系世帯、およそ 510 名の日系人が居住する。福博村は、1931 年の日本人移民家族のこの地域への転住をもってその歴史が始まった。1935 年に「福博日本人会」が創設され、1948 年には村づくり・村おこしのための実態調査（村勢調査）が行われている（第 1 回村勢調査）。以後、約 10 年ごとに継続調査が行われている。

スザノ市福博村を対象とした規模の大きい調査としては、まず、1985-6 年にかけて、日本の T 大学がデカセギ現象について、デカセギの動機や日系社会の空洞化およびデカセギから帰ってきた人々に対する調査を行っている。2000 年にはサンパウロ人文科学研究所が日系社会実態調査を行い、2003 年には COE 調査で、言語生活調査・談話収録調査を行っている。

なお、2006 年に 75 周年を迎える福博村では、これから 5 年ごとに調査を行う予定で、日本の研究者と連携して、多角的な調査を進めていきたいという希望があるとのことである。

3.1.2 アリアンサ移住地

アリアンサ移住地は、サンパウロ州最西端地域ミランドポリス市の大規模日系地域共同体である。サンパウロ市からはおよそ 600 キロ離れ、先述の『日系社会実態調査報告書』によれば、2001 年

度時点でこの奥地農村型の地域では約180戸の日系世帯、およそ640名の日系人が居住している。

アリアンサ移住地は、弓場農場という特異な日系共同農場の存在でも有名である。1935年に建設され、現在では約100名の構成員が共同で労働し、あらゆる財産を共有しながら生活している。農場の人々による「ユバ・バレエ団」や、1世の高齢者から4世の子供までもが生活言語として日本語を使用しているなど、非常に興味深いコミュニティーである。こうしたこともあり、弓場農場には、研究者や一般旅行者が頻繁に訪れる。もともと「来る人拒まず」のところであるため、短期で訪れる人もいれば、半年か一年ほどの長期滞在の人も多い(弓場農場:<http://www.100nen.com.br/ja/yuba>)。

アリアンサ移住地や弓場農場を対象とした主な調査は、2001年のサンパウロ人文科学研究所の日系社会実態調査や2003年度のCOE調査(言語生活調査・談話収録調査)があり、2004年からはK大学の大学院生が1年間の参与観察を行っている。なお、現在アリアンサ移住地では、「アリアンサ移民80周年史」の作成を計画している。

3.2 2003年度COE言語調査の活動概要

2003年度COE調査では、「ブラジル日系社会における言語の記録・保存」および「ブラジル日系社会における言語の総合的研究」を目的に、言語生活調査(2003年4-5月実施)と談話収録調査(2003年7-8月実施)を行った。これらの言語調査は、§1で述べたが、緻密に計画された短期集中的な形態であり、サンパウロ人文科学研究所が2000-2001年度に行った日系社会調査(ブラジル日系社会4地点:826世帯・対象者3108人)を母体にして行われたものである。ブラジル在住の共同研究者(文化人類学者)が多年のフィールドワークを通して築いた現地との信頼関係の上に成り立った、総合的研究の一環として言語調査が行われたのである。

言語生活調査対象者のサンプリングは、スザノ市福博村とアリアンサ移住地において、1世・2世・3世以下という世代的指標と年齢からの等間隔抽出法を行い、それぞれの世代で40名ほどを選定した(スザノ市福博村:108名調査、アリアンサ移住地:111名調査)。談話収録調査の研究参加者は、言語生活調査対象者の中から48人に対して行った(各地区24人:1世12人・2世8人・3世4人)。

談話収録調査は、半構造化インタビュー方式をとり、基本的に調査員が研究参加者の自宅を訪ね、録音・(一部)録画を行った。収録談話は次の2種類である。

- (1) 調査員との対話（フォーマルな談話：30分以上）
- (2) 地域内の同世代同性の友人・知人（Key Person）との対話（カジュアルな談話：30分以上）

(2)については、話者のもつ最もカジュアルなスタイルを引き出すことを目的に、「友人との対話場面」の調査をデザインしたが、車無しでは自由に歩けないといった治安の問題や隣家が何キロも離れていることが多く、また1地区4日という実質調査日程などにより、親しい友人との対話のセッティングには多くの困難があった。そのため、経済的・時間的効率性を考慮し、同一地域内の友人・知人をkey person（以下、KPとする）として採用し、カジュアルな談話を収録する研究協力者になってもらった。KPは各地区6人ずつ計12人（1世から3世までの男女各1人ずつ）である。

4. 調査者の思いとフィールドの声

4.1 言語調査に対する内観

まず、2003年度COE調査のうち、筆者が参加した談話収録調査（§3.2で先述）の具体的な活動を内観する。

談話収録調査では、調査員がそれぞれの研究参加者の自宅に訪ねていき、約2時間を予定に話してもらった（研究参加者は各地区24人：1世12人・2世8人・3世4人）。§3.2で述べたが、KPの方々は、カジュアルな談話の話し相手役を担当して下さっただけでなく、研究参加者の自宅に訪ねる際の移動を自家用車で担当して下さった。また、スザノ市福博村ではKPの方々が研究参加者に携帯電話をかけて調査の予定を立てて下さった。さらに、スザノ市福博村では、談話調査終了後に村の日系若年層による太鼓演奏を披露して下さり、バーベキューパーティー（シュハスコ）を催して下さった。アリアンサ移住地では、調査拠点である弓場農場で宿泊や食事のお世話になり、資料館や図書館なども提供して下さり、自由に使わせてもいただいた。研究参加者には日本からのおみやげをプレゼントし、KPの方々には研究協力者として謝礼をしている。弓場農場での宿泊や食事に関しても相応の謝礼をしている。また、調査に直接的に参加した方々や調査に協力を惜しまなかった方々への謝礼は終わったわけではなく、感謝の気持ちと敬意はこれからも何らかの形で表明していくべきであると考えている。

以上の調査は、学術的に貴重な調査となったと確信しており、その成果の一部は『COE 報告書 5 「言語の接触と混交」(第 1 部)』(工藤編 2003)や『大阪大学大学院文学研究科紀要 44-2』(工藤編 2004)に紹介されている。現地への還元という観点からは、その報告書類や談話収録調査の傍ら収録した映像資料を提供している。また、現地からの要望がある場合は、第 1 次資料(無修正生データ)に関しても、個人情報保護の観点および著作権の観点、資料流用などの観点からの議論を経て、できる範囲において積極的に現地への還元も行っている(そもそもこういった資料は現地のものであり、研究者は預かっているのだから、「還元」というより「お返し」であるが)。たとえば、スザノ市福博村には「収録談話のコピー」をお返しし、アリアンサ移住地には「アリアンサ移民 80 周年史」に役立ててもらうために言語生活調査データの一部をお返ししている。さらに、本稿の執筆の契機となったスザノ市福博村やアリアンサ移住地の弓場農場への再訪問(2005 年 7-8 月)も現地との交流の一環である。こうした現地への還元や交流は、これからもつづけていくべきであり、そうありたいと願っている。

しかし、2003 年度 COE 調査では、実質調査日程が 1 地区 4 日であり(§ 3.2 参照)、午前・午後の 2 回の調査が組まれていたこともあり、現地の研究参加者と調査以外のふれあいはほとんど持てなかったのが実状である。研究代表者の工藤真由美教授も述べているように、1 世・2 世の方々の話を聞くには短すぎる時間だったかもしれない。オーラルヒストリ的な側面への配慮が十分にできなかったことが悔やまれる(『COE 報告書』5 p.106)。また、談話収録調査にうかがっても、何をどうしたらよいか分からず困惑気味の研究参加者に対して、調査の方法や談話収録の意義などについて丁寧にかつ具体的に説明する時間的な余裕がない場合もあった。

2003 年度 COE 調査では、基本的に研究者のスケジュールにあわせてもらった。その一方、研究参加者の方々が個人的に招待して下さることも多くあった。しかし、それには日程的に応じられないことが多かったのである。

4.2 フィールドの声

ここではまず、(言語)調査および研究者に対してフィールドの持つ全体的な印象をまとめ、次に(言語)調査および研究者に対するフィールドの声を個別項目に分けて、筆者が代弁する形でまとめていく。これは、フィールドの声をありのままに提示してはいるものの、筆者のフィルターを通すことになり、筆者の気づきかぬ取捨選択が行われる蓋然性を否定し得ないためである。したがって、ここで

提示するのは、筆者の立場からみた「フィールドの声」ということになる。なお、繰り返しになるが、2003年度COE調査のみでなく、これまでのさまざまな調査についてのフィールドの声であることを再度断っておきたい。

フィールドの2地点で聞き取り調査を行った結果、フィールドの持つ全体的な印象を、以下のようにまとめることができる。

まず、肯定的な印象として、COE調査の臨地調査はフィールドにとって日常のなかの非日常であり、新鮮な経験だったと評価する声があった(B氏)。とくに2003年度のCOE調査の研究協力者(KP: §3.2, §4.1参照)として参加し、研究者との共同作業のなかで、アカデミックな雰囲気肌に肌で接することができ、自分の刺激になるという意見とともに、村をあげてのイベントだったので、一種の祭的な雰囲気があったという(A氏、B氏)。学間に接することへ興味を持っている現地の方からの意見であるが、単に情報提供者としてだけでなく、研究協力者として調査に関わったことが肯定的な評価につながったと思われる。

次に、否定的な印象としては、これまで多くの研究において、研究者の興味本位で調査をし、とくに日本側の研究者の業績になるだけではないかという批判があった(B氏)。これまでのさまざまな調査が、学問的調査にとどまっており、その成果が現地の生活・社会に戻ってこなかったという指摘であろう。とくにこのような意見は、村のインテリ層に多いようで、過去に現地への還元がなされてこなかったことが現在の研究へ影響を及ぼしていると言えよう。

以下では、フィールドの声を個別項目に分けてまとめていく。

4.2.1 臨地調査そのものについて

(1) 事前情報の確保

研究者は、フィールドおよび研究参加者の個人について、できる限り予備知識をもっておかなければならない。前もって相手のことを知っておくと、初対面でも話がはずみ、追加情報を引き出しやすい(A氏)。

予備知識と関連して、アリアンサ移住地にはこれまでにさまざまな調査があり、基本的な社会的属性情報などの調査項目が重複することが多く、現地の人々からすると大変迷惑と感ずることもあった。調査をする側は異なっても調査を受ける側は同じであり、現地の人々は研究者同士を何らかの形で結びつけている(C氏)。研究者間でこれまでの資料を共有し、再利用することで、同じような調査

が繰り返される無駄を省くことができるのではないだろうか。そうすれば、不足部分に対する追加調査のみを実施することができ、効率的であろう（C氏）。

(2) 調査の依頼

これまでの調査では、調査の目的や内容、また何に役立つのか、現地にはどのような還元を考えているか、などについて明確な説明がなく、現地の理解を得ないままに調査が実施されることが多くあった（A氏、C氏）。また、電話で調査を依頼することが多いが、研究代表者などが直接現地へ来て、説明会などをして丁寧に説明してはじめて現地も納得し、調査に協力することになるだろう（A氏、C氏）。とくにコミュニティーを対象とする場合は、村民の大多数は、村のリーダーからの調査依頼に対する義理人情があつて協力することが多い。そのため、現地のリーダーに調査のことを明瞭に説明して理解してもらう必要がある（A氏）。なお、時間がない、遠い、面倒だ、などの理由は、そもそも研究に対する基本的な考え方が間違っている。何度も足を運んで、誠意を持って説明し、了解してもらうことが大事ではないだろうか（A氏）。

(3) 調査の進め方

本稿の冒頭でも述べたが、言語調査の臨地調査は短期間に集中的に行われる。たとえば10人以上の研究者が参加したCOE調査も、1地区4日間の調査であった（§3.2参照）。

しかし、フィールドからは、短期間の調査でどれだけのことかわかるのだろうかという疑問の声があがっている（A氏、E氏）。アリアンサ移住地の弓場農場のような定住型移住地に関しては、長期間の調査が望ましく、現地の人々と仕事や生活を共にし、喜怒哀楽を共有することで現地が深く理解された例を評価している（E氏）。アリアンサ移住地や弓場農場では、過去に1年間にわたって住み込み調査をした研究者もいて、現地の人々に研究者同士が比較されたのである。

また、フィールドには話したいこと、聞いてもらいたいことがたくさんあり、現地の人々にとって話を聞いてもらうことだけでも価値のあることだったりする（A氏）。しかし、研究者はすでに組まれている調査スケジュールによって、現地の一人一人と長くつきあえないことが多い。

(4) 調査の形態

調査のうち、とくに選択式のアンケート調査が嫌いという意見があつた（D氏）。たとえば自分の意見が選択肢に挙がっていない場合でも、必ず選ばなければならないことに対して困難を感じる。また

回答によって、そのような考え方の持ち主だと見られるのもいやだという。アンケート調査は簡単そうで、じつはもっとも難しい調査法の一つであることを現地の方がいみじくも指摘しているのである。

4.2.2 研究者とフィールドとの対話様式について

(1) フィールドに対する配慮

管理者的な研究者および調査の方法は現地の人々に歓迎されない。研究者は、誠意を持って現地の人々に調査のことを理解してもらうことが大事である(A氏)。たとえば、アリアンサ移住地の場合、日本語は話すが、読み書きが不自由な場合が多く、理解度が落ちることもあるという。難しいことばによる難解な説明は分からないことも多いので、やさしく、丁寧に説明する必要がある(C氏)。現地の人々に通じ合うことばが大事で、現地の人々に「一緒にやりたい」という気持ちを起こさせることで良い調査ができるだろう(A氏)。

また、研究者のテクニクとして、研究参加者が話しやすいように聞いてほしいとの意見もあった(A氏、C氏)。調査は、人を相手にするわけなので、相手の気持ちを考え、思いやりをもった聞き方が重要である(A氏)。先ほどのアンケート調査のように、知りたいことを明確に聞く場合もあろうが、理想的には時間をかけていろいろな話をしながらさりげなく聞くことで、研究参加者が不愉快な思いをすることを極力少なくする必要があろう。これは研究者の資質に関する点で、研究者の技術的な能力を高めるための、トレーニングも徹底する必要がある。

(2) 心情に訴える対話

現地の人々にとって、研究者の整然とした論理的な説明よりも、現地の人々の心情に訴えることが大切ではないか(A氏)。そうするためには、ある程度の期間を現地で生活しながら調査をする必要があり、そうした人間的なふれあいや、つき合いの中からもっと深いことが聞け、理解できるのではないだろうか(A氏)。そういうった中で現地のために何か還元できるか、現地に何がほしいか、ということが見えてき、そのような姿勢を現地の人々が感じ取ること、さらに協力が得られるだろう(C氏)。現地の人々との人間的なつき合いがなければ、現地の人々はよい調査だとは思わないし、非協力的になることさえある(A氏、C氏)。

これらのことに関連して、コレット・グリーンバルド(2002)が指摘するように、研究者は「過去と将来を考える」必要がある。研究者とフィールドとの対話は、現在だけでなく、過去や未来の研究とも

つながっており、それが計画の実効性に決定的な影響をもち得るのである (p.246-250)。

4.2.3 現地への還元について

(1) 個人に対して

調査報告書や研究論文などの専門的な還元は、フィールドのごく一部の識者にしかわからず、基本的に多くの研究参加者には歓迎されない。また一方で、フィールドにとって調査に参加したことで自己存在意識を再確認する、いわば達成感のような意識が、調査報告書などによって芽生えてくることもある。こうした一般市民の調査への参加意識は、特にビデオ映像や写真などによって生まれてくることが多い。ただし、調査終了後できるだけ早い時期に見られることが望まれる。調査終了後2-3年にもなると、記憶も意識も薄れてくるので、中間報告の段階でもこまめに送ってほしい(C氏)。

なお、現地の個人に対する金銭的な謝礼は、一過的であり、生活のためにならない⁸⁾。個人に対する謝礼を考えるのであれば、コミュニティ全体で有効に活用できる還元、たとえば公民館などで使用可能な機材などがほしいところである(A氏)。

(2) コミュニティに対して

調査報告書は、フィールドの内部でさらに活用する場合に役立つこともある(A氏、C氏)。これまでの調査では、調査報告書の送付や礼状がないことも多く、調査されっぱなしで結果が分からない。是非とも調査の成果を知りたい。調査報告書は記録として役に立つし、専門家の研究方法を勉強する上でも役立つ。またそれを活用することもできる(C氏)。

さらに、現地への還元は、調査報告書のみでなく、第1次データ(無修正生データ)がほしい場合もある。調査報告書は個人情報に関する箇所はすべて伏せており、それを知るためにはもう一度調査をすることになる。そのような手間を省くために、フィールドが望む場合、現地へ生データを還元し、さらに調査をつづけるのに役立つことができればよいと思われる(C氏)。

(3) 無形の還元

研究が将来的に現地の役に立つことがあろう(D氏)。たとえば、コロニア語は日系社会の生きた証であり、産物であるが、いづれなくなる運命にある。コロニアのこトバを広く知らしめてほしい(E氏)。

また言語調査を、一回の調査で終わらせるのではなく、継続的にやるべきである(A氏)。たとえば、10年後にコロナ語は減びているのであろうか、あるいは維持されているのであろうか、または優位言語のポルトガル語の中にどのような日本語が残るのであろうか、などについては、研究者の興味だけでなく、現地のためにも継続調査をしてほしい(A氏)。このことと関連して、フィールドと共同で何かしらの研究を続けることも可能であろう(C氏、E氏)。たとえば、先述したように、スザノ福博村では今後5年ごとに継続的な実態調査を予定しており、アリアンサ移住地では「アリアンサ移住80周年史」を5カ年計画でまとめようとしている。これらの計画にこれまでの研究者が協力することも可能なはずである。また、現在日系ブラジル社会では、移民資料の電子化が急がれるので、それに協力することも現地への還元の一つになろう(C氏)。

5. ディスカッション

以上で、言語調査に対する内観をし、フィールドの声を全体的な感想と個別的な項目に分けてまとめた。フィールドの声からは、先行研究においてすでに指摘されてきた事象も含まれているが、調査の依頼や進め方、また現地への還元の具体的な形など、新たに見えてきたことも多い。

本節では、フィールドの声から見えてきた具体的な事象を臨床性と横断性に絡めて、さらに議論していきたい。まず、§5.1で「フィールドとの対話の臨床性」に焦点を当て、臨地調査のあり方について議論し、続く§5.2ではフィールドを共にする「研究者およびディシプリンの横断性」について議論を展開していく。この2つの視点は、明瞭に分けられるものではなく、§1で述べたように、臨床性を基盤とした横断性という関係にあるが、議論しやすくするために、便宜的に分けて考えることにする。

5.1 フィールドとの対話の臨床性

(1) 臨地調査の計画

調査依頼に際し、調査の具体的な目的・方法、そして現地への還元、報告書執筆予定などを丁寧に説明する必要がある。そうして調査に参加する現地の研究参加者に、事前に研究および調査の全体像をわかってもらうことが望まれる。そうするためには、調査の計画段階に研究代表者などが

現地に行くことが最も望まれるが、現実的には困難な場合もあろう。要は研究者が一方的に調査研究を決めるのではなく、フィールドとの対話のなかで調査をデザインするということである。本稿の冒頭で述べたが、「データ使用許諾書」が現地の利益を追求する手段として意味を持ち、現地への還元のための具体的な形を盛り込んだ話し合いが必要であるということである。

また、調査の計画段階のときに、フィールドも研究者に対する要望を出して、現地の研究参加者が調査に協力してよかったと思うような調査にしていきたい。こうして調査の計画段階から研究者とフィールドとが綿密に話し合い、情報を交わすことで、§ 4.2 で述べたような否定的な批判や、角田(2002)のいう「学問的泥棒」の汚名を返上することができるだろう。

(2) 臨地調査の実施中

臨地調査の日程は、現地の都合・希望に合わせて、時間的・体力的余裕を持って組むことが望まれる。§ 4.2.2 で述べたように、現地の人々との人間的なつき合いがなければ、現地の人々はい調査だとは思わないのである。また、研究者の都合で調査を打ち切りをするのではなく、現地の人々が望むのであれば、研究者はその話を聞くべきである⁹⁾。調査は現地の人々にとって、日常の中の非日常である。現地の人々の善意を最大限に尊重すべきであろう。

現地の人々とのふれあいを考えると、2005年8月にピラ・カローンにおいて行われた談話収録調査のように、1日に1調査のみにし、余裕を持って対応できるようにしたいものである(2003年度COE調査では1日2調査：§ 3.2 参照)。そして、もし調査が早く終わったら資料の整理や、他の調査のお手伝いなどできるわけである。このようにして、現地のリズムに合わせた新しい調査法を模索していくべきであろう。

(3) 臨地調査の終了後

まず、これまでのように、形式的・均一的なおみやげのものではなく、村の発展につながるものごとを還元すべきである。次に、現地の人々にとって、調査への協力が自分のプラスになる、あるいはプラスにしていけるように研究者が働きかけるべきである。

そして、現地に調査を受け入れられる底力があれば、調査の刺激を受けて、現地の内部から力を発揮していくことが可能であろう。たとえば、§ 3.1.1 および § 3.1.2 でも述べたが、スザノ市福博村では1948年に行った第1回村勢調査以降、約10年ごとに継続調査を行っており、今後は5年ごとに調査を行う予定である。また、アリアンサ移住地では、「アリアンサ移民80周年史」の作成計

画を進めている。そういったフィールドの力にも期待したいし、これらの事業への協力も可能であろう。研究者とフィールドとが協力し合い、継続的な研究を行うことが望まれる。

さらに、すでに現地にデータがある場合は、研究者と現地との連名で公表することもあり得、現地と協力し、新たな付加価値の創出に努めることも必要である。このようにして、現地の人々を単なる情報提供者としてだけではなく、現地の人々と共に問題を発見し、共に研究し、行動計画をと共に策定する「参加型アクションリサーチ」が求められるのである（井上 2002）。つまり、フィールドは研究の対象でありながら、研究の主体ともなり得るのである。こうしたフィールドの研究過程への関与によって、研究者とフィールドとの非対称的な関係に対する批判などを克服することが可能となろう。

5.2 研究者およびディシプリンの横断性

これまで、同じフィールドを対象として行われた研究において、研究者間のネットワークがなく、資料が共有されることは少なかった。そのこともあって、フィールドからすると同じと思われるような調査が何度も繰り返されることがあった。フィールドを共にする研究者間の基礎データの共有が必要であろう。研究者は調査報告書のみでなく、フィールドで収集したすべての情報はフィールドに返し、フィールドの管理のもとに次の研究に役立てることが望まれる。無論、調査ごとに独自の視点があり、互いに結びつかず、統一がとれない場合もあろうが、フィールドを共にする研究者が越境・横断的に成果を共有し、その成果を臨床的にフィールドへ還元していくべきである。研究成果のフィールドへの還元という点からは、最も望ましい形態であろう。

このようなデータの共有は、それぞれの研究者のデータを全面的に公開することが前提となる。この点については、角田（2022）がいみじくも指摘しているように、生データそのものを刊行することの意義にもつながり、社会に開かれた研究となる。研究者のフィールドについての事前情報の確保を手助けし、先達の研究に不足している箇所のみを追加収集することで、調査の効率性が上がり、学問の発展にもつながるものであろう。なお、現地に基礎データの管理組織がない場合、現地の同意（許可）を得て、研究者側でつくりあげることが必要である。たとえば、COE プログラムが世界的研究の拠点作りを目指しているならば、COE プログラムにこれまでのデータをまとめておくことも可能なのである。この点、今後真剣に考えていくべき問題である。

このような研究者およびディシプリンの横断性を考えるならば、研究者が責任を持って現地と長くつき合う、いわばライフワークのつもりで対処しなければならない。したがって、小手先の興味本位の調

査ではなく、大きな目的を持った研究計画が望まれる。これは研究の規模を問題にするのではなく、ライフワークにしていくような研究が望ましいということである。そうすることで、現地へ還元できるものも増えてくるだろう。研究をデザインする場合には、この点について十分留意すべきである。

6. おわりに

以上、フィールドの声を、臨床性と横断性に絡めて議論してきた。フィールドの声を一言で言うと、「フィールドは研究者のさまざまな調査に協力するが、フィールドは研究者からは協力してもらえない」とまとめることができる。こうした研究者とフィールドの不平等な関係を改善し、互恵的パートナーシップを確立することが望まれる。本稿では、フィールドとの対話の臨床性という視点から、調査の計画段階からフィールドの声を聞くことが大事であり、研究者とフィールドとの対話が重要であることを指摘した。また、研究者およびディシプリンの横断性という視点からは、それぞれの研究のデータを全面的に公開し、フィールドを共にする研究者間のデータの共有を含む交流が望ましいことを指摘した。

これまでの研究は、調査のデザインや資料収集、報告書刊行に重点を置いてきたが、本稿では、報告書刊行以降の研究者とフィールドとの継続的な対話の重要性を説いた。この点、研究プロジェクトの予算執行にかかわる問題や短期的な成果が求められる今日的な研究形態を根本的に改革していく必要があろう。その検討が今後の課題である。

社会言語学は、社会的な問題を抱える人の手助けとなる学問であってよいし、そうあるべきであると考えている。本稿の議論を通して社会言語学における「ウェルフェア・リングイステクス」の具体的な形の一つが現れてきたように思う。すなわち、研究者とフィールドとがお互いに変えられる経験の場、相互浸透する知の現れる場を、研究者とフィールドが共同で作り上げていくということである。

本稿は、スザノ市福博村・アリアンサ移住地という規模の大きいコミュニティにおけるフィールドの声を記録したものである。フィールドごとにさまざまに事情が異なるので、それぞれのフィールドの特性を考慮する必要があるだろう。いずれにしても、本稿がこれから臨地調査を計画し、フィールドに出かけようとする人に、少しでも参考になれば幸いである。

(特任研究員)

〈注〉

- 1) 日本における社会言語学的な視点からの研究は、かなり古くから独自に存在しており、日本の社会言語学史における第一のエポックは1950年代初頭にあった。このことは、アメリカの社会言語学者達も認めている事実である（真田他1992）。
- 2) ここでいう「言語調査」は、調査票を用いたサーベイそのものはもちろんのこと、調査の目的・方法などを記した調査計画書の作成といった調査のデザインや調査終了後の報告書の刊行を含む。広く、言語に関する研究プロジェクトと捉えて良い。なお、現地に赴き、調査票を用いて行うサーベイそのものを指す場合は、「臨地調査」という用語を用いる。
- 3) 文化人類学におけるフィールドワークについては、松田（1991；1998）が詳しく紹介している。また、井上（2002：221-222）は、フィールド研究を、広義のフィールドワーク（狭義のフィールドワークとサーベイ）およびデスクワークを含めて、フィールド（現場）にかかわる研究活動と定義している。狭義のフィールドワークとは、人類学者が実施する長期滞在型の典型的なフィールドワークであり、デスクワークとはフィールドで得たデータを整理し、分析し、あるいは解釈する作業である。
- 4) ここで「言語調査および研究者に対するフィールドの声」のように「 」付きにしたのは、無限に広がりうるフィールドの声に限定を加えるためである。そういう意味で、この論考自体がパラドキシカルであるが、あえて問題提起をするのは、これまでに筆者自身が行ってきた言語調査への反省が第一にあり、社会言語学におけるフィールドワークのあり方を鑑みるきっかけになればという期待を込めている。
- 5) ここでいうウェルフェアとは、フィールドの福祉、幸せのみを対象としているのではなく、研究者とフィールドの両方の福祉、幸せを満たすことを視野に入れたものである。すなわち、具体的なもの（こと）をフィールドへ還元したとして、フィールドのウェルフェアに貢献できるということではない。フィールドのウェルフェアに貢献するということは、研究者とフィールドが共に作り上げることであり、研究者がフィールドの働きかけにも応じることで為し得るものである。

なお、他のディシプリンではすでにこうした論考が存在する。たとえば、井上（2002：228）は、一人の研究者による総合的（synthetic）・学際的（inter-disciplinary）アプローチのことを、ハイブリッド（hybrid）・アプローチと呼び、学問分野の超越の必要性を主張している。さらにフィールド研究の倫理問題については調査者と非調査者との互恵的パートナーシップを確立するプロセスとして「参加型アクションリサーチ」を紹介している。

- 6) 筆者は、大学院修士課程のとき、研究目的が明確に定まっていなかったにもかかわらず、成果を急ぐあまり、言語行動についての多人数アンケート調査を実施したことがある。このアンケート調査は決して興味本位ではなく、真剣に研究に打ち込んでいく過程で行われたものであるが、研究成果として公表することはできなかった。アンケートに応じてくださった方々に甚大な迷惑をかけたことを未だに反省している。また、博士課程のときは、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に談話収録調査を行った。談話収録調査を行うときや談話資料を分析するなかで、研究参加者の諸氏の日本語習得に対する苦悩に直面することが多くあった。諸氏にはお世話になるばかりで、何も返すものがない。その涙ぐましい努力に報いることを心より願うばかりであるが、将来日本語学習者のためになる研究ができるよう、一層努力したいと誓ったのである。
- 7) 内観は、吉本伊信（1916-1988）が創始した自己探求法であり、「内心の観察」（「内面の観察」とも）という意味である。浄土真宗の一派に伝わる「身調べ」という求道法から発展してきたもので、現在では宗的色彩を取り除いている（三木1976）。内観は吉本氏の個人的体験で成立しており（三木1995）、理論的な裏付けが乏しい面もあるが、自己啓発的側面と心理療法的側面を持つ。森田療法とともに、日本で開発され普及してきた代表的な心理療法の一つである（三木1998）。なお、内観的価値観が端的に反映されている3つのテーマは、吉本氏が30年の年月を費やして、面接の体験の中から定められたものである。

ここで、COE 若手研究集合で指摘された内観と「反省」の違いについて若干説明を加える。普段われわれが「反省」する場合は、何かしら結果が（自分にとって）好ましくなかったときに、どこが悪かったかといつて省みることが多い。つまり、

自分の常識や価値観から問題がなければ普段「反省」はしないのである。しかし、内観において「迷惑をかけたこと」というのは、結果が良い悪いという問題ではない。内観によって、客観的に自分と他者の関係を見る目、いわば「バランスシートの思考様式」や「共感的思考様式」を養うことができる（三木・三木 1998）。

- 8) 個人々人に対する謝礼に関して、ネウストブニー（2002）は、「著者の指導のもとで調査を行ったある中年の研究者が、数日間調査をしていた対象者（単数）をレストランに招待し、お礼をしたことがわかったときに感動したことがある。」と記している（p.37）。個人々人に対する感謝の気持ちの表明にはさまざまな形があると思うが、研究参加者に対するこうした感謝の表明はいわば当然のことであろう。また、このことからわかることは、社会言語学における研究参加者に対する還元が個人々人への感謝の表明で終わっており、大局的な学問的な還元にはほど遠いということである。
- 9) COEの談話収録調査に際して、研究参加者の言語形式に注意を払うあまり、研究参加者の語りたい内容には興味を示さないこともあったと思われる。筆者とペアになって調査を担当した調査協力者の元新聞記者からの指摘があった。

〈謝辞〉

言語調査を内観して、「フィールドの協力があって、今の研究がある」と、フィールドに生かされた研究であることを改めて思った。知の搾取にならぬよう、貴重な資料を預かる使命感をもって、今後の研究に望みたい。今回（2005年7月29日～8月5日）、スズノ市福博村とアリアンサ移住地の弓場農場を、映像収録調査を兼ねて再度訪問した。再訪問を契機に聞き取り調査が可能であった。再訪問の機会をくださった研究代表者の工藤真由美教授に感謝したい。そして、いつも温かく迎えてくださる現地の方々から心からの感謝を申し上げる。

学生時代から言語調査のあり方には疑問を持ちつつも、整理のチャンスに恵まれなかった。COE若手研究集合の皆さんに背中を押してもらって、一つの形にすることができた。COE若手研究集合の皆さんにお礼を申し上げる。筆者は、これまで、専門分野の社会言語学とは別に臨床心理学分野の内観法に興味を持ち、実践的に取り込んできた。本稿は、言語調査を題材にして、社会言語学と内観法の融合を試みたディスカッションペーパーでもある。内観に関してご指導を賜った神戸松蔭女子学院大学の三木善彦先生に感謝の意を表する次第である。

〈参考文献〉

- 井上 真（2002）「越境するフィールド研究の可能性」石 弘之編『環境学の技法』東京大学出版会 p.215-257
- 工藤真由美編（2003）『言語の接触と混交-日系ブラジル人の言語の諸相』大阪大学 21世紀COEプログラム〈インタフェイスの人文学〉報告書5（第1部）
- _____（2004）『ブラジル日系社会言語調査報告』大阪大学大学院文学研究科紀要 44-2
- 呉人 恵（2004）「ソンドラで瀕死の言語に向き合う」岩波書店編集部編『フィールドワークは楽しい』岩波ジュニア親書 p.1-20
- コレット・クリンバルド著・永井忠孝訳（2002）「第十章 瀬戸際での出会い-危機言語の話者とのフィールドワーク」宮岡伯人・崎山 理編 渡辺 己・笹間史子監訳『消滅の危機に瀕した世界の言語-ことばと文化の多様性を守るために』明石ライブラリー p.239-281
- 真田信治（2004）「ネオ方言はどのように生まれるのか」岩波書店編集部編『フィールドワークは楽しい』岩波ジュニア親書 p.21-38
- _____（2005）『都道府県別 気持ちが変わる方言 141』講談社 + α新書
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹（1992）『社会言語学』おうふう

- サンパウロ人文科学研究所編（2002）『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所
- 祖父江孝男他（1992）「日本民族学会研究倫理委員会（第2期）についての報告」『民族学研究』57-1 p.70-91
- 角田太作（2002）「研究者の任務・理論と記録の方法」宮岡伯人・崎山 理編 渡辺 己・笹間史子監訳『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』明石ライブラリー p.282-290
- 土岐 哲（1999）「研究成果の還元その他について」『社会言語科学』1-2 社会言語科学会 p.29-31
- 徳川宗賢（1999）「ウェルフェア・リングスティクスの出発」『社会言語科学』2-1 社会言語科学会 p.89-100
- 中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』岩波新書
- J. V. ネウストプニー（2002）「調査研究の倫理的問題」J. V. ネウストプニー・宮崎里司共編著『言語研究の方法』くろしお出版 p.35-40
- K. F. パンチ著・川合隆男監訳（2005）『社会調査入門—量的調査と質的調査の活用—』慶応義塾大学出版会
- ヒックス・ジョーゼフ（1998）「人間科学における研究倫理について—特に心理学を中心に—」高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編著『人間科学研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版 p.31-50
- 松田素二（1991）「方法としてのフィールドワーク」米山俊直・谷 泰編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社 p.32-45
- _____（1998）「フィールドワークをしよう—民族誌を書こう」船曳建夫編『文化人類学のすすめ』筑摩書房 p.152-170
- 三木善彦（1976）『内観療法入門—日本的自己探求の世界』創元社
- _____（1995）『内観療法—自己理解と自己革新の方法』ヘルス研究所
- _____（1998）「内観療法」三木善彦・黒木賢一共編『日本の心理療法—その特質と実際』朱鷺書房
- 三木善彦・三木潤子（1998）『内観ワーク』二見書房
- 宮岡伯人（2002）「第一章 消滅の危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム—」宮岡伯人・崎山 理編 渡辺 己・笹間史子監訳『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』明石ライブラリー p.8-53
- 鷲田清一（1999）『「聴く」ことの手—臨床哲学試論—』阪急コミュニケーションズ

学知の還元

— 調査報告を通して学ぶこと —

高阪 香津美

< 要旨 >

本研究では、研究とは誰のために行うべきなのかという問いに答えるため、1) ある研究を遂行しようとする際に、研究参加者とはいかなる位置づけなのか、2) 研究結果を報告することがいかに重要であるのか、3) 実際に研究報告が行われることにより、研究参加者は何を感じるのかの3点から分析を試みた。そして、研究というものが研究者と研究参加者との対話によって成り立つものであること、調査段階や調査報告段階の対話により研究者、研究参加者の両者に利益がもたらされることがみえてきた。しかしながら、その一方で筆者の研究対象である日系ブラジル人に対して、彼らに実施した調査の結果を報告したところ、日本社会で生活する日系ブラジル人の多くは研究報告を目的とする行事に参加できる環境にはいないことが彼らからのフィードバックで明らかになった。

< キーワード >

研究参加者、対話、研究結果の還元、日系ブラジル人、フィードバック

1. はじめに

1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改正、ならびに近年の少子・高齢化現象に伴う労働力人口の低下は日本社会に日系ペルー人やブラジル人といった日系人労働者の急増をもたらした。その結果、2004年末の外国人登録者数は197万3,747人と過去最高を記録し、今や日本の総人口の約1.55%を占めている(法務省入国管理局統計)。そして、この統計結果は現在、日本社会が多言語・多文化化へと移行する渦中にあることを顕著に示すものである。

こうした日本社会の変容は、学術の世界からもその一端を垣間見ることができる。今年5月に日本

語教育学会春季大会において「多文化共生社会と年少者をとりまく環境」¹と銘打ったシンポジウムが開催されたことを皮切りに、9月には日本子ども学会において「多文化社会と子どもたち-未来をつくる共生と支援」²をテーマとしたシンポジウム、また、10月には社会言語科学会において「共生を生きる日本社会：21世紀 COE プロジェクトから」³と題したテーマ講演が開催されるなど、今年度だけをみても種々の学会において「多言語・多文化化する日本社会」がシンポジウムや講演の中心テーマとしてたびたび取り上げられている。このことは、日本社会が実際に多文化共生社会へと移行していることを端的に表わすものであると同時に、このテーマに対する研究者の関心の高さを示している。しかしながら、多言語・多文化化する日本社会への関心はなにも研究者に限ったことではなく、いまや市民のレベルにまで広がりをみせている。実践家や一般市民を対象とした同様の行事が全国各地で多数開催されていることがそれを証明している。しかしながら、筆者がそうした行事への参加を通じて常に痛感させられることは、会場の座席を見渡してみても出席者のほとんどが日本人住民であり、多様な文化背景をもつ外国籍住民の参加が極めて少ないことである。

フォーラムやシンポジウムは出席者全員で特定のテーマについての知識や情報を共有する場、討論する場、そして、問題意識を深める場であるが、ここで提供される知識や情報の源となるのは専門家である研究者がこれまで行ってきた調査の結果である。このことから、フォーラムやシンポジウムは専門家が行う研究や調査から得た知識を公に伝える働きをしていることになる。先に述べたように、外国籍住民は多言語・多文化化する日本社会をテーマとしたこうした行事に参加することは少ない。それゆえ、「いま自分の周りでどのようなことが起きているのか」「何が問題となっているのか」という情報を受信していない場合が多い。つまり、外国籍住民も日本人住民と同様、このテーマの当事者であるにもかかわらず、彼らに対して研究成果が還元されていないというわけである。しかしながら、研究者が多言語・多文化化する日本社会で生じているなんらかの事象を研究しようとする際、研究参加者と称して外国籍住民から情報提供をはじめとするさまざまな側面で恩恵を受けている。そう考えると、研究とは誰のために行うものなのかという問いに直面する。

そこで、本稿ではこの問いに答えるために以下の3点から分析を試みる。

- ①ある研究を遂行しようとする際に、研究参加者とはいかなる位置づけなのか。
- ②研究結果を報告することがいかに重要であるのか。

1 2005年5月21日(土)、関内ホールにて開催されたシンポジウム

2 2005年9月3日(土)、4日(日)、東京大学(本郷キャンパス)において開催された第2回日本子ども学会のテーマ

3 2005年10月1日(土)、龍谷大学において開催された第16回社会言語科学会で行われた大阪大学大学院言語文化研究科津田葵氏によるテーマ講演

③実際に研究報告が行われることにより、研究参加者は何を感じるのか。

2. 研究とは誰のために行うものなのか

2-1. 研究参加者の位置づけ

論文や報告書の中で、研究者は研究に協力してくれる人のことを「インフォーマント」や「被験者」などといった呼び方をすることがある。こうした呼び方をするのは、協力者のことを単に「調査に関するデータや情報を提供してくれる都合の良い存在」とみなしているためではないだろうか。この問題、つまり、参加者に対する研究者の態度について考えるには、まず、研究というものをどのように定義するかが重要となってくる。

高橋(2002)は人間科学や社会行動科学分野の研究は典型的に以下の4つの段階を踏んで行われると記している。

第一の段階（研究以前）：問題意識の発生

第二の段階：課題の設定と定式化

第三の段階：データの収集と分析（調査）

第四の段階：結果の発表と公共化

高橋（2002：3）

それによると研究の4段階とは上記を指し、「いずれの段階の要素が欠けても研究がうまく行かず、挫折したり無意味なものになったりしてしまう」（高橋2002:3）と述べている。この4つの段階において研究者と参加者間で対話が行われる段階として、第三の段階の「データの収集と分析」と第四の段階の「結果の発表と公共化」が考えられるであろう。以下の図1. はひとつの研究を進める上で、研究者と参加者の間にいつ、どのような対話が行われるかを示すものであり、先出の高橋が提示した研究の諸段階と統合させた図となっている。

「データ収集と分析」を行う第三の段階は、調査内容を参加者に説明し調査協力を依頼する調査前段階と調査依頼を承諾した参加者に対し実際に聴き取り調査やアンケート調査を行う本調査段階の二つに分けられる。調査前段階からすでに研究者と参加者間の対話は始まっている。当然のことながら協力者に無理やり研究に参加してもらうことはできない。そのため、可能なかぎり具体的に研究の内容や目的を参加者に伝え、研究への参加を承諾してもらわなければならない。そこでみられ

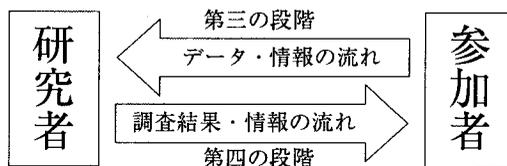
るやりとりが調査前に行われる研究者と参加者間の対話である。ここでは、その過程を依頼・交渉のプロセスと呼んでいる。その後のフィールドワークでは、聴き取り調査やアンケート調査を実施することで研究者と参加者間の直接的な対話が生まれる。これが、調査のプロセスである。さらに、第四の段階である「結果の発表と公共化」でも研究結果を報告書や論文にまとめたり、学会で発表するなどして公に研究成果を示すことを通じ、直接的であれ間接的であれ研究者と参加者の間でやりとりが行われる。このように、研究を進める上で通るべき個別の段階内において研究者と参加者の間にインターアクションがみられる。

図 1. 研究者と参加者間の対話のプロセス

第三の段階①	調査前（依頼・交渉のプロセス）	調査の説明、承諾
②	調査中（調査のプロセス）	聞き取り、アンケート、参与観察
第四の段階	調査後（報告・意見交換のプロセス）	調査結果の報告

次に示す図2. は研究者と参加者がそれぞれ所有する情報の流れにみる二者の関係性を表したものであるが、この図によると、第三の段階である「データの収集と分析」では研究者は調査に関わる情報を得るという形で参加者から多大な恩恵をこうむっており、一方、第四の「結果の発表と公共化」の段階では第三の段階で参加者から受けた恩恵に対し研究者が参加者に研究を通して得られた結果や情報をなんらかの形で還元するという、研究者と参加者間の双方向のやりとりが行われる。以上から、研究者と参加者間の対話はある段階の内部にのみ存在するものではなく、特定の段階という枠を超えてみられるものである。言い換えれば、研究そのものが研究者と参加者の間の一連のやりとりを通じて形作られるものであるといえよう。

図 2. 研究者と参加者の関係性



ここで参加者に対する呼び方に再び話を戻すことにする。なぜ、参加者が「被験者」や「インフォーマント」というような呼び方をされるであろうか。それは、このセクションの最初でも述べたように、研究者が参加者を自分の研究に有益な情報を引き出すための道具とししか認識していないことが理由としてあげられる。この問題に関して、ヒックス（2002：33）は英語の“subject”という表現を取り上げ、次のように述べている。

In the English language the word “subject” nowadays has more negative connotations than the word *hikenja* does in Japanese. In English the word “subject” is sometimes associated with objectification of the human being, thus reducing the status of the research participant to a “thing” for studying.

上記のように、「英語においての“subject”という呼び方は日本語の“被験者”よりもさらに否定的な意味合いの濃い単語であり、こうした言い方が用いられるのは研究者が研究参加者を人間扱いせず、モノと同一視していることの表れである（筆者訳）」と指摘している。また、研究者は自らが欲する情報を得ることに終始し、参加者側からの発信には耳を傾けることが少ないという一方通的な関係性もそうした呼び方に反映されていると考えられよう。以上のような参加者への呼び方にはヒックス（2002）が示すように研究というものが往々にして権力の強い者が弱い者に対して行う行為であるとされ、そうした呼び方に研究者=権力の強い者>参加者=権力の弱い者という力関係が内在するためであろう。

このように参加者の呼び方を通して研究の中にみられる研究者と参加者の関係性について考察してきた。そして、上述のとおり、参加者はデータ収集時のみに限らず研究のさまざまな段階で研究者と対話し、研究者とともにひとつの研究を作りあげていく存在であることから、本稿では研究に協力してくれる人のことを「被験者」や「インフォーマント」ではなく、「研究参加者」と呼ぶことにする。

2-2. 研究成果を報告することの重要性:筆者のこれまでの研究を振り返って

先のセクションでも述べたように、研究の諸段階における研究者と参加者との対話は第三の段階である「データの収集と分析」でのみ行われるものではなく、第四の段階である「結果の発表と公共化」においてもなされるべきことである。当然のことながら、この「結果の発表と公共化」、つまり、研究参加者に対する研究成果の還元が行われてはじめて一つの研究が完了したといえる。しかしながら、これまで、学会などにおける研究者向けの口頭発表や学術雑誌への掲載を通じて研究結果

を研究者間で共有することは積極的に行われてきたかもしれないが、実際に研究に協力してくれた研究参加者に対してどれだけ研究成果が報告されてきたのだろうか。従来の研究において、第四の段階の「結果の発表と公共化」が筆者も含め軽視されてきた感はやむを得ない。そこで、筆者がこれまで行ってきた研究を振り返り、第四の段階である「結果の発表と公共化」の重要性について考えてみたい。

筆者は近年増大する日系ブラジル人の定住化に伴って子どもの言語教育に焦点をあて研究を続けてきた。本稿では筆者が2003年から実施している日本の公立小・中学校に通う日系ブラジル人の子どもたちのポルトガル語と日本語の二言語会話力調査を取り上げる。社会の主要言語である日本語と主に家庭を中心として用いられるポルトガル語というふたつの異なる言語環境で生活する日系ブラジル人児童・生徒の二言語会話力の実態を探るため、14名の子どもたちを対象に会話力テスト⁴を実施した。さらに、子どもたちが家庭内でどのように二言語を使い分けしているのか、また、親が母語保持についてどのように考えているのかなどを尋ねるため、子どもたちとその親双方に対して聴き取り調査を実施し、その結果を以下の4点から分析を試みた。

1. 二言語会話力がどれくらいのレベルに達しているのか。
2. 二言語会話力の発達に滞日年数と来日年齢はどのように影響しているのか。
3. 滞日年数と来日年齢以外にはどのような要因が言語発達に関係しているのか。
4. 二言語の使用の特徴にはどのようなものがみられるのか。

以下に研究結果を簡単にまとめておく。まず、二言語会話力に関して、日系ブラジル人児童・生徒の会話力は家庭で特に親とのコミュニケーションで使用するポルトガル語よりも社会、おもに学校生活で使用する日本語の方がより発達している傾向にあった。

滞日年数と二言語会話力に関して、生活言語能力⁵は習得するのに通常2～3年、学習言語能力⁶は5～7年かかると言われているが、この調査からも日本語会話力において同様の結果が得られた。また、ポルトガル語については日本での滞在年数が長期化するに従い、保持することが徐々に困難になることが明らかになった。

来日年齢と二言語会話能力に関して、日本生まれの子どもは来日年齢が最も低いにもかかわらず、来日年齢が1歳以上の子どもたちと比べ日本語会話能力が未発達なケースが目立った。また、ポル

4 ここではOBCテスト(Oral Proficiency Test for Bilingual Children)を用いる。これは二言語環境で生活する6歳～15歳のバイリンガル児の多様な会話力を正しく評価するために、カナダ日本語振興会によって開発されたものである。

5 生活の中で伝達に必要な言語能力

6 学習をするときに必要な学力に結びついた言語能力

トガル語に関しても、日本生まれの子どもは保持される場合と未発達の場合に分かれており、彼らが育つ家庭内の言語環境と関連していることが予想された。

そこで、来日年齢、滞在年数以外にポルトガル語の会話力に影響を与える要因を探るため、子どもたちやその親に対して聴き取り調査を行った結果、1) 家庭での使用言語、2) 母語学習の実施、3) 親の母語保持に対する意識の高さ、4) ポルトガル語での識字教育の有無の4つが要因として浮かび上がった。

最後に、二言語の使用に関して、会話力テストの評価項目のうち大きな特徴がみられた「文法」、「語彙」、「内容の豊富さ」、「話体・敬体」の4項目を取り上げ、その特徴を記述する。まず、「文法」はポルトガル語の会話力が高いと評価された生徒であっても誤用を頻繁に引き起こすことが明らかになった。次に「語彙」に関しては、日本語、ポルトガル語の双方において、「リサイクル」や「森林伐採」などといった専門用語や学習時に用いられる単語が適切な場所で使えないという事例が伺えた。ポルトガル語のみに表れた特徴としては、数の言い方がわからず誕生日や学年を答えられた子どもがほとんどいないということである。「内容の豊富さ」に関しては、子どもたちに両言語でストーリー性のある一枚の絵を示し自由に物語を作ってもらおうというタスクを行ったが、ポルトガル語ではその絵の説明をなるべく短く簡単に済ませようとし、日本語では豊富な語彙を用いてより詳細に描写する傾向が顕著にみられた。最後に「話体・敬体」に関して、日本語では自分が今、誰に向かって話しているのかを意識してスタイルを切り替えることができた。一方、丁寧な表現を動詞の活用で示す場合が多いポルトガル語においては子どもが文法の習得が未熟であるために、「話体・敬体」の項目が低い得点となって現れていた。

以上の研究結果を参加者である日系ブラジル人の子どもたち自身、また、その親、さらには彼らの言語教育に携わる教員に報告することにより、子どものポルトガル語会話力の保持・発達に直接に結びつくであろう。例えば、両親が母語保持に対する意識を高く持つことが子どものポルトガル語会話力を保持・発達させるということを知っていれば、たとえその親が子どもの得意とする日本語の知識を有していたとしても、子どもとのコミュニケーションの際には徹底してポルトガル語を使用することで、子どものポルトガル語会話力の保持・発達が実現されるであろう。また、日本生まれ、あるいは来日年齢が低い児童・生徒の場合、子どもたちのポルトガル語会話力の保持・発達は個人差があるとはいうものの困難であるということを今後来日予定の日系ブラジル人家族が認識していれば、子どものブラジルでの識字教育終了時に合わせて来日時期を決定することも可能となる。このように、研究結果を研究参加者に直接報告することは参加者に母語保持・発達に関する知識を提供し、子どもたちを母

語の低下から未然に防ぐことに貢献できよう。そして、このことが親子間のコミュニケーションの円滑化、アイデンティティの確立、帰国後の再適応の促進につながることはいうまでもない。以上の意味において、研究参加者と研究結果を共有することは非常に意義深いことではないだろうか。

2-3. 研究成果を報告することの重要性:研究参加者からの発信

筆者が足掛け3年間、フィールドワークを行ってきた広島県X市は日系ブラジル人住民が総人口のおよそ0.3%を占める(2003年度統計)。静岡県浜松市や群馬県太田市などと比較すると外国人集住地域とは呼べないが、しかしながら、皆無とも言い難いいわゆる中規模集住地域である。このような特徴を持つX市における調査活動には、これまで成人、子どもを問わず延べ数十名の日系ブラジル人の協力を得ている。ここでは、その中の3名(40代男性Aさん、40代女性Bさん、女子中学生Cさん)の研究参加者に、日系ブラジル人を対象とした研究に参加することに対してどのような感情を抱いているのかを雑談の中で尋ねてみた。すると、Bさん、Cさんは「自分たちの生活に興味・関心を持ってもらうことは嬉しい(筆者訳、以下同)」、「自分も研究に参加できるので、自分のわかる範囲であれば何でも手伝ってあげたい」などといった研究を肯定的に受け止める発言がみられた。その一方で、Aさんは「私たちに質問ばかりしているが、その質問の目的や意図を明確に示すこと、その質問によって得られた研究結果を明らかにすることが必要である。そうでないと、私たちは何のために質問に答えているのかまったくわからないから」という意見が得られたのもまた事実であった。研究参加者に対して質問の意図を明確に伝えることに関して、「最初から詳細に研究の意図を話しておくのも問題で、この場合には、インフォーマントがその点にかかわる自分の発言をつよく制御するようになり、一般的には期待される答えのほうにむかうようになってしまう」(2003:211)とブリギッテ・シュリーベン＝ランゲが主張しているように、自然なデータを収集する際には折り合いをつけなければならない部分ではある。そのため、研究の意図を明確に伝えるのではなく、大まかに伝えておくという配慮が必要であろう。一方、研究結果を報告することに関しては、筆者はこれまで自身が行ってきた研究を調査報告書や論文という形で発表してきた。しかしながら、実際、研究参加者である日系ブラジル人の目に触れる場所に置き、十分に理解可能な形式で提示されてはいなかった。そして、このことが研究参加者に対して研究への不信任感を抱かせる原因となっていたと考えられる。

このように、筆者のこれまでの研究を振り返ること、そして、研究参加者の声に耳を傾けることで研

究結果を参加者に伝えることの重要性を筆者自らが気づき、筆者がこれまで調査・研究してきた成果を学会や研究会等で研究者間のみを広めるのではなく、ともに研究を作り上げている研究参加者に対しても直接的な方法で研究結果を伝えるという研究報告の機会を設けるに至った。

3. 研究結果の還元に向けて

3-1. 調査報告の実施

調査報告の方法として当初は調査報告会開催を予定していたが、長時間労働に従事している多くの外国籍住民から貴重な休日に外出してもらい負担を減らすため、調査者自らが研究参加者の家庭を個別に訪問し調査報告を実施するというスタイルに変更した。これまでのところ、調査結果報告が可能であったのは3名である。彼らの勤務形態は、平日、午前8時から午後8時までのおよそ12時間労働であるため、それを考慮し家庭訪問は土曜日あるいは日曜日に行った。しかしながら、「休日は子どもが出場するサッカーの試合を観戦しに行くから」「土曜日、日曜日も夜遅くまで働いているから」「教会へ行くから」という理由からもわかるように日系ブラジル人家庭と生活サイクルが異なるため、思うように研究報告が実施出来なかったことがこの3名という数字に表れている。

今回、家庭訪問形式により調査報告を行う内容は先の2-2. で提示した日本の公立学校に通う日系ブラジル人児童・生徒の二言語会話力の実態調査の結果である。調査報告の方法として、まず、研究の目的、意義、方法、および結果の要約がポルトガル語に翻訳された資料を配布した。この資料を作成する際、言語教育に関して特別な知識を持たない日系ブラジル人に協力を依頼し、非専門家であってもそこに書かれている内容が十分理解されるにはどのような語彙を選択すべきであるのかかなりの時間をかけて討議した。配布資料により研究参加者に調査の全体像を把握してもらった後、次に実際に子どもの二言語会話力を調査するために用いたOBCテストに関して参加者の母語であるポルトガル語で説明を試みた。子どもたちが絵を見てもその名前や人の動きなどを表す適切な単語を答えられるかどうかを調べるために用いられた絵カードを提示（全資料41枚）したり、日系ブラジル人の子どもの対話力を調べるために行った「母親の留守中に子どもが電話に應對し母親への伝言を受ける」などといったロールプレイの状況や子どもたちが演じた役割を説明したりしながら、そのときの状況を再現してみせた。さらに、年齢や誕生日、好きな動物、兄弟の有無ならびに言語使

用状況などについても子どもたちに尋ねているが、その質問項目なども合わせて示した。結果の提示には、より詳細に伝えるため参加者の母語であるポルトガル語による説明に加え、子どもたちの会話力テストの得点率をグラフや図式化し視覚に訴えかける努力をした。また、子どもたちの二言語会話力の実態がより容易にイメージできるよう、テスト時に発した事例をできるだけ多く取り上げ提示することに配慮した。例えば、A que horas você dorme todos os dias?(いつも何時頃寝ますか)という問いに対して、ある子どもは Eu dorme as 10 horas todos os dias. (私は毎日10時に寝ます)と回答した。しかしながら、下線が引かれている「寝る」という動詞“dormir (原形)”は回答にある3人称単数現在形の活用形である“durmo”ではなく、1人称単数現在形の活用である“durmo”とされなければならなかった。しかしながら、不規則変化動詞の活用は子どもたちにとって非常に困難であり、3人称単数現在形の“dorme (誤)”と活用させている子どもが非常に目立った。そのほか、例えば日本語でテストを行っている際には声も大きくいきいきと答えているのに対し、ポルトガル語で質問した際には自信がないなどの理由で子どもたちの声小さくなる傾向があるなど、言語会話テストを行っている際の子どもの態度について調査時に気づいたことを伝えた。

調査結果を報告した後、今後研究活動を続けていく上で、筆者がとるべき研究に対する姿勢という点において何を、どのように見直さなければならぬかを探るため、調査報告を受けて研究参加者がどのようなことを感じたのかに関してアンケート調査を行った。その結果を次に報告したい。

3-2. 研究参加者からのフィードバック

以上のような調査報告を聞いて、研究参加者はいったい何を感じたのだろうか。二言語会話力調査の参加者である日系ブラジル人児童・生徒の親のうち、可能な限り最大の3名を対象に次の①～⑧までの8つの質問項目からなるアンケート調査を実施した。

- ①「日系ブラジル人を対象に研究している研究者に対して、何か印象がありますか」
- ②「ブラジル人の子どもを対象とした二言語会話力調査には興味がありますか」
- ③「これまでにアンケートやインタビューを受けたことがありますか。それに対して、なにか感じていますか」
- ④「多言語・多文化化する日本社会に対するシンポジウムやフォーラムに参加したことはありますか」
- ⑤「研究結果の報告の仕方として、どのような提示の仕方がいいと思いますか」

- ⑥ 「調査報告にあたって、どのような配布資料を望みますか」
- ⑦ 「研究参加者に報告書を読んでもらうために、どのようなところに注意すればよいでしょうか」
- ⑧ 「このたびの研究報告を聞いて、何を感じましたか」

以下に調査報告を実施した3名の概略を簡単に述べておく。

【Dさん：40代男性】日本語能力が非常に高いために会社では通訳業務を行い、さらに、ブラジル人コミュニティ内においても日本語で提供されている教育や生活に関する情報をもたらす重要なパイプ役を果たす。家族はパートで働く妻と公立小学校5年生の女の子、幼稚園に通う男の子の計4人家族である。来日してから15年が経過しているが、現在、長女が6年生を修了すると同時にブラジルへの帰国が計画されている。

【Eさん：30代女性】15年前に来日し、会社員の夫と公立小学校6年生の女の子1名、同じく公立小学校3年生の男の子1名の計4名家族である。週に4回、X市を中心にブラジル人児童・生徒のためのポルトガル語教室を開講しているポルトガル語教師である。また、日本語も堪能であり、日系ブラジル人が頻繁に来院するX市内の医師に対してもポルトガル語を教えている。

【Fさん：30代女性】2年前に来日し、月曜日から土曜日まで近所のゴム加工会社で12時間勤務を行っている。日本語はあいさつ程度のコミュニケーションが可能なレベルである。家族は公立小学校6年生の女の子2名と1歳の男の子1名の合計4名で構成されている。

以下、アンケート結果とその考察を述べたい。まず、研究者や研究というものへの印象について尋ねたところ、以下のような回答が得られた。

- ① 「日系ブラジル人を対象に研究をしている研究者に対して、何か印象はありますか」
 - ・ 調査はなんらかの方法でだれかの役に立つことなので、すごくいいことだと思います。特に、国籍が異なっても人類という大きなカテゴリーではみな平等な「地球市民」であるといった外国人のいうものの新しい捉え方を日本人に気づかせることに貢献するだろう。(Dさん)
 - ・ この種の調査は日本とブラジルの現実の姿を理解することに貢献するという意味において非常に素晴らしいことだと思います。(Eさん)
 - ・ 研究者が行っていることは重要なことだと思う。私たちが疑問に感じていることを取り除く手助けをしてくれるから、私たちにとって非常に良いことだと思います。(Fさん)
- ② 「ブラジル人の子どもを対象とした二言語会話力調査には興味がありますか」
 - ・ はい、あります。将来、ほかの人のためになることなので、調査に参加できたことをとても嬉しく思います。やみくもにはなく、インタビューなどを通して得られた事実に基づいて結論を出して

欲しいと思います。(Dさん)

- ・ はい、あります。私は日本人、ブラジル人両方の子どもたちの将来を案じています。こうした調査が日本、ブラジル両方の社会をより良くするために働きかけることを願っています。(Eさん)
- ・ 私には就学年齢の子どもがいて、そこで生じる私たちの疑問を解消してくれるので、この研究はとてもよいと思います。(Fさん)

研究者の印象を、Fさんは研究参加者である日系ブラジル人に対して、またDさん、Eさんは日本社会をともに構成している日本人も含め、研究というものは人の役に立つものであると述べており、3者それぞれが研究というものを肯定的に捉えている点において共通していることが読み取れる。また、筆者がこの度行ったブラジル人の子どもたちを対象とする二言語会話力調査に対しても、3者が小学校に通う子をもつ親であり、このたびのテーマが子どもたちの将来にかかわる内容であったがゆえに非常に高い関心を示している様子がアンケートより伺えた。さらに、こうした調査が研究対象であり研究参加者である日系ブラジル人の子どもたちの将来に対してのみ貢献するのではなく、日本人の子どもにとってもよりよく機能することが上記の質問に引き続き期待されている。

次に、上記①、②の質問に関連して、反対に自分自身が研究参加者であることにどのような印象をもっているのか尋ねたところ以下のような回答がみられた。

③ 「これまでにアンケートやインタビューを受けたことがありますか。それに対して、なにか感じていますか」

- ・ はい、何度もうけました。私たちは社会の一部分を構成しているので、どんな話題にも常に注意を払っている必要があると思います。(Dさん)
- ・ 自分が接している日本、ブラジル両文化に対する自分の考えを明確にさせることができるという点で非常に満足しています。(Eさん)
- ・ 自分がどんな疑問点を持っているのかがはっきりするので、よいことだと思います。(Fさん)

Dさん、Eさん、Fさんすべてがこれまでにアンケートやインタビューといった調査に参加した経験がある。そのなかでDさんはインタビューやアンケートを通して常にさまざまな話題に関心を持つ必要性に気づき、また、EさんやFさんはその研究テーマについて考えや問題点を明確なものにした。つまり、研究参加者から恩恵を授かる調査本段階でも、アンケートやインタビューを通して行われる研究者と研究参加者との対話により、研究参加者に対してもなんらかの形で貢献していることがわかった。

さらに、多言語・多文化化するシンポジウムやフォーラムへの参加の有無とその理由について、次のような回答が得られた。

④ 「多言語・多文化化する日本社会に対するシンポジウムやフォーラムに参加したことはありますか」

- ・ 何度も参加しています。私自身もX大学で、日系ブラジル人の生活の様子について集中セミナーで講演したことがあります。(Dさん)
- ・ 何度か参加しましたが、その後はいつ、どこでそういった行事が行われているのかという情報が手に入らないので参加していません。(Eさん)
- ・ 参加したことは一度もありません。どこでそのような行事が開催されるのか知りませんし、時間的な余裕もありません。(Fさん)

Dさんは過去に外国籍住民を対象としたシンポジウムやフォーラムに参加したことがあり、また自らがX市にある大学に出向き大学生向けのセミナー講演を行った経験ももっている。しかしながら、何度か行事に参加したことのあるEさんと一度も参加したことがないFさんはそうした行事に関する情報が得られないことを不参加の理由の一つとして挙げている。それに付け加え、Fさんは時間的な余裕がないということも不参加の理由として掲げている。こうして得られた回答には情報を提供する側と情報を提供される側の要因が混在していることがわかった。情報を提供する側の問題には広報の問題、つまり、行事を知らせる宣伝活動の徹底不足が考えられるだろう。一方、情報を提供される側の問題は参加者の就労形態と密接に結びついており、長時間労働に起因するさまざまな環境により上述の行事に参加できないケースが多い。こうした情報を提供する側とされる側双方の要因が研究参加者である外国籍住民を研究結果還元の見込みから遠ざけているのである。

以下はこのたびの研究の結果報告を受けて、研究参加者がいったい何を感じたのかについてアンケート結果をもとにまとめ、考察したものである。次の⑤～⑦の3つの質問は、研究結果を参加者にどのように伝えたらよいかについて尋ねたものである。

⑤ 「研究結果の報告の仕方として、どのような提示の仕方がいいと思いますか」

- ・ 歓迎されず、ただ低賃金で雇うことができる労働力であるがために受け入れられているということから生じる労働者の疎外感が、将来、現在フランスで起こっているようなゲッターや暴動に発展しないよう、子どもや成人、文化、労働問題、差別、少年犯罪、スポーツ、外国人にいたるまで、研究報告の内容は多岐にわたる方がいいと思います。(Dさん)
- ・ 特に、ブラジル人の親にとっては子どもに関することは知っておくべきことなので、もしポルトガル語が使えるのであれば調査結果もポルトガル語で提示してもらいたいです。(Eさん)
- ・ 私には日本語がわからないので、あなたの研究がポルトガル語で行われたら良いと思います。(Fさん)

⑥ 「調査報告にあたって、どのような配布資料を望みますか」

- ・ 簡単なことではありますが、どこかに感謝の気持ちが述べてあるということ、インタビューやアンケートで出された意見が真剣に受けとめられているということ、そして、できるだけ客観性をもたせるように努めているということです。(Dさん)
- ・ ポルトガル語で書いてあり、内容がシンプルなものがいいと思います。(Eさん)
- ・ ポルトガル語のものもいいです。ポルトガル語でだとわかりやすいからです。(Fさん)

ここでは、やはり提示の仕方も配布資料も研究参加者の母語であるポルトガル語で研究報告を受けたいという意見が何度も見受けられた。また、Dさんからは提示の仕方や配布資料に関して、報告内容が多様化されること、資料は研究参加者に対する感謝の気持ちが表示されていること、研究参加者の声が重く受けとめられること、調査に客観性があることが指摘され、調査報告の際は母語を使用するといった形式面だけでなく内容面にも十分配慮が必要であることがわかる。

また、問い⑦は今後、報告書執筆に向けてどこを改善すべきであるかを探るために尋ねたものである。

⑦ 「研究参加者に報告書を読んでもらうために、どのようなところに注意すればよいでしょうか」

- ・ 説明するのは難しいです。多くの人は関心を持っていません。(Dさん)
- ・ 今日、私たちのまわりには新聞、雑誌、テレビなどがあり、そうした手段を通して情報を入手します。しかし、すべての人がそうした情報に耳を傾け、しっかり心にとめているということを意味するわけではありません。多くの人は休日にはゆっくりしたいと思っています。また、アンケート、集会や学会は誰も知りたいとは思っていないような問題を取り扱うものであると多くの人は考えています。(Dさん)
- ・ ポルトガル語で書いて欲しいです。(Eさん)
- ・ 日本語の読み書きがわからないので、ポルトガル語で書いて欲しいです。(Fさん)

その結果、報告書の提示に仕方や配布資料に見られたように、ここでも研究参加者の母語であるポルトガル語を使用言語とすることが望まれていることがわかる。しかしながら、その一方でDさんの発言からわかるように、往々にして休日に行われるアンケートやインタビューへの回答や研究集会などといった研究結果を報告する場への参加は多くの日系ブラジル人のにとって特別な関心事ではないことがみてとれる。

最後に、実際に研究報告を受けた感想を尋ねた結果を以下に記したい。

⑧ 「このたびの研究報告を聞いて、何を感じましたか」

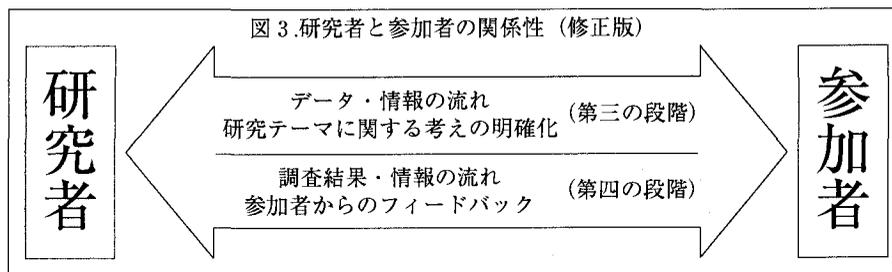
- ・「r」や「l」の発音がうまくできないことや文法能力が低いということは、自分の子どもたちの問題だけではなく、ほかの家庭の子どもたちにも同じ問題が生じているのだということがわかりました。(Dさん)
- ・グラフで表されているところが目でみてわかりやすいです。ポルトガル語塾である公文式でもこの地域にあればよかったです。子どもたちにポルトガル語を勉強して欲しかったです。(Dさん)
- ・とてもわかりやすいと思いました。渡されたレジユムを見て、より具体的になったので非常によかったです。提示されたグラフ、インタビューの内容、調査結果によって私がこれまで持っていた漠然としたイメージがはっきりしました。(Eさん)
- ・ブラジル人の子どもたちが、少なくとも「基礎タスク」と「対話タスク」において日本語だけでも100%近く習得できていたということを知り、とても嬉しく感じました。もし、二言語のうちどちらか一つの言語も習得できていなかったとしたら、非常に悲しかったでしょう。(Eさん)

調査結果を報告することによって、日系ブラジル人の子どもたちが直面している二言語会話力の現状が親であり、また教師である研究参加者に認識されたことがわかる。テストを行うことによって客観的に評価された二言語会話力の結果をグラフや図表を使用し視覚に訴えかけることで、これまで日常的に子どもと接する中で漠然とは感じてはいたものの言葉では十分に説明できなかった知識や現象と結びつき、明確化されたようである。さらに、Dさんには自分の子どもだけでなく、日系ブラジル人のほかの子どもたちにも同様の現象が起きていることに対する気づきがみられた。また、Eさんはポルトガル語教師としてポルトガル語の保持、発達が望まれるものの、子どもにとって少なくともどちらか一方の言語の会話力が習得されていることに安堵しているようであった。

4. おわりに

以上、研究参加者に対し実際に研究結果を報告し、その後参加者から出された意見をフィードバックする中で、研究とはいったい誰のために行うものであるかについて考えてきた。そして、そこで確認されたことは研究とは研究者と研究参加者がともに作り上げていくものであるということである。それゆえに研究の中での研究者と研究参加者間のやりとり、つまり対話をもっとも重要な位置を占めるといえる。この度の調査で調査段階、調査報告段階のどちらにおいてもそこで行われる対話が研究者、研究参加者の互いに有益であることがみてとれた。つまり、調査段階での対話は研究者が研究参

加者から調査に関する知識や情報を得るという一方通行的なものではなく、聴き取り調査やアンケート調査を通して研究参加者が研究テーマに関する自身の意見や考えを明確にすることに貢献している。さらに調査報告段階の対話でも、調査から得られた知識や情報の分析結果が研究参加者に提供されるのと同時に研究結果の報告を通して得られた研究参加者からのフィードバックが研究者の取り組むべき新たな課題に気づかせてくれるだろう。そこで、研究参加者からのアンケート結果に基づき先ほど2-1.で提示した図2.を以下のように修正したい。



上述のように、たとえ研究というのが研究者だけでなく、参加者にも利益が与えられるとはいっても、研究の場、そしてその研究結果を参加者に直接報告できる機会がもてないことにはまったく意味のないことである。実際に、筆者がFさんの家を訪れた日も小学校6年生になる女の子がまだ1歳になったばかりの弟の世話と夕食の支度をしながら、母親であるFさんの帰りを待っていた。Fさんは夜8時過ぎに帰宅し幼い子どもの世話をしながら、疲れているにもかかわらず筆者のアンケートに答えてくれた。Fさんとは彼女の子どもを通して知り合いになり、これまで何度も会い会話を交わしている。そして、雑談の中でFさんが日系ブラジル人を対象とする行事に参加していない理由を尋ねてみると、「朝早くから夜遅くまで仕事をしていて、休みは日曜日だけ。だから、すごく疲れてる。日曜日には家族と一緒に教会に行って、神に祈りを捧げたり、友人とのんびりおしゃべりしたりするわ。平日には家のことができないから、時間があるときにやらなきゃいけないしね」と答えていたのが印象的であった。つまり、彼らの目の前に横たわっている現実には就労であり、たとえ彼らをテーマとする行事が開催されていたとしても参加する時間的あるいは精神的余裕がないようである。

今後の課題として挙げられることは、企業との連携である。研究者と研究参加者の就業する企業が連携し、参加者が自分の身の回りで起こっている出来事や生じている問題を自分の目や耳でとらえることができる環境を整備していかなければならないだろう。それと同時に、情報提供者側の努力も

必要不可欠である。つまり、研究結果を参加者に還元する場合、参加者の母語を発表や配布資料における使用言語とするだけでなく、いつ、どこで研究結果の報告を目的とするフォーラムや集会といった行事が行われるのかを参加者に知らせる広報活動の強化が一層望まれる。

(リサーチ・アシスタント、言語文化研究科博士後期課程)

参考文献

- カナダ日本語教育振興会 (2000) 『子どもの会話力テストの見方と評価—バイリンガル会話テスト (OBC) の開発—』 Welland, Ontario: Editions Soleil Publishing
- J.V. ネウストブニー・宮崎里司 (2002) 『言語研究の方法』 くろしお出版
- 高橋順一 (2002) 「研究とはなにか」 『人間科学研究法ハンドブック』 1-9、ナカニシヤ出版
- 中島和子 (2001) 『バイリンガル教育の方法—12歳までに親と教師ができること』 アルク
- ヒックス (2002) 「人間科学における研究倫理について - 特に心理学を中心に」 『人間科学研究法ハンドブック』 31-50、ナカニシヤ出版
- ブリギッテ・シュリーベン=ランゲ (2003) 「社会言語学の方法」 三元社
- 法務省入国管理局統計 (2004) <http://www.moj.go.jp/PRESS/050617-1/050617-1.html> 2005年10月20日付

1970年代以降の科学社会学の展開

～「横断性」の観点から

家高 洋

<要旨>

本稿では「横断性」の一例としてB・ラトゥールほかの科学社会学の70年代以降の展開を検討する。この時期の科学社会学は「社会構成主義」の影響を受けて始まったが、その方法論上の原理的な困難を一種の根本的な〈パラダイム変換〉によって90年代後半に克服していった。その過程を検討することによって、人文学の諸学科に通底している方法論的・概念的な圏域が切り開かれるであろう。

<キーワード>

社会構成主義、科学、実在、ネットワーク、認識論的問題設定、生成論、agency

はじめに ～「横断性」について

様々な学科の間での「横断（性）」や「越境（性）」、「学際」などの言葉は現在かなり広汎に使われており、もちろん私はその全般的な分類や分析はできない。そこで、我々の〈研究集合〉での議論や活動をふり返りながら「横断性」について簡単にまとめてみたい。私は、今のところ「横断性」に関して三つのあり方があるように考えている。

まず第一の「横断」は、他学科の概念やアイデア、方法などを、自らの学科で使用すること（あるいは、そのようにして新興領域を開拓すること）である。これは、概念や方法の「流用・応用」などと呼ばれてきたことである。このような概念などの「流用・応用」という事態は、特に現在に特有の出来事であるとは言えないであろう。例えば、西洋の近代以降の哲学は、「流用・応用」の連続の歴史であったと言っても過言ではないと思う。

例えば、20世紀のフランスの現象学者メルロ＝ポンティは、50年代の幾つかの論文で、ソシユール言語論の中の示差的な体系を、歴史的事象に当てはめようとした(Merleau-Ponty, 1960)。今日のソシユールの思想の理解からすれば、もともと共時的な(synchrone)事柄を対象にして作り上げられた「示差的な体系」を通時的な(diachrone)歴史的事象に当てはめることは完全な誤解である。しかし、記号と意味とのソシユールの思想を歴史に流用することで、当時支配的であったマルクス主義的歴史観に対抗できる新たな歴史観をメルロ＝ポンティは形成しようとしたのであった。

この研究会でも「流用・応用」の学問的意義は既にある程度共有されており、結局、各メンバー自身がどのように「流用・応用」を試行するのかが課題になっていると思われる。

第二の「横断」としては、現在の研究会で行っている「模造紙・ポストイット方式」が挙げられるであろう。毎回の研究会の数本のペーパーからキーワードを取り出し、それらのキーワードの間をつなげて新たな関係を作り上げる(ペーパー間での「横断」)。この方式で面白いのは、複数の人間が討議しながらこの作業を行うことである(メンバー間での「横断」)。このように複数のレベルの「横断」が同時に生じつつ最後に模造紙上に「成果」が生まれてくるので、「実験」としてかなり興味深いと思う。

第三の「横断」は、「討論・論争」である。例えば、これまでも研究会の中で、歴史学の目的に関して「実証史学派」対「ポストコロニアル派」の間で論争が生じた。このように単なる質問や応答を超えて「論争」の域まで達している場合には、(決裂に至る場合が多いとしても)何らかの「横断」的な事柄や影響が生じているように思われる。

一般に新興の学科や領域が勃興するときには、自らの学科や領域の存立のために既存の伝統的な学科に対して激しい論争が行われることが多い。先に挙げた概念の「流用・応用」は、個々の研究者の裁量に任されていると思われるが、学科全体を巻き込む論争の場合は、より多面的で持続的な「横断」が行われるであろう。

このようなことは、「横断」というよりは「衝突」に近いことかもしれない。しかし、「衝突」は「衝撃」を含んでおり、この「衝撃」は論争を見守る周囲の諸学科にも及び、お互いに触発しあって新たな方法論的な刷新や概念の作成が生じることもあるだろう。このような影響関係も含めて、本稿ではやや広い意味で「横断(性)」に焦点を当てたい。

本稿のテーマは、1970年代半ばから1990年代終わりまでの科学社会学の展開である。自然科

学を対象とすることにおいて、既に科学社会学は「横断」をしていると言えるが、従来の伝統的な科学論に対して自らの独自性を主張する中で、科学社会学は科学論の枠組みを超え、「实在」や「真理」などの（哲学が扱ってきた）基礎的な問題も扱うようになるなど、その議論の内実はかなり広汎なものになっている。このような科学社会学の展開において他の人文学の学科をも触発するような「横断」の一つの例が示されていると考えられるのである。

本稿は、フランスの科学社会学者のB・ラトゥールの業績を中心に取り上げる。彼は、「[実験室の人類学]とも呼ばれている）「実験室研究」でデビューしたが、その後理論的な考察も積極的にを行い、現在の科学社会学の一翼を担っている研究者である。

第1章 「活動中の科学 (Science in action)」論について

a. 「ストロング・プログラム」 ～科学的知識の社会学

前世紀後半の科学論の最大の転回は、1962年に公刊されたTh・クーンの『科学革命の構造』の〈パラダイム論〉によって引き起こされたと言っても過言ではないだろう。

クーンの所論には、異なるパラダイム下にある理論体系はお互いに〈共約不可能な〉特徴を持つということが主張されていた。このことが意味しているのは、異なる理論体系（例えば、ギリシャの自然学と近代物理学）が相互に理解され得ないということだけでない。相互に理解され得ない以上、それら間の優劣も決められないということも含意していたので、クーンの主張は「相対主義的な科学観」であるとしばしば言われている。

このような相対主義的な主張がクーンの真意であるかどうかはここでは問題にしないが（次章e節を参照）、科学研究にとっての〈パラダイム論〉の意義は、「科学哲学を共時的な論理分析や認識論的分析の土俵から、通時的な歴史的・社会的分析の文脈へと解き放ったことにある」と言うことはできるであろう（野家, 1993, 120）。

この展開を直接に引き受け、さらに大胆に推し進めたのが、D・ブルアやB・バーンズらのエディンバラ学派である。彼らの新しさは、科学的な知識についての社会学的な分析を行おうとしたことにある（それゆえに、ブルアたちの学派は「科学的知識の社会学」と呼ばれた）。

そもそも（ウィーン学団やその後継者たちの）伝統的な科学論によれば、科学的な知識は「实在」

している対象(自然)に基づいて成立しており、社会的な事象は科学的な知識の形成にとって中心
的な契機にはならないと考えられていた。

ブルアたちはこのような伝統的な科学論の前提を転倒しようとしたのである。彼らの実質的な成果
は歴史的な研究に存しているが(金森, 2002)、その思想的な要点は、ブルアが1976年に発表
した「ストロング・プログラム」の中に示されている(Bloor, 1976)。

ところで「ストロング・プログラム」の内容は、以下の四つのテーゼからなる。

- ① 因果性 (causality) : 信念や知識を生み出す諸条件に関心を持つこと(科学的な知識でも、そ
れを生み出すための関心や利益があるのだから、それを見ること)。
- ② 不偏性 (impartiality) : 真偽、合理・不合理、成功・失敗に関して不偏であること。
- ③ 対称性 (symmetry) : 説明様式が対称的であること。同じタイプの原因で正しい信念と間違った
信念が説明される。
- ④ 反射性 (reflexivity) : 原則として、その説明パターンは、社会学者自身に適用可能でなければ
ならない。

①～③までに関しては、例を挙げた方がわかりやすいであろう。

伝統的な科学観によれば、「間違った科学理論」が社会に流布する場合、その原因は政治的あ
るいは社会的な事柄にあり、他方「正しい科学理論」の正しさの原因は、その理論が自然界のあ
り方自身を反映していることにありと説明される。例えば、以下のような出来事があった。

ルイセンコが一時期小麦の獲得形質遺伝性を信じており、その結果、メンデルの遺伝学を否定するようにな
った。彼のこのような理論の普及は、彼の後ろ盾にスターリンのような権力者がいたから可能だったである。つ
まり、間違った理論の普及には、政治的な説明付けが与えられる。逆にメンデルの遺伝学がその後「正しい」
と認識されるようになったのは、自然界で遺伝のあり方はメンデルが考えていたように存在しているからだ
と説明されるのである。

だが、このような説明の仕方は「対称的」と言うことはできない。この例では、メンデルの「正し
い」遺伝学が社会に広く受容される場合にも、その理由として「自然界の論理」とは別の社会的・
文化的な要因(「利益」など)があるかどうかを探求する方向があるはずであり、「ストロング・プロ

グラム」とはこのことを要求しているのである。

要するに、「ストロング・プログラム」、そして「科学的知識の社会学」は、科学的な知識の成立についての社会決定論的な立場であると言えるだろう（④の「反射性」は、①～③によって得られた分析の結果をさらに社会的に正当化しようという意図から生じており、「社会学主義」の一つの典型であると言えるであろうが、すぐに分かるようにこの自己言及的な分析は無限背進に陥る。「反射性」に関しては次章c節で再論する）。

このように考えると、「ストロング・プログラム」と伝統的な科学論とは、（科学的知識の成立を〈社会〉に求めるのか、実在する〈自然〉に求めるのかという点で）その探究の方向は正反対であり共存できない関係にあるが、しかしながら、というよりもそれゆえにこそ両者は共通の志向を持っていることが理解される。

つまり、科学的な知識についての何らかの「（実在的な）原因」を求めていくという態度を両者は共有しているのだ。そして、このような問題機制を根本的に変えていく契機が起こったのが「実験室研究」であった。

b. 「実験室研究」から〈ネットワーク理論〉へ

「実験室研究」は、70年代後半に何人かの社会学者や文化人類学者が、実験室での科学者達の日常的な活動をリアルタイムで追跡する「参与観察」を行ったことによって始められた。文化人類学者がある土地に住み込み、その文化や慣習を詳細に記述するのを同様に、科学の素人である観察者が、実験室での科学者の活動を仔細に記録したのである。本節では「実験室研究」の最も代表的な研究であるラトゥールとS・ウールガーの『実験室生活』（初版は1979年出版。Latour & Woolgar, 1986. 以下、LWと略）と、「実験室研究」が発展的に解消されていった「ネットワーク理論」が展開されているラトゥールの『活動中の科学』（Latour, 1987）のポイントを見てみたい。

『実験室生活』は、ラトゥールがアメリカのカリフォルニアにあるソーク研究所に75年から2年間滞り、神経内分泌学の研究を参与観察した成果をまとめたものである。ソーク研究所では、77年にノーベル医学生理学賞を受賞したR・ギュイマンを中心に、60年代初頭以来、69年の甲状腺刺激ホルモン放出因子（Tyrotropin Releasing Factor：TRF）の構造決定を中心とした一連の研究が行われていた。ラトゥールが滞在したのは、73年のソマトスタチンの構造決定によって研究が一応の収束を見た時期であった。

ラトゥールたちの研究の中から、ここでは二つの主な成果を取り上げる（平川，2002）。

・インスクリプションとインスクリプション装置

科学者達が実験室で行っている大部分の活動は、文献を集め、読み、参照し、最終的に論文に書いて出版するという「文書の作業（literary work）」で占められているということがラトゥールたちがまず着目する事実である。このような活動の中でも、図形やグラフ、方程式など、彼らが「インスクリプション（inscription）」と名付ける膨大な数の記録・表現物と、それらを生成し処理する測定器などの装置——「インスクリプション装置」——こそが、科学活動に秩序を与え、科学者とその研究対象を固く結びつける堅固な知識を生み出しているのである（LW, 245-246）。

・言明分析

ラトゥールたちは、69年にTRFの構造が確定されるまでの研究史を描き出す一つの方法として、研究の軌跡を、論争的な言明操作のプロセスとして描いた（LW, 75-88）。つまり、1. 非常に私的なレベルでの言明（「aはbである」と田中は示唆した）から、2. 利用できる証拠の一般性やその乏しさの様相に関する言明（「aはbである」という証拠は数多くある/ほとんどない）、さらに、3. レビュー論文などに見られる特定の研究者の功績などに言及している様相の言明（「aはbである」ことは2年前に鈴木によって初めて証明された）、そして、4. 教科書の記述のように様相を伴わない科学的言明のプロトタイプ（「aはbである」）、最後に、5. 議論や説明の余地なく当然視された事実に関する言明であり、表立って主張されることすらなく、ほかの言明の暗黙の前提として使われるもの、の五つの段階の変遷を描いたものである（『実験室生活』で言われている「事実の社会構成」とは、主にこのような言明の事実らしさの変遷過程を意味している。なお、このように科学活動の言語的側面に注目する姿勢は、同時期の談話分析などの研究も含め、科学論の「言語論的転回」と呼ばれている）。

以上の二つの成果からも分かるように、ラトゥールたちの『実験室生活』は、実験室についてのかなりミクロな分析であり、ラトゥール自身、実験室とその外部の世界とのマクロな分析への視野を欠いていることを批判している（Latour, 1983）。このような問題意識からラトゥールは、同僚のM・カロンが作り出した「アクター・ネットワーク理論」（Callon, 1986）をカロンと共に発展させていった。「アクター・ネットワーク理論」は、実験室での科学活動が、社会的関係と自然的・物質的關係を同時に変化させ、結合し、組織化していく自然と科学、社会の「共生成（coproduction）」の過

程を記述し、分析するための方法論である。さらに、ここには（「ストロング・プログラム」が主張しているように）社会的要因が科学的な知識を形作るというような科学社会学の社会決定論的な一面性を修正する意義も含まれている（平川，2002）。

以上のことを反映してアクター・ネットワーク理論は、人間や社会組織だけでなく、器械や研究対象の物質、技術や人工物、科学法則、論文など「非人間（nonhuman）」をもアクターに含んでいることがその特徴として挙げられるであろう。これらの非人間的なアクターもまた、人間や社会組織と同様に、ネットワークの中で人々の思考や行為、社会関係に働きかけ、それらを形作り変化させる積極的な作用（agency）の担い手なのである（特に物質的なアクターは、人間の意図や行為に抵抗したり介入したりすることによって、人間の行為やその結果を予想外の方向に推し進めていく性格をもっていることが特筆される）。

アクター・ネットワーク理論に関しては「翻訳」など興味深い概念があるが、本稿では省略する。このようなネットワークの理論は、80年代初めにK・D・クノール＝セティナも主張しており（Knorr-Cetina, 1983）、また90年代以降A・ピッカリングも展開させているので、本稿では〈ネットワーク理論〉と記すことにする。

c. 伝統的な科学論と「活動中の科学」論の違い

前節で「実験室研究」から〈ネットワーク理論〉への歴史的展開を見てきたが、本節では、この科学社会学の展開と伝統的な科学論との違いをまとめてみたい。まず伝統的な科学や科学論の基本的な姿勢を確認しておこう。

伝統的な科学論も、（〈ネットワーク理論〉が指摘したような）科学の研究と社会との相互関係を否定することはないであろう。しかし伝統的な科学観に従えば、一般に科学とは、「実在」についての理論的な言明（いわゆる「科学的な真理」）の産出を目標としていると言えるので、科学論も、科学の方法と科学の解明の対象（「実在」）との関係の解明、つまり「科学的真理の正当化」を基本的なテーマとしてきたと言えるであろう。その結果、科学の最終成果（「正当化された科学的真理」）から科学の様々な営みを捉えることが多く、科学研究における偶発的な紆余曲折を削除するような科学史の「合理的な再構成」も行われてきたのである。

このような伝統的な科学論と、（前節で取り上げてきた）科学社会学の動向とはかなり異なっている。前節で取り上げた科学社会学は、「活動中の科学」をテーマとしているとまとめられるが、その

特徴を平川は「三方向への問題関心のシフト」として指摘している。以下、平川の議論の要点を見てみよう（平川，2002，31-33）。

まず第一の関心の移動は、真偽が明らかになった最終成果やその観点から回顧的に整理された科学の歴史という「既に終わった科学」から、現在であれ過去であれ、何が正しい理論や主張なのか不明な段階にある「活動中の科学」のプロセスへ移動である。さらに、遂行論的・発生論的な視点へのシフトは、科学の営みを、真理の叙述というよりは、「論争のプロセス」として捉え直していると言えよう。

第二のシフトは、理論的な「知識」ではなく、実験「活動」に焦点を当てたことである。つまり、実験を、具体的な場所と時間における物質的で社会的な条件や相互行為のもとで行われる「具象的な (material) 行為」として捉えることであり、特に重要なのが、実験の介入的で作為的な性格である。I・ハッキングの表現を借りれば、科学は、自然についての単なる「表象 (representation)」というよりは、自然的世界への技術的な「介入 (intervention)」行為なのである（ハッキング，1986）。このことが、実験室研究が主張する「科学的事実、発見されるというよりはむしろ構成される」という「社会構成主義」のテーゼの一つの意味である。

ところで、この介入は、自然的世界に対してのみ行われるように考えられるかもしれないが、社会的世界に対しても行われるということ（「共生性」）がポイントである。例えば、「実験を行う」ことにおいて、実験室の中のみで完結していることは現在ではほとんどあり得ないのである。実験が実施されるためには、社会の様々な資源（物的資源や人的資源など）の調達や育成が行われなければならないが、したがって、このような実験が可能になるために社会自身が変化しているのであり、その結果、ますます「実験室」が増えていく。このことをラトゥールは、「世界の実験室化」と呼ぶ（Latour, 1987）。

第三のシフトは、科学哲学を伝統的に支配してきた「それは本当に事実なのか」、「どちらが正しいのか」、「その正しさはどうやって正当化されるのか」といった真理や正当化に係わる規範的な関心から、いわば「真理への無関心さ」を基調とする記述的な問題関心への移行、いわゆる科学論の「記述的転回」に関わっている。真理へこのような無関心さは、しばしば科学知識の真理性を否定する反実在論や、すべての主張をそれぞれの文脈において等価で妥当なものとみなす判断相対主義など、反科学的な態度であると誤解されやすい。しかし、伝統的な科学哲学との違いがここに現れていると理解するべきであろう。この記述的転回は、時として「些末実証主義」とみなされうることもあるが（金森，2000，162）、それだけには終わらない理論的射程が含まれているのだ。

第2章 「活動中の科学」論の射程

本章では「活動中の科学」論の理論的な射程を見ていきたい。まず初めに、(伝統的な科学論の基本的な前提となっている)「实在」と科学的な言明との関係を検討する。次に、この関係が前提している哲学的な枠組みの検討を行う。なお、この後者の検討は、「ストロング・プログラム」の第四のテーゼの「反射性」が引き起こした理論的な袋小路から脱するために生じてきたでもある(「反射性」に関しては、前章 a 節を参照)。

a. 「科学論の方法の第三規則」

さて、ラトゥールが典型的な「社会構成主義者」としてしばしば引き合いに出されるのは、『実験室生活』での以下の主張である(LW, 180-182)。

ある言明が事実になる理由を説明するために「实在」を用いることはできない。なぜなら实在という結果が得られるのは、言明が事実になった後なのであるから。(中略)我々は、事実が存在しないとか、实在というようなものは存在しないなど言いたいのではない。我々は、このような単純な意味での相対主義者ではない。我々の要点は、「外にあるということ(out-there-ness)」は、科学的作業の「原因」であるよりは、むしろその「帰結(consequence)」だということにある。

これは後にラトゥールが科学論の「方法の第三規則」と名付けた主張と同じである。その主張とは次の通りである(Latour, 1987, 99, 258)。

論争の決着は、自然の表象の「原因」であって帰結でないのだから、結果として得られる自然を、論争がどのようにしてなぜ決着したのかということの説明に用いることはできない。

これは1990年代以降に自然科学者たちによってしばしば批判の対象となってきた主張である。批判者たちは、科学の論争が決着し、ある言明が事実(を表す言明)になるのは、その言明が実際に「实在」に対応しているということを自明な前提とみなしている。それゆえに彼らは、ラトゥールた

ちの上記の主張は科学における「実在」の役割や地位を否定しており、その結果、真偽はすべて交渉次第で決定されるとする反実在論的な相対主義そのものであると断じているのである(Sokal & Bricmont, 1998; R・ニュートン, 1999)。

確かにラトゥールたちの表現はややレトリカルであるが、理解不能なことを言っている訳ではない。

前章で確認したように、ラトゥールたちのテーマは「活動中の科学」の状態、より具体的に言えば「論争中の科学」なのである。つまり、どの言明が「正しい」のか(言い換えれば、「『実在』そのもののあり方を示している」のか)を決定することができない状況が取り扱われているのだ。「方法の第三原則」の趣旨は、このような状況において、ある言明の正しさを証明しようとする場合、(証明されるべき)「実在」をその証明の根拠に使うことはできないということなのである。

例えば、「ある言明が実在を示している」と言えるのは、その言明の「正しさ」が証明された後である。次のような例を考えてみよう。「TRF(甲状腺刺激ホルモン放出因子)は、Pyro-Glu-Pro-NH₂である」という言明がある。これが事実だと確定された69年11月以降ならば、この言明は、それが示している構造を持つ物質が実際に自然界(脳内)に存在するから「正しい」と実在論的に説明することができる。しかし、その1年前ではどうであろうか。もちろん、その場合も、この言明の「正しさ」は論争の有無とは関係なく実在のあり方に対応していると、69年11月以降ならば回顧的に言うことはできるであろうが、しかし、論争の渦中にいる人たちにとっては、この言明は「真理」というよりは証明されるべき「課題」なのである。

b. 「実在」に関して

以上のように、ラトゥールの「方法の第三規則」は、「活動中の科学」の状況を述べたものであると限定して考察すれば、それほど奇異な主張であるとは思われないだろう。

だが、それでも疑問は残る。論争の最中はそれぞれの言明の真理性は確定されないとしても、論争はいずれは収束する。問題は、論争の収束は何に基づいているのか、ということである。ラトゥールの「方法の第三規則」によれば、論争の収束は次のように説明される。「論争が収束した結果として、言明が示している対象が『実在している』と主張できるようになる」ということである。すなわち、「論争が終わったから、実在があるのだ」ということであり、「実在があるから、論争が終わる」ではないのだ。

この主張もかなり奇妙に思われる。言明の指示対象が実在しているからこそ、論争は収束するの

ではないのか。科学の言明は、科学者たちが主張するように、実在に対応し反映しているから、その真偽が判断されるのではないか。

ここで注意しなければならないことは、ラトゥールらも「実在」のような事態があり得ないと言いたいのではないということである。しかし、自然科学者たちと「実在」の定義が根本的に異なっているのだ。上述の自然科学者たちにとって「実在」とは、「人間の存在とは関わりなく自存しているもの」と言い表してもよいだろう。他方、ラトゥールたちにとっての「実在」とは、物質的なものが持つ「抵抗」に関わっているもの、人間からの介入に対して抵抗するものであり、「意のままに変えることができないものが実在的だとみなされる」のである（LW, 260, n. 17; Latour, 1987, 93）。

すなわち、「実在」の定義において人間との関係を前提とすることが、自然科学者たちの定義と根本的な違いであるが、しかし、ラトゥールたちにとっては、「実在」は人間達の自由になるもの（自然科学者達が批判する意味での「社会的に構成される」もの）ではないのである。具体的には、何度実験しても同じような結果が出る場合や、ある基本的な科学の前提を否定することができない（あるいは、意味がない）ことなどが挙げられる（二重否定による肯定の導出）。このような場合に、「ある言明は実在を示している」ということができるとラトゥールたちは主張する。この主張も、科学の成果からではなく、遂行中の科学の活動に基づいてなされているのである。

この議論からも想定されるように、ラトゥールたちが扱っているのは、（伝統的な科学論が扱っている）「真理条件」ではない。「真理条件」とは、言明の真理性を決定する実在論的で無時間的な条件であるが、ラトゥールたちが実際に問題にしているのは、論争の参加者の行為遂行的な視点から見た言明の「主張可能性の条件」なのである。

ここでの「主張可能性条件」とは、論争参加者の間で、ある言明が経験的かつ論理的に十分裏付けられた科学的言明として主張され、承認されうるための社会的で経験的な条件であり、（実在的な自然界のあり方を前提している）「真理条件」とは別のものである。この「主張可能性」を孕んだ様々な言明の中で、どの言明がどのようにして「事実らしさ」を増していくのかを（言明分析などを行いながら）ラトゥールたちは追求したのである。

さて、ラトゥールたちのこのような議論の「横断的な意義」はどこにあるのだろうか。

前述のように、多くの自然科学者たちはラトゥールたちの主張を受け入れていない。この面から見れば、「横断」は成り立っていないと言えよう。

ただし科学者たちも以下の事柄は認めるのではないかと私は考えている。つまり、論争中の言明

は、まだ主張可能性の段階にあり、十分に真理性を要求することはできない、ということである。科学の論争（特に「発見」）に関しては、かなり激しい意見の応酬があり、時として過剰な真理要求がなされることはよく知られているし、また、社会（や非専門家）に対して科学者が自己弁明を行うときも、主張可能性の段階にある言明を「科学的真理」だと言ってしまうこともしばしば生じている。このような場合に、ラトゥールたちの指摘は、一種の「抑止」の役割や効果があると言えるであろう。

だが、このような場合でも、科学者と科学社会学者が実質的に連携しているとは言い難いであろう。この段階に科学社会学者の探求が留まってしまうならば、科学社会学者は、科学（そして、科学と連携している産業界と行政）の活動の「見張り役」であるということになるであろう。

しかし、本節の「実在」の定義を考慮してもわかるように、ラトゥールたちの科学社会学の展開は、科学論の枠を超える内容を持つ。つまり、科学論の枠組みの基礎的な前提を問い返すことも含まれており、実際に90年代前半以降には哲学的な存在論にまで介入していったのである。それは、ブルアの「ストロング・プログラム」をそのまま継承して、完全に行き詰ってしまった科学論のある動向からの脱却を目指すために生じてきた。この一連の動向を次節で見よう。

c. 「反射的転回 (reflexive turn)」

この動向は、80年代後半に起こった科学論の「反射的転回」である。その検討の前に、「ストロング・プログラム」の要点を簡単に復習しておこう。

「ストロング・プログラム」の最初の三つのテーゼ（「因果性」、「不偏性」「対称性」）には、結局二つの基本的な前提がある。

1. 科学的な知識の産出においては、（伝統的な科学論のように自然界の「実在」に因果的に関係づけて説明するだけでなく）社会的な事柄にも因果的な原因があること。
2. この社会的な原因は、社会学によって解明可能であること。

この二つの前提だけでも、「ストロング・プログラム」はかなり困難な課題を抱えていることがわかる。そもそも「社会的な事柄」は因果的に存在しているのかという疑問が生じるし、さらにこの社会的な因果関係はどの程度まで解き明かされるのかも判然としない。

そして、第四の最後の「反射性」のテーゼがますます課題の困難さを増大させる。このテーゼ

は、「因果的な説明の仕方を社会学者自身にも適応する」という内容であった。このテーゼの真意は、(因果的説明という)同一の解明の方法を(自ら自身をも含めた)すべての領域に対して適応するという徹底した方法論を採用することによって、諸学の解明を社会学のみが行う、という「社会学主義」の宣言であるとみなされるであろう。

しかし、この「反射性」のテーゼを実施しようとしても無限後退に陥ることは明らかである。例えば、研究者自ら自身が被っている社会的な因果的影響関係を開示しようとしても、研究を行っている研究者自身は同時に因果的に解明されることはないので、常に解明され得ない限界を持たざるを得ないのである。

一言で言えば、実施不可能な課題を「ストロング・プログラム」は宣言しているとは思われないのであるが、しかし、このプログラムを継承しようとした研究者達(M・アシュモア、M・マルケイ、ウールガー他)がいた。

これまで述べてきたように「ストロング・プログラム」はそのままでは実施できない。それ故に、「ストロング・プログラム」を放棄するという方向へ進むのではなく、彼らは「ストロング・プログラム」が成り立たない以上、学としての社会学の営みを事実上放棄しているようにみなされうることを行ったのである。

具体的に言えば以下の通りである。研究者自身すでに社会的なバイアスがかかっている以上、いくら研究を進めても客観的な事態には到達し得ないのであるが、科学者はこのことを自覚しないので研究を進めることができる。他方、科学社会学者はこのことを自覚しているので、あらゆる研究には正当性の根拠がないことがわかっており、どの研究が「より正確に実在を反映しているのか(客観性があるのか)」は決めることはできない。あるテキストが「客観性がある」ように見えるのは、結局、そのテキストのレトリックのためだとアシュモアたちは結論付ける。それゆえに、アシュモアたちの著作は、自らの著作の中に、自らの著作の正当性を否定するような仕組みを含ませることで、「客観性」や「正当性」のごまかしに自らは荷担していないという新たな(正当性)を主張しようとしたのである。例えば、マルケイ(Mulkay, 1991)は、「劇」や複数の種類の「対話」、そして「パロディ」などの章を設けることによって、通常の科学論の「モノログ」的な性格を否定するような独立した様々な声をテキストに入れ、テキストの真理性の要求を停止することを試みた。

このように「反射的転回」を正面から引き受けた研究者たちは、自己否定的で自己矛盾的な再帰的なテキストを生み出した。このような態度は、彼らの前提を共有する研究者たちには受け入れられ

たが、多くの研究者には引き受けられなかったのである。

d. 認識論的な問題設定

前節の「反射的転回」は、前述の「科学論の言語学的転回」を極端なまでに推し進めたものとも考えることはできるが、ラトゥールたちの議論は、言明分析などのテキスト論だけではなく、本章で既に述べているように「実在」にも関わっていた。しかし、この「実在」についての討議が70年代以降の科学社会学の中で十分に成し遂げられなかったので、「反射的転回」のような袋小路に陥るような試みがなされてしまったと考えられる。

80年代後半に「反射的転回」の影響を受けた著作や論文が公刊された後、その方法論的懐疑論を脱するための試みが幾つか行われた(Latour, 1991; Pickering, 1995; Latour, 1999)。これらの試みはデカルト以降の哲学史の展開を踏まえたものが多いが、本節では哲学史の知識を使わず、私なりに議論の展開をまとめてみたい。

ところで、伝統的な科学と科学論が前提としている近代の認識論的な枠組みと試みは以下の通りである(ここでの「認識論」とは、真なる知識の生成と産出のメカニズムを解明することを目標としている学的な営みを意味している)。

つまり、それは、「心の中」と「外界(の実在)」とを完全に分離した上で、「心の中の知識が外界に実在するものの正しい表象であることをどのようにして正当化することができるのか」という課題を問う試みであると言えるだろう(また、「実在とその表象」を想定する「表象主義」もこの認識論の枠組みの中にあると言えよう)。

認識論が扱っているこのような事柄は、実は日常的にも経験されていることである。例えば知覚の経験において、私の位置の移動によって、もの(例えば、目の前の電灯)の見え方は変わるが、しかし、見えているもの自身の存在は変わっていないと思っている。「主観的な」見え方は様々であるが、それらが指し示している「もの」それ自身は(基本的には)常に同一である、と思われていることが上記の認識論の前提となっていることだ。

さて、この認識論的な問題を解決しようとする場合には、原理的に解きたい「矛盾」を孕んでいることが気付かれる。つまり、人間の心と、外界の実在との関係を完全に外から把握しようとすることは、自ら自身の心を対象にするために自分から出て自分を外から見ることを要求する以上、その

実行は不可能である。(実験などで)他者の心をテーマにするときでも原理的な困難がある。まず、他者が何を経験しているのかが完全にはわからない。そして、そもそも他者と実在との関係を把握しようとしている研究者も、その把握の行為それ自身が認識論の説明の対象であるはずなので、説明されるべき事柄自体が説明する行為の中に含まれているという一種の「循環」が生じているのである。

しかし、認識論的な課題に含まれている矛盾や困難は、徐々に解決されてきたとも考えることができる。それは、科学(と科学に関わる思想)の発展を考慮に入れた場合である。

ところで、科学は、上述の矛盾を直接に解決や解消しているわけではないが、実験による証明や自然界の法則の発見と呈示は、人間の経験の主観的な性質をできるだけ除去していくことによって客観的な「実在」に迫ろうとしてきたということができよう。その結果、現在の多くの科学者には、科学は「実在」そのものを扱っているという揺るがない信念が共有されているのである。

しかし、科学が解明する「実在」の客観性は、〈ネットワーク理論〉が明らかにしているように、様々な社会的な事柄に基づいて生じている。このことは、例えば、実験器具は社会で生産されているということだけでなく、世界の各国で実験が可能であるということは、実験が実施できるように社会全体を変えていくネットワークがあるということも意味している。そして、科学的な活動が順調であるほど、このような社会的な側面は見えなくなる。身体的な習慣と同じく、このような媒介のネットワークは見えない(意識されない)ほど、滞りなく機能しているのである。

それゆえに、日頃主観的に意識されていないからという理由で、科学の営みが「実在」そのものに関わっていると断言するのは素朴であると言えよう。現象学者のE・フッサールが言うように、客観性は、相互主観性(intersubjectivity)、すなわち、社会的な共同性に基づいているのである。客観性と、(様々なネットワークの媒介という意味での)社会性とは背反しないのであり、このことは、自然科学的な実在論の前提を固持している限りは、理解されないであろう。

e. 「活動中の科学」論の意義

これまでの議論をそろそろまとめよう。

「活動中の科学」論には、およそ三つの帰結があると私は考えている。第一は、認識論的な問題設定に対する評価、第二は、科学の活動をどう考えるのかということ、第三は、〈ネットワーク理論〉の哲学的な意義である。

まず、前節で述べた認識論的な問題設定に関しては以下の通りである。

この問題設定（心と外界の实在との関係）は、そもそも日常的な経験にも基づいているので、このような問いが生じること自体は理解できることである。しかし、問題を解決する際に原理的な困難が含まれているし、「实在そのものの解明を行っている」と主張する科学も自らの社会的なネットワークの存在を忘却した上でこのような主張を行っているので、認識論的な問題は、「疑似問題」であるとみなすことができると考えられる。

この問題設定を正面から引き受けようとした試みが、本章c節の科学社会学の「反射的転回」であり、その結果どうすることもできない袋小路に陥ったのは今から見れば当然であったように思われる。

だが、このような事柄は過去のことではない。現在も人文学の諸学科において方法論的な論争があり、そこで生じている困難は科学社会学と通底しているように思われる（上野（編）, 2001）。例えば、「事実」をめぐる歴史学、人類学、社会学の諸学科内の論争は、上述の「实在」をめぐる科学社会学の議論と類似している。また、社会学などでしばしば取り上げられる「ポジショナリティ」の問題も、本稿の「反射的転回」と似た問題構成を持っていると思われる。それゆえに、科学社会学が「反射的転回」という理論的な袋小路から脱していった過程は、他の学科にも通底した圏域に関わっていると考えられる。

ところで、「活動中の科学」論によれば、結局、科学の営みはどのように考えられるのか。伝統的な科学観によれば、科学は「实在そのものの解明を行い、無時間的に妥当する真理を生み出す」活動とみなされていた。他方、「活動中の科学」をテーマとする科学社会学は、ネットワークの強調からも予想されるように、科学の活動の局所性や状況依存性を指摘し、その結果、科学的な「真理」の無時間的な妥当性を認めることはない。

だからといって、科学社会学は、「真理」や「实在の認識」をすべて拒絶する相対主義を主張しているのではない。論争の過程に着目しているように、「真理（とみなされるようになる事柄）」は、ある状況の中で生まれ、その後の別の状況の中で更に認知されるか、あるいは反駁されるのであって、他の知識や経験と変わらないあり方をしているのである（「二重否定を介した肯定」としての〈真理〉。本章b節を参照）。

ただ、科学には独自の強力なネットワークがあり、ますますそれが拡がっていくこと（「世界の実験室化」）において、他のローカル・ナリッジや他の学的な知識とは異なるあり方をしており、その結果、より「普遍的」に考えられるかもしれないが、このことは、科学の諸成果が無時間的な妥当性を持

つということを直ちに意味するとは限らないのだ。

〈ネットワーク理論〉の哲学的な意義とは以下の通りである。

前述のように、遂行論的で生成論的な立場を取る〈ネットワーク理論〉は、自存している「实在」を単純に措定することはできない。それゆえに〈ネットワーク理論〉は自らのテーマ（ネットワーク）の記述に関して、「实在」を想定させるような言葉は使用できないし、時として新たな概念を形成しなければならぬのである。

このことは、ラトゥールが1991年に公開した著作『我々は一度も近代的ではなかった』において宣言していることである（Latour, 1991）。ここでのラトゥールの主張は、17世紀以降の思想的な展開が（本章で検討した）認識論的な問題設定などの数々のアポリアを生み出してきたので、近代的な思想特有の二元論的な概念（例えば、主観と客観、実在と表象、文化と自然など）から脱しなければならぬ、ということである。

ラトゥールとは別にこの主張を具体化したのは、ピッカリングである（Pickering, 1995）。彼は、『実践としてのマングル』という1995年の著作において、「表象的な語法（representational idiom）」と「遂行論的な語法（performative idiom）」とを対置し、後者によって、科学そして世界を記述することを試みている。その際に鍵となるのは、agencyという概念である。このagency（作用）は、ラトゥールとカロンのアクター・ネットワーク理論のアクターに相当するもので、material agency（物質的な作用）、human agency（人間的な作用）などが指摘され、これらの多様なagencyが交わる中で、相対的に安定した様々なネットワークが生まれてきて変化すると言う。ピッカリングの主張の中で理論的に興味深いことは、本稿の冒頭で挙げたクーンの〈共約不可能性〉の問題に対して解決の一つの方向を与えていることである。

クーンの「共約不可能性」の問題とは、異なるパラダイム（例えば、「天動説」と「地動説」）の間では相互に理解が可能でない以上、どのパラダイムがより「正しい」のかを決定することはできない、ということであった。クーンの主張は一見非常に奇妙に思われるのだが、それなりの根拠を備えている。すなわち、概念の意味や使い方が根本的に違う以上、異なるパラダイムの間では理論について完全な相互理解は生じないであろうし、後世の人々がそれらのパラダイムを理解しようとしても、その時代の影響から脱することができないので、過去のパラダイムを完全に理解することはできないということを指摘しているのである（野家、1993）。

テキストにおける理論の理解という側面に関しては、クーンの主張は簡単には否定できないと考えられる。しかしだからといって、「天動説」と「地動説」は比較が不可能である、とすぐに結論付けることはできないだろう。

ピッカリングの所論によれば、ある理論の〈正しさ〉は、その理論が関わっているネットワークのあり方によって示される。「天動説」と「地動説」の比較も、各々のネットワークのあり方と規模の違いとして考えられるのである。例えば、「天動説」に関して、それが受け入れられている社会の中でどのようなネットワークがどれほどの強さや広さ、密度で作りに上げられているのか、様々な事象を動員する力はどのようなものかということ考察する。そして、「地動説」に関して同様のことを行うならば、両者の比較は可能になるのではないか、ということである。

結びにかえて

これまで1970年代から1990年代半ばまでの科学社会学の展開を見てきた。(前述のように) 科学者たちはこの展開に関して承認しない場合が多いので、現状ではこのような側面からの相互的な「横断」や「交流」は成り立っていない。しかし、(人文学の多くの論争の場合もあてはまるであろうが)「相互承認」や「融合」が生じていないからと言って、この出来事には意味がないと言うのは行き過ぎであると思う。

科学社会学のこの二十年の出来事の中には様々な衝突や衝撃があった。それらの理論的な意義を明らかにすることによって、(科学者には直接に影響を与えないとしても)人文学の他の諸学科を触発し、相互に触発し合う平面が切り開かれるということ、つまり一種の「横断性」や「越境性」が生じていると私は思う。

このような触発する平面を切り開くということに至るためには、(本稿でも述べてきたような)次のような二つの契機が必要なのではないか、と私は考えている。

1. 自らの学科の方法や前提についての徹底的な検討と試行(本稿では、科学論の記述的転回や反射的転回などの一連の動向)。
2. (1に伴って生じる)基礎的な概念の変容(本稿では、〈ネットワーク理論〉における「实在」「真理」「客観性」ほかの概念の変容)。

諸学科を触発する平面が切り開かれた後、その学自身の体制もそれ以前と異なっていくことは避けられない。

90年代後半以降の科学社会学では、より実践的な方向へ向かう動向が生じている。例えば、ラトールと共にアクター・ネットワーク理論を発展させたカロンは、様々な科学技術の社会的な問題に対する「介入」を提起している (Callon et al, 2001)。

このことは、理論から実践へと研究者が転身していったと考えるべきではないだろう。そもそもアクター・ネットワークは、研究者にとっての研究対象であるだけでなく、研究者自身がそのネットワークの中に含まれているのであり、それゆえにネットワークを変化させる可能性に開かれているのであって、そこは「理論」と「実践」のインターフェイス (いわゆる「臨床性」) が新たに構築し直される場なのである。

このように (近年盛んになってきている科学技術コミュニケーションの検討も含めて) ネットワーク全体の中でどのような新しい関係が結ばれているのかということに着目することで、本稿で扱われてきたのとは異なるかたちの「横断性」や新たな「学知」を見出すことができるかもしれない。このような新たな動向も、本稿で取り上げられた一連の原理的な考察の展開を経て生じてきた事象なのであり、それゆえに方法や概念などについて基礎的な検討を行い続けることも人文学の絶えざる役割の一つであるだろう。

(特任研究員)

参考文献

- Ashmore, Malcolm (1989), *The Reflexive Thesis*, The University of Chicago Press.
- Bloor, David (1976), *Knowledge and Social Imaginary*, Routledge & Kegan Paul.
- Callon, Michel, "The Sociology of an Actor-Network", in Callon et al. eds. (1986).
- Callon, Michel, John Law & Arie Rip (eds.) (1986), *Mapping the Dynamics of Science and Technology*, MacMillan Press.
- Callon, Michel, P. Lascoumes & Y. Barthe (2001), *Agir dans un monde incertain*, Seuil.
- ハッキング, イアン (1986), 『表現と介入』 渡辺博訳, 産業図書 (原著発行: 1983).
- 平川秀幸 (2002), 『実験室の人類学』, ~金森修, 中島秀人編著 『科学論の現在』 勁草書房所収.
- 金森修 (2000), 『サイエンス・ウォーズ』, 東京大学出版会.
- 金森修, 中島秀人編著 (2002), 『科学論の現在』, 勁草書房.
- 金森修 (2002), 『科学知識の社会学』, ~金森修, 中島秀人編著 『科学論の現在』 勁草書房所収.
- Knorr-Cetina, Karin D. (1983), "The Ethnographic Study of Science", in Knorr-Cetina, Karin D. & Michael Mulkay (eds.) (1983).
- Knorr-Cetina, Karin D. & Michael Mulkay (eds.) (1983), *Science observed*, Sage.
- Latour, Bruno (1983), "Give me a laboratory and I will raise the world", in Knorr-Cetina & Mulkay eds. (1983).

- Latour, Bruno & Steve Woolgar (1986), *Laboratory Life* (2nd Ed.), Princeton University Press.
- Latour, Bruno (1987), *Science in Action*, Harvard University Press.
- Latour, Bruno (1991), *Nous n'avons jamais été modernes*, La Découverte.
- Latour, Bruno (1999), *Pandora's Hope*, Harvard University Press.
- Merleau-Ponty, Maurice (1960), *Signes*, Gallimard.
- Mulkay, Michael (1985), *The Word and the World*, George Allen & Unwin.
- ニュートン, ロジャー・G. (1999), 『科学が正しい理由』 松浦俊輔訳, 青土社 (原著発刊: 1997).
- 野家啓 (1993), 『科学の解釈学』, 新曜社.
- Pickering, Andrew (1995), *The Mangle of Practice*, The University of Chicago Press.
- Sokal, Alan & Jean Bricmont (1998), *Fashionable Nonsense*, Picador.
- 上野千鶴子編著 (2001), 『構築主義とは何か』, 勁草書房.

社会心理学の「歴史」と＜横断性＞

—人文学のインターフェイスの「道具」として—

加藤 謙介

<要旨>

本稿では、領域横断的な知のあり方（＜横断性＞）について論じるために、特に心理学の「歴史」を題材として検討を試みた。具体的には、心理学の一分科である社会心理学の成立と発展の「歴史」において、他のディシプリンから如何なる影響を受け、社会心理学というディシプリンそのものが変容したのか、その過程を整理した。また、人間科学としてのグループ・ダイナミックスの枠組みを示した。その上で、あるディシプリンの「歴史」と「枠組み」を提示することが、ディシプリン間の横断のための「道具」となることを示唆した。さらに、＜横断的な知＞が、discipline-orientedではなくissue-orientedな枠組みとして成立することを論じ、そのための準備としての『討議空間のデザイン』の重要性について論じた。

<キーワード>

横断性、社会心理学、グループ・ダイナミックス、触発の平面

0 はじめに

本稿は、「インターフェイスの人文学」の特任助手・特任研究員・RAによって構成される「若手研究集合」での発表・議論を踏まえている。研究集合には様々なディシプリン出身のメンバーが参加し、「討議空間のデザイン」について考察するため、事前にディスカッション・ペーパーを提出し、その論文に基づいて議論が重ねられている。本稿の初稿は、2005年11月10日の研究会にて、議論に供された。

筆者は2004年4月より、同プログラムの特任研究員に任ぜられ、研究集合に参加してきた。自分とは異なるディシプリン（例えば、哲学、社会学、言語学、歴史学、人類学、美学、文学、等）

出自の人々との議論は、これまでの筆者の視点とは異なるアプローチを示唆してくれるものであり、大変刺激的であった。しかしその一方で、各メンバーの議論の前提、それぞれのディシプリンが抱える固有の視点について、もうひとつ理解が深められず、歯がゆい思いをしていた。もちろん、原因は筆者の勉強不足にある。しかし、異なるディシプリンの人々が集まって議論をする際には、それぞれのディシプリン間の「つながり」を、もう少し見えやすく提示する必要があるのではないかと考えるようになった。

そこで筆者は、初稿において、上記のような問題意識に基づき、筆者のディシプリンである社会心理学における「学説・論争史」の整理を試みた。社会心理学に限らず、心理学は、他のディシプリンからの影響を強く受けながら展開した領域である。それゆえ、社会心理学の「歴史」は、必然的に、他のディシプリンからの影響関係の歴史となる。この整理を通して、人文諸学の「つながりの見取り図」の、言わば「踏み台」のひとつが作れるのではないかと筆者は考えた。

幸いにして、初稿に対しては、参加者から（批判も含め）様々な指摘を受け、議論を深めることができた。筆者の意図である「踏み台」としての役割は、多少は果たすことができたのではないかなと思う。しかし、さらに検討すべきは、こうした「学説・論争史」的な論考が、他ディシプリンとの「つながり」にどのような貢献を果たしうるか、という点である。

これについて、家高（2005）は、他のディシプリンとの相互影響関係を踏まえ、そのディシプリン自体が変容する契機について、「触発の平面を切り開く」という表現を用いて論じている。また、その契機として、（1）自らの学科（あるいは他の学科）の方法や前提についての徹底的な検討と試行、（2）（1に伴って生じる）基礎的な概念の変容、の2点が必要になると述べている。「学説・論争史」は、この2つの契機の過程を示したものであると言えよう。それゆえ、ディシプリン間の「横断」を考え、最終的に、ディシプリンの枠組みを越えるような研究の協働を企図する場合、まずは、「触発の平面」を切り開く作業が必要となるだろう。

本稿では、初稿の内容に若干の加筆修正を行うとともに、研究会での議論を踏まえて、今後の展望について論じる。本稿での議論は、さしあたっては、本COEプログラムの理念のうち、「横断性」に焦点を当てたものとなっている。なお、「インターフェイスの人文学」が掲げる理念のひとつとしての<横断的な知>については、同プログラムの公式ウェブサイトに掲載されている。以下に、該当箇所を引用しよう。

プログラムは、文化の生成をつねに複数文化の接触面で動態的に見ていく<インターフェイスの

人文学)への、人文学の創造的変換を図る。具体的には、複数文化の激しい接触のなかで変動する21世紀の社会を的確に捉えるために、人文学を、二つの新しい知、つまり、異なる複数文化の接触・交差・軋轢を国家・地域横断的に捉える〈横断的な知〉と、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とを架橋する〈臨床的な知〉を核とするものへと構造変換する。(「インターフェイスの人文学」ウェブサイト)

同プログラムの理念において、〈横断的な知〉とは、「今、社会に存在する複雑な『問題』をどのように捉えるか」という「『問題(研究対象)』の捉え方」として設定されていると考えられる。本稿で試みたような「ディシプリン間の横断」についての議論は、その一段階前のステップと位置づけることができる。

本稿は、特に「社会心理学」の展開の歴史を、他ディシプリンや社会的出来事による「揺らぎ」の過程として捉えて整理し、紹介する。この作業を通して、他ディシプリンとの「触発の平面」を開くことが、本稿の最終的な目標である。1章・2章では、特に社会心理学の「歴史」について、初稿、及び研究会での議論を踏まえ、簡潔に整理を試みた。そして3章では、ディシプリン間の「横断」について私論を述べる。

なお、本稿の読者としては、心理学を専門にしていない研究者を想定している。このため、専門的で煩瑣な議論はできるだけ避け、「社会心理学」というディシプリンが成立・発展する変化の過程を、大まかに整理するに留めた。

1 「心理学」の発展と他領域との関連

「心理学」とは何か?それを一言で述べるのは困難を極める。心理学が独立した学問として成立したのは、「心理学の祖」と言われるヴェントが、ライプチヒ大学に心理学実験室を設立した1879年だとされている。その後、様々な経緯を経て、実に多くの「〇〇心理学」が存在するようになった。心理学界の中心的な組織であるアメリカ心理学会では、現在、心理学が取り扱う領域 (division) として、55の部会が設けられている¹⁾。日本においても状況は似ており、日本心理学諸学会連合には、心理学関連の学会が数十、加盟している。

本稿では、心理学の一分科としての社会心理学の「歴史」について論じるつもりであるが、社会

心理学はもとより、心理学一般の展開の全体像については、とても筆者の力量の下で整理をし得るものではない。ここでは、渡辺（2002）²⁾の論考を参考にしながら、その特徴を簡潔に整理するに留めよう。

渡辺は、自身が用いた1960年代の心理学の教科書（「心理学Ⅰ・Ⅱ」）の冒頭に掲げられた学会長老の次の言葉、「心理学は現代（1960年代）にいたって、はじめてその科学的方位確立の戦いを制しえたといえるのである」を引用し、その後の35年間で、まさにこのことばを裏切るように、様々な「新心理学説」が登場したことを紹介している。例えば、1970年代の日本における認知心理学の隆盛、1986年の日本人間性心理学会の設立、1999年の日本トランスパーソナル精神医学・心理学会の設立など、新たな心理学説に基づく様々な学会が立ち上げられている。また、社会構成主義、アフォーダンス、進化心理学、文化心理学等、これらの枠に収まらない多様な学説が登場している。

近年増加する「新心理学説」の登場について、渡辺は、それが「何ら科学としての心理学の内発的発展の結果などではなく、この半世紀の欧米諸国における時代思潮・時代精神や人間観の変遷と、またそれに伴う科学哲学の展開と、密接に結びついていることこそ、まず認識されなければならないことだろう」（渡辺、2002, p.7）と主張する。例えば、「認知心理学」は、人の心的機能をコンピュータのような情報処理過程と見做しており、まさにコンピュータ時代の産物であると言える。また、「社会構成主義」や「言説心理学」は、人の心的な活動が主に言語を介して社会的に構成されていることを主張し、いわゆるポストモダニズムの思想的な影響を強く受けている。

その上で、渡辺は、これらの新心理学説が、「西洋の哲学思潮のうねりの波頭の、そのまた飛沫とでも言うべきものである」と述べる。その上で、「明治以来、日本の心理学界は、哲学思想という根から切り離された、切り花状態の輸入に明け暮れていたと言え、いい過ぎになるだろうか。」との皮肉をもらしている（p.8）。

このような整理は簡潔すぎて、学知同士の深い連関については捉えきれないものではないだろう。しかし、大雑把でも、このような「見取り図」を示すことで、「心理学」が、他のディシプリンとまったく関係なしに独立自存する学問分野ではなく、それどころか、様々な「他の」ディシプリン、また、社会現象との関係の中で発展・変化していったことが伺えるだろう。

2 社会心理学の〈横断性〉と展開

読者におかれては、「社会心理学」と言われても、そこでどのようなテーマが研究されているのか、ピンとこない方もおられるのではないかと思う。ご存知の方には遠回りとなるかもしれないが、ここで、「社会心理学」の特徴を簡単にまとめてみよう。

心理学において最も一般的な辞典のひとつである「心理学辞典」(中島ら, 1999)によれば、社会心理学とは、「個人とその社会的状況との間の相互的な影響過程を科学的に研究する学問の一分野」と定義されている。また、その研究対象は多様であり、「個人の心理過程」(自己, 帰属過程, 態度と態度変容, 対人認知)、「対人的過程」(攻撃, 援助, 説得, 対人魅力, 対人コミュニケーション, 対人関係など)、「集団内行動」(集団の構造・機能, 社会的勢力, リーダーシップなど)、「集団間行動」(偏見, 差別, 協力と競争, 取り引き, 交渉など)、「社会の水準(societal level)」(集合行動(流言など), 普及過程, 消費・購買行動など)、「応用的研究」(環境, 法律・裁判, 健康, 教育, 臨床・カウンセリングなど)と多岐に渡っている。要するに、様々なレベルの集団・社会と個人との間の相互的な影響過程を、科学的に研究するのが、「社会心理学」というディシプリンの、きわめて大雑把な特徴であると言える³⁾。

本稿では、社会心理学というディシプリンの変遷を見るために、吉森(2002)の社会心理学史を参照しつつ、議論を進めることにする。「心理学の過去は長いが、その歴史は短い」とは、心理学者エビングハウスの言葉である。この言葉に表されているように、社会心理学が採り上げている命題そのものは、古代ギリシャ以来、長年にわたって取り組まれてきたものである。一方、「(経験)科学」としての社会心理学の歴史は、せいぜい100年程度しかない。しかし、そのたった100年の歴史の中で、社会心理学は、その成立から現在に至るまで、様々なディシプリンの影響を受け続けている。その「歴史」を概観・紹介することは、『討議空間のデザイン』のための「触発の平面」を開く一助となるだろう。

2-1 社会心理学の「歴史」:吉森(2002)の整理を踏まえて

吉森は、社会心理学の「歴史」を大きく3つに分けている。第1期である「準備期」は、心理学の祖ヴェンが「民族心理学」を刊行した1900年から、社会心理学の教科書が発行された1935

年までとされている。第2期が「成立期」とされ、1935年から、「社会心理学の『危機』」が叫ばれるようになった1960年代後半までと区切られている。そして、現代まで続く第3期が、「転換期／再生期」として整理されている。以下、各時期の特徴を紹介しよう。

第1期：準備期

この時期のポイントは、以下の4点である。第1に、特にヨーロッパにおいて、集団・社会と（個人との関係についての様々な理論的観点が登場するとともに、それが、「社会心理学」という名称でまとめられるようになったこと。第2に、「行動主義」の出現に示されるように、「心」を知る際には、客観的に観察可能な現象のみを扱わなければならないとの傾向が強まったこと。第3に、社会情勢の変化により、ヨーロッパの心理学者の多くが渡米し、彼の地で社会心理学が発展を遂げたこと。そして第4に、集団よりも個人への分析に重きが置かれるようになったこと。この4つである。特に重要なのは、2点目の「行動主義」の出現であろう。黎明期にあったそれまでの心理学（まだ「心理学」として完全に分化しきってはいなかったが）は、研究方法においても様々な手法がとられていた。代表的なものとしては、ヴントが進めた「内観（訓練された被験者が、自身の心的過程を報告する）」が挙げられる。こうした取り組みに対して、心理学者のワトソンは、1913年に「行動主義宣言」を唱え、心理学を、「精神（mind）」の科学ではなく、「行動（behavior）」の科学である、と主張した。

ワトソンは、客観的に外から観察可能な身体の動き、腺分泌などの生理的活動を、心理学の研究対象とすべき、と主張し、人間の行動を、「刺激（S）」に対する「反応（R）」とし、その成立の基本的単位を条件反射に求めた。彼の主張は、人の「心」を直接扱うものではなく、むしろブラックボックスの中に封じ込めてしまうという点で、「こころなき心理学」を生み出したと、後年批判にさらされることとなる。しかし、この時期において、彼の主張、即ち、心理学を、「自然科学的な研究方法」のもとで進めるべきであるとの考えは、熱狂的に支持された。ワトソンの行動主義は、その後の批判によって大幅な改訂を迫られたが、彼の唱えた心理学の「科学化」（客観主義・物理主義・実証主義）は、現代に至るまで、強い影響を及ぼしている。現代の社会心理学において、研究者と研究対象者との間に明確な一線を画し、被験者（subject）を、研究に関わる「主体」ではなく、研究の対象たる「客体」として措定するようになってきているのも、この時期の流れを汲んでいる。

第2期：成立期

この時期のポイントは、現実の社会問題に応えるかたちで、社会心理学がデシプリンとして発展し、社会的にも大いに期待されるようになったことである。特に、第二次世界大戦前後に山積した様々な社会問題に対して、社会心理学は積極的に取り組んだ。例えば、グループ・ダイナミックスの祖であるクルト・レヴィンは、自身の研究成果（集団決定法）を用いて、戦時中のアメリカの一般市民の食習慣を変える政策に貢献している。また、ファシズムへの関心が高まる中、アドルノらは、「権威主義的パーソナリティ」尺度を開発し、個人のパーソナリティがファシズムに影響を及ぼすのではないかとの研究を進めた。この他にも、社会心理学は、「小集団活動」（企業や軍隊等の組織において効率のよい活動を行うため、少人数で構成されるグループの活性化を図るような研究）や、「リーダーシップ」等、様々な課題に取り組んでいった。

上述のクルト・レヴィンは、グループ・ダイナミックスのモットーとして、『よい理論ほど実践的なものはない』という言葉掲げている。グループ・ダイナミックスは社会心理学の全てではないが、それでも、当時の社会心理学（の一部）が、強く実践を志向する学問分野であったことが特徴付けられている。様々な社会的な課題に対して積極的に取り組む社会心理学は、新しい政策科学として「ウルトラ・モダン学」とも称され、大いに期待される分野であった。

この時期までの伝統的社会心理学は、ゲシュタルト理論、場の理論、強化理論、役割理論、精神分析など、様々な学派に分化しつつも、精神分析以外は、基本的には行動主義の伝統を受け継ぎ、社会心理学の『科学性』を厳しく求める言説（論理実証主義）が支配していた。「心」を研究する際にも、客観主義・物理主義・実証主義等、『科学的な研究手法であること』が求められていた。

第3期：転換期／再生期

この時期のポイント、次の2点である。第1に、従来の社会心理学のあり方に対して、様々な批判が寄せられるようになったこと。第2に、他のデシプリンや思想・思潮の影響のもと、「心」に関する新たな理論的観点が登場するようになったこと。この2点である。

「転換期／再生期」は、それまでの社会心理学のあり方に対して、様々な批判が寄せられた時期である。例えば、以下のようなものが挙げられる（吉森, 2002, pp.256-257）。「社会心理学は現実の人々が当面している大きな問題ではなく、どうでもよい、瑣末な問題に取り組んでいるのではないか?（瑣末実証主義）」、「研究の場が現実場面ではなく、それを模しただけの『実験室』でなさ

れるだけでよいのか?」、「人々の行動に意味付与している『社会の伝統（歴史や文化）』や『具体的状況（文脈）』を考慮しないで、結果を普遍化・一般化してよいのか?」、「社会心理学がいわば社会の『権力（優勢集団）』の支援を受け、彼らに利用されているのか?」。こうした批判は、「社会心理学の『危機』」と総称されている。

これらの批判を踏まえつつ、社会心理学は大きく2つの流れに分かれていった。1つは、いわゆる「認知革命」を受け、人の心的な機能を、コンピュータのような情報処理過程と見做して検討する認知心理学的な観点である。もう1つは、人の心を成り立たせる社会や文化のはたらき、特に「言語」の役割に重きを置いて、「心」を研究しようとする動きである。前者は、現在に至るまで、社会心理学の主流なパラダイムとなっている。集団と個人の間を関係を検討する際にも、「個人の」認知過程を対象とした研究が進められている。また、研究方法も、基本的には、従来の科学的研究法の流れを汲み、実験室実験や質問紙調査など、定量的な方法が採用されている。

一方、後者は、ヴェトゲンシュタインの言語ゲームや、ガーフィンケルのエスノメソドロジー等、人間の諸活動に対する言語や言説の果たす役割に注目した諸理論の影響を強く受けている。ポストモダン思潮における言語論的展開から心理学が強く影響を受けた結果、もはや「個人」という枠組みでは人の「心」を捉えることができず、主に言語を介した社会的活動の中でのみ、人の心的活動や生活が営まれる、という「人間」観そのものについての大きな転換が迫られることとなった。

例えば、ウイリッグ（2003）は、心理学における言語・言説への関心の高まりについて、次のように整理している。1950年代以降、哲学、コミュニケーション論、歴史学、社会学の領域では、社会的なパフォーマンスとしての言語に関心が寄せられるようになった。いわゆる「言語論的展開（the turn to language）」である。ところが、「認知革命」の影響を強く受けた当時の心理学は、逆に、心的表象に関する研究や、環境からの入力のリ認知的媒介をコントロールする規則に関心が向けられていた。しかし、1970～80年代にかけて、個人の認知プロセスが、知覚と行為において中心的な役割を果たすとする、いわゆる「認知主義」に対する批判が生じ、言説の持つパフォーマンス的な特徴や、人々が利用可能な言説資源（discursive resource）に焦点を当てるようになった。そうしたアプローチのひとつである言説心理学（discursive psychology）では、記憶、帰属、アイデンティティなどの心理現象を扱うが、これらを、認知プロセス（人々が「持つ」何か）ではなく、言説行為（discursive action）（人々が「する」何か）として捉え、概念化を行っている。

また、心理学というジャンルを越えた領域横断的な研究枠組みにも、心理学のディシプリン内外から強い関心が集まっている。代表的なものとしては、1920年代のロシアの心理学者ヴィゴツキーと文

芸批評家バフチンの理論を発展させた、精神への社会文化的アプローチ(例えば、ワーチ, 2004)、同じくヴィゴツキーの理論を陶冶し、人間の心理的活動における「文化」の役割を位置づけなおした「文化心理学」(例えば、コール, 2002)、そして、教育、遊び、科学・技術、労働、生活など、人びとの協働によって創造される多様な社会的実践活動を対象に、その分析・デザイン・変革を統合した研究を展開する領域横断的パラダイムである「活動理論」(例えば、エンゲストローム, 1999)等が挙げられる。

これらの理論的観点は、社会心理学を直接標榜するものではなく、むしろ発達心理学や教育学といった分野から発展し、研究対象を拡大していったものと位置づけることができる。重要なのは、これらのアプローチもまた、従来の人間観に対する問い直しから生まれ、互いに影響を与え合いながら展開していった点である。その際に、心理学以外のディシプリン(例えば、マルクス・フーコーの思想、文芸批評、言語哲学など)からの影響を受けていることは看過できない。最も重要なのは、こうしたアプローチが、社会・集団を扱う社会心理学に確実な影響を及ぼし、新たな展開の可能性を示唆していることである。

こうした新たな理論的観点に加え、研究を行う上での方法論においても、様々な議論がなされている。従来のような実験室実験や質問紙調査だけではなく、会話分析等、新たな研究方法が開発されることとなった。日本においても、これまでの科学的研究法(≒定量的手法)を反省し、フィールド調査やライフヒストリーインタビュー、参与観察等、「質的研究法」に対する関心が高まりを見せている⁴⁾。心理学における質的な研究法に関する入門書・専門書も多く発行されるようになり(例えば、無藤ら, 2004)、2004年には日本質的心理学会が設立されるに至っている。「質的心理学」への関心と注目は、それまでの定量的手法を偏重してきた心理学研究法だけでなく、それを支えていた「人間観」そのものへの問い直しを含み、社会心理学に限らず、発達心理学・臨床心理学等も巻き込みながら、ディシプリンの再編を促すものとなっている。

以上、駆け足で、社会心理学の「歴史」の整理を行った。社会心理学史だけで何冊もの本ができるほどの分量であるため、本稿での整理では不十分に過ぎることは、筆者も自覚している。それでも、このわずかな整理の中だけでも、社会心理学の成立・発展・転換に際して、他ディシプリン、及び、様々な社会的な出来事と深く関わっていることが見て取れるであろう。

2-2 社会心理学の「危機」：「臨床」の衝撃

およそあらゆる学問分野には、その「危機」を指摘される時期があるだろう。前章で整理したように、社会心理学も、ある時期には、ディシプリン内外から様々なかたちで「危機」が叫ばれるようになった。そうした指摘は、必ずしも、アカデミズムの立場からだけではない。大きな社会的事件が起きた場合、その事件とのかかわりの中で、ディシプリンのあり方そのものが問い直されることがある。

近年の社会的事件と社会心理学のディシプリンとの関係の中で、こうした「危機」が論じられたのは、1995年に発災した阪神・淡路大震災を契機としたものであった。例えば、精神科医の野田（1995）は、震災に際しての社会心理学者の言動を、「専門離人症」と称して、厳しく非難している。「専門離人症」について、野田は、「自分の学問分野の既存テーマを繰り返し持ち出し、震災で起こっている現実にはほとんどかかわることのできない一群の人々の傾向」、「専門家であるがゆえの社会的現実感の喪失」（p.171）としている。また、現代の細分化された学問は、「その限定された分野から現象を見ていけばいほど、複合して生起する現実から専門家を隔てていくという反作用を持っている」（pp.171-172）とも、野田は指摘している⁵⁾。

自身も被災しながら、発災直後から被災地・西宮市の避難所で救援活動に従事し、災害救援ボランティア活動の展開について研究を重ねてきた渥美（1996）は、野田のことは踏まえながら、次のように述べている。

そもそも学問は、研究と実践の積み重ねを通して、理論の精緻化をはかることによって進歩する。そして、学問に対する評価とは、その理論をもとに展開された研究が何らかの形でわれわれの日常を豊かにするか否かという点にかかっている。被災地で見かけた社会心理学者は、調査用紙を片手に被災地にやってきて「データ」を収集していた。そもそも、悲しみに打ちひしがれている被災者に強引に質問を投げかけていくことは、人道的にゆるされるのかと疑問に思う。百歩譲って、研究のため、また、今後の災害対策のために、データが必要だとしても、彼らの持ち帰った「データ」にそれほどの価値があるかは疑わしいと思う。（中略）彼らには、これまで私が被災地で生活をしながら、何度も何度も喉元まで出かかっては飲み込んできた言葉を投げかけておだけにしよう。「あなたがたはいったい何を見ていたのですか？」と（渥美，1996，pp.194-195）。

こうした批判は、アカデミズム内部から寄せられたものと比して、さらに深刻であると言えるだろう。

人の心を研究しているはずの（社会）心理学が、その心が危機に瀕している場面において「役に立たない」と言われたも同然だからである。

こうした社会的事件との関係の中で、言わばディシプリンの外から寄せられた批判は、先に述べた、社会心理学に対する内在的な批判と併せて、社会心理学の前提そのものを問い直す動きの原動力となっている。そこでは、「研究対象」である人々との関わり方等、研究方法や倫理的問題にとどまらず、それらを支える研究の枠組み自体（人の「心」をどういふものとして捉えるか、という認識論的問題など）に、大きな変更が迫られたのであった。まさに、「臨床」の衝撃であったと言えるだろう。

2-3 人間科学としてのグループ・ダイナミックス

筆者の専門である「グループ・ダイナミックス」は、ポストモダンの諸潮流を理論的背景とし、また、阪神・淡路大震災のような社会的事象と研究者との関わりの中で成立をしていった⁶⁾。杉万(2001)は、グループ・ダイナミックスを、「集合体の全体的性質（集合性）の動態を研究する人間科学」と定義している。この定義には、人の「心」を研究するにあたって、分析の枠組みを、個人から集合体（広く、社会・文化を含む）に移行すること、及び、自然科学的手法のような研究者と研究対象者の間に一線を画す研究方法を採用しないこと（「人間科学」という方法を採用すること）が述べられている。人間科学では、研究者と研究対象者（当事者）との交流が前提となるため、研究を通して、当事者らとよりよい実践に取り組むこと（共同の実践）が強く志向されている。こうした枠組みは、従来の社会心理学とは、前提となる理論も、採るべき研究方法も、大きく異なることを示している。かつてレヴィンが唱えたグループ・ダイナミックスの理念（「よい理論ほど実践的なものはない」）を引き継ぎつつ、それとは異なる研究枠組みであることを強調するため、「人間科学としてのグループ・ダイナミックス」という呼称が用いられることもある。

渥美(2001)は、このグループ・ダイナミックスの研究枠組みを、以下の図のように表している（Figure 1）。言うまでもなく、これらの5項目は、独立しているわけではなく、互いに分かちがたく結びついている。研究枠組みの全体像を示すために、便宜上設けられた区分に過ぎない。以下、渥美(2001)に基づきながら、ごく簡単に、この枠組みについての説明をしよう。

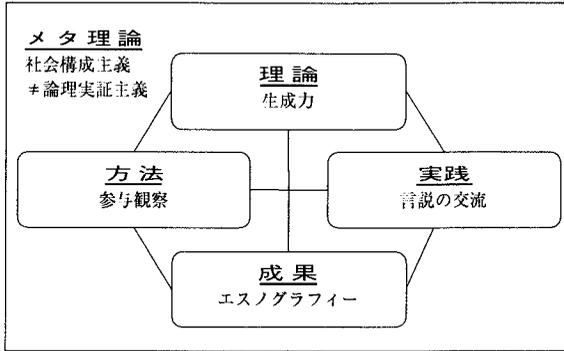


Figure 1. グループ・ダイナミクスの枠組み(渥美, 2001, p.13)

グループ・ダイナミクスでは、『理論』は、研究者が当事者との共同実践の中で「抽象化して述べた言説」のことでされている。理論は、現場からのみ生み出されるのではなく、様々な既存の理論も援用され、研究が進められる。それらは、例えば共同主観的認識論(例えば、廣松, 1982)や、社会学的身体論(例えば、大澤, 1990)など、伝統的な心理学出自のものには限定されていない。ただ、こうした理論は、外在的実実との照合が進むことをもって「良い理論」とされるのではなく、「生成力」(ガーゲン, 1998)、即ち、「社会の前提そのものを疑い、現代の社会生活そのものを疑い、その結果、社会の中に新鮮な代替案を生み出す能力」によって評価される。

研究の『方法』としては、当事者の生活世界にどっぷりと入り込みつつ、かつ同時に、そこから身を引き、外部の視点から当事者を見ることができるよう手法が望まれる。筆者をはじめ、グループ・ダイナミクスの研究者がしばしば参与観察法を用いるのは、こうした理由による。もちろん、定量的な手法や、従来のような実験室実験法・質問紙調査法を排斥しているのではない。ただ、そうした手法を用いて得られた結果を、どのようなかたちで成果に結びつけるのが問題となる。

研究の『成果』は、「エスノグラフィー」のようなかたちを取るようになる。この『成果』は、一度発表すれば終わり、なのではなく、『実践』、即ち、当事者との言説の交流の中で、不断の改訂作業にさらされている。また、単に論文としてまとめられたものだけが『成果』なのではない。研究の結果得られた知見を、より良い実践に活かすため、その『成果』のかたちにも、様々な工夫が凝らされている。例えば、地域の防災力を高めるためのワークショップの方法(渡邊, 2000)や、防災教育のためのゲームの開発(矢守・吉川・網代, 2005)など、研究のアウトプットのかたちは様々である。

研究の前提である『メタ理論』では、従来の社会心理学が依拠してきたとされる論理実証主義ではなく、「言説によって社会が構成される」とする社会構成主義が採用されている。このため、研究者と当事者は、主に言説を通して必ず交流することが前提となっている。

本章の最後に、社会心理学の「歴史」を紹介した後このような枠組みを紹介した意図について説明しておこう。心理学を専門としていない読者におかれては、枠組みの「中身」自体、あまり面白みのないものだったかもしれない。あるいは、問題が多すぎて使えない、との批判もあるかもしれない。しかし、もし、読者におかれて、そういう引っ掛かりのようなものが生み出せたなら、この図式が、「触発の平面」を切り開く一助となったと言えるだろう。

本稿でこのような図式を示す意図は、社会心理学の「歴史」におけるひとつの到達点としての「人間科学としてのグループ・ダイナミクス」のかたちを提示するだけに留まらない。ディシプリン間での「横断」を試みるためには、相互のディシプリンの特徴について、十分に把握しあう必要がある。筆者としては、この図式を、(心理学以外の)専門家が、自分のディシプリンの特徴を改めて整理をする際の「道具」としても使ってもらうために提示したつもりである。例えば、この図を見ることで、ある人は、自身の専門分野がこのような5つの項目に分けて整理することができるかどうか考えられるかもしれない。あるいは別の研究者は、自分のディシプリンの特徴・面白さをどのように整理して伝えることができるか悩むことになるかもしれない。

Figure1は、グループ・ダイナミクスというディシプリンの特徴について、簡潔に図式化したものである。あるディシプリンのかたちをその歴史とともに提示することは、他の専門分野に属する研究者にとって、これまで特に意識してこなかった自身のディシプリンに関する「暗黙かつ自明の前提」を、改めて問い直すきっかけとなりうるだろう。ディシプリン間でのより深い協働は、そうした自己省察を踏まえることで、より深いものになるのではないだろうか⁷⁾。

3 今後の展望

本稿では、社会心理学の成立と発展の歴史を駆け足で追い、グループ・ダイナミクスの枠組みを示すことで、筆者の依拠するディシプリンについての「見取り図」を示すことを試みた。社会心理学は、その成立時から「科学的研究法」に傾倒しつつも、様々な他のディシプリンからの影響を受け、研究の対象である人間の「心」の前提そのものをも大きく変化させながら、展開している。以上の議論から、「触発の平面」を開き、ディシプリンを越えたく横断的な知>を作るために、どのような展望を描くことができるだろうか。

<横断的な知>を、単に異業種間の協働作業であると捉えるならば、既に多くの研究が蓄積され

ている。例えば、グループ・ダイナミクスでは、以前より、小集団の活性化等、集団を変化させるための様々な実践的手法を開発し、実践を進めてきた。グループ・ダイナミクスの祖、クルト・レヴィンは、第二次世界大戦中に、アメリカ国民の食習慣を変化させるための一手法として「集団決定法」を開発し、成果を挙げている。こうした実践は、現在でも、職場における人間関係論等で活用されている（例えば、吉田，2001）。しかし、＜横断的な知＞とは、単に小集団活動のテクニックを学べば生み出せるほど単純なものではないだろう。＜横断的な知＞の成立には、それまでのディシプリンを問い直す契機が含まれると考えられるからである。

ここで、専門分化したディシプリンから＜横断的な知＞を生み出すためのひとつの意見として、ある心理学者の見解を紹介しよう。冒頭で述べたように、心理学はその歴史の中で多様に変化・分化し、様々な領域へと分派している。それゆえ、心理学というディシプリン内部においても、他の分野の人々と議論をすることさえ困難な状況になっている。そうした状況に対して、ワーチ（2004）は、次のように述べている。

ワーチは、心理学と他の専門領域および一般の公衆との対話が妨げられてきたことについて、孤立した個人ないし「真空の中の」精神過程を研究しようとする学問的性質と、極めて専門分化した制度的な構造の2つの原因があると述べている。前者について、ワーチは、「心理学の討論は、人間の心と行為に関する一貫した理論を構築する作業に加わっているにもかかわらず、しばしば直接的な関与者意外は誰も興味を持たないような、難解な、仲間うちだけの論争に身をゆだねてきた。」（ワーチ，2004，p.18）と批判する。一方で後者について、細分化が進んでしまったために、「アメリカ心理学会の分野全般についてはいうまでもなく、特定の分科会で進んでいることに遅れないでついていくことさえほとんど不可能になってしまうし、他の専門領域の発展と並行していこうと試みることなど完全に問題外である」（ワーチ，2004，p.18）と嘆いている。

しかしながら、ワーチは、上記のような現状がありつつも、各研究領域間の分断をなくすような研究課題の設定は可能であると述べている。そのためには、(1) 別個の専門領域に広がる研究者たちによって理解され、かつ拡張していけるようなタイプの理論的枠組みを作ること、及び、(2) 様々な専門領域の研究者の参加が機械的に阻まれてしまうことのないような方法論を設定すること、の2点が重要であると述べている。

こうした取り組みを行うためには、研究者の集団的努力が欠かせない、とワーチは述べる。それを行うためには、専門領域を越えて広がる実践的な問題を理解しようと努力し、それに応えようとする試みが必要となる。こうした努力と挑戦は、既に、批判理論のフランクフルト学派の研究者や、1910

年代後半から1930年代半ばまでのソビエトの研究者たちによって行われてきた、とワーチは紹介している。

ここで挙げられている問題状況は、心理学者であるワーチが、現在のアメリカ心理学会の現状を嘆いて述べたものである。しかし、こうした問題は、心理学にとどまらず、広く人文学全体においても指摘しうるものと言えるだろう。専門領域を越えて広がる課題の理解（及び、その解決）を志向した研究枠組みは、「issue-orientedな枠組み」と言うことができるだろう⁸⁾。反対に、ディシプリン固有の問題に取り組むことは「discipline-orientedな枠組み」と言える。昨今話題になり、またしばしば批判の対象と成る「学知のタコソボ化」は、discipline-orientedな枠組みを追求しすぎた結果と言える。

言うまでもなく、筆者は、後者のような研究のあり方が悪いとか、全てissue-orientedな研究になるべきだと主張したいわけではない。基礎が固まっていなければ、架橋することもできない。そのため、既存のディシプリンの発想や成果を完全に無視したような研究枠組みは、砂上の楼閣のように脆いものになってしまうだろう。それゆえ、＜横断的な知＞のあり方は、基本的には、既存のディシプリンを前提としたものとなるだろう。

また、何の準備もなしにissue-orientedな枠組みを作ることは、砂上に楼閣を組むよりも困難な作業であろう。ある共通の課題があることで、ディシプリン間の対話は進み、既存のディシプリンを越えた新たな知の枠組みが生まれることは想像に難くない（逆に、何の目標も課題もなく、ただ越境横断のみを目的に交流しても、十分な成果は得られないだろう。＜横断的な知＞とは、disciplineを越えたissueを志向してこそ、成立し得ると言える）。しかし、ディシプリン内ですら専門分化が進んでいる昨今の状況では、ディシプリン外の研究者と協働することは大変な困難を伴うだろう。

そこで求められるのが、「討議空間のデザイン」である。その全体像と成果については、本プロジェクトが終了する来年度に示されることとなるだろう。本稿の1・2章で提示した「歴史」と「図式化」は、「触発の平面」を開くための「道具」であった。これに限らず、様々な「道具」を示し合いながら議論を進めることは、理解・解決困難なissueに向かうために、必要なプロセスとなると考えられる。本稿で提示した内容は、「触発の平面」を開く「道具」として用いるには、未だ十分に洗練されているとは言い難いかもしれない。より洗練された「道具」を示し、＜横断的な知＞を構築する準備に寄与することは、筆者の今後の課題とさせて頂きたい。

(特任研究員)

引用文献

- 渥美公秀 2001 ボランティアの知——実践としてのボランティア研究—— 大阪大学出版会
- 渥美公秀 1996 これからの災害救援 城 仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子 編 心理学者がみた阪神大震災——心のケアとボランティア—— ナカニシヤ出版 pp.192-216.
- コール M. 天野 清 (訳) 2002 文化心理学——発達・認知・活動への文化-歴史的アプローチ—— 新曜社
- エンゲストローム Y. 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏 (訳) 1999 拡張による学習——活動理論からのアプローチ—— 新曜社
(Engestrom, Y. 1987 *Learning by expanding: an activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki: Orienta-Konsultit.)
- ガーゲン K.J. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 (監訳) 1998 もう一つの社会心理学——社会行動学の転換に向けて—— ナカニシヤ出版
(Gergen, K. J. 1994 *Toward transformation in social knowledge*. 2nd ed. London: Sage)
- 廣松 渉 1982 存在と意味——事の世界観の定礎—— 岩波書店
- 家高 洋 2005 1970年代以降の科学社会学の展開——「横断性」の観点から—— 大阪大学 21世紀 COE プログラム「若手研究集合」ディスカッション・ペーパー (未公開)
- 無藤 隆・やまだようこ・南 博文・麻生 武・サウタツヤ 2004 質的心理学——創造的に活用するコツ—— 新曜社
- 中島義明・子安増生・繁樹算男・箱田裕司・安藤清志・坂野雄二・立花政夫 1999 心理学辞典 有斐閣
- 野田正彰 1995 災害救援 岩波新書
- 大橋英寿 1998 沖縄ジャーナリズムの社会心理学的研究 弘文堂
- 大澤真幸 1990 身体の比較社会学 I 勁草書房
- 佐藤郁哉 1992 フィールドワーク——書を持って街に出よう—— 新曜社
- 杉万俊夫 2001 グループ・ダイナミックスの理論 中島義明 編 現代心理学 [理論] 事典 朝倉書店 pp.641-659.
- 杉万俊夫 編著 2000 フィールドワーク人間科学——よみがえるコミュニティー—— ミネルヴァ書房
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一 編著 人間科学研究法ハンドブック ナカニシヤ出版
- 渡邊としえ 2000 地域社会における5年目の試み——「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察—— 実験社会心理学研究, 39 (2), 188-196.
- 渡辺恒夫 2002 心理学の哲学とは何か 渡辺恒夫・村田純一・高橋藩子 編 心理学の哲学 北大路書房 pp.3-20.
- ワーチ J.V. 2004 心の声——媒介された行為への社会文化的アプローチ—— 福村出版
(Wertsch, J. V. *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, Mass: Harvard University Press)
- ウィリッグ C. 上淵 寿・大家まゆみ・小松高至 (共訳) 2003 心理学のための質的研究法入門——創造的な探求に向けて—— 培風館
(Willig, C. 2001 *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Open Univeristy Press.)
- 矢守克也・吉川肇子・網代 剛 2005 防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション——クロスロードへの招待—— ナカニシヤ出版
- 吉田道雄 2001 人間理解のグループ・ダイナミックス ナカニシヤ出版
- 吉森 護 2001 アナトミア社会心理学——社会心理学のこれまでとこれから—— 北大路書房

註

- 1) アメリカ心理学会 (APA) のウェブサイトを参照
<http://www.apa.org/about/division.html>
- 2) 渡辺は、哲学・思想と心理学説との関係について検討するため、「心理学の哲学」の必要性を唱え、それを、「心理学のいろいろな概念・理論・方法の哲学的諸前提を明らかにし、理論的哲学的反省を行う、心理学者と哲学者の協働領域」として定義している (渡辺, 2002, p.9)。
- 3) ただし、筆者が意図的に傍点を添えたように、「個人を指定する」かどうか、あるいは研究方法として「科学的な手法を採用する」かどうかは、必ずしも自明の前提ではない。
- 4) 社会心理学においても、フィールドワークのような「定性的な」研究手法は、従来から用いられてきた。例えば、大橋 (1998) の沖縄シャーマニズムに関する研究に代表されるような重厚なフィールド研究は、東北大学の心理学研究室を中心に、既に半世紀近い蓄積がなされている。ただ、そうした研究があまり注目を集めてこなかったのは、従来の社会心理学的研究が「科学的研究法」を重視し、定量的なデータ分析を重んじてきたからだと言える。
- 5) 野田が具体的に非難したのは、阪神・淡路大震災という複合的な災害という現象に対して、「流言蜚語」という、関東大震災時に生じた現象のみを取り上げて解説を繰り返した一部の社会心理学者たちであった。
- 6) もちろん、阪神・淡路大震災が起きたから、社会心理学からグループ・ダイナミクスが生まれた、という図式では捉えきれない。例えば、グループ・ダイナミクスの代表的な研究者の一人である杉万は、1990年代のはじめから、鳥取県智頭町を中心とする山間過疎地域の村おこし運動に関して研究を進め、グループ・ダイナミクスの研究枠組みを洗練させている (杉万, 2000)。理論的なく横断>の蓄積が進む中、不幸にして起きた震災という事件が、グループ・ダイナミクスの枠組みを確立させる一助となったと言えるだろう。
- 7) もちろん、これ以外にも、議論の端緒を開く方法はあるだろう。研究集合において、あるディシプリンの最新の (そして無傷の) 成果を示すより、論争中のトピックスを提示した方が、議論がしやすいのではないかと、との指摘を受けた。そうしたトピックスを整理したものもまた、「触発の平面」を開くための重要な「道具」となるだろう。
- 8) グループ・ダイナミクスにおいても、「issue-oriented」な理論的枠組みの重要性について議論がなされている。最近では、日本グループ・ダイナミクス学会第 50 回大会メインシンポジウム (2003 年 3 月・キャンパスプラザ京都) での議論等。

隠された歴史との対話

——実証主義の限界についての方法的考察——

森 宣雄

<要旨>

政治史・社会運動史の方面では、資史料にもとづいた実証的検討をおしすすめていくと、実証可能な空白の領域があることに行き着くことがある。当事者が黙秘したり経過を隠蔽することがしばしばだからである。本稿はこの隠された歴史にどう向き合うことができるか、沖縄戦後史を材料として論じた。主たる論点は、語りえない空白をはらんだものとしてのリアルな歴史にわたりあうことのできる歴史記述の可能性である。すなわち、不透明のままにある過去にたいして、史実を究明していく作業とは別の思想的次元で、黙秘や隠蔽が生み出してきた効果、あるいは逆に、語られた歴史が生み出してきた効果を検討し、その効果のなかに、研究による歴史叙述を介入させる、沈黙の歴史との対話空間の構成が追究される。

<キーワード>

実証史学、歴史の隠蔽、歴史と現在の連帯、歴史としてのイデオロギー対立、思想課題の位相、沖縄独立論

はじめに

わたしはこれまで、実証史学的方法論に立って史料収集・編纂を一方ですすめながら、他方では史料からは実証できない領域にある歴史を叙述する方法について探究をすすめてきた。このペーパは、こうした自分自身の歴史研究の方法論についてかえりみて再検討しつつ、紹介することを主題としている。このような事例を提起することが、本研究集合において、人文学の伝統的な方法論と、そこからのさまざまな認識論上の切断をへた革新的な方法論とのあいだの対話関係をゆたかにするうえで、なにかの議論の手がかりになりはしないかと考えてのことである。

臨床性との関わりでいうならば、歴史が当事者の口から語られ、史料が編集されていく現場が、その臨床的な問いと知のあり方を検討する舞台となる。そしてその史料やそれにもとづく研究を公刊する作業をつうじて働きかけてゆく現代日本社会のある部分もまた、ひきつづいて問題対象の範囲に入る。

学問分野の越境横断については、歴史学における実証主義（「歴史主義」と批判される）が広い意味で科学主義の一部であるとされることから、歴史記述の実践的方法論を模索する作業をととして、科学主義・客観主義を再検討するとりくみのひとつとして、連関やひろがり成り立ちうると、まずさしあたりは設定しておきたい。

編成としては、まず「Ⅰ 歴史研究における歴史と現在の連帯」のパートにおいては、最初に大枠の歴史学的認識論について短く紹介し、そのうえで、自分の実践例から方法論の一部を抜粋紹介する。Ⅰは本共同研究会にディスカッション・ペーパーとして提出したもの（若干加筆した）だが、「Ⅱ 沖縄人民自治独立論のゆくえ」においては、研究会での討議の際にいただいた、方法論的立場の表明だけでなく具体的事例をあげるべきだとの意見にこたえるかたちで、一事例の補足を加えた。

Ⅰ 歴史研究における歴史と現在の連帯

1 実証史学とく消滅の歴史学>

歴史学における実証主義の方法論は、19世紀なかば以降の西欧「科学主義の時代」のなかで確立されたといわれる。二宮宏之によると、そこには次の2つの側面が明確に区別されることなく混在していた。ひとつは立論の根拠を、史実の厳密な批判的確定という基礎の上に置こうとする「実証的方法」。もうひとつは、その実証的方法でえられた史実を絶対視する「実証主義哲学」。前者は歴史研究が学問として成り立つためには欠かすことのできない方法論上の基礎として受け継がれているが、この方法を、その限界を勘案することなく科学的真理として絶対視するところに、実証主義歴史学の難点が指摘されてきた。いわく、時代の権力のありかに集中する文書史料をもとに、断片的な史実の考証に没頭したために、史実間の連関をつなげられないまま、起源論・系譜論を立てて決定論的な思考、進化論的思考でしか歴史を見れなくなった、また人間の歴史を権力者の周囲

の事件史を中心とした政治史・外交史として開き込み、史料の外にある世界をみる目を閉ざしていったなど。

そこで20世紀前半からの「新しい歴史学」は、表層的な事件史を包み込んでいる「全体史」の多層的・多時間的構成、生きた人間たちの歴史的な生活世界の全体性の把握（「生きた歴史学」、社会史）を志向してきた。また歴史の再構成においては歴史家自身の主体的な問いかけ（問題設定）が決定的な機能をはたすことの承認の上に立って、過去と現在の緊張感にみちた対話関係（ここでは当然に、現在のがわからず過去への一方的な歴史観の投影は、実証主義的方法的手続をふむなかで、抑制されなければならないものとされる）のなかに、歴史は問いかけとして再構成されるとの認識論が立てられるようになった（以上は二宮宏之「歴史的思考とその位相」二宮『全体を見る眼と歴史家たち』平凡社ライブラリー、1995年所収を参照）。

ここに一瞥した近代歴史学の流れのうえに、わたし自身の歴史研究は、これまでは歴史学内で問題とされることの少なかった点、「実証的方法」の批判的再検討をおしすすめる試みであると考えている。

同じく二宮宏之は、「歴史家の営みは、歴史が残した痕跡を手掛かりに、歴史的世界を読み解こうとする試み」だと述べる（同上、61頁）。この比喩を借りていえば、痕跡とは、あるものが焼失したり失われたがゆえに生まれるものである。もちろん歴史学は過去のすべての復元をめざそうとするものではなく、価値づけと選択をあえてする学問であることは、共通認識となってきた（小谷汪之『歴史の方法について』東京大学出版会、1985年、81頁以下参照）。しかしそこで次に議論の焦点となるのは、その選択や価値づけの公正さ適切さなどであり、神々の争い、イデオロギーの相克であった。その争いのなかで実証性（実証的妥当性・信憑性）の程度が論じられることはあっても、実証的方法にたいする信頼を根本的に問いなおす理論的実践的な取り組みは、あまり行なわれてこなかった。

これにたいして、わたしは次のような＜消滅の歴史学＞の構想を立てて論じた（森宣雄『地のなかの革命 潜在 - 遍在する沖繩戦後史の時代経験』現代企画室より2006年出版予定、の「付論 消滅の歴史学と＜霊媒＞の歴史」より）。

一般に社会運動史の勘所となるような重要なポイントの多くは、体制／反体制どちらのものであれ、同時代の政治的な脈絡からタブー化されたり、幾重にも粉飾をかさねられながら語られるものである。こうした制約は政治的対立が人間の社会に不可避であり、またその対立をめぐる

権力の弾圧や暴力があとを絶たない以上、さげられない政治史・社会運動史研究の宿命である。そうした宿命のもとで刻まれてきた政治史・社会運動史の書き換えの年輪は、適切な敬意をもって、だがそれゆえにこそ厳密に、実証的手続きをふんで、読み解かれるべきだろう。本書の記述がめざすところは、いわゆる<客観的で正しい史実>の構築による過去の裁断、それによる権力的で一元的な歴史の語りの再生産などではなく、過去と現在のあいだの、そして未来にむけた、対話的回路の設定である。

それぞれが固有の場面を負った歴史的史料がさまざまなかたちで封印をやぶってあらわれてくるとき、それらを並べてみると、歴然たる歴史の書き換え、粉飾、捏造が明らかになり、闇のなかから姿をあらわす得体のしれない隠滅の硬い意志を前にして、しばし茫然としてしまうことがある。歴史は当事者たちによって消滅させられ、ある意味でこの歴史の消失は歴史の成就である。しかしここで、事象にたいして外在的な、真理の超越的時空に逃げこんで隠滅をなげき、歴史のただ中にいる当事者たちを断罪してみても、なにも得るところはない。

表現の困難のなかにある歴史は、その固有の困難さにおいて内在的にくぐるところがなければ、記述することはできない。そしてその困難性のゆえに、歴史のなかの困難は必然的に隠蔽され消失し、この消失に裏打ちされることによって、語りうるものとしての歴史が構成されてゆく。そうであるならば、そこでの「歴史との対話」とは、いったいどんな対話であろうか。

成就した歴史の背後には、つねにすでに消失した歴史が寄り添っている。隠滅や捏造、忘却のなかで消失することによって、歴史のなかの困難は、成就した歴史のなかに、語られることのない困難（空白）としての自己を保持しており、これを裏側からいえば、成就した歴史とその主体は、困難が背後に隠れることによってはじめて主体として成り立ち、主体として語りだす。語りは隠滅に支えられ規定され、条件づけられているのである。ならば成就した歴史の背後に影のようにとり憑いた、歴史の亡霊に出会い、歴史認識の体系をおびやかされること、これが「歴史との対話」のひとつのありさまとなる。

当事者によって消去され、永遠に復元できない歴史の空白のなかにうごめく歴史の亡霊との対話——そう言ってしまうと、それは実証的歴史研究には似つかわしくなく、なじまない、向こう側の人間のやる仕事だと、切り分けられるかもしれない。しかしむしろ逆ではないか。実証的歴史研究の土台が消滅の領域に支えられ、それをかかえこんでいる以上、こうした論点は、実証史学自身にとって欠かすことのできない問題領域として獲得されなければならないものであるだろう。実証がその限界領域を適切に見極め、自己を知ることがなければ、自己のいとなみに無

自覚なまま産出された実証史学の研究成果とは、ただその時代の権力の恣意や偶然によって残された記録をなぞるだけの、それ自体では価値を自立させえない（つまり時代の権力に事後的に付き従うだけの）報告書づくりに終わってしまう。そしてそのような、歴史記述としてそれ自身が自立しえないような報告書類は、実証史学の精髓と呼ばれるような、これまでの成果のなかには、もとより存在しないのではないか。むしろ実証にもとづき実証主義を内破する突破は、これまでさまざまなかたちで試みられ、そうした探求こそが、歴史学の発展をもたらしてきたのだと考える。

話を本筋にもどすと、歴史が消滅をかかえこんでいる以上、いやむしろ史料によって実証的にたどることのできる事象が、氷山の一角というべき点であるにすぎない以上、歴史研究は成就した歴史とその主体を成り立たせて消えてゆく、消滅の土台の生成を感知できる方法をもたねばならない。これまでこうした問題をめぐっては、いわゆる「新しい歴史学」の課題として、さまざまな試みがなされてきた。だが一般的にいて、そこで着目されてきた海も、心性も、歴史家が合理的に捕捉可能で表現可能な事象を、歴史の要素や擬似的な歴史主体として歴史の叙述のうちに組みこむことで、歴史を拡充させ、成就をさらに推し進めていく志向をもってきた、そういうことができるだろう。

これにたいして本書は、史料から実証的に表現することも捕捉することもできないものこそが、実証的次元で成立している歴史主体を、主体として成就させ存在させているという論理的必然に方法論的な基本設定を置き、そこから歴史認識および歴史的世界認識の方法を、反転的に再起動するのである。すなわちここで本書が探究する歴史学の構想を呈示すると、本書は実証史的検証のなかから〈消滅の歴史学〉というべきものを浮き彫りにさせてゆく、その事例研究としてある。

〈消滅の歴史学〉は、実証的な史料批判、文献学的考証、それに史料に書かれた／書かれなかったことがらについてのテキスト分析をかみあわせてゆくその先に、隠された歴史、能動的に消滅させられた歴史を見いだそうとするものである。実証され論じられる歴史の主体や史実とは、その主体化を拒んだり、もれおちていったことともによって支えられ、成り立っている。そのありさまを、たとえば歴史の書き換えの多い政治の領域でとらえだし、主体との向き合い方、とらえ方を多次元的に構成しなおす。すると、善悪二元論に立った裁断や、ゼロサムゲームのおいつめ、そしていわゆる政治的正しさ（問題のなさ）に立って当たり障りのない立場からものごとを評していくやり口、これらとは

異なる次元が二項対立のはざまから浮かび上がり、そこで思想的な介入の余地領域がひらかれる。それは実証的方法とその限界をふまえて、歴史を沈黙や黙秘、隠滅をふくめた次元、実証の科学の手の及ばない次元で、人間の歴史認識を十全に思想的に問題にする、その沃野をきりひろくためする方法論である。

消滅の領域を浮き彫りにするまでの方法論は、通常の実証的分析、史料批判であり、いわゆる科学主義の範疇にあるものといえる。だがその実証的分析によって、実証しえない沈黙の領域があることに行きついたその先は、過去にあったできごとそれ自体をめぐる問いよりも、その過去の事実をめぐってその後にかかれ語られてきたことからの変遷、推移が、より大きな意味をもつようになってくる。むろんその歴史の語られ方の変遷もまた、実証的分析や史料批判の対象となるのだが、科学主義あるいは客観主義の立場とは明らかに異なったスタンスが、ここから必要になり、開かれてくる。ある出来事から起きてくる歴史の語りの変遷という波は、当事者の証言からはじまって、いまこれに分析および評価つまり価値づけを加える研究者自身の足もとにまで及んでいるからである。

自分自身の歴史研究もまた、固有の時代的背景をもった歴史の語りとして存在し、過去からの語りの変遷・推移の一コマとして、おそらく後代からは遇されるであろうこと。もしこの認識が、歴史研究に無力さをつきつけるものとして受けとめられるならば、そこで描かれているところの歴史研究のイメージは、時代によって揺るがされることのない絶対的な真実を記述しようとするいとなみのだろう。だが歴史が過去それ自体ではなく、現在の視座から過去にあたえる意味づけによって成り立つことはだれしも否定できない。そしてこの意味づけの面で大きな意味をもつのは、過去の事実をめぐって語られてきた歴史とのあいだの関係を、どういま築き、過去を歴史としてよみがえらせるかとなる。歴史事実とされてきたことからのめぐる語りの歴史とのあいだに、また新たに関係を織りなし、築いていく行為、「歴史」への介入として、歴史研究は書かれることになる。ここではいわゆる客観的なアプローチというものは成立しえない。もし客観主義的立場というものがあるとすれば、それは過去にたいして超然的な位置を占めようとする思想的立場の謂いであるかもしれない、また過去をありのままに客観的にとらえるという姿勢の背後には、じつのところ、過去と現在との関係性を切断する現在中心主義的な認識があるのかもしれない。

さて、こうした〈消滅の歴史学〉の方法論上の有効性を説明し、検証するには、その具体的な実践例を示すにしくはない。ところが、隠滅された歴史がはたしている役割を浮かび上がらせる作業は、そのあぶり出しにいたるまでのプロセスを長く具体的に示す必要があり、それは独立した学術論文や研究書の提起によってはじめて可能になる。そうした事例は、既発表および近刊の論著からい

くらかのヴァリエイションをもってあげることができるが、ここではさしあたり、加藤哲郎・森宣雄・鳥山淳・国場幸太郎編『戦後初期沖縄解放運動資料集』（不二出版、2004-05年）第3巻の解説論文、森宣雄「沖縄非合法共産党における連帯の問題 —— 歴史と現在 ——」（以下『資料集』『解説論文』と略記）から、この論稿のポイントである「歴史と現在のあいだのある種の連帯」という方法的論点に関係する部分を抜粋紹介するのにとどめることにしたい。

本題に入る前に、まずここで主題となる沖縄非合法共産党について簡単に紹介しておこう。沖縄非合法共産党とは、米軍統治下の戦後沖縄（1945-72年）において、共産主義政党的存在をゆるさない統治政策に抗して、非合法の形態で地下活動を展開した運動体である。米軍政府に認可された合法政党である沖縄人民党（当時は琉球人民党）の幹部・中心メンバーが、奄美の合法政党である奄美共産党の在沖縄支部メンバーとともに、1952年6月、人民党の背後に結成した。そして53年末からは日本共産党の非合法の沖縄県委員会として組織された。人民党書記長である瀬長亀次郎が沖縄県委員会委員長となり、書記局の責任者は国場幸太郎が担当した。

沖縄非合法共産党は人民党や奄美共産党、日本共産党のいずれとも異なる独自の運動を展開した。その運動路線は、一政党の党利党略から離れて、沖縄革新陣営の統一戦線を大衆規模でおしひろげることになった。54年秋に人民党が米軍政府から徹底弾圧をうけ機能停止におちいったあと、非合法共産党は、恐怖政治のもとに沈黙を強いられた沖縄社会が「総反撃」に再起する道を、この統一戦線の運動路線にもとめた。そしてじっさいに56年夏、沖縄住民がいっせいに対米抗議運動にたちあがった、いわゆる「島ぐるみ闘争」（6月20日に各市町村ごとに開かれた住民大会への参加者は全人口の半数、40万人ともいわれる）があらわれるまで、非合法機関紙の発行、分断された抵抗運動の連結、中道派を再起させるための支援など重要な役割を担った。

その地下活動の成果は、54年に弾圧で投獄された瀬長が、出獄した56年の年末に首都那覇の市長に当選し、弾圧のシンボルから総反撃のシンボルへと再起をはたすことで明確になった。しかし世界的に名を知られる人物となった瀬長は、その後日本共産党との連携を強め、党利党略から自立した統一戦線運動を担った非合法共産党をたんなる日本共産党の地下組織に変えていった。そして59年には統一戦線路線の推進者だった国場幸太郎を党から追放するにいたった。これ以後、独自の運動体であった沖縄非合法共産党の存在は人民党・日本共産党の歴史から一切消去され、隠滅されて現在にいたる。

2 二重化され時空をこえる「連帯の問題」

「解説論文」の解説対象となる『資料集』第3巻は、次のような主題を立てている。

図式的にいくらか単純化するというならば、沖縄戦の戦禍のあと、戦後沖縄の土着的革新政党として成長していった沖縄人民党と、ある外部からの動きが合流したところに生まれたのが沖縄の非合法共産党だった。そのため、沖縄非合法共産党の歴史を解明する基礎資料を提供することを目的とする本資料集もまた、第1巻で沖縄人民党を、第2巻で沖縄非合法共産党を主題としたうえで、いま述べた「ある外部」、つまり奄美と日本からやってくる動きとの合流・接合のありかたについて、関係資料を編纂して提起する作業が必要になる。この作業を担うのが本巻「沖縄非合法共産党と奄美・日本」の役割であり、また本資料集に占める位置となる。

米軍統治下の沖縄を活動の舞台とした非合法の地下社会運動が、どのように外とのつながりをもったか。またその「外」のほうでは、この「沖縄問題」をどのようにうけとめたか。そしておつかり合いの衝突をふくめた交流のなかで、たがいのあいだに、なにか新たに生みだされたのか。本巻に収録した諸資料をつらぬくものは、こうした出会いと変容において何度となく問い返され経験された、連帯の問題である。

ここでいう「連帯の問題」は、およそ半世紀前の社会運動における「連帯問題」である。だがたんに過去の問題としてそれに向き合うのでなく、その歴史を問い返す行為、そこに歴史と現在のあいだのつながり方の問題を重ねあわせ、「連帯の問題」を二重化すること、つまり歴史的過去における「連帯問題」を歴史的現在の次元の問題にひきずりこみ、時代と境界を越境横断する歴史認識上の時空間をあらしめること、これを「解説論文」は追究していく。その方法論を提起したのが、次の箇所である。

地下の歴史が要請する歴史

ところで、本資料集がとりあつかうのは、講和条約の発効によって戦時占領が終了した後も継続された軍事支配の明白な不条理に抗して、やむをえず非合法のかたちで展開された、社会運動の隠されてきた歴史である。そこには社会的な公正を求めて、人知れず流された個人のかげがえのない犠牲や、無念の思いなどが、無数にまつまっているかもしれない。思うに、こ

うした歴史は、公正さをそなえた歴史検討の場に迎え入れられることを、その歴史自身がはげしく、自律的に要請してくる、そのような性質の歴史なのではないだろうか。歴史が後代の者に要請してくる、このようなある種の倫理的な呼びかけにとらえられてしまっているとの認識が、じつはいま述べた第4部の編集方針、そして後代のインタビューでの対話の記録をも資料のうちにくめられている、本巻全体の編集の趣旨と、かかわりをもっている。この点についていくらか説明してみたい。

弾圧に抗するなかで非公然の形態で進められた地下活動は、ふつう日の目をみることはない。いわゆる「自然発生的」な大衆運動の起ち上がりを追求する「意識的指導」の側面は、運動が展開されたその当時においては、自然発生的な大衆の起ち上がりという目的が遂げられるなかで、その背後に埋もれていくべきものだった（アントニオ・グラムシ「自然発生性と意識的指導」上村忠男編訳『新編 現代の君主』青木書店、1994年参照）。ところが、本来は地下にあって地下の変革の土壌に溶け入り、見えなままに地下に消尽してゆくはずだった隠された歴史の一端が、思わぬ偶然の折りかさなりのなかで、いまこうして原資料とともに公になってきた。

ふつう「無名の者たちの歴史」として消え去りゆく歴史の一端にふれるとき、わたしたちはどのようにしたらこうした地下の歴史領域に適切に交接することができるのか。かつて問われてきた連帯の問題は、このようなかたちで、いまを生きるわたしたちのもとへも、よみがえってあらわれてくる。ここで検討している問題は、このような意味での、連帯の問題のよみがえりのなかにある。

さて、こうして時代をへだてて、地下の解放運動の实在が地上に姿をあらわしてきたとはいえ、運動のなかで経験された諸事実については、弾圧に抗して秘密裏にすすめられた関係から、あるいは永遠に日の目を見ることもなく隠されて終わるものも少なくないかもしれない。また、もとより証拠を残さぬ細心の注意のもとに、軍事支配に抗して展開された地下の抵抗運動というものは、歴史的な復元という試みの手が本来的に届かない部分をもつ。

沖縄非合法共産党においても、まさにそうである。検挙され自白・密告を迫られたばあいにそなえ、各メンバーは自己の担当する領域外の組織活動の全体を知らされないまま、それぞれの持ち場で活動していた。「自分の任務に直接関係のない組織上のことや、他の同志の任務をセンサクするのは、このような非合法体制下では組織防衛の上からも百害あって一利なしである」との組織原則のもと、どこに細胞があるか「隣にいても分からないようにして」、「そこはも

うそれぞれの琉大なら琉大の人たちに、信頼してもらって」活動していた（『資料集』2巻、136頁上段。および3巻所収「国場インタビュー記録」2参照）。

極限的な政治状況のなかでくりひろげられた地下抵抗運動の脈動は、表面にはあらわれてこない。そのひろがり、地下に隠れて表面には見えないままにある。それが歴史の事実なのである。それでもなお、明らかになった事実や残された諸資料、インタビューなどをかみあわせながら、可能なかぎり、全体像と運動の具体像を描き出してみることは可能であり、これに努めることは歴史研究者の責務でもある。だが事実の完全な究明を志向してなされる、こうしたとりくみとは別に、地下活動をめぐる歴史研究において、それ以上に重要な意味をもつのは、かつては意に反して人目を避けてなされるほかなかった地下の社会解放運動を、公正な歴史的評価・検討の舞台の上に乗せること、それ自体にあるのかもしれない。

ここでは、事実がどこまで公表されるにいったのか、それが重要なのではない。かつて失われていた、そしてそれゆえに追い求められた、社会関係と手続をめぐる公正さを、歴史研究の場においてとりもどし、ある意味で、その歴史のなかの希求を事後的に満ち、成就させてゆくこと、それが、この歴史を研究する場の関係性において、独自に重要な意味を担うようになるということである。

それは運動当事者たちのなした個々の事跡にたいして、後代の研究者が加えていく究明や、良否の評価判定とは異なる次元に生まれる、歴史研究のある種の機能と役割なのかもしれない。後代の研究者は、地下に埋もれてゆく歴史の一端に手をふれるなかで、社会的関係の公正さを求める歴史のなかの渴望に、ある意味でとり憑かれ、当人が意図しなくとも、過去の希求を満ちしていく役割を負わされることになる--あるいはその過去に埋もれた希求を成就させているか、歴史それ自体から問われる位置に立たされる、そういうことだ。さきに述べた、歴史それ自体が歴史研究に要請してくる、ある種の倫理的な呼びかけが、歴史と現在のあいだにこのような関係性を成立させ、うながしてくるのである。

誤解なきように付言すれば、こうした課題にこたえられているといえるような自負は、もちろんのこと、わたし個人にはない。だが、このような歴史の評価・検討の公共空間の成立に資する一助となるなにかを求めて、あるいは歴史それ自体からうながされて編んだのが、本巻第4部である。

もとより社会関係の公正さといったものは、たとえだれか一個人の内に抱懐された善意があったとして、それによって実現されるものではないだろう。自負や忸怩の念などが、いかように個人

の内面にあったとしても、それとはかかわりなく、存在とそのなすところから生みだされるのが社会性であり、それが公正さをそなえるかいなかは、その社会性に参与する個々人のあいだの関係性にかかっている。そしてその公正さの実現は、いつのどの社会においてであれ、それぞれ固有のかたちをとって、困難なのである。だがほかでもない、この公正さの実現が困難であるということの共通性、そしてそれへの渴望の普遍性において、過去と現在の葛藤は時空をこえてつながり、過去は歴史としてよみがえることになるのではないだろうか。

3 断絶のかなたにある歴史との対面

このあと「解説論文」は、沖縄人民党と日本共産党の双方から否認され隠された沖縄非法共産党の歴史について、実証的手法をもちいた検証をすすめ、なぜ、いつから、だれが、どこで、どのようにして、歴史の書き換えをおこなっていったか議論を展開する。その際、次のような前置きをおいた。

ただしおことわりしておく、ここにおいて主たる問題関心となるのは、いわゆる党史批判ではない。

というのは、それぞれの現代的な立場、自己像との関係から避けがたくあらわれる歴史記述のかたより、あるいは個性にたいして、学問の名において一方的な裁断を下すような姿勢は、わたしは自分の歴史研究においてこれまでも取ってこなかった。むしろ自己の歴史を語る場面での葛藤やあつれきに、可能なかぎり寄り添いながら、事実を裏づけられた歴史的想像力において歴史的経験をそのただなかから再構成し、そこから学ぶことを、研究姿勢の支えや理想としてきた。こうした歴史研究／記述の方法は本稿においても維持することになるが、ここでは、このような方法が戦後日本共産党史のようなハードな政治史の領域においてどこまで通用し、またそうした方法に拠ることによって、なにを現代的にもたらすことになるか、そうした点に根底的な問題意識をすえながら、分析と記述をすすめてゆくことにしたい。

この『資料集』の編集にあたっては、復刻資料の著作権者である日本共産党中央委員会とのあいだで、資料復刻の許諾をめぐる交渉過程もあった。その配慮から、遠慮して党史批判の矛を取めたというわけではない。「解説論文」は、実証的手法によって、歴史の書き換えのありさまを明る

みにする作業を徹底しておこなう。しかしそれは政治党派にたいする政治主義的な批判、つまり政治的な効果を求めた、政治としての批判ではない。ではなんの批判なのか。なにが目的なのか。実証のため学問のため、というのもちがう。真実のために、というのも、幾分なじまない。「真実」という名の絶対的権威をつくりあげ、その前にひれ伏す像を描き出したいのではないのである。ではなんなのか。そのスタンスを説明した、結論近くの箇所を次に紹介する。

党自身による党史と、歴史研究

現在の日本共産党は、1950年から55年の6全協までの「主流派」の党指導部のもとでの「非合法領域にわたる」活動を、すべて明確にカッコにくくり、自己の編纂する党史の枠外に置く立場をとっている。そのため、ここに述べてきたような沖縄対策方針の変遷もまた、大部分は党史の外にあるということなのかもしれない。「公式党史」と呼ばれる、党自身の手になる党史が、各時点の政治的立場に規定され、そのような立場をとるものであることは、政治史研究ではすでに常識となっているといつてよいだろう。だがその結果さきに引用したように、『日本共産党の八十年』（日本共産党中央委員会編刊、2003年）では、「50年代以降」「こうして、「沖縄メッセージ」の誤りは克服されてゆきました」という、「こうして」の中身はなんなのか、50年代にどのようにして「沖縄の全面返還の要求をかけることになったのか、いっさい具体的に記述されることがない、歴史の空白がもたらされるにいたっている。

なお、党自身の手になる党史記述における、このような歴史の空白や齟齬にたいしては、これまで日本共産党批判の運動論的な脈絡に多少とも背景をもちつつ、客観的学問的な公正さを期し、または正を求めるとりくみが、厚く積み上げられてきた。その批判的研究の蓄積は、今後とも歴史研究の貴重な財産として受け継がれてゆくであろう。なぜなら、それは史実の確定という側面での先行研究であるばかりでなくして、研究者自身が研究対象とした歴史的事象とのあいだに、その歴史の継承のあり方や持続的な影響の問題などをめぐって、同時代的な緊張関係をとり結びながら、歴史の記述をその時代における思想表現としてあらわした、思想的な遺産としても残されているからである。

だがこうした同時代の運動論的なリアリティを背景にした党史批判のとりくみが、以前から継続されてきたもののほかに、今後新たにあらわれてくることは、あるいは、ないのかもしれない。冷戦の終焉それ自体が歴史となるなか、むしろ党自身による党史の記述の変遷とは別個に、時間の壁によってそれとはまったく切り離され独立したかたちで、否応なく第三者的な位置からは

じまる、文字通りの歴史の研究として、戦後日本共産党の歴史は、議論され分析をすすめられてゆくのではないだろうか。

あらゆる政治党派の論理から自立した、学問的公正さの確立という課題は、もちろん従来から追究されてきた。だがこの受け継がれるべき課題は、否応なくやってくる時間の壁、時代の空気の変容といったフィルターを通して、いくらか変容したかたちで受け取られることにならざるをえない。時をへることによる隔てと変容、それもまた歴史の論理である。本稿もまた、こうした歴史の絶えざる継承と断絶、変容のなかにある歴史研究のひとつとして、歴史としての政治を考え、また歴史のなかの個々人の経験にむきあいながら、現代の固有の課題に立脚して、時代をこえる社会的関係性のあり方をまたあらたに考察していきたいと考えている。

ここで述べた「文字通りの歴史の研究」とは、過去にたいする、距離を置いた、他人事としての歴史の研究ではない。時空の隔てによって断絶されている過去とどのように関係をつくりだし、過去を現在のわたしたちにとっての歴史として生まれ変わらせるのか、このテーマを探究するのが、ここでいう「歴史の研究」である。

最後に、「解説論文」の「むすび 歴史研究における歴史と現在の連帯」から、個人的な独白のようにみえて、じつは、過去にたいして歴史としてむきあうためのひとつのスタンスを示そうとした結語を紹介して終わる。

最後に、このような場だからこそ、あえていえることであるが、一般に「運動経験」と呼ばれるようなものを、わたし個人はまったくもったことがない。だからといって引け目を感じることも、また逆に、さまざまな運動の渦中にある経験を見下して裁いたりするほどの自惚れ（それもまたなにかの劣等感のあらわれに相違ないかもしれない）も、もちあわせていない。歴史のなかの諸個人の経験について、敬意を払いながら、その敬意のゆえに、歴史研究者としては厳密な史料批判と分析をすすめ、運動の歴史のなかにある個々人の経験とわたりあうことのできる歴史研究を、いまあらしめること、これ以外に意図するところはない。

いまこのような個人的なことからまで言及したのは、本巻の編纂方針を解説することが、すなわちその編纂方針を立てるわたしの歴史認識を語るところにも（とりわけ第4部の解説において）すでに否応なくはみ出してしまっていることを自覚するからである。個々人に所蔵されてきた文書や未公開の手記、写真、録音テープを「資料／史料」として預かり、また思いを聞き書

きし、質問をかさねて記録とし、『資料集』の名において公表するというとなみとは、なんであるのか。この問いは、本資料集に結実した「資料収集」の過程で、つねに離れなかった。

史料のなかに記された経験と、資料収集・編纂のなかの経験が折りかさなるところに、歴史あるいはその記述が生まれるのだとするならば、ここに記してきた解説論文それ自体もまた、沖縄非合法共産党の歴史についての資料のひとつ（になりつつある）に相違ないのかもしれない。この「解説」の論文は、すぎさった過去のものではない「沖縄非合法共産党における連帯の問題」、そのただなかにある。

つまるところ本稿は、本資料集に収録した諸資料についての解説である一方で、本資料集の編纂過程に新たに生まれた経験の一端を語り、これを解説するものでもある。そしてこの解説自体が資料となって、収録した諸資料とともに立ち、歴史を問い、対話する時空を未来につなげ、ひろげてゆくこと——すなわち歴史研究における歴史と現在のあいだのある種の連帯、その自立したあり方こそが、ここで追究してきた本稿の主題であり、またそこにいたることを目指した大きな目標であった。

本稿で紹介した「歴史と現在の連帯」という論点は、冷戦崩壊後の現代にあって、政治的イデオロギーから自立する政治史研究・社会運動史の支えとなる、思想的立場を、歴史哲学的にうち立てようとする試みであったように思う。冷戦期の世界が経験した、政治的立場の相違にもとづく断絶と対立の時代のあとに、その遺産をうけつぎつつ、のりこえる道を模索したものだ。この時代的モチーフを展開するにあたって、学問上の課題として随伴させたのが、実証的方法の限界をうけいれたかたちでの、歴史学的実証と歴史哲学的構想の接合というテーマだった。

II 沖縄人民自治独立論のゆくえ

以上のIのパートが、本研究会に提出し、討議にかけたディスカッション・ペーパーであるが、「はじめに」で述べたように、以下ではこのような方法論的立場を必要にさせる具体的事例の提起にすみたい。ここでとりあげる事例は、前半部分で主題的にとりあげた沖縄・奄美非合法共産党史の前身にあたるもので、第二次大戦後、沖縄の帰属問題をめぐって主流の見解としてあった沖縄独立論が、1951年のサンフランシスコ対日講和会議を前にして撤回された経緯や論理を考察するものである。

本稿が検討対象とするのは、歴史上の人物・当事者によって後に否認された歴史であるが、否認された歴史の復元や、否認という行為をめぐる真相暴露は主題としない。それでもなおかつ、本稿が当事者による否認の論理に迫ろうとするのは、なんのためなのか。

あらかじめ説明しておく、ひとつには、歴史事実の否認もまた歴史的事実としての意味をもつということ。そしてふたつに、より大きな意味のあることとして、歴史事実の否認に際して立てられた論理は、否認する対象（事実）が記録などから抹消された後も生きつづけ、水面下でその歴史主体の論理や行動を規定しつづけるからである。否認を決断する際に立てられた論理は、否認の指示対象が抹消されたからといって役目を終えるわけではない。否認が継続される（つまり撤回されない）かぎり、否認の決断は水面下、つまり表面にあらわれない歴史主体の内的論理において何度となく再確認され、歴史主体の言動を地下から拘束しつづけるであろう。その再確認の道のりのなかでは、もちろん、決断の再吟味や与える合理化の意味づけの揺れ動きなどが内奥にあるかもしれないが、その軌跡を明示的に追うことはできない。ただわたしたちは、表面にあらわれてこない歴史の隠滅領域があること、そしてその隠れた領域が、表面にあらわれる歴史の領域にもなんらかの作用を与えつけているという事実を容認し想起することによって、過去や歴史との向き合いかたをよりゆたかにできるかもしれない。

以下にとりあげる事例は、このような問題系にかかわるものとして選んだ。よりくわしい議論は別稿「潜在主権と軍事占領 —— 思想課題としての沖縄戦」『岩波講座 アジア・太平洋戦争』4巻（岩波書店、2006年）および森前掲『地のなかの革命』第2章を参照されたい。

1 問題設定: 左派の日本帰属論としての再結合論

第二次大戦後の日本—沖縄関係は、切断とともにはじまった。まずは戦後日沖関係の出発点を概観しよう。

よく知られているように、沖縄は大日本帝国の敗戦受諾過程で、時間稼ぎの「捨て石」として日米の地上戦の舞台とされ、米軍の占領下に置かれた。日沖関係における沖縄の地位は、歴史的に曖昧な性格をあたえられてきた。もともと近世幕藩体制下で実質的な支配がはじまったときから、琉球は中国との関係から意図的に「異国」とされ、不分明な状態に置かれてきたのであるが、第二次大戦の敗戦受諾過程において、この曖昧さのなかにひそむ切断可能性が前面に押し出されることになった。沖縄は米軍が「血を流して得た」戦利品となり、ここで日沖関係は、戦略的政治的な決

断のうえで、いったん切斷されたのである。切り捨てによる切斷の事実にもきあい、そこからなにを新たに作り出すか、日沖関係の戦後史はこの思想的課題とともににはじまるのである。

戦後沖縄の帰属問題への対応としては、一方には、沖縄戦による「沖縄失陥」をとりもどそうとする脈絡から「郷土奪還」を期してはじまった、在日沖縄出身者の有力者層による「祖国復帰」論が、沖縄戦ののち、日本の敗戦前から持続的にあらわれていた。だが講和が近づくまで沖縄および日本の沖縄出身者団体が優勢だったのは、戦前の沖縄県への回帰を志向する保守主義的な復帰運動ではなく、日本の軍国主義や差別からの「沖縄人」の解放と自治を追求する独立論的な意見だった。表面的な流れでは、独立論が後退して、後に日本帰属の趨勢が主流の位置を占めるようになったと整理することができる。だがこうした整理は、この政治的・思想的主張の推移を実際に生きた人間たちの経験の中身を理解するうえであまりに表面的にすぎる。まずは独立論の主張のなかにも重要な差異があったことに注意をむけたい。

すなわちいわゆる独立論のなかには、沖縄の国家的独立を自治と解放のための不可欠の条件や究極の目標として、この目標を前提的に固定化するものと、沖縄住民の自治権ないし自主権を確立することを第一義的な目標とし、この目的を実現するための手段として、独立や他国との結合などの帰属問題を相対化してとらえる性格のものがあった。違いを際立たせていえば、国家的独立論と、国権確立による解放を相対化して人民の自治権を追求する独立論という相違である。この両側面はじっさいには混合するものだが、後者は左派的な観念であり、独立論の主流を占めた左派においては、国際情勢に左右される帰属問題の行方と切り離すかたちで、沖縄の自治と解放という根源的な目標を自立させるために、自治独立の主張を立てるといふ性格がつよかった。そうすることで自己の固有の生存条件についての発言権を、遂行的に対外的にも確保しようとするのである。

そのため左派の独立論の内部では、もともと、いったん分離独立をへたあとに対等な立場で日本との再結合に進もうとする構想も、当初から主張されていた。これも戦後日本との民主的な再結合に沖縄自治の将来展望を見いだす、沖縄自治解放論の左派的な一形態だった。この主張は、当時の左派においては常識視される理論に裏打ちされていた。被抑圧少数民族が分離の自由をみとめられたうえで、帝国主義の過去を払拭し、自主的に抑圧民族やその他の諸民族とともに新たな連邦制のもとに入り、民主的な再結合をはたすという、分離—再結合の理論は、ロシア革命期にレーニンおよびスターリンによって定式化された、民族問題を解決する世界革命の解放理論だったのである。そしてこの再結合の可能性を視野におさめた左派の沖縄独立論が、国際情勢の推移などに規定され修正を加えられた結果、分離独立をへない日沖再結合論に変じ、これがつまり左派の社会変革運動

としての日本帰属論となっていたのである。こうして保守派の祖国復帰論とともに、左派の沖縄自治解放論の系譜上にある日本帰属論が並び立つことで、日本復帰の趨勢が主流として形づくられることになった。

この2つの復帰運動論もまた思想的に混合することが多く、どちらかひとつのみに割り切れないのが一般的な傾向だった。とはいえ、いくらかなりとも理論的に日本復帰を主張するばあいには、再結合論のニュアンスが前面にあらわれ、また社会変革運動としての復帰運動を推し進めたものも、こうした理念的設定だった。だがその与件的条件として、「母のふところへ帰る」といった民族主義的な祖国復帰論の文化的ヘゲモニーはたえず存在し、この二面性をめぐる葛藤は日本復帰の実現にいたるまで、くり返しあらわれた。それゆえにこそ、この両側面がどのように切り結んであらわれたか、とくに再結合論が社会変革運動としての復帰運動論の中軸として台頭し、祖国復帰論と並立してくる経緯と論理を把握することが、事態の把握においては勘所の位置を占めるといえるだろう。

以上の概観のうえで、以下では分離独立―再結合構想が、日本帰属を要求する日本復帰論に転換していく経緯とその論理を具体的にみていくことにしたい。表面上、結合論は撤回され、政治的思想的立場も日本復帰論へとくら替えされたということになるのだが、復帰論への転換は結合論のある種の変生として遂行されたということが出来る。戦後沖縄で人民自治独立論・沖縄民族解放論をとなえた旗手であり、またのちに左派の日本復帰運動を代表する人物ともなった瀬長亀次郎、およびかれの率いた沖縄人民党を、検討の対象とする。

2 反帝再結合運動としての沖縄の日本復帰運動

戦後沖縄を代表する左派政党として知られる沖縄人民党は、47年7月、戦前からの社会主義者が中心となって結成された。党綱領には、労働者農民など全勤労大衆の利害を代表し、「自主沖縄の再建を期す」とうたい、政策の第一に「人民自治政府の樹立」をかかげた。階級的な立場は明らかだったが、即座に社会主義政府の樹立をめざしたわけでもなく、また逆にアメリカを解放軍と見て全面的に依存する立場をとったのでもなかった。

結党直後47年9月の演説会で、中心メンバーである瀬長亀次郎は、「悲しみをこへて涙も出ない」状態から起ち上がろうと熱弁をふるった。社会主義への共感、「沖縄人民戦線」結成の展望を語る一方、国際環境を見すえて次のように述べていた（「沖縄人民党演説会開催に関する件」沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書 R475B 「沖縄人民党に関する書類綴」所収）。

我々沖縄人の運命はロンドンに繋りニューヨーク、南京、東京に繋がってゐる 即ち沖縄を支配する者は他国であることを思はねばならぬ 我々を支配するこの者を恐れることなく見極め 我々の生きる道を求めねばならぬ 慎重に現実のこの姿を批判して この中からのみ沖縄民族解放の道を見出さねばならぬ

沖縄の帰属がどうなるかは、沖縄人の手の届かぬ国際情勢の推移にゆだねられている。だがいづれの形態をとうとうも「沖縄を支配する者は他国である」。だからこそ、新たな支配のあり方を見きわめながら、国際社会でも尊敬をうけるべき沖縄住民の自治権を一步でも既成事実化させ、「人民自治政府」のもとに沖縄解放の政治主体を獲得してゆくことが必要だった。

瀬長が演説会で語っていた支配者への「見極め」にたいする答えは、49年の配給食糧品値上げ問題をめぐって、沖縄議会が総辞職を決議するなど、戦後沖縄社会がはじめて組織的な対米抵抗運動をはじめるといって以降、明確になっていった。人民党はこの年32回もの演説会をひらき、「人民総束となって我々の支配者たる軍政府と闘う沖縄の「民族戦線」の結集をはかり、支持をひろげた（「三党合同演説会開催について」沖縄県公文書館所蔵琉球政府文書 R477B「政党に関する書類綴」所収）。その結果、瀬長は沖縄議会議員などの公職を解任されたが、これ以後、瀬長を最高指導者とした対米抵抗運動の旗手としての人民党のあり方は決定的になった。

「主権の確立とその限界拡大に全精力を結集せよ」。これが49年に瀬長亀次郎がかかげた「琉球民族解放運動の現在の主要目標」だった（『うるま新報』49年2月21日）。だがただでさえ自由の保証されない軍事占領下に、冷戦の反共政策が波及するなかで、主権の確立も自治の伸張も展望はひらかれなかった。この限界を突き破る道のありかは、50年9月、瀬長が出馬した沖縄群島知事選挙の演説会で突発的なかたちで示された。歴史的にも有名なセリフが、瀬長の応援弁士の演説から飛びだした。「沖縄の人たちは、瀬長の“亀さんの背中”に乗かって、本土の岸まで運んでもらおうではありませんか」（平良辰雄『戦後の政界裏面史 平良辰雄回顧録』南報社、1963年、170頁）。当時まだ公的にはタブーであった日本復帰論を冗談まじりに公言し、会場は拍手と爆笑でわいた。この応援弁士の名は、上地栄という。

上地は沖縄読谷村の出身だが、東京の大学に在学中、学徒動員で沖縄戦に派遣された。そして東京への戦況報告にむかう上官の案内役として、住民虐殺の現場もくぐりながら日本に生還した。ところが随行した上官が敗戦は住民のスパイと裏切りによるとの報告談を流し、沖縄疎開者にたいする圧迫が日本各地にひろがったことから、沖縄人連盟（日本本土の沖縄出身者7万人が結集した

連絡・救援団体）および連盟の青年部にあたる沖縄青年同盟（青同）で運動に身を投じるようになった。

連盟や青同は共産党系の者が主導権をにぎっていた。ここではくわしく立ち入らないが、戦後日本共産党の沖縄対策方針は、46年2月に発表された有名な「沖縄民族の独立を祝うメッセージ」で知られるように、人民党と同じく沖縄自治独立論の立場だった。ただし日本に人民共和政府を樹立することで、革命後の日本と沖縄が対等な立場で民主的再結合をはたすとの将来展望を、人民党よりもいっそう明確にうちだしていた。

保守派の日本復帰論は、戦前の、基地もなく戦火に焼かれる前の沖縄県への回帰を志向したが、社会党などもふくむ日本の左派においては、革命後の日本が新たに民主的再結合をはたすかたちで沖縄との関係をつくりなおすとの議論が優勢だった。それはソ連の連邦共和制をモデルにした展望だったが、ただたんにレーニンやスターリンによって定式化されていたから、独立—再結合の理論が適用されたというわけではない。上地栄は、沖縄の独立—再結合構想の背後にあってこれを支える思想を簡潔にこう表現している。「要は国籍の問題ではなく、沖縄人の幸福の問題である」。「如何なる国家に属しようともむしろ必ずしもそれ自体は重大な意義をもたない。要はその国に属することによってまたは特定の統治形体系に置かれることによって、“全沖縄人の意思がより十分に尊重されるか否か”という所に基本的考えを置くのである」（上地栄「言刺駁談」『自由沖縄』8号、1946年6月15日。上地生「言刺駁談」同11号、同年12月15日。上地栄「沖縄人の立場」『朝日新聞』47年6月17日）。

上地の主張は、戦後沖縄という時空間が沖縄人・日本人・アメリカ人の三者が入り乱れて沖縄を焼きつくすなかから生まれていることを見すえていた。そのうえで、この戦争をくぐりぬけた者たちが「是を機に“禍を転じて福となす”」戦後史を歩めるかいなかを問題にした。沖縄戦による日沖関係の切断と米軍の占領、この事実をうけとめて、戦禍のなかから自立する「沖縄人の立場」を築こうとする意志に形をあたえたものが、独立—再結合の理論であり、そこにこの構想がたんなる理論的定式の当てはめでなく、リアリティと支持を獲得しうる土台があった。

そしてこの「沖縄人の立場」を追求するなかで、上地は49年に沖縄に帰省して沖縄人民党に参加し、先に見たように人民党を独立論から分離独立をへない日本との再結合論へと転換させる役割を担っていった。そこに「要は国籍の問題ではなく、沖縄人の幸福の問題である」という、かつての主張が生きつづけているであろうことを、うかがうこともできるだろう。

そして瀬長、上地ら人民党指導部は、51年に入ってから、党内を説得しつつ、他党に先がけて

日本復帰運動の開始をよびかけていった。従来の琉球民族の主権確立の主張はどうなったのか。党内外からの疑問にたいし、瀬長は次のように新たな立場を説明した。「琉球の帰属は分離結合の理論から進めねばならない」、そして「民主主義の原則に則つて主権がじん民に与へられることを条件として日本に結合する、言い換へれば日本に復きする」（沖縄諸島解放青年同盟『沖縄はこうなっている!! アメリカ軍政下の沖縄の真相』沖縄県立図書館比嘉春潮文庫所蔵、1952年、3頁。『琉球日報』1951年2月15日）。すなわち人民党の「復き」論とは、日沖の対等な条件のもとでの民主的再結合の「言い換へ」だった。レーニンの名前やロシア革命の民族政策といった語彙は出てこないが、それは米軍占領下にあるからであって、瀬長がレーニン主義の「分離結合の理論」に依拠していたことは疑いない。

だが日本では「逆コース」のもとでレッド・バージがふきあれ言論の自由も失われている。そのことについて、こまかに語る自由はないけれど「われわれは知っている」のだと、瀬長は日本復帰を提唱する論文「日本人と結合せよ」で述べている（『世論週報』特集号日本復帰論、1952年7月、33頁）。にもかかわらず、日本の政治状況の暗さは本質的な問題とはされなかった。瀬長は51年2月の党中央委員会で、こう沖縄の解放運動を規定していた。「沖縄の解放は反帝闘争であり、方法として日本復帰を叫ぶ」（沖縄人民党史編集発行委員会編刊『沖縄人民党の歴史』1985年、89頁）。つまり日本復帰は目的ではなく、支配者である米軍にたいする反帝闘争に「沖縄人民」が勝利するための手段、方法にすぎなかった。沖縄の解放は日本国への帰属によって上から無条件にあたえられるものとは考えられていなかった。

しかしどうして民主化の進んでいない日本との結合が沖縄の解放につながるのか。この「方法」をえらぶりアリティはどこに見いだされていたか。同論文などで瀬長は、インドネシア、インド、朝鮮、ヴェトナムなどですすむ民族解放運動を数えあげ、東西二極対立が、これらアジアの「植民地か半植民地の人民と結びつく」世界的な民族解放戦線の形成につらなっていると論じた。そして沖縄の解放運動が、日本の民族独立運動と結合することで「世界人民の面前にその姿を表示し」、「世界の偉大なる民主勢力」に合流してゆく展望のうちに、共感と支え、歴史の発展の趨勢を見だしていた。すなわち日本は、米軍政の金網にかこまれた「沖縄民族」が、世界の「民族解放の戦列に加わつて」そこに結合するための回路、媒体として位置づけられていた（『資料集』1巻、51頁）。

3 主体なき亡霊のささやき

とはいえ、たとえ日本復帰の要求が目的のための方法や媒介項にすぎなかったとしても、その方法を全うしなければ目的には到れない。それゆえに瀬長は、党として正式に日本復帰運動の開始を決議した51年3月の臨時党大会で、琉球百万人民が「一大勇気を振り起して起ち上り」「日本の進歩的勢力と共に起ち上るべきだ」と、つよく訴えたが、つづけて次のような意味のとりにくいことばを重ねた（前掲『沖縄はこうなっている!!』4頁）。

そしてわれわれ琉球人民は自分で働いて生きて行く覚悟を必要とする。日本復帰の民族感情はこの二面から生まれてくる。

このことばはなにを伝えているのだろうか。

前段の、琉球人民の覚悟というのは、「そして」を「だが」に置き換えてみれば、なにを言おうとし、なぜ「だが」とはっきり言えなかったのかも理解できる。つまり、もしも再結合が「日本の進歩的勢力」への従属的な依存や吸収となったならば、日本帰属はふるい日本の帝国主義支配のもとへの回帰となるかもしれない。反帝闘争の沖縄解放たりえないことを「琉球人民」は覚悟して、「自分で働いて生きて」ゆかなければならないと、この文は告げているのだろう。では後段にいう、「日本復帰の民族感情」が生まれてくる場所の二面性とはなにか。そこにあえて表現をあたえれば、日本民族として解放されることを決意する、沖縄民族の解放への決意という二面性、すなわち二重化された意識である。この矛盾をはらんだ決意を立てるのは、その矛盾を解消して、沖縄人の解放をもたらしてくれるプロレタリア国際主義の世界革命のなかに、日本人としての沖縄人が参入するという、大局的な統合の展望がえらばれたためだった。しかしこのことばは誰が語っているのか。

日本人になる沖縄人、琉球人民である。だがこの主体は、「日本復帰の民族感情」が生まれ「祖国復帰」が叫ばれるなかで、消えてゆくべき存在であった。この謎めいたことばは、みずから消えてゆこうとする主体が、自己のことばと歴史の消滅を肯定するために、自己にむけて発した、断末魔のつぶやき・独白だったのではないだろうか。

瀬長がこうした日本と沖縄の二面性ないし二重意識について公の場で語ることは、後にも先にもこれ一度きりのようだ。民族の意識を二重化してそこに拘泥することは、プロレタリアートとしての統合の未来像（国家と民族の終極的な消滅）をくもらせてしまうからだろうか。だが二重性の矛盾があ

るからこそ、矛盾を内包したまま、それを克服する未来をめざして主体化の決断は下されたのであり、日本復帰の民族主体は「この二面から」こそ「生まれてくる」のである。ということはつまり、この決断のあったことが自己の祖国復帰闘争の内なる始原として思い返され、思いが新たにされるたびに、すでに主体の外に追いやったはずの、消えたもう一面の主体（民族国家を形成する主体となることを断念した沖縄民族）はよみがえってくるということだ。だがもしそこで、この亡霊をも完全に抹殺させようとするならば、葛藤は最初からなかったことにされ、「一大勇気を振り起こし」た決断もなくなる。すなわち自己の守ろうとする、えらびとった主体の空無化がはねかえっておそってくるのである。

瀬長が二面性について二度と語らなかつたということは、彼が「覚悟」を決めた、すぐれた活動家であり指導者だったことを示している。ふたたび二面性の矛盾につきあつたときも、彼ならば過去の決断の是非にとらわれて迷いに立ちつくすのではなく、前進してたたかいをつづけていったらう。だがかつて何度となく「沖縄民族の解放」や「琉球民族の主権」確立を叫んだ、身体にのこる記憶を抹消し、そしてその抹消の記憶をさえ抹消し流しさらうとして前進をつづけてゆく、その先には、運動の持続だけが目的となって手段が自己になる、復讐が浸透してくるのをさけることはできないのかもしれない。

まだこの段階でそう言うのははやすぎる。それはこの後の瀬長および沖縄人民党の道ゆきを具体的にたどつたうえで、論ずべきことがらだろう。だがこの問題は瀬長や人民党だけのものではなかつた。日本復帰による沖縄の解放という道の選定において、後戻りできない新たな始まりが沖縄戦後史においてあらわれたのであり、瀬長・人民党はその先頭に立っていた。ここでは、その始まりのありさまを、くつきりととらえておきたい。

51年3月の人民党臨時党大会で採択された日本復帰方針の決議文には「琉球民族は初めから日本民族の一部である」との文言が入れられていた（前掲『沖縄人民党の歴史』90頁）。こうした民族論が人民党の本来の立場にそぐわないものであることは、同時期の瀬長の諸論文や党文書を読めば明らかである。この文言は分離独立なき再結合の理論的な不明瞭さと弱さに疑問をぬぐえない党员や支持者からも納得をとりつけ、「一大勇気」の決断を運動としてひろげるために、大衆政党としての立場から挿入されたのだろう。だがここで超歴史的な民族統一論を取つたことによって、結党以来の柱としてきた沖縄民族の自治解放論は否定され、あたかも人民党が「初めから日本民族の一部」として日本の独立だけをめざしてきたかのように、自己の歴史は隠滅させられることになった。後代からの粉飾にみちた記述として知られる人民党の公式党史の矛盾は、このときからはじまるのである。

自己の歴史をみずから隠滅させ、うしなうこと。それは自己のこぼをうしなうことでもあった。先に引いた臨時党大会での謎めいたことばは、歴史とことばが主体から失われていく瞬間を刻んだものであるのかもしれない。

戦火に焼きつくされた焦土で多くの者たちの心をとらえた沖縄民族解放の夢は、こうした転換を経て公式的な歴史記述からは抹消されていくことになった。そして戦後沖縄の日本復帰運動は、アメリカの異民族支配から脱却をはかった民族統一運動として、左派においても説明されるようになった。この公式的な語りにおいては、沖縄民族解放論の論理は、当事者たちによってなかったことにされ、またこれまでの歴史研究においては撤回され転換されたものとして位置づけられてきた。だがそこでは、なにかがはじまったのである。

分離独立による沖縄の自主権の確保も、日本の人民共和政府という結合すべき対象の保証もないままに、日沖の民主的再結合を、沖縄人の解放、新沖縄建設の夢の形姿としてえらび、結合を復帰として叫ぶこと。こうした何の保障もない賭けが、このとき、沖縄戦史においてははじまったのである。そしてこの決断によって、自己のすべての歴史とことばは無化されていくことになるのか、それとも新たにされてゆく矛盾にわたりあう決断を、亡霊的主体との対話とともに、この道の先に更新していくことができるか。存在を否定された沖縄民族の独立解放論は、隠れ家としてもぐりこんだ日本への祖国復帰論のなかで、主体のない亡霊の問いをささやきつづける。

戦後沖縄における復帰運動の開始は、保証のない賭けの決断としてあった。こうした賭けをおこなう主体があったこと、そしてこの賭けのゆくえを主体の背後で見つめつづける者との内的な対話が、この後の沖縄戦後史の展開のなかで、時折みえかくれするようにならわれ出ること。これらをわたしたちは沖縄戦後史の見えない歴史の論理として、想起することができる。

むすび

この事例補足は、実質的には、最後に引用した瀬長亀次郎の謎めいたことば、これをどう理解したらよいか、背景を語り、分析を加えたにつくる。瀬長が発したこのような言語表現は、次のような問いとともに、ある程度一般化して評することが必要なものかもしれない。

すなわち「アイデンティティは、それ自身だけでは、思考されえない、あるいは作動しえない」。「アイデンティティは、根源的に起源的な断絶あるいは瑕疵の抑圧をとまうことなく、みずからを構成した

りあるいは想起したりすることができない」。「そのように非決定で深刻に損なわれた歴史はいったい書かれうるものとして在るのか」（エドワード・W・サイード／長原豊訳『フロイトと非—ヨーロッパ人』平凡社、2003年、72-73頁）。

書かれうるものとしての歴史が、主体をなくした者たちの沈黙のうえに築かれていくのは、やむをえない。だがもし、この沈黙領域の伏在を考察の外に排除するならば、書かれうる歴史から感じ取ることのできるリアリティは、書かれざる領域に形なくただよっている、あるリアルな感覚に、かなわないのではないか。歴史研究は実証的であらねばならない。だがその実証の方法の限界を見きわめ、その向こう側にあるものへのアプローチを方法論的に設定することがなければ、実証の作業の真価は活かされてこない。

このことを本稿でとりあげた事例に即して述べておこう。瀬長と人民党の復帰論への転換について、いまま沖縄現代史研究の水準となっている代表的な先行研究は次のように評している。「独立論をタナ上げにして、手のひらをかえすように、復帰論を主張しはじめたこと」が「大きな誤り」であると。そしていう。「なぜ独立論を主張せざるをえなかったのか、独立論をいかに克服あるいは発展させて復帰論に到達したのか、を明らかにしようという思想的営為を放棄して、はじめから復帰論を主張していたかのように装い、この時期〔復帰論への転換にいたるまで〕を、沖縄戦後思想上の空白期に閉じ込めてしまった」（新崎盛暉『戦後沖縄史』日本評論社、1976年、41頁）。

たしかに当事者たちは、「独立論をいかに克服あるいは発展させ」たか、十分にわかりやすく説明したとはいえない。そしてむしろ「はじめから復帰論を主張していたかのように」神話を語って、経緯を隠蔽した。だがそのことをもって「思想的営為」の不在であると見なすのは妥当だろうか。思想とは、＜真相＞を包み隠さず闡明にする行為と同じなのだろうか。

経緯を明らかにする行為が放棄されたということはいえる。だがその行為の放棄という事実もまた「思想的営為」であるかもしれず、決断のひとつであった。ならば、ここでわたしたちは、二者択一的に、瀬長と人民党を偽装転向者、かくれ沖縄独立論者としてみるべきなのだろうか。そうではない。沖縄民族独立論者としての瀬長は、主体をなくしたのであり、かれはここで決定的に日本復帰論者に変様した。そしてこの決断をなした主体は、みずからのことばをもたないのであり、いくら説明責任を求めても、みずから語りようがない。

当事者に真相の証言を求め、できるかぎり正確な歴史を残そうとすること、それはなんらあやまりとはいえない。わたし自身も、そうするであろう。だが書かれうる歴史のほか、語りえぬ主体の歴史もあるということが、方法的認識としてないならば、語らない／語れないという歴史の事実＝リアリティ

は「大きな誤り」として裁断され、歴史家は、実証主義の信念だけを手にして立ちつくす審問官となって、歴史のリアリティから遠ざかっていくほかないのではないか。

歴史のリアリティは、実証主義や科学主義における正しさの探究によって包み込めるとはかぎらない。本稿の主張はこの一語につきるのかもしれない。

歴史主体なき者たち、「歴史なき民」の歴史を記述することは、歴史の主体をあらしめる論理そのもの、歴史そのものを問いなおすいとなみでもある。このことばをもたない歴史主体へのアプローチとして＜消滅の歴史学＞はあり、またその歴史記述の上での方法論として、＜霊媒＞の歴史叙述がある。後者の方法論については、別の場所で論じることとしたい（さしあたり前掲拙著『地のなかの革命』付論、および拙著『台湾／日本一連鎖するコロニアリズム』インパクト出版会、2001年、「結語」を参照）。

(特任研究員)

考現学の混沌から討議空間のデザインを考える

—— 「研究」の〈経験〉と〈表現〉

伊藤 遊

<要旨>

考現学／民俗学という2つの「〈日常生活〉研究」を比較し、(1)「〈日常生活〉研究」は誰が行うのか」という「方法の主体」の問題、(2)「〈日常生活〉研究」をどのように表象するのか」といった「方法の手段」の問題、を焦点化することで、人文学における討議空間のあり方を探る。考現学においては、「方法の主体」の〈経験〉そのものが反映された表象＝〈表現〉こそが方法論化される。そこに表出する「私」の〈表現〉という方法論は、他者との出会いとそれによって変るかも知れないということ自体が意識化された方法論であるという点において、「アカデミズム」／社会という単なる二項対立の再生産という形ではない「討議空間のデザイン」のヒントを与えてくれるだろう。

<キーワード>

日常生活、アカデミズム／ポピュラーカルチャー、方法の主体、経験、私／私たち、学問-研究／芸術、ことば／イメージ、表現

はじめに

近年、様々な場所において、「討議空間」の創出という問題がクローズアップされ、また実際試みられている。当着手研究集合においても、その「デザイン」が議論され、実験されてきた。

その議論の中で繰り返し出てきたのは、「アカデミズム」という制度をいかに相対化するか（あるいはしないか）という問題であった。この問題設定はしかし、私たちの議論に限ったものではないだろう。「大学」や「ディシプリン」が、自らの制度の外を無視し得なくなり、場合によっては、その「ボーダーレス」化や「越境」が要請されている。着手研究集合においては、こうした状況が、「臨

床」および「横断」というキーワードをもって議論されてきた。

そうした若手研究集合での議論に対し、本稿は、1920～30年代の「人文学者」たちが大きな関心のひとつとして持っていた〈日常生活〉をめぐる議論とその継承のあり方を紹介することで介入を試みたいと思う。

というのも、最近の“オールタナティブな”「討議空間」は、ある意味、この時代の〈日常生活〉をめぐる議論にみられる2つの「混沌」（あるいは「未分化」）状況の“再想像”であるという側面が少なからずあるように思うからである。少なくとも、そう考えることで、近年の「討議空間」をめぐる議論にいくつかの視点を提供できると考える。

具体的には、今和次郎の考現学と、柳田国男の民俗学という2つの「〈日常生活〉研究」の方法を取り上げたい。

1920～30年代に構想された数ある〈日常生活〉研究の中から、ここで、考現学と民俗学に注目するには理由がある。ひとつには、同じ関心を出発点としている2つの方法論が、結果的に両者の「アカデミズム」との距離を大きく異にしているからだ。「民間学」として出発した両者だが、民俗学が後にアカデミズムの中で「学問」としての地位を築き得たのに対して、考現学は結局単なる「ディレッタントイズム」とされ、アカデミズムには無視されてきた。しかしながら一方で、考現学は、一種の「ポピュラーカルチャー」として、現代に継承されている。言い換えれば、柳田は、〈日常生活〉をめぐる「研究」における混沌を制度化し得、今はできなかったのだと言える。しかし、先に述べたように、逆説的だが、当時の混沌を混沌として保持し続けた考現学こそ、現在の「討議空間」をめぐる議論になんらかのヒントを与えてくれるだろう。もっとも、そのことを気付かせてくれるのは民俗学という制度だ。2つの方法は、ここでは言わば表裏一体の関係なのである。

本稿では、1920年代の〈日常生活〉をめぐる議論にみられるカオスを、次の2つの問題として焦点化し、それぞれの問題に関して、柳田と今がどう対応したのかを概観する。その後、そのカオスをカオスとして継承している、現代における考現学の“再想像者”たちの実験を紹介したい。

ここで焦点化する2つの問題とはすなわち、(1)「〈日常生活〉研究」は誰が行うのか」という「方法の主体」の問題・〈経験〉の問題であり、(2)「〈日常生活〉研究」をどのように表象するのか」といった「方法の手段」の問題である。

I. 「＜日常生活＞研究」という方法の主体は誰か？

——「研究」の＜経験＞

I-1. 柳田民俗学の理念とその制度化

柳田国男（1875～1962）が、後に民俗学と呼ばれる「郷土研究」（「郷土生活の研究」）という形で、「＜日常生活＞研究」の方法を構想した際、そこには、「その＜日常生活＞を問うていくのは誰なのか」という、言わば「方法の主体」というものに関する思弁があった。一方、柳田は、「＜日常生活＞というものを「それぞれの身体を中心に織りあげられる日々の実践」〔佐藤1997：179〕と考えていた。この、方法の主体に関する思弁と対象の設定ゆえ、「＜日常生活＞研究」は、「自省」をその理念として掲げることになった。「郷土の研究」ではなく、「郷土で研究」というスタンスである。言い換えれば、この方法は、「個人個人がそれぞれの＜日常生活＞の意識化・表象を「日々の実践」の延長として行うことがいかにして可能か？」という問いの上に存在していたと言える。端的に言えば、＜日常生活＞を生きている人、つまりすべての人が民俗学者たり得る、民俗学とはそうした可能性を持った方法だったのである。

しかしながら、この理念は、柳田の方法が、制度としての「学問」となり、アカデミズムとして整理されていく中で、政治性を孕んでいく。

「郷土」における＜日常生活＞の「実践」者自らによって意識化・表象化されたことば——例えば「郷土研究」といった柳田の同人誌に投稿されてくる「民俗誌」——が、柳田の考える「日本」という概念に回収される形で語り直される、という事態が生じたのである。ここでは、＜日常生活＞の表象が、「自己表象」と「他者表象」という形で、その主体を2つに分裂させている。

分裂した2つの主体はさまざま「研究対象」と「研究主体」という形に制度化されてしまったが、フィールドワークにおける「聞き書き」を重視している民俗学ゆえ、現在においても、この日常生活の二重の語りは存在する。

確かに、フィールドワークにおける「聞き書き」は「対話」として捉えられるようになってはいるだろう。しかしながら、「話者」の、＜日常生活＞＝フィールドの外で表象しなおされることばは、あくまで「民俗学者」のことばでしかない。

この代弁を許しているのは、「私」の経験が、「私たち」の経験として語られることを許すような「日

本人」という柳田の設定であり、また、「研究対象」による<日常生活>=「研究主体」のフィールド／「研究主体」による表象の場、を分断させた「アカデミズム」という制度である。

I-2. 今の「学問一研究」指向とその挫折

一方、今和次郎（こん・わじろう 1888～1973）の考現学は、アカデミズムとどのような距離を持つことになったのか。

そのことをみていく前に、今と彼の提唱した考現学について、簡単に紹介しておこう。

今和次郎は、東京美術学校図案科卒。その後すぐに早稲田大学建築科の助手となるが、同時期、同科教授佐藤功一と柳田が発起人となった、民家保存を目的とする「白茅会」に参加し、柳田と出会っている。また、新渡戸稻造宅で行われていた「郷土会」にも顔を出し、柳田を始め、石黒忠篤（農政学）や小田内通敏（人文地理学）らと交流した。白茅会も郷土会も、当時の人文学者たちの<日常生活>への関心が具体的に結実した例である。1923年、関東大震災に遭遇した今は、震災直後、美術家・デザイナーたちとバラックの内外装を手掛ける「バラック装飾社」を立ち上げる。その後、その時の仲間であった吉田謙吉（舞台美術家）らと考現学を提唱することになる。

考現学とは、今自身のことばを借りれば、「現代風俗或は現代世相研究に対して採りつつある態度及方法、そしてその仕事全体」[今1930=1986:353]ということになる。が、その労力は専ら、主に関東大震災後急速に「モダン」化していった東京という「都市」を歩き回り、そこで観察できるあらゆるモノやヒトを巡る現象を記録しつくそうというフィールドワークの経験にこそ注がれた。

考現学は一世を風靡したが、建築学・服飾学などに関心を絡ませながら、今の中では発展解消という形をとっていく。

実は今和次郎自身は、この考現学という「<日常生活>研究」の方法が、客観的な「科学」であることを、柳田以上に追及していた。しかしながら、実際にはその願いは叶わず、考現学は、アカデミズムに「ディレクティブイズム」と蔑まれ続けることになる。

一方、考現学は現在、「ポピュラーカルチャー」として、（もっと言えば「エンターテインメント」として、）多くの人々が“実践”している。つまり、柳田の初志にあったはずの、すべての人びとが実践し得る「<日常生活>の延長としての<日常生活>研究」とでもいうべき理念を囚らずも実現してしまっているのである。

今自身の強い指向にもかかわらず、考現学がこれまで「学問研究」としての位置を得られていな

いひとつの理由は、柳田的に言えば¹、フィールドワーク「報告」のほとんどが「理論」になっておらず、「断片」のままであったからである。

梅棹忠男は、考現学におけるフィールドワークの手法を、①「量的調査」（「特定の条件のなかでの全数について、分類された諸様式がそれぞれそのくらい存在したか、という調査」）、②「ぐるり調査・分布しらべ」（「一定の地域をかぎって、そのなかに特定のものがどのように分布しているかをしらべる」）、③「もちもの一切しらべ」（「ある人間の所有物がある条件のもとで全部調べ上げる方法」）、④「行動調査」＝「尾行調査」、および⑤「単なる「採集」」＝「断片的調査」に分けている〔梅棹 1971: 112-113〕。①～④は明らかに、「データ」を収集し、そこから何か普遍的な「理論」を見出す「科学的な手法であるということに注目した分類である。しかしながら、ここでは、分類しきれない調査を、⑤「単なる「採集」」＝「断片的調査」としてまとめざるを得なかった梅棹の困惑に注意すべきである。

実は、その「断片報告」の膨大さこそが、考現学の全体像を決定していると言っても過言ではないからだ。

疋田正博による、考現学調査報告集『モデルノロヂオ』（1930）の記事分析は、「調査報告の煮詰り方の程度」〔疋田 1986: 17〕における、今と、彼以外の「考現学者」との明らかな差を物語っている。調査報告のうち、ただ「風俗現象を描写したり、何らかの点に着目して記録、集計しただけの」〔同: 17〕「断片的なもの」の割合は、例えば吉田謙吉の場合、43 のうちの 40 であり（その他の「考現学者」の場合、44 のうち 38。）、一方今の場合、32 のうち 12 の報告において仮説や結論が導かれていた。吉田自身、今とのこうした差異には意識的であり、次のように述べている。「いろいろな方面に、それぞれの確なひろがりを持つ今さんの仕事と、まだまだ享楽の分子に入り込んでゐる私の仕事との、各々の特徴を露骨に発揮して、統計に関するすべては今さんが分担し、私は断片様々を拾う事になったのである。」〔吉田 1925 「一九二五年初夏東京銀座街風俗記録・断片」今・吉田 1930 = 1986: 43〕

今は、これらの「断片報告」を「理論」に昇華させるための方法として「比較」というものを強調したが、結局その方法でお互いが参照可能なデータとしての「断片報告」すら集まったとは言えない。

1 雑誌『郷土研究』が 1917 年に休刊する際、編集者・柳田は次のように述べている。「研究と云ふからは学問でなければならぬと思つた。新しい理論を立証し、或は少なくとも今迄の心付かぬ説明を試みるので無ければ、忙しい読者の時間を割愛せしむるに足らぬと独断して居つた。各府県からの報告は蓋し此意味の研究に対する無限の援助ではあつたが、必しも研究其物では無かつた。中には資料の採集には非凡の技量を有せらるる人たちに於て、猶明かに我々の重きを置いた論文に一顧をも与へられぬと見える向きへもあつた」〔柳田 1917: 53〕

ひとつには、今が「生活」を個性的なものとも考えていたということがある。もちろん、柳田も、〈日常生活〉の持つ個性には注目していた。しかしながら、柳田が、それらの〈日常生活〉を、分析可能な「データ」として提供できるような方法論を組織的に作り上げていったのに対し、考現学は、〈日常生活〉という「研究対象」の個性が、「研究主体」自身の個性と結びつくことに無頓着であった。

そうすることで、今の中のアンビバレントは解消されなかったが、考現学は明らかに、柳田民俗学のような「学問研究」路線とは別の何かを形成し得る可能性を得たのだと言える。なぜなら、ここでの「断片報告」ひとつひとつは、柳田の考える「理論」に回収される「データ」としての「他者表象」というより、考現学という方法の主体自身の「自己意識」こそを反映したものと考えることができるからである。

そこでは、柳田民俗学がそうしたように、「私」の「それぞれの身体を中心に織りあげられる日々の実践」が知らないうちに「私たち」のそれとして、民俗学者の語りに回収されるということはない。〈日常生活〉の語りは常に、それを「フィールドワーク」した「私」の〈経験〉と分かちがたくあるし、それが例え「他者」の〈日常生活〉であったとしても、(柳田が両者をひっくるめて「私」としてしまったのは違って、)そのフィールドワークの〈経験〉自体は「私」自身のそれとして、表象されていったのだった。

柳田の、「私」／「私たち」の境界の隠蔽という政治は、フィールドと、その外における表象の断絶にあった。つまり、「研究対象」の〈経験〉と、それを「研究」する「研究主体」の〈経験〉は、別の〈経験〉なのである。一方、考現学における表象においては、フィールドにおける考現学者自身の〈経験〉こそが反映されている。フィールドワークとそれをもとにした表象は、「方法の主体」の一貫した〈経験〉としてあるのである。

Ⅱ. 「〈日常生活〉研究」をどのように表象するか

— 「民俗芸術」をめぐる

ところで、近年の人文科学のひとつの傾向として、特に「討議空間のデザイン」ということを考える際、注目しておいてもいいのは、「学問-研究」と、「芸術」が、再接近しているという状況である。(そのことは例えば、国立民族学博物館の吉田憲司が、博物館の歴史をひもといた上で提案・実践

しているように〔吉田1999〕、学術博物館と美術館を、かつてそうであったような一体のものとして再構築しようとしていることにも表われている。）

「再」接近と言ったのは他でもない。ここで取り上げている1920～30年代の〈日常生活〉をめぐる議論において、「学問-研究」と「芸術」の2つの領域は混在した状況にあったと考えられるからである。

そのことを示すのが、「民俗芸術」という概念をめぐる議論である。この議論の中心にいたのはやはり柳田国男であり、一方、彼の意図に同調しつつズラしていく方法として、今和次郎の考現学を位置づけることができる。

そして、「民俗芸術研究」においては、「研究対象」として客観化しようという「学問-研究」の欲望と、自らの主観と結び付けて表象するための手段と考える「芸術」的实践が、未分化のまま存在している。

柳田国男が「民俗芸術」に注目した背景には、「土俗・民俗」ということばに織り込んだ政治的な意図と同様のものがあつたと思われる。それは、制度的な「学問-研究」というシステムが持つことになる政治性と同質のものである。

一方、実は、今和次郎も、そうした政治性を孕みかねない「学問-研究」的志向を強く持っていたわけだが、そこに「芸術」ということばが付随された途端、その意図はズラされる。そして、彼の考現学は、柳田の「日常生活研究」とは違うそれとして、立ち上がってくることになる。

その特異性は、『民俗芸術』という「研究」同人誌の「造形芸術号」（1928年11月号（第1巻第11号））に明らかである。『民俗芸術』（1928～1932）は、柳田や今が参加していた「民俗芸術の会」の月刊機関誌だが、この号は実質、今和次郎の責任編集号で、執筆者も、今の仲間たち——いわゆる考現学グループと言われる人たちである。それまで、「芸能」的なものを「民俗芸術」として、「建築美術」などの（日常生活に溢れる）「造形美術、装飾美術」にほとんど関心を持っていなかった会にとっては、エポック的な号でもある。

収録された研究・報告における観察や記録などのあり方には、当時今が方法論化を目論んでいた考現学のやり方が採用されている。（ただし、雑誌の中で「考現学」ということばはほとんど使われていない。）

この号の詳しい分析については別の機会に譲りたいが、そこで重要なのは、「造形芸術」ということを論じるに当って、それがビジュアルイメージによる表象に結びつくことに躊躇がみられないという点である。

考現学の大きな特徴のひとつは、観察の記録が絵図によってなされていることである。考現学のフィールドワーク報告においては、ほとんどすべてに、観察したもののスケッチや、それを概念化したようなイラストなど、ビジュアルイメージによる表象が試みられている。ここに、独特なデザインのグラフや表といったものを加えてもいいだろう。スケッチのみを示した「フィールドノート」さえ見受けられる。

そうした特徴は、『民俗芸術』『造形芸術号』にも、はっきりみられる。

こうした方法が登場したことは、当時の「(<日常生活>)研究」において、ことばとイメージ(絵)が渾然一体となった表象形式が普通にあり得たという混沌状況を示している。

ところで、柳田国男は、自らの方法を、「目の採集、旅人の採集」／「耳と目の採集、寄寓者の採集」／「心の採集、同郷人の採集」(『民間伝承論』(1934))という「採集」=調査の方法・主体と、それに対応する研究対象として、「有形文化」(第一部)／「言語文化」(第二部)／「心意現象」(第三部)(『郷土生活の研究法』(1935))という風に分類して説明した。有名な「民俗資料の三部分類」である。ここで、「民俗学者」は「寄寓者」という風に想定されているわけだが、その「寄寓者」の調査方法に「目と耳」が挙げられている点は、興味深い。一般的に、この「三部分類」は目／耳／心に対応する方法論と理解されているが、川田牧人も指摘するように〔川田2005〕、柳田は「目の採集」も重視していた。

しかしながら、ここで注意すべきは、「目」が重視されるのはあくまで「採集」=調査においてであって、その調査の結果が表象される段になると、「目」への信頼は、一気に後退するという点である。つまり、ビジュアルに関わる「研究」対象を、ビジュアルによって表象しなかったのだ。

柳田国男の民俗学が、「学問」になり得たひとつの理由は、「採集」の段階では混在していた「目と耳」が厳密に区別され、当初<日常生活>研究全体が持っていたことばとイメージの混沌的表象を腑分け得たからである。

一方、考現学は、「目」による方法であった。正確に言えば、ことばとイメージが未分化なまま組み込まれた方法である。それは、ビジュアルイメージがことばを補完する、というレベルのものではない。両者は文字通り渾然一体であり、その独特の表象形式の様々なバリエーションを作り出す実験こそが、考現学という方法論を独特たらしめていると言っても過言ではない。

Ⅲ. 考現学の再想像者たちによる実験

1920年代における〈日常生活〉への関心は、アカデミズム的な「学問-研究」とは異なるある種の混沌を孕んでいた。柳田・民俗学と今・考現学という2つの方法も、そうしたカオスの中に生まれたと言える。

柳田と今は、自らの方法を、制度的な「学問」とするべく様々な努力をする。しかしながら、柳田の民俗学がアカデミズムになっていった一方で、今の考現学はポピュラーカルチャーという形でのみ生き延びることになる。

民俗学の制度化の背景には、2つの戦略があった。ひとつは、〈日常生活〉を実践する「研究対象」と、それを理論化する「研究主体」を明確に分けたこと。そして、もうひとつは、その表象手段として、抽象的なことばを、イメージと（ヒエラルキックに）相対化していったことである。柳田の戦略とは言わば、当初持っていたであろう〈日常生活〉研究というもの、ある種のカオスを秩序立てる努力であった。

一方、考現学は、〈日常生活〉を生きる〈経験〉とそれを表象する「研究」の〈経験〉が渾然一体のままあり続けた方法である。またその表象の手段としても、イメージとことばが混在するような独自の言語が発明されていく。

そして、考現学は、その非制度化ゆえに、ポピュラーカルチャーとして、多くの非アカデミシャンを魅了し続けてきた。

特に、1980年代における一種の考現学ブームは注目に値する。そのきっかけを作った、1970年代末頃から全国で同時多発的に出現した考現学の再想像者たちは、1920～30年代の「〈日常生活〉研究」が持っていたこの混沌こそを意識的・無意識的に継承していったようにみえるからだ。

彼ら考現学の再想像者たちの詳しい活動や歴史に関しては、紙面の関係上、別稿（[[伊藤2003]・[[伊藤2006]]）を参照していただきたいが、ここではその代表格である「路上観察学会」（1986～）と「野外活動研究会」（1974～）の活動を一部紹介してみたい。

Ⅲ-1. 路上観察学会の活動から

Ⅲ-1-i. 「自分の視点」、「自分の科学」

考現学が、〈日常生活〉を生きることとそれを意識化し表象する「研究」が渾然一体となったままの方法であることは、言い換えれば、そこに個人的な「主観」としての〈経験〉が入り込むことをゆるすことでもある。このことが、考現学を「科学」から遠ざけている一因になっていることは間違いない。

例えば、路上観察学会の立役者・赤瀬川原平を、同じくメンバーである南仲坊は、こう評している。「赤瀬川さんは、人を恐れ入したり、はいつくばらせたりするために、知識を仕入れるということのない人で、興味を持つのはいつも「自分の視点」なのだ。徹頭徹尾に内発的である」〔南仲坊「赤瀬川さんが考現学に興味をもったワケ」赤瀬川監修 1995：146〕、と。

また、メンバーたちに「神様」と言われている林丈二の調査マニア・収集狂ぶりは驚くべきだが、その膨大なデータ群はしかし、相互参照できるデータとしては全く開かれていない。例えば彼は、アイスキャンデーの当たりクジが出る確率を3年間にわたって記録しているが、その“調査”は、林がアイスを食べたいと思ったときに行われているのだ。こうした“擬似（近代）科学的”あるいは“前（近代）科学的”なやり方を、赤瀬川は、「自分の科学」と名付けた〔住友和子編集室・村松編 2000：6-7〕。

Ⅲ-1-ii. 非ユークリッド写真連盟のによる〈経験〉の「表現」

路上観察学会がさらに興味深いのは、そうした「自分の視点」を「路上」に「発見」するだけでなく、その「自分の視点」をいかに表象していくか、といった実験こそを、考現学の重要な要素として継承しているからである。

例えば、路上観察学会の一派を名乗る「非ユークリッド写真連盟」（写真家・糸崎公朗と漫画家・森田信吾によるユニット）のコンセプトは、「非ユークリッド写真による非人称芸術の記録」である。「非人称芸術」とは、赤瀬川が提唱した「超芸術」の一つの性格で、作者がおらず、それを「発見」した者が意味を見出していくというもの。「非ユークリッド写真」というのは、「ユークリッド遠近法にこだわらない写真」という意味である〔糸崎 2002：47〕。

彼らは、人間にとっての「目の前の現実」が、目だけでなく、それに、「さまざまな方向からモノを見ること、過去の記憶と照らし合わせること、耳、舌、皮膚など、他の感覚器官からのいろいろな

情報と関連づけられ、初めて」現れるものである〔非ユークリッド写真連盟 1999:37〕から、写真機をそのまま使っても、撮影者の感じた「その場の空気」を「表現」することはできない、と言う。そして、「その場の雰囲気、現場で感じた空気」を「表現」するための写真術を次々と開発していくのである。そのひとつ「ツギヤマ」は、「部分的に撮り分けた写真をつなぎ合わせ、広い視野を再現する技法」であり、そうすることで例えば、「昆虫のミクロの世界から人間の日常世界まで、すべてにピントが合った」世界すら現出させることができる〔糸崎 2002:40〕。「フォトモ」は、様々な角度から撮った立体物の写真と、人間や看板などの写真を切り抜き、立版古のような立体ジオラマにしたものである。これらは、「今までの写真とは違った現実のあり方を表現し、写真を見るときとは違った視覚機能を引き出すような」新しい写真「表現」〔非ユークリッド写真連盟 1999:35〕となっている。

Ⅲ-2. 野外活動研究会の活動から

「野外活動研究会」通称「野外研」は、編集者の岡本信也を中心に、フィールドワークの同士の集まりとして、1974年に誕生した。メンバーの多くは、名古屋市近辺に住み、「地域文化・生活環境に関心を持つ」「一般の人びと」―「市民」である〔岡本 2000:81〕。

野外研においても、＜日常生活＞の採集＝調査という作業における主観という主題は、免れ得ないものとして意識化される。

Ⅲ-2-i. 観察対象の時間／観察主体の時間

最近の野外研の研究発表会（「フィールド研究発表 2005 考現学から見える過去と未来」2005年9月25日 @名古屋市短歌会館）における、岡本信也の「時間」に関する議論は、正に調査者の主観性を取り扱ったものであった。岡本の話は、坪井正五郎を紹介した「定点観測」という調査手法のはなしから始まり、モノが朽ちていったり変化していくことをどう捉えるかといった議論に展開していった。ここまではおそらく、いたって正統な社会科学的議論だった。ところが、「古い」ということを語り始めた辺りから、はなしは徐々に、観察対象の「時間」の問題から、観察主体の「時間」の問題にシフトしていった。つまり、「定点観測の時間と観測者の人生時間は同時に流れている」という、よく考えたら当たり前のことについて、改めて問い直そうとしたのだった。この問いは、定点観測というものが――ひいては「観察する」という営みが、純粹に「客観的」な方法であるという科学の常識を疑い、何らかの形で観察者の「主観」が入り込んでしまうことを無視しない、という自覚がなければ

ば出てこない問いではないかと思う。自らの考現学的営みにおける「主観」と「客観」をぶつけるような実験こそが、この方法を、〈日常生活〉の「研究」とも「実践」とも言えないユニークな方法にしていることをあらためて確認する。

Ⅲ-2-ii. 「私がえらんだ文化財」

もっとも、野外研における「主観」の問題も、採集=フィールドワークにおいてのみ意識されるものではない。むしろ、〈日常生活〉の／における採集の中で生まれた「主観」を「主観」として表象することで生じる、「他者」との共感／違和感そのものを問題化するための表象装置の開発と実験が、この会の重要な目的になっていく。

そのことが現れているのが、1989年から始められた、「私のえらんだ文化財」という試みである。

これは、「身近な日常の生活・風俗をフィールドワークして、自分の眼でえらんだ文化財」で、一方では「私」としての大切なものとはなにか」と自問し、一方では「現代の社会を問い直す」ことを目的としている〔会誌「フィールドから」44号（以下号数のみが示された場合はこの会誌を指す。）1990:346〕。「作業としては、参加者を呼びかけ、各自で身近な地域を見て歩き選定を試みる。選定をした事柄は「登録用紙」に記入し、収集して行き、その収集作業の中で、「選定の意味」をさぐっていく、というものである（「私のえらんだ文化財」登録公募のピラ）。

1992年からは、一般からの「登録」も募り、現在その登録数は2000を越えている。

登録されたものをみると、自分の愛車や、友人に仕立ててもらったコート、子ども時代から大切にしている人形など、自分史と深く関わるものがある一方、歴史的建築物といったものもしばしばみられる。「私のえらんだ文化財」の実践は、「私の」／「文化財」という、一見アンビバレントなものを並べることで、「私」という主観の問題と、例えば「現代の社会」とか「私たちの生活環境」とか、あるいは「文化」といった言わば「私たち」の問題の、〈日常生活〉における関係性を問う場として設定されることになった。

町に出て「文化財」を選ぶというフィールドワークは、あくまで「私」の発見と深化が目的とされ、フィールドワーカーたちも実際にそうした実感を抱いている（例えば、「フィールドワークとは、結局、私の私研究につきることだと思う。」といった感想〔中根康高「雑感」59号1995:543〕）。

一方、フィールドワーク後の重要な作業のひとつは、集まった「登録用紙」の「分類」である。ここではまず、自分自身が「選んだ資料（文化財）をながめて、私はなぜこんなものを選んだのかと考えこむ研究を」する〔岡本信也「人はどのようにして石を拾うか」53号1993:461〕。それは、フィー

ルドワークにおける「私」への思索と同質のものと言っていいのではないか。

その上で、「文化財」とはその地域に生きた人びと、その子孫たちの心にふれ合うものとしたら、たとえひとつずつがバラバラであっても、人びとに共感しうるものがないと成り立たない。〔岡本信也「ノスタルジアと原始ユーモア」51号1993:431〕といった認識についての検討がなされる。ここでの「私たち」の構築に関わる思索は、「共感」ということに集約されることが多いのだが、さらに、時間―歴史の問題が加味されることでしばしば、「ノスタルジー」という「共有の感覚」が見出されている。そして、これらの共感覚は、会員同士に限らず、「私のえらんだ文化財」展の観客をも巻き込むものとして設定されていくのである〔中島信幸「自分を見つめ直す」59号1995:544〕。

しかしながら、目的はおそらくこうした「共感」の要素の発見ではない。ここで期待されているのはむしろ、フィールドとその外部を行ったり来たりすることで、「私」と別の「私」、あるいは「私」と「私たち」が「矛盾を抱えたままで、まず混沌を生み出すこと」〔岡本信也「ノスタルジアと原始ユーモア」51号1993:431〕なのである。

おわりに――〈表現〉する「討議空間」

考現学という方法に見出せるのは、「私」の〈経験〉としての「研究」という、従来の「アカデミズム」のそれとは異なる方法論である。そうした〈経験〉そのものを反映したようなそれぞれの主観的な世界の見方を表象する努力は、もしかしたら、〈表現〉と言っていいものかもしれない。

一方、「アカデミズム」の、例えば「論文」といった「表現」は、客観的な（規律訓練を受けた「専門家」にとつての）相互参照可能性こそが重視されてきたといえる。それゆえ、「討議空間のデザイン」が求められていると言ったとき、そこで想定される「討議空間」というのはしばしば、相互参照可能な「データ」やそこから導かれた「理論」が精緻化される場である。また、「討議空間のデザイン」が「臨床」的であると言ったとき、そこでの「デザイン」の前提はしばしば、アカデミズム／社会という二項対立を再生産するだけになってしまうことになる。「討議空間」はあくまで、専門家たる「研究者」が「一般の人々」に対して提示するなんらかの“処方箋”あるいは“治療”といった「研究結果」自体を生産するための場として設定され、その「表現」とは、「患者」にわかりやすいことばを發明することでしかなくなる。

しかしながら、若手研究集合の議論の中で確認されたことのひとつは、「研究」をめぐる「臨床

性」とは、アカデミズム／社会という二項対立の単なる接点ではない、ということだった。アカデミズムに所属している私たちも、違う分野に足を踏み入れれば、いつでも「素人」になれるわけで、そうした認識においても、アカデミズム／社会をつなぐ万能の「デザイン」などはありえない。

問題は、「討議空間」という場のディシプリンをより精緻化することではない。必要なのはおそらく、「討議空間のデザイン」というものを、様々な個別の出会いの意識化自体の方法論であると考えていることではないか。それは、鷺田清一の言う「臨床」＝「ある他者の前に身を置くことによって、そのホスピタルな関係のなかでじぶん自身もまた変えられるような経験の場面」〔鷺田1999:p.139〕と似ている。

考現学の、特に再想像者たちが、その〈表現〉として方法論化しようと実験しているのは正に、「私」を差し出すことで「私」が変わっていくという状況を観察することであり、「討議空間のデザイン」ということなのである。

(リサーチ・アシスタント、文学研究科博士後期課程)

【引用文献】

- ・ 赤瀬川原平監修 1995『赤瀬川原平の冒険——脳内レポート開発大作戦——』[同名展覧会カタログ]「赤瀬川原平の冒険」実行委員会
- ・ 伊藤遊 2003「考現学で民俗学ということ——今和次郎・路上観察学会・野外活動研究会の「<日常生活>研究」作法——」川村邦光編『文化の語りと実践、そして批評』文化 批評編集委員会
- ・ 伊藤遊 2006「ポピュラーカルチャー＝日常生活を研究する 表現する——考現学における「芸術」と「博物学」」『日本学報』第 25 号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室
- ・ 糸崎公朗 2002『出現!フォトモ——町を組み立てる』PARCO出版
- ・ 梅棹忠夫 1971「考現学と世相史（上）——現代史研究への人類学的アプローチ——」『季刊人類学』1971年1月号
- ・ 岡本信也 2000「考現学と随筆——地域研究の一方法」『東海地域文化研究』第 11 号、愛知女子短期大学
- ・ 川田牧人 2005「目で見える方法序説——視覚の方法化、もしくは考現学と民俗学」『先端社会研究』第 2 号関西学院大学大学院社会学研究科 21 世紀COEプログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究
- ・ 今和次郎・吉田謙吉 1930 = 1986『モデルノゾオ（考現学）』[復刻版] 学陽書房
- ・ 佐藤健二 1997「コミュニケーションとしての調査」川添登・佐藤健二編著『講座生活学 2 生活学の方法』光生館
- ・ 住友和子編集室・村松寿満子編 2000『林丈二的考現学——屁と富士山』INAX出版
- ・ 疋田正博 1986「今和次郎・吉田謙吉の「モデルノゾオ」」『現代風俗 '86』現代風俗研究会
- ・ 非ユークリッド写真連盟 1999『フォトモ——路上写真の新展開』工作社
- ・ 柳田国男 1917「郷土研究の休刊」『郷土研究』第 4 卷第 12 号、郷土研究社
- ・ 柳田国男 1934「民間伝承論」『柳田国男全集』第 8 卷、筑摩書房、1998
- ・ 柳田国男 1935「郷土生活の研究法」『柳田国男全集』第 8 卷、筑摩書房、1998
- ・ 吉田憲司 1999『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店
- ・ 鷺田浩 1999『「聴く」ことの力』阪急コミュニケーションズ

To Be or not To Be... Interesting

- A Hamlet Soliloquy on the Choices of Patterns for Social Interaction:
The Cases of a Musician and a Musicologist -

Stella Zhivkova¹

Abstract:

The long-term aim of this paper is to stimulate interaction between scholars and their audience, thus ensuring interpersonal and/or intercultural dialogicity. Its short-term aim is to suggest possible ways of performing research avoiding the pitfalls of pure intellectuality, stiff idiom and high abstractness of thought and expression used by scholars. I support my point of view with examples of how I as a scholar have been engaged into a productive interaction with the readers of my academic output.

Key words:

human interactivity, participation, dialogue, actuality

0. Introduction

This paper tells two stories: one of an established Bulgarian musician, and one of a not-yet-established Bulgarian scholar. Its intention is to elucidate the issue that I have been concerned about recently; that is, might there be a possibility for simultaneous 1) professional, highly-specialized career, and 2) production of results that would interest not only scholars but also people from non-academic social and cultural milieus.

¹ I wish to extend my heartfelt gratitude to my colleagues from the Interface Humanities Junior Research Group, whose comments aided me significantly in the creation of this paper, for their vast knowledge readily shared with me.

As a member of the Interface Humanities Project, I have tried to find a way to achieve interaction between the scholarly-engaged workers and the society. Examining the possibilities for dialogue between these two “camps,” I have come up with several suggestions for producing output of musicological research that is accessible, useful, understandable and meaningful for the non-academics. However, there are a number of potential dangers in such an undertaking: lowering the level of research and reducing the depth of analysis are both among the unforgivable scholarly sins. What is gained, however, shows that it is worth losing some “academic weight” (my way to term the Japanese word “*omomi*”), as in return a clear possibility for active dialogue with more members of society is ensured.

In the outline of my ideas submitted earlier this year I repeatedly mentioned Herman Hesse’s *Castalia*.² Castalia is a province isolated from the world around it. Castalia is a pedagogic province that keeps alive the thought and the spiritual values of humankind through teaching, studying, and playing the cryptic Game which synthesizes disparate intellectual and artistic disciplines into a whole. Never clearly described, the Game is a kind of composition combining Chinese philosophy, the Latin usage of Julius Caesar, and the esoterics of the Kabbalah; in this way the Game creates an organic symphony of the mind in which the connections between things that appear so different become clear.

My interpretation of the issue of the possibility of clinicality of academic research was influenced by Hesse’s irony which underlies the Castalia narrative. However grand and sophisticated the Game played and developed there, it proves worthless for the humankind because of its markedly abstract character; the Game is nothing but an aim in itself. The overtly haughty attitude of the Castalian members, as it is described by Hesse, also made me think about the possibilities for achieving an equal dialogue between our academic world and society.

With the present paper I aim to prove that: 1) the output of expert work can be accessible; and 2) that the fact that the output is easily understood and accepted outside the academic circles

2 Herman Hesse, *The Glass Bead Game* (1943).

does not necessarily mean that the research is unworthy or of little scholarly significance. I adduce an example from contemporary Bulgarian music - it is the work of a clarinetist who successfully combines his career in classical music with his work in the field of contemporary Bulgarian pop-folk music. I employ Ilia Iliev's case as an example of successful symbiosis of two seemingly incompatible musical personas - the one of a classical musician and the one of a pop-folk musician. Why they are considered incompatible is explained below.

1. The Choice of Ilia Iliev

1.1 The Musician Ilia Iliev - "the Professor" of classical and *chalga* music

Iliev was born on July 23, 1968. He started taking piano lessons at the age of five; later, when he was ten, he began clarinet lessons. By the age of eighteen he had already won numerous prestigious awards for young musicians. Later, entered the National Academy of Music and majored in Clarinet Music Performance.

Appropriate recognition of his talent is his appointment as soloist of the Grand Symphony Orchestra of the Bulgarian National Radio. His activities include concerts, participation in classical music recordings, etc.³

What I find most intriguing about Iliev is his successful work in two radically different fields - the one of the elegant classical music and the one of the alleged uncouth pop-folk music. In order to make my point, I offer a short introduction to contemporary Bulgarian pop-folk music; with this introduction I hope to show why pop-folk was, and is still considered vulgar and crude in Bulgaria. Following the case study on Bulgarian pop-folk, also known as "*chalga*," I offer an analysis of Ilia Iliev's way of overcoming the seemingly irreconcilable contradiction between the highly refined classical music and the pop-folk music for the masses called *chalga*.

3 Internet Source: <http://www.slavishow.com/index.php?cat=1&mid=35&id=16&v=4077> (In Bulgarian).

1.2 Contemporary Pop-folk Music (A Case Study)⁴

Chalga is one of the slightly negative names referring to Bulgarian pop-folk music; the word itself calls up associations of this genre with the Romanies and their music⁵ as well as with Turkish cultural influence, both being negative links for many Bulgarians.⁶ The word also carries connotations of Turkish and Romany words (for musical instrument and musician). Kurkela⁷ stresses on several “eastern features”, namely - vocal sound, certain modalities and melodic formulae. In the clarinet playing of *chalga*’s strongly Oriental melodies, the musicians prefer nasal and harsh intonations, which makes their playing imitate the *zurla* (oboe-like wind instrument with abundant connotations of eastern music.) The musical modalities employed in *chalga* contain “typically added seconds and semitones which are from view point of Western thinking in the wrong place and could be traced back to the Turkish *makam* system”. (Ibid.)

Timothy Rice also points out something distinctively eastern, besides the rhythm: it is the Phrygian scale employed in the performance of *chalga* music⁸. In Bulgaria it is typically associated with Romany music.⁹ To make things even harder to swallow for the “pure” Bulgarians, pop-folk makes use of *kyuchek* rhythms, high scale clarinet solos imitating *zurla* playing (an element from Turkish music), as well as madly rapid gypsyish tempos. All of them used to run counter to the nationalistic discourse of the communist period (up to 1989) when the slogan “One music for one nation” was favored and supported; that was *Bulgarian* “folk music” as a symbol of national purity. In an attempt to limit and eradicate even the traits of *foreign* elements, the government tried to control the popularity of the early *chalga* music; but despite the difficulties in establishing itself as the new form of folk music, *chalga* lived long enough to see the “free”

4 The short introduction I provide here is a translation from a larger article tackling the pop-folk issue from another perspective: ジブコバ (2005, 177 – 185).

5 “Roma,” “Romany” or the like are the commonly used terms referring to what is widely known as “Gypsies;” the latter is sometimes considered offensive.

6 Rice (2004:90).

7 Kurkela, Electronic Source.

8 Rice (2004:94).

9 (Ibid.)

Bulgaria in 1989, and to almost thoroughly gain control of Bulgaria's musical market.

The reasons for the negative attitudes towards *chalga* are understandable in terms of the hardships undergone by the Bulgarians during the five-hundred years of Turkish oppression. Naturally, having freed themselves, the Bulgarians would not be willing to accept another apparently Turkish influence, be it exclusively in the sphere of music. The Romany influence, strongly present in *chalga*, is not among the things that could be easily accepted by the sensitive Bulgarians either. The Roma, contrary to the image most of the Japanese have, are among the most skillful pick-pockets, thieves and crooks; girls are cheap samples of juvenile prostitutes. This does not apply to all of the Romanies, but the numerous precedents in this respect create a typical stereotype about all things Romany. Thus, such anti-Turkish and anti-Romany implications result in a strong anti-*chalga* attitude.

Apart from having non-Bulgarian musical connotations, are there any other reasons to consider *chalga* music "cheap and tasteless"? The answer is simple: in fact *chalga* hardly offers any rhythmic variety; lyrics are predominantly naïve, syrupy and schmaltzy; often with clear-cut suggestiveness implied. They were also meant to be rather catchy and persistent. Female singers were (not very skillfully) imitating Madonna's bold suggestive behavior, and touching themselves while singing in a very provocative way, which was one of the "musts" for a *chalga* star stage behavior.

The suggestive behavior seems to be passé nowadays. My research has shown that however silicon-improved and provocative the looks of the female singers, the words they sing are a far cry from what they used to be at the time when *chalga* was gathering momentum.¹⁰ Nowadays, the musicians who play the best *chalga* are professionals and perform completely convincing using traditional tone ornamentation alongside with the Turkish and Romany-music derived devices. Ilia Iliev, the clarinetist mentioned earlier in this text, belongs to one of the most

¹⁰ To avoid participating in copyright piracy I do not exemplify my thought with any visual materials. Such are available online.

popular pop-folk bands, "Ku-ku Band;"¹¹ he is a National Academy of Music graduate and a professional performer of classical music as well. He has been recently engaged in writing a music textbook for junior high school students, introducing the subject in general, but especially stressing on Bulgarian folk music and its new stage called pop-folk.¹² This gives me reason to think that if people who have excellent music education have come to make *chalga* and at the same time they apparently do not make any compromises with their musical consciousness, there must be some ground for thinking that *chalga*, is not a devil as black as he is painted by the critics. However different from the orthodox concept of folklore, it is music for the people; it is the music of the nation.

Seventeen years after the fall of the communistic regime in 1989, the new concept of Bulgaria's identity includes its belonging to the Balkans as well as its multi-ethnic structure. The Roma, whose existence used not to be officially acknowledged, now play a central role in our music and culture. The boom of *chalga* in contemporary Bulgarian society raises questions about the authenticity of the phenomenon and its wider social implications.

Although there is a wave of resistance to *chalga* among supporters of 'high' or 'pure' national culture¹³, the fact of its massive spread among young people since the late 1990s allows explanations rooted in cultural hybridity, where the power of Oriental flows has come to play a significant role in shaping up young people's everyday cultural practices. Good or bad; pop-folk mirrors the transitional pains Bulgaria has been through. In some sense, it stimulates the heightening of a stronger sense of "Bulgarian-ness" at the same time bridging up the distance between Bulgaria and its neighbors.

The wider and quieter acceptance of *chalga* we can observe today shows that the fear of demonstrating Bulgaria's Balkan-ness and non-European-ness is gone and Bulgarians have already

11 See for more detail the webpage of the famous and rather lucrative show that Ku-ku band work for: <http://www.slavishow.com/index.php?cat=6>

12 Personal contacts.

13 See: http://www.download.Bulgaria/prg_view.php?name=Chalga+Killer for a computer game in which you can "kill" pop-folk singers.

accepted the fact that Bulgaria is **first** and foremost a part of the somewhat peculiar Balkans; and **then** - a member of the European family. Besides, it might be said that *chalga* mirrors the delicate and otherwise hard to observe creating of a new Bulgarian identity. It clearly shows that there are not attempts at proving national purity or superiority anymore. A multi-faceted nation produces and enjoys multi-faceted music, which does not negate, but collaborates with the music of its neighbors. A fairly humanistic trait, indeed.

1.3 The Sophisticated and the Vulgar: Two Musics, One Person

To return from this long but necessary digression, I would like to explain why Iliev is called “the Professor” by his colleagues. To begin with, let me remind you that he has been juggling the image of both the classical and *chalga* musician. It is not a thing that many musicians can do. Playing *chalga* demands a severe change in fingering (the moving of the fingers on the body of the instrument) and the position of the teeth, tongue and lips (for the wind instruments). Acquiring the right fingering, mouth and breathing techniques for playing only one kind of music takes years of hard practice and turns the musician into a highly-specialized expert in playing that certain type of music.

Iliev plays two structurally different clarinets in his appearance on stage as either a classical or *chalga* performer. His talent to adjust to the respective music, has earned him the title of “Professor” among the musicians.

One more reason to consider him a scholarly engaged person is his serious project named “Folklore Secrets revealed by Ilia Iliev” - a (text)book on the principles and ornamentation techniques of different kinds of regional Bulgarian folk music.¹⁴ According to the author, it will provide practical advice and theoretical explanations, as well as easy-to-understand secrets of playing melodies that are considered typically Bulgarian but apparently show Oriental influence. Iliev sees no hostility and nothing negatively foreign in them.

14 Provisional title. (Personal correspondence).

Iliev's case is a remarkable curiosity and yet his non-orthodox approach to music seems perfectly normal: his chameleonic attitude of changing the tone-color according to the expectations of the audience is his way of participating in music. He provides an excellent example of an expert who does not confine himself to making serious music, but endeavors to satisfy the tastes of the wide audience too. The reasons are not purely financial. Indeed, a *chalga* musician earns more than a classical musician. Iliev, however believes that both genres give him something special and invaluable - the feeling of being needed and loved by people of various walks of life. It seems to make him feel more complete as a musician, too.

2. The Musicologist - me

2.1 Differences from Iliev's approach

I have so far attempted to show that the concept of pure expert-produced and expert-oriented art can be changed. I will try to illustrate my approach to doing research using hints from Iliev's experience. However, it deserves a mention that my case considerably differs from the one of Iliev. First and foremost, admittedly, Iliev plays two radically different kinds of music, but he clearly distinguished himself both as a classical musician and as a *chalga* one. When he appears on stage as a classical performer, he wears a tuxedo and directs his music to an audience of classical music aficionados. Quite differently, when he plays *chalga*, he wears whatever the season allows for one to feel comfortable in. Reminding the reader of the dramatically different fingering, posture, performing behavior etc. when playing either classical or *chalga* clarinet, it should have become clear by now that Iliev does not in any way "combine" the two kind of music he plays.

2.2 Research methodology proposed by me

What importantly differs in my approach is that I intend to “play” two kinds of research idiom simultaneously. To put it more clearly, I aim at combining two styles of expression with the intention of turning my academic output into an accessible one for readers from all walks of life. One of those styles is the commonly accepted so called academic style; the other one is the slightly journalistic style, which I for lack of a better term choose to call “publicity style.”¹⁵ I see the combining of the strictly academic expression and a simpler, closer to the common parlance expression, as a means for more effective communication with the prospective readers. While Ilija Iliev is a one-hundred percent classical musician *or* a one-hundred percent chalga musician depending on the audience he plays for, I cannot have a prior knowledge what my potential readers would be like. For that matter, a subtle balance between the two manners of presentation needs to be maintained by me as an author of audience-friendly papers.

2.3 Application of Method

One possible solution to the problem how to make myself understood by an audience consisting of people from distinctively different milieu is to establish a multilayered writing style.¹⁶ To clarify what I mean by “multilayered writing style”, let me give one example.

In the thesis I submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy, I use the example of the *sawari* playing technique on the *shamisen*.¹⁷ The format of the paper required a strictly musicological, technically precise explanation of the technique, intended for those who would like to have an utterly objective, impartial idea of what that technique is like. To be sure, I also provided a brief observation of the academic discussions on the matter in question. However, I gave myself the freedom to interpret the sound produced when

15 I have chosen for the word “publicity” because I intend to retain its etymological connection with “public” and “populace.”

16 By “multilayered” I try to convey the meaning which is considerably easier to grasp through the graphical presentation of the word in Japanese. Cf. “多層的” and “重層的.”

17 Zhivkova (2005:74-78).

playing *sawari* (that is, how it sounds like), as well as what is communicated by that sounds. I ventured to explain in an unpretentious way how *sawari* appears to the uninformed person who enjoys music but do not necessarily have much special knowledge about it. Thus, I created two visibly different layers of explanation: one for the expert who would be satisfied to know about the structure of the *shamisen*, its neck, the *kamikoma* bridge that supports the two strings but not the one that actually produces the sound known as *sawari*. Anyone interested in a detailed description could read and learn more from the reference material which I have given in the footnotes. For readers who are not tempted to learn what is technically important in order to produce the *sawari* sound, I have written sentences that provide clear enough explanation of the sound color and the metaphoric links to real life that *sawari* can be understood through - insect buzzing being but one example. Readers who wish to know in detail about technical specifications like tone qualities, pitch, frequency etc. can profit from reading the paragraph on these. Readers, who just want to know why I have included *sawari* in a paper on image-laden loci observed in Japanese culture can refer to the sentences in which emphasis is laid on *sawari*'s mysterious, drone-like sound which invites the audience to complete the aesthetic arc of finding out what is represented by a certain sound highly metaphorical in its nature.

Dividing the results of my *sawari* examination in such a way, I have tried to meet two possible kinds of expectations of two possible audiences, and to satisfy their interests by offering either of them a bit of useful knowledge.

Unfortunately, a serious drawback of the multilayered writing method shows through in that part of my research where I argue on the phenomenon of *kakekotoba*.¹⁸ In an attempt to explain why *kakekotoba* are possible when writing in Japanese, I had no choice but to mention the *hiragana* syllabary and to pay some attention to it too. Such an effort certainly pays back because it does clarify a lot to the readers unfamiliar with the Japanese language, but on the other hand - it is disturbingly childish to introduce the *hiragana* characters to the part of my prospective readers who have a good command of the language; or, which is in fact the worst, to readers who

18 Zhivkova (2005:51-56).

are native speakers of Japanese. However, such a shortcoming is rather stimulating for the improvement of the research doing method which I try to establish in my attempt to avoid being hard to understand or patronizing and talking down to the readers.

3. In Conclusion:

Positive Aspects of the Open-(also)-for-the-general-public Research

Although my experimental “easy” writing is still on its initial stage, I feel that it has certain advantages which I sum up here.

First, it ensures greater possibilities for effective communication with a large number of people, because apart from its communicating information about the research to other scholarly engaged individuals, it has an open valence to those who are not directly involved in academic research but are apparently interested in the matter in question.

Second, naturally, an academic paper accomplished in any of the fields of the Humanities, is an academic product. Nevertheless, it should look at the factors that have generated the ideas which form its basis; invariably these are social factors, and thus the paper automatically turns into a means to answer social needs. Since every research project is a contribution towards increasing our understanding of the world around us, it is natural that a paper should be created so that it would encourage, not impede this understanding by using excessive amount of academic jargon for example.

Third, in strong connection with the need for a paper to prove socially engaged and useful comes another important factor which plays a crucial role for characterizing a paper as “actual,” “clinical” or socially valuable. Namely, this is the factor which *determines* such actuality. In order to be up-to-date and needed, a researcher has to bear in mind the extreme importance of developing a familiarity with the actual needs at the moment of performance of the research.

Periodically updating fieldwork data and not allowing its being used past its expiration date, as well as refraining from its repeated usage in the course of several years guarantee an ever-actual, perceptive research output. However hard, it is essential for a scholar to remain alert and watch the way social phenomena develop and reflect such a change in one's own writing.

Forth, my observations have proved that there is no substitute to actual talking and communicating with the people in some way concerned with the research project developed by a scholar. They supply the material and they should evaluate the result of my interpretation of that material. The feedback makes clearer the gaps and the points that have been overlooked. What I have actually done was talking about my research in public lectures, play the *koto* and stimulate the interest of the general public in my understanding of Japanese culture. Such an attempt to make known what is being done as research can be labeled "intelligent advertising" of that research. It is by its nature a way of dissemination of my academic achievements; at the same time it provides an invaluable chance for correctives on the part of those concerned (the whole of the Japanese people, as it is in the case of my Ph.D. research paper). It turns out at the end that "participants" and "recipients" of research can be one and the same thing. Discussions with the subjects, interim reports, immeasurably contribute to seeing whether the results meet the needs, satisfy the interest, supply answers to questions. Talks, round tables or informal talks allow the participants to look closely at the research and to offer constructive advice; not to mention the vital importance of their preventing researcher's possible drifts away from the matter researched.

Admittedly, preparing regular discussion papers on different topics as the research progresses is not an easy task but it is well worth doing it. I have discussed mine with various musicians, native speakers of Japanese and other numerous "subjects" who tested the plausibility of my assumptions. Such mini-discussions have helped me give up ideas which were far too abstract or vague; improve my method; they have helped immeasurably to firm up ideas and put things into context, as well as to check the relevance of results and conclusions. I knew in advance that it was highly likely that there would be periods of tension between the researcher and the "audience." After experiencing several such periods, I am now certain that these can and

should be handled so that they work for the advantage of the research. The tension should be turned into a constructive impetus for the researcher to further develop the theory instead of letting the constructive communication break down.

In this work, I tried to juxtapose the activities of two people working in two different fields in an attempt to make clear through the juxtaposition what a scholar of musicology can learn from a practically engaged musician. I found out that both work in a time that does not anymore leave room for narrow specialization; the spirit of the age also demands a close connection with the audience we devote our efforts to. More obvious than the similarities between the musician (Iliev) and the musicologist (author of the present paper) are the differences, which were discussed in subsections 3.1 and 3.2.

The marked fundamental similarity, however, is that both of them do enjoy and feel satisfaction from being engaged in working for two utterly different types of audience. The author of the present work has chosen to create **papers answering actual social questions**, rather than creating **purely academic papers**. In order to avoid cloistered academism and contemplative Castalian humanism, I have anchored research in real life and vibrant culture. Having done so, I keep aiming at stimulating interest and interaction between the Castalians and non-Castalians, thus ensuring fruitful dialogicity on interpersonal and even intercultural levels.

(Designated Researcher / 特任研究員)

Reference Materials

Zhivkova, Stella (2005) *Expression in Japanese Culture: an Inquiry into the Phenomenon of Image-Laden Loci Observed in Language, Music and Poetry* A dissertation submitted in partial fulfilment of the requirements for the degree of Doctor of Literature, Osaka University.

Bibliography on *Chalga*

Buchanan, Donna (1996) "Wedding Musicians, Political Transition, and National Consciousness in Bulgaria." In: Mark Slobin, ed. *Retuning Culture: Musical Changes in Central and Eastern Europe*, Duke University Press, pp.200-230.

Dimov, Ventsislav (2001) *Etnopopbumat*, Sofia, Bulgarsko Muzikoznanie.

ゲルナー, アーネスト (2001) 『民族とナショナリズム』 加藤節 (監訳), 岩波書店。

Kurkela, Avesa "Producing Oriental: A Perspective on Bulgarian Popular Music" <http://www.uta.fi/laitokset/mustut/populaarimusiikki/aineisto/oriental.html>

Levy, Claire (1995) Book Review: My It Fill Your Soul: Experiencing Bulgarian Music. *Popular Music* 14 (2), pp.379-381.

マニユエル, ビーター (1992) 『非西欧世界のポピュラー音楽』 中村とうよう (訳)。

Rasmussen, Ljerka Vidic (1995) "From Source to Commodity: Newly- composed Folk Music of Yugoslavia." *Popular Music* 14 (2):pp.241-56.

Rasmussen, Ljerka Vidic (2002) *Newly composed folk music of Yugoslavia*. N.Y. Routledge.

Rice, Timothy (2004) *Music in Bulgaria: Experiencing Music, Expressing Culture*, Oxford New York: Oxford University Press.

Rice, Timothy (2002) "Bulgaria or *Chalgar*: The Attenuation of Bulgarian Nationalism in a Mass-Mediated Popular Music." *Yearbook for Traditional Music* 34, pp. 25-46.

Rice, Timothy (1994) *May It Fill Your Soul: Experiencing Bulgarian Music*, Chicago : University of Chicago Press.

サイード, E.W. (1993) 『オリエンタリズム』 今沢紀子 (訳), 東京: 平凡社。

ジブコバ・ステラ 伊東 信宏 共著、『ブルガリアのチャルガーアイデンティティ、変革、グローバルイゼーション』、In: 民族藝術 vol.21, 2005, 177 - 185 頁。

Web addresses of importance:

- Web site of a chalga selling online shop. CD jackets with singers' photos can be seen. <http://music.balkanatolia.com/c/sl-e/p-l/cid-4/pop-folk-chalga-music.html>
- Hungarian group borrowing east European motives' <http://www.chalga.hu/>
- Martin Karbovski's view on Bulgaria as *Chalgaria* <http://tarpy.ms-hydraulic.com/Karbovski/chalga.htm> (In Bulgarian).
- <http://www.paynermusic.com/> singer's photos, news and excerpts from chalga music (In Bulgarian).

ふたつの研究会をめぐるエスノグラフィック・ノート

アイロニーを超える力

田沼 幸子

<要旨>

本ペーパーは、本報告書が作成されるまでの「若手研究会」の生成と紆余曲折と、筆者が発足させた「ポスト・ユートピア研究会」とに関して、キューバの調査を経て帰国してきた「私」の目を通して描いたエッセイである。ここには、ある意味で、エスノグラフィック（民族誌的）な記述が含まれるが、このような記述を可能にする、人類学的手法の要となる「参与 観察」が、いかに、筆者自身が埋め込まれた状況に左右されているかを描き、人文学の他分野の研究者にも分かりやすく紹介することを心がけた。

<キーワード>

若手、ミッション、ポスト・ユートピア、アイロニー、愛

この論集の作成のために事前に行われた「若手研究会」の研究発表で、私は、自ら発足した「ポスト・ユートピア研究会」のメンバーと、日本文化人類学会で組織した分科会で発表した「小さな、大きな物語：キューバ調査研究報告のための試論」を提示した。なぜか。このペーパーも、ポスト・ユートピア研究会も、本21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」とその若手研究会（以下、若手研）なくして、ありえなかったからだ。研究の内容の詳細については、別冊の報告書『ポスト・ユートピアの民族誌』（2006年刊行予定）をご覧いただきたい。ここでは、COEプログラムと若手研究会が、ポスト・ユートピア研究会のなりたちと、1年半後のシンポジウム実現までに、果たした役割を報告したい。

1) 先立つもの

まず、本プログラムのシニアの研究者たちが、若手を育成し、我々の身になって考えてくれた安定した雇用システムに触れないわけにはいかない。教職義務のない非常勤研究員として3年間、継続雇用されるであろうという安心感が、私たち——少なくとも私個人には——にとって、冒険的なテーマで、大学の枠を超えた横と縦のネットワークを拡げ、研究会を組織し、シンポジウムを企画する上で果たした役割は計り知れない。近年、若手研究者がテニアとして雇用される年齢が上昇しているうえに、テニアとして雇用される保障もなく、経済的な余裕がないために、研究内容も研究のネットワーク形成も非常にこじんまりとしたものにとどまってしまう傾向が少なからずあるように思う。少しでも早く就職するために、非常に狭い専門分野のなかでしか評価されないものであろうと、研究成果を発表しなければならぬ、という焦りは、いまや日本の大学院に在籍する者共通の憂いであろう。私たちは、3年間は継続雇用されるという計画のおかげで、もう少し長いスパンと、より広い視野に立って、他の人文科学の人にとっても、もっといえば社会にとっても、本当に意義のある研究とは何か、そしてそれを相手に伝えるように発表するにはどうしたらよいかを考えるための余裕を持つことができた¹⁾。

2) ミッション

しかし我々の上司であるところのシニア研究者たちは、私たちを3年間、ぬくぬくと自由放任し、任期が終わるころには競争力を失った若手研究者と、読まれることのない報告書の山を生み出すような愚かなプランは立てなかった。彼らは私たちにミッションを与えた。

「毎週、夜を徹しても話し合い、誰もまだ考えたことのない、新しい人文学のテーマと方法論を作り出せ」

正確にはこうではなかったかもしれない。が、私にはこう聞こえた。多分、他のメンバーにもそう聞こえたのではないと思う。私たちは反発した。

1 具体的な理念の詳細については、富山一郎 2004: 2-4 参照。

もちろん、その内容が簡単な指令だったら、私たちも特に抵抗を覚えることはなかっただろう。指令の内容が、「ミッション・インポシブル」ではないか、というまどいが、私たちのなかに反発を生じさせたのだ。

が、ミッション・インポシブルが指令されるのは、世の常である。私たちが所属している大学も、象牙の塔ではなく、「世の中」なのである。そしてシニアの研究者たちは、私たちにとって、「上司」である。かくして独立法人という世の中で、我々は、自主的に、指令されたミッションを遂行しなくてはならない。

それでも「毎週」と「夜を徹して」は現実離れしていると考え、ともかく2週間に1度、時間を限定した会合にしてほしいと要望を出すと、協議の結果、無事に通って、少し安堵した。

3) キューバ

こうした状況は、キューバという社会主義国から帰国したばかりの私にとって、既視感をもたらすものだった。社会主義国では、自分個人よりも社会全体を考えて行動する「新しい人間」たちが、「自主的に」各種の委員会や組織をつくって、最終的に全体がうまく機能することが期待されている。例えば、キューバでは、「みんなのための大学」(Universidad para Todos)、日本でいう「放送大学」のようなものが開始され、また、社会人、主婦やニートでも学ぶことができる夜間大学のようなものがつくられた。経済危機が続くなか、ひとつの職では自足できない大卒のキューバ人の友人達は、少しでも収入を増やそうと、こうした大学の講師として応募し、採用された。講師達は、授業をどうしたらよくなるか、という「話し合い」を持たされた。友人の一人は、特に言うべきことがないの黙っていた。すると意欲がない、と注意された。友人は私にこっそり不満をもらした。

「そうはいつでもさ、一生懸命になって発言している人たち。あの人たちは、本当にそれを実現しようと思って発言しているとはとうてい、思えない。実現するための具体的なプランなんかないんだ。その内容が実現可能かどうかでことより、お役人たちにやる気があるかどうかを見せる、それだけのために発言しているんじゃないかと思うんだ」。

そのうえ、自主的に参加できることが売りだった夜間大学なのだが、登録した生徒達が登校しなく

なってきた場合、講師みずからがその生徒の家を訪問して、意欲を奮い立たせるように、との指令が出た。「やる気がないならほっておけばいいのに」と例によって友人は憂鬱そうに語った。「これじゃ、『家族のための医師』²と同じだ。『家族のための教師』さ」。

4) 自己紹介

日本にいる私たちの若手研究会の「自己紹介」を兼ねたペーパーの提出と議論を行う研究会が始まった。越境・臨床研究会など、いろいろな名前が審議されたが、複雑で長くて覚えられないのと、そういったことを上からの指令で行うと言うことに違和感を覚えた私は、これを「謎の研究会」と呼び、自分のペーパーの発表に臨んだ。

私のペーパーは、キューバにおける、外国人左翼知識人の態度を現地の人びとの笑い話を通じて批判したものだった³。1960年代に学生時代を過ごした多くの知識人にとって、キューバは、当時は反植民地主義のシンボルであり、現在も、反帝国主義・反グローバルイズムの旗手としてとらえられている。彼らはキューバを理想化するあまり、近年、現地に長期間滞在して、理想とは異なるキューバ社会の内情を語る若い人類学者たちの報告を聞いても、「それは本当のキューバ(人)ではない」と否定することさえある。そうした否定が、現地のキューバ人たちにとっても、私にとっても、いかに滑稽に見えるか。それを現地の人びとが権力を批判するときに用いる数々のクエント(笑い話)を用いて示した。

私は底意地が悪いので、そんな話を、若手研に出席されている、キューバに対する思い入れがありそうなシニアの研究者に対する批判の含みを込めて行っていた。シニアの研究者のほとんどは、参加していなかったが、初年度の夏までは、心あるお二人がやってきて私たちの冴えない議論を眺めていた。私は、その存在が、いかに良心に発するものであれ、「自発性を指令する」というそもそもの発足のあり方の矛盾を露呈しているようで、居心地の悪さを感じていた。

よく覚えていないが、若手研究者同士の質疑応答は、あまりエキサイティングなものではなかった。なんでこんな質問をされなきゃいけないんだ、と苛立ちを募らせていたとき、後ろで見守っていたシニ

2 キューバでは、家族のための医師 (medico de la familia) と呼ばれる医師たちが、各地区ごとに駐在している。

3 田沼幸子『話せないことを語ること:クエントから見る現代キューバ』21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」第26回トランスナショナルリテシナー、大阪大学、5月21日、

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/grouppage/trance/trance26.pdf>

ア研究者の一人が立ち上がっていった。

「みんな、なんでそんな話をしているんだ。これは、愛についての話じゃないか!」

言われた「みんな」が、口を開けてぼう然とした様子をしたように記憶している。記憶違いかもしれない。とりあえず、私は、ぼう然とした。

あのとき、私は、なぜぼう然としたのだろう。反発し、批判しようとしている相手が、自分のペーパーを、書いた本人以上に評価してくれている、ということへのとまどいと、気恥ずかしさのようなものがあつたのだと思う。そしてまたそれは、こんな研究会をしたって、新しいものが生まれるはずがない、まるでキューバの「話し合い」と同じようなものだ、という、私の固定観念を揺さぶる一撃でもあつた。それは、お役人を納得させる言葉や、研究会という場を演じるための言葉というものとはほど遠いものだった。この瞬間は、私が、アイロニカルな自分を疑うきっかけになった。そのとき、ミッション・インポシブルは、少しだけ、ポシブルなものであるように思えた。

5) ポスト・ユートピア研究会

これと時を同じくして、私は、「ポスト・ユートピア研究会」を発足させた。主に(旧)社会主義国をフィールドとする若い人類学者を、大学を超えて組織して、読書会や研究会をし、より幅広い視野で自分達の研究内容を考え、最終的に世に問うことを目指した。

現存する／した社会主義国で行われた人類学的研究はまだ蓄積が少ない。文化人類学という学問は、英米仏を中心として発達したために、社会主義国では「ブルジョアの社会学」と非難され、かつては「西側」諸国の研究者たちに長期の調査許可が下りるはずもなかった。が、ベルリンの壁の崩壊のあとは、現地調査が可能になり、若い研究者達の報告が増えつつある。しかし、先に述べたように、「それは本当の〇〇ではない」と否定するような年配の研究者がいるのではないか、という恐れもあって、私は、手始めに、若手の研究者を集めた。また、資金を持った年配の研究者が集めた研究会は、どうしても、その人たちの顔色をうかがって、自分が見てきたものを提示するような形になってしまい、結果として、強制されたわけでもないのに、フィールドデータを自発的に既存の見解に寄り添うような形で書き直してしまうのではないかと危惧した。というのも、

キューバで知り合った米国の人類学の院生たちが、その場で語ってくれた発見の内容と、彼らが論文として書く内容というものを見比べたときに、後者は、フィールドで語っていたときの、えもいわれない複雑さを、削り落としていったものになってしまっているように見えたからだ。それは、彼らがやはり、1年でも早く、アカデミアでなくてもいいから職に就こうと必死であるということと、彼らに書く場を与えている年長者達が、本来、彼らが批判の対象としてもおかしくない——その年長者たちは、キューバに入国できないか、長期滞在できないため、二次資料しか用いていないことが往々にしてあったのだから——人びとであったにもかかわらず、立場上、そう明言することができなかったことも無縁ではないだろう。私から見ると、以上のような理由で、米国のキューバ研究は、フィールドデータを記述する際の繊細さにも、先行研究者への挑戦にも欠いたものになっていったように思えた⁴。

冒頭で述べたように、この点で、「インターフェイスの人文学」が私に与えてくれた3年間の雇用と経済的な保証は重要だった。また、ポスト・ユートピア研究会のメンバーも含めた若手研究者が、RAや非常勤講師の仕事で手一杯で、研究会の企画や運営など考える余裕すらないときに、私は、それを行うことができた。

2004年度、若手研が開催されるのと同じ日の午前中に、ポスト・ユートピア研究会として読書会を行うと同時に、フィールドで得た情報や知見を交換することは、それぞれのメンバーにとって、非常に新鮮な驚きだった。人類学はもともと、ミクロな地域のフィールド調査を踏まえたうえで、それらのデータを地域を超えて比較することによって考察を深める学問である。このため、若手の人類学者は、対象となる地域と同じ範囲の研究者との交流から始めることが多いのだが、そのまま、その地域研究のサークルに留まってしまうことも多い。「ポスト・ユートピア」というテーマのもとに考えてみると、かなり離れた地域や、「社会主義」を経験したことがない国でさえ、共通したものが見えてきた。それはまた、これまで、地域ごと、あるいは所属する大学、または研究室ごとに、いつのまにか自然で自明なものであるかのように固定化しつつあった、研究上の「言葉づかい」を見直し、互いに通じる言葉を選び、研ぎすませていくための討議の場となった。それは若手研が目指していたことと同じだった。ただ、分野が同じで選ばれた人間の範囲が少ないため、若手研での作業よりはずっと容易だった。

4 それはまた、米国とキューバ政府の関係が、依然として敵対的なものであり、どちらも自らの側が正義を担っているということを主張し続けていることも無縁ではない。キューバ革命後、もっとも評価が高く、影響力を持つキューバの人類学的研究が、もはや自国に正義があるとは容易に主張できない、ドイツ出身の人びとによるものであるのは、偶然ではないだろう (Kutzinski 1993; Martinez-Alier (Stolcke) 1989; Palmie 2002)。

そうこうするうちに、ポスト・ユートピア研究会の、若手人類学者同士での対話は、徐々にやりやすいものになっていった。2005年の文化人類学会研究大会では、初めて発表する者も含めたメンバー6人で発表をすることにした。このとき、事前に研究会で案を出し、とことん議論するというスタイルも、若手研から得たノウハウが功を奏した。事前にメーリングリストでペーパーを提出する、という肝心の部分だけは、真似ようと思っても結局、実現できなかったが。

6) アイロニー

この分科会で発表したものが、冒頭で述べたペーパー、「小さな、大きな物語」である。このとき、私はアイロニーについて考えていた。1959年のキューバ革命ののち、世界各地の社会主義者や民族運動家たちの熱狂的な支持の対象となり、目標ともなったキューバという国において、ベルリンの壁の崩壊後に調査研究を報告することは、容易ではなかった。いや逆に、容易すぎることに畏があった。すなわち、フィールドで見聞した事象を、「結局、革命は意図せざる結果に終わった」というアイロニカルな物語の題材として提示するというものだ。これと対照をなすのが、現在でも、革命政府の言明を、正義を示すものとしてだけでなく、事実として「正しい」ものとして無批判に受け入れる研究群である。ただ、注意しなければならないのは、かつて、ソ連邦崩壊前に書かれたアイロニカルな物言いが、よりはっきりと、イデオロギー闘争的な意図のもとに書かれていたのに対して、ソ連邦崩壊後に書かれたアイロニカルな物言いは、自身の立場がイデオロギー的なものであるということすら認識しないものが多いということだ。それはとりもなおさず、ソ連邦の崩壊が、「大きな物語」の終焉、すなわち、ポスト・モダンと呼ばれる思想状況と軌を一にしていたことと無関係ではない。言ってみれば、冷戦に「勝利」した側は、自らの立場は、敗北した側と違って「イデオロギー」ではないと、措定しているのである。とはいえ、「勝利」した側が、単純に、その高みから相手を批判的に表象しているのだと考えることも、事態を単純化しすぎるようになってしまう。

もう少し具体的に説明しよう。キューバで知り合った米国の人類学の院生たちは、もともとは、キューバ政府の言明に共感しながらも、その「内実」を知って従来の見解を修正した人びとである。だからその「内実」を表すときに、古くから革命を批判してきた「反革命者」や「右翼」と名指される人びとと同じような気楽さでは批判できないものの、批判の仕方や内容が、結局、その彼らと同じようなものになってしまうこととまどいを示していた。一方で、かつては彼らが共感し、尊敬していた（そし

て時には指導教官でもある)「左翼」研究者たちの描くキューバ像をなぞることもできない。なぜなら、キューバで出会った人びと自身が、アイロニカルな物言いで、自分達の社会を批判しているのだから。

この窮状を打開するために、私は、アイロニーを、より複雑化してとらえるべきではないかと考えた。アイロニーとひと言で言っても、「結局・・・で終わった」と、外部の者が揶揄するのと、当事者が、泣き笑いするような顔で語るのとは、別のものではないだろうか。そしてまた、外部／内部、あるいは当事者／非当事者という区別は、キューバ人／非キューバ人という風に、国籍で分けられるものでもなかった。革命の大義に身を投ずるものであれば、キューバ出身者でなくても統合し、キューバ出身者であろうと反革命ならば「外部」へと排除していくことそのものが、「革命」だったのだから。

さらにいえば、これまで人類学で区別されてきた、研究者／非研究者、エリート／非エリートの区別も、ここではあまり明確なものではなかった。革命は、両者の区別をあいまいにすることもその目標としていた。とはいえ、この区別の攪乱は、現在、研究者を目指している20代から30代の私たちにとって、扱いにくいものだった。私たちは研究の原則として、自己と他者の言明や、事実の記述と意見を区別するように指導されてきたからだ。にも関わらず、外国の研究者で、キューバ革命を支持する年長者たちは、そのとき、他の場合には行わない冷静な分析やアイロニカルな物言いやふるまいをやめ、感動と期待と慈愛を持って語ることが多かった。ソ連邦の崩壊後にアカデミックな世界に足を踏み入れた私と同世代の人間達にとって、こうした態度は、とまどいを覚えさせるものであった。ポスト・モダンにおいては、イデオロギーと現実、言葉と世界、自己と他者のズレを認識し、それをおかしみとともに語るアイロニーこそが、もっとも鋭い批判だと捉えられていたからだ。

しかし、そのようなアイロニーは、10年以上の時を経て、もはやその鋭さを失いつつあったのかもしれない。社会の正義を実現しようとした社会主義の「現実」など、「イデオロギー」にすぎないと、当事者たちが壁を壊し、みんなが「しらけ」きってしまった結果、あらゆるものが市場の論理にからめとられてしまったかのようなようだった。その結果、私たちは、批判する自由は手に入れることができたかもしれない。が、一方で、批判する対象の代替になるものを生み出すような、「マジ」な批評と、想像力と創造性を失いつつあったように思う。

そんななか、私は、1960年代から70年代の、熱い政治の季節を生きた人類学者と、現在のキューバの現地の人びとが、自分たちをアイロニカルに語ることの意義を考え直した。彼らのアイロニーは、私たちが、ソ連崩壊後に、事後的に、「結局あれは失敗だった」というのとは同じアイロニーではないのだと、遅ればせながら認識した。それは、当事者として、人生の何十年もの時と労力をかけてつくりあげたものが、うまくいかないことへの、哀惜だけでなく、責任を含んだ笑いだったのだ。それ

を悲嘆としてのみ語るとしたら、彼らはもう、それを諦めたことになるだろう。が、そこに笑いがあるとき、彼らは、その目標への希望と愛情を、まだ捨てきってはいないのだ。

ポスト・ユートピア研究会では、中心となる若手研究者が、シニア研究者のこうした当事者としてのわりきれなさや愛情に安易に同一化することも、逆に、単純化して批判してしまうこともないように、議論を重ねた。そして2005年10月29、30日には、実際に当事者として社会運動に関わってきたシニアの研究者たちも招いてシンポジウムを行った。この頃までに、私たちは、シニアの研究者らの追従に終わらないだけの知識と分析を重ねていたし、彼らの声に耳を傾けるための柔軟性も養っていた。その甲斐もあってか、普段は手厳しいことで知られるシニアの研究者たちと、積極的に、冷静に、しかし、暖かく、語り合うシンポジウムにできたように思う。

7) 討議空間

一方の、COE若手研究者の研究会も、2005年度後期には、改めて、本報告書に載せる論文を作成するためのディスカッションペーパーをめぐる議論する研究集合が行われるようになった。驚いたのは、ペーパーの質も、議論の生産性も、一年半前とは比べものにならない程、向上したということだ。かつて聞いた発表は、「なぜそれを私が聞かないといけなにかよく分からない」という内容のものが多かった。だがいま現在、若手研で提出されるペーパーの多くは、「それは私にも、他の人文科学の専門分野の人びとにも関係のあることだ」と思える内容のものになっている。そうしたペーパーに感じるのは、ポスト・モダンのアイロニーを経た後に、冷静で的確な研究対象の分析を行うと同時に、アイロニーを乗り越えて、対象と世界を変えて行こうという、静かな情熱である。それぞれが対象に惹かれたのは、始まりは、ただ、何も知らないまま、だったかもしれない。が、それらへの情熱を、思い込みによる美化で馴化するのではなく、不明で未知なものを、他者を他者のまま、自分の師として、教えを乞うことによって生まれた知の精度が生まれてきている。それは、自らを主体とし、研究対象を客体とするのではなく、研究対象を主体として、それに導かれるままに、自らを従えようとする、謙虚な姿勢から生まれているのだと思う。当初、ミッション・インスポイルに思えた若手研は、こうして、私には、時に、感動すら覚えさせてくれるペーパーとの出会いの場になった。それはどうして可能になったのか、といえば、途中、「こんなことやって意味あるのかしら」としらけきっていた私のような人間のシニシズムにも負けず、熱く、臨床とは何か、討議空間をどう構築すべきか、等々

を、語り、検討し続けていた、編集委員のみなさんのおかげであろう。始まってしばらくすると、模造紙とポストペットを駆使した会話は、徐々に効果を発揮し始めた。本論が掲載される報告書は、こうして、ミッション・インポシブルがポシブルとなった成果であり、同時にもうひとつの研究会、もうひとつの報告書まで生み出すほどの豊穡な土台となったのだ。

その土台となるものを、私たちは、愛と呼ぶのかもしれない。

(特任研究員)

参考文献

Kutzinski, Vera M. 1993 *Sugar's Secrets: Race and the Erotics of Cuban Nationalism*. New World studies. Charlottesville: UP of Virginia.

Martinez-Alier(Stolcke), Verena 1989(1974) *Marriage, Class and Colour in Nineteenth-Century Cuba: A Study of Racial Attitudes and Sexual Values in a Slave Society*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Palmie, Stephan 2002 *Wizards and Scientists: Explorations in Afro-Cuban Modernity and Tradition*. Durham: Duke University Press.

富山一郎 「研究集合」 宣言：あるいは知のターミナルの創造のために 『Interface Humanities 04 モノの人文科学』 pp. 2-4.

Finding meaning in 'yama nashi, ochi nashi, imi nashi'

- women and girls creating alternatives to homosocial and heterosexist pornography

Jessica Bauwens

Abstract:

In this manuscript I will try to see how feminist theory concerning women writing sexuality can be applied to the seemingly trivial phenomena of boys love (aka yaoi) and slash fiction and their convergences. I will point out why boys love and yaoi are meaningful in themselves, and why they are valuable objects of study.

Key words:

gender, globalization, cyber sociology, homo-erotic, homosocial, hetero-sexist

I like the word queer and I don't think it's just for gay people, it's also about reinventing love, you know?

(Ani DiFranco, 2005, in an interview with Chrita Ramaswamy for *The Big Issue*)

Introduction: What pornography how?

When we think about pornography, the first thing that comes to mind is the mainstream pornography aimed at a mainly heterosexual male audience. In this age, the internet being replete with pornography to the annoyance of many users is often problematized. People express concern about minors accidentally being confronted with these contents, but a great many adults are upset in their own right.

Especially during the second wave of feminism, much attention was paid to pornography, and it was demonized to such an extent that it could not be discussed. You were either against

pornography and allowed to call yourself a feminist, or you were not against it and with the patriarchy. All pornography was automatically oppression, period. The women who said they enjoyed it, were accused of oppressing themselves and fraternizing with the enemy.

In the eighties, this attitude started to get questioned, and a new problem arose: that all material designed to titillate sexually can be called pornography (like romance novels), but that not all such material victimizes women, and that a lot of it is consumed and produced by women for a sometimes almost exclusively female audience. Some tried to get around that by calling sexually titillating material 'erotica', but it was never completely understood where the line between pornography and erotica was. Others would call 'erotica' works that were written as opposed to graphic/pictorial, and still others would call all art erotica, and photography/film pornography, while others tried to use arbitrary standards like the amount of nudity, clearly depicted sexual activity etc. In the end, many joked that 'What I like is erotica, what you like is pornography', acknowledging the subjectivity of these criteria.

In this paper, I will not use 'erotica' due to the vagueness of the term, but will make a distinction between 'harmful pornography', the kind that 'victimizes' and the kind that women in the seventies originally opposed, and 'harmless pornography', the kind that by its nature does not create victims. It should be noted that in many cases this distinction is not completely clear, so I would like to illustrate with some examples.

Clearly harmful pornography would be child pornography, any kind of material in which children are made to cooperate in the making of sexually explicit material, and pornography in which grown-ups are forced or coerced to participate against their will. A concrete example of this would be 1972 film *Deep Throat*, the first 'mainstream' pornographic film. The film was lauded as liberating, but the main actress later said that she had been threatened into making it by having a gun held to her head, and that she was repeatedly beaten during the making of it by a man who had forced her to have sex with a dog in the past, while the director and the staff looked away.

I define harmful pornography as a human right's violation, as something feminists should oppose. Harmful pornography will usually be in the form of photography or film, though more recently the lines between what is harmful and what is not have been further blurred by digital images that can make it look as if a person engaged in acts she/he didn't (a lot of Japanese female

aidoru have this done to their pictures).

Examples of 'harmless' (between apostrophes since it can be argued that nothing is completely harmless) pornography would include romance novels, and more explicit novels and other works in which the characters are fictional. Fictional here is key, the characters can do whatever, and no one is hurt, just as no one is hurt when fictional characters are murdered. Since this victimless pornography is still offensive to the sensitivities or tastes of many, it should be noted that 'harmless' in this case does not mean inoffensive. Also included in this category should be pornographic movies, photography and other media in which the participants have chosen to participate without having their agency impaired by pressure from others or circumstances.

It can be argued that the characters in explicit live-action pornographic film are 'fictional' too, but this doesn't negotiate the fact that the sexual acts depicted have to be performed by people who may or may not be comfortable with them, who may or may not have been forced, and who would have chosen not to if they had other ways of securing an income.

While I will not use 'erotica' because the term is too vague, I will use erotic as an adjective for everything that is intended to be sexually arousing, and that will include romance novels and materials that are not sexually explicit. I will also argue that slash and yaoi are different from (often qualified as harmful) male orientated pornography. Readers and authors of the female orientated genres have argued that they are character-centered erotica (Mortimer, 1997), different in the sense that they don't center on sexual acts only. Even if yaoi and slash can still be called forms of pornography for those of us who, like me, do not want to use erotica because it is confusing, both genres can be said to be mostly harmless (in the way that I defined harmless). Slash and boys love, though harmless pornography, are genres that have proven to be offensive on occasion too.

1. Decades long acts of fun parallel subversion

While a lot of research has been done on pornography catering to heterosexual male audiences - and a lot of it not to prove that it was harmless to the participants but only to prove that it was

harmless to the viewers, once more emphasizing the hegemonic status of hetero-sexual males, whether deliberately or not, it is only recently that sexually explicit material targeted to female audiences has become the object of study.

When I first reported on the sororal twin phenomena of boys love and slash, the reactions from those around me were interesting. There were those who were concerned about my career, and also about my 'getting too deep into it', as if this topic had the power to ruin my life. There were giggles, there was unbelief, and the question, 'Why? Why occupy yourself with something so *trivial*?'

I have to admit, when I first heard about women writing homoerotic fiction about males for a female audience, I thought it was a joke and ignored it. At best, I thought it was a prank, those rumors about straight women enjoying stories about Captain Kirk getting intimate, very intimate, with Mr. Spock¹. I was ready to believe that someone wrote it as a joke, to giggle about with her friends, but it didn't occur to me that there were millions of girls and women around the world who do not enjoy these stories as a joke, but as an alternative to what the mainstream offers to women readers. I did not get it. That was until I finally sat down and read a story about two characters from a book I was familiar with, and had an epiphany. I did get it, and how, but the next thing I wanted to know was, 'Why?' How is it that a straight woman can enjoy a story about two men falling in love and having sex? And not just enjoy, identify thoroughly with one or more of the characters? Needless to say, discovering the millions of slash fans online, and the large amount of monthly and weekly boys love publications section in the bookstore just around the corner² (I must have been walking around with my eyes in my pockets), the argument that it is 'trivial' does not hold water.

1 Captain Kirk and Mr. Spock are the main characters from an SF TV series (there were also several films based on the series)

2 Here I have to note that while boys love publications are freely available in any middle sized and even most small bookstores in Japan, and are not hidden from view and sold under the counter but on display in the same section as regular girls and ladies comics, several of my Japanese male colleagues were not aware of their existence until I presented my first discussion paper. Greater than my surprise at their not knowing, was their surprise - shock? - that nearly all women of their age did know. This, and my own ignorance, can be explained by the way the covers look: the difference between a male/female couple and a male/male couple (standard for many manga magazines targeted at female customers) is hardly noticeable at first glance.

As I read more and started interacting with the people who wrote these stories, I found that we are not all straight women, by far. There are lesbians - who logically would be expected to least enjoy a pornographic story about two men, but that isn't the case, there are gay males, there are bi-sexuals, both female and male, and there is the rare straight male.

As for a short description of the genres: slash is - originally - Western homoerotic fiction mainly but not exclusively consumed and produced by women, regardless of their sexual orientation. Boys love or yaoi is the Japanese equivalent. What is interesting is that in the East and West, these genres developed independently yet as good as parallel (since the late 1960s, early 1970s), and there are some distinctions, like in the West slash being a mainly non-commercial subculture of fans still, while in Japan boys love turned into a successful mainstream genre and mainstream publications and fan activity flourish next to each other. I would like to come back to why 'homoerotic fiction by women for women' is a problem in the West the way it is not in Japan later.

Since the second half of the 1990s, when more and more people started to get online from their homes and sometimes at work, the twain met, with mixed feelings, mixed success, and minor incidents that were soon overcome. Slashers - as the readers and creators of slash called themselves - discovered boys love, boys love creators (or fujoshi, 腐女子 'rotten girls' as they call themselves) discovered slash.

Self-proclaimed 'old school' slashers would once in a while be depreciative of the fixed 'seme' (or 'active') and 'uke' (or 'passive') roles in boys love (ignoring that many slash stories have just as fixed 'top' and 'bottom' roles) and deplore the effeminess of the characters depicted (once again ignoring that the characters in many slash stories are not examples of strong-man masculinity either), while Japanese artists were not pleased with Western fans copying art from their sites without permission to use it on their own, and were surprised to find their doujinshi (equivalent of fanzines), supposedly in limited circulation and with warnings to not show them to people who might be offended by the contents, fully scanned and uploaded - sometimes translated - on public homepages.

There were attempts at making contact from both sides, to settle disputes, but also to ask for cooperation, which resulted in hybrid sites, mainly with Japanese art and English stories, with

some of them translated into Japanese and other Asian languages.

This did not stay limited to English speaking communities, there are large online hybrid yaoi/slash fan communities that operate in Spanish, French, Portuguese (the majority of those Brazilian), and also Chinese, Russian, German, Indonesian, Thai, etc.

We have come to a point where it is difficult to spot the difference between what is slash and what is boys love, and also to a point where in some cases the difference no longer matters.

It started with fans of mainstream manga like *Inuyasha* and *Dragonball* writing and drawing fan-stories labeling them slash. This was slash based on non-Western canon. At the same time, there were doujinshi based on non-Japanese canon, like *Lord of the Rings* and *Harry Potter*. Then Western fans discovered boys love, and some were under the impression that if the canon is Japanese, the story, written in English or not, should be labeled yaoi (the more common label in the West for all things boys love). There was some talk within fan communities about 'mislabeling', but no one could really say what mislabeling was, and the argument got stuck when the old gripe about everything with clear uke and seme roles being yaoi was dragged out, to the disgruntlement of those slash fans who had always liked stories with clearly defined top and bottom roles and yet were unfamiliar with yaoi.

It is still mainly younger fans and/or fans who are active in Japanese canon communities who will label their homo-erotic stories yaoi, and fan-art is more easily labeled yaoi than text stories because while boys love manga are popular abroad and many of them have been translated, the boys love novel remains a mainly Japanese phenomenon, causing foreign fans to associate 'yaoi' more easily with pictures than with text.

More recently, teenage girls nowadays do not discover slash through fanzines or online first, the way most of us between twenty and sixty did, they are anime and manga fans first, and through their love for manga, they discover mainstream boys love manga translated in their local comic shops. Some of those are R-rated or carry labels that say '16+', but most of them aren't very explicit and look just like any other shoujo manga, except for the fact that the shorter - and often 'blonder' - character on the cover is a boy and not a girl. They may read and enjoy boys love for years without becoming aware of their local slash subculture.

A young university student and ardent manga fan from Germany told me about how her father had been in her room, looking through her collection of manga, when he found one that was boys love. He was shocked, and speechless. It had occurred to this girl that her parents might not approve of her reading anything homo-erotic, but she rightly assumed that these manga did not look out of place and were adequately camouflaged by her shoujo manga, since they look almost exactly the same.

It must be noted that they *are* almost exactly the same, since the content is mostly romance, romantic fantasy often, with the only difference that in some pairings not one but both partners are male. Also, not all boys love manga are sexually explicit, and there are many shoujo and ladies manga that could give yaoi a run for its money where sexual explicitness is concerned.

As I mentioned above, this can be a problem in the West the way it is not in Japan, which is not to say that there is no discrimination of homosexuality in Japan (I'd argue that there are qualitatively different forms of discrimination that are hard to define quantitatively, but there is not room to go into that here), but then boys love - though it has many gay male fans too - is not about actual homosexuality, a fact that seems better understood in Japan than it is in the West. In the West, homosexuality has traditionally been associated with sin, and still is defined as evil in conservative religious discourse, and a scapegoat for societal ills, often quoted as a symbol of 'the breakdown of society'. In Japan however, sex is within the realm of play, and stigmatization of sexual preferences - when kept private - can be argued to be less, or at least less of a public agenda.

The way homo-erotic fiction by women for women is less tolerated in the West is also illustrated by the genre never becoming commercialized in the mainstream, except for some authors who wrote homo-erotic scenes in their horror books about vampires, in which a kiss does not have to be a kiss nor an embrace and embrace, the way Anne Rice (who now denies ever having done so) and Poppy Z. Brite did.

Another phenomenon this 'being problematic' caused was the boom the slash genre experienced with the spreading of the global web; thanks to the possibility of going online as good as anonymous, with no obligation to give out personal information the way it had been during the period when slash was distributed in fanzines via postal mail, many girls and women whose immediate environment might be vehemently opposed or forbidding of their consuming/producing such

material had access, and they used it.

Within the fan community I am part of, I have a pseudonym and tread carefully so I do not get close enough to other fans for them to expect me to share my true identity. Personal issues sometimes do come up, and on numerous threads and in messages from mailing lists I have read about how some fans are afraid that their parents/boyfriend/husband will find out about what they do online, and about what they do to hide it - clearing caches on computers other people use is a necessary skill - and sometimes about their tactics of slowly trying to acclimatize their partners to their hobby (something I felt the need to do myself, and managed - my partner can live with the yaoi and doujinshi section of the bookshelf now, for as long as I don't expect him to read it).

And all this for having a hobby that does not differ all that much from reading mainstream romance like Harlequin novels, except for the part where the damsel in distress is not female.

And here we come to the meat of my discourse: why there is meaning in women both consuming/producing these stories, and why there is meaning in making it an object of study, more particularly as an object of gender studies and not just literature.

2. A Feminist Regime

In *Gender Trouble*, her controversial and still talked about first book, Judith Butler, in chapter three (Subversive Bodily Acts), has a section called 'Monique Wittig: Bodily Disintegration and Fictive Sex' in which she paraphrases:

The task for women, Wittig argues, is to assume the position of authoritative, speaking subject-which is in some sense their ontologically grounded "right"-and to overthrow both the category of sex and the system of compulsory homosexuality that is its origin.(p. 115)

Wittig says that to take themselves out of the binary opposition to man as the permanent other, women should stop being women and become lesbians. The idea that you cannot be a 'real'

feminist unless you become a lesbian, like Wittig and some of her contemporaries espoused, has never been popular, since most women reserve the right to fight for their rights regardless of what sex they are attracted to. Wittig's emphasis is on language, and its usage, and the part Butler paraphrases seems manageable without having to change one's sexual orientation. There is what I'll call a loophole, for lack of a better term, since readers and writers need the ability to identify with a number of characters, to see things from different point of views, it is possible to consume/produce *fictive sex* (though Butler and Wittig only use it in what goes as 'physical difference') wherein the sex of the characters is of no direct consequence.

Since - in general - stories about heroines are marketed to girls mostly, and stories about heroes to the general public, many girls will from a young age identify with the hero while reading/watching/listening to a story. This isn't subversive, and it is likely often not even a conscious act, this is because there is an appalling lack of female characters in many stories, especially children's books, and especially of 'interesting' female characters (Just look at classics like *Winnie the Pooh*) - those who contribute to the plot and do not just sit around being pretty or getting saved³. This is the epiphany I had when I read my first slash story: I was able to identify with the mail characters with amazing ease, just as I would have with a regular story that did not contain homoerotic scenes.

Thus, though this prerequisite to become 'queer' (now the umbrella term for the study of all relationships and phenomena not in line with the heterosexist norm) in order to be able to fully realize one's feminist potential and protest patriarchy is outdated, consuming/creating homoerotic fiction makes even straight women *queer*, in the sense that they do something that subverts the heterosexist norm. John Fiske has also argued that popular culture as consumed and reconstructed by fans is an act of resistance, a way for the consumers of mass-produced popular culture to gain some control over it that is independent and sometimes goes completely against the intention of the original producers and copyright holders. A lot of the yaoi and slash fans produce are perfect examples to illustrate his theory.

It could be argued that these women and girls are only 'part-time queer' (a sort of cop-out

3 As Takahashi points out in part three of her recent article, yaoi enfolds (*tsutsumikomu*, p. 26) the homosocial world(s) of many cultural artifacts, in which virtually all active characters are male.

compared to 'the real thing'), only when they are reading or writing/drawing such material, but if we take into account that a lot of them will think of their hobby when they have free moments or when their hands are occupied with other things but their mind is not, we can eliminate the part-time and can say that as fans of such material they are effectively queered by their reading choices.

This applying of the term 'queer' to straight women may seem outrageous, but this isn't the first time, people in the poly and bdsm communities⁴ have appropriated it too.

Consuming/producing slash and yaoi as an act of resistance is occasionally conflated by fans as a statement to protect/fight for the rights of gays and lesbians. Since slash and yaoi have as good as nothing to do with the reality of gay and lesbian existence, this is a fallacy. It should also be noted that many gays and lesbians are highly critical - at least as critical as straight critics, if sometimes for different reasons - of slash and yaoi, because they feel misrepresented; here they also ignore that slash and yaoi doesn't usually aim to represent gay reality and are mere entertainment for a varied female audience that includes some males. We are not doing this for the gay and lesbian community, and would be fooling ourselves if we tried to hide behind such a ridiculous pretext. Also, we shouldn't forget that there are slash and yaoi fans who love the genre, who love *the idea* - but the idea only - of two men getting it on, but who object to real homosexuality on religious or other grounds.

First and foremost, we are doing it for ourselves, with the first objective being entertainment, stress relief. Another one would be that our fan communities will usually provide a safe space in which we are free from sexual harassment since most of the men who resort to that are not likely to read anything that is not hetero-sexist (though some will infiltrate on purpose to 'troll' - harass, usually by 'flaming' the posting or mailing of rude content on the internet). This alone is an act of resistance, removing ourselves from spaces and communities in which we would have to put up with the infamous 'big boob' threads, that were the bane of the existence of female fans in older online fan communities.

4 'Poly' is the abbreviation of polyamory, a lifestyle subculture that also boomed with the advent of internet anonymity (since I am not very familiar with this subculture, please see this link on the *Electronic Journal for Human Sexuality* for more information: <http://www.ejhs.org/volume6/polyamory.htm>). Bdsism is an anagram of bondage, domination, submission/sadism and masochism.

However, more importantly than having a space free from harassment - which as I said, is important enough in and of itself - is having a space in which gender roles are not fixed, and can be switched and played with without that switching being frowned upon or ridiculed as soon as it is proposed. Something that comes up again and again in both slash and yaoi communities is why this or that character bottoms/is an uke, while another tops/is a seme; it is especially interesting in cases where you have the same pairing interpreted by different people, who will then talk about why they interpret one character as more passive (implicitly female) and the other as more active (implicitly male). The ascribing of gendered attributes to a certain character is carried much further than merely sexual passiveness or activeness, the male characters are endowed with every gendered characteristic imaginable, from those traditionally stereotyped as male, to those that would get a female character with the same characteristics labeled a number of nasty misogynist slurs.

Although all of these stories are completely fictional, the thinking about gender that fans do is not, the insights they might get into gender stereotypes are not, and many of these insights may well have - from a feminist point of view - a positive impact on the lives of these women/girls.

What I brought up in part one, about many young fans discovering yaoi in their local bookshop and not online where they might not be attracted by sites that have slash, is important in this context: pictures might make it easier to envision, to imagine this switching of genders, since the beautiful boys of boys love manga look nearly exactly the same as the beautiful girls of shoujo manga. By becoming more mainstream, it offers more young women the incentive to think about attributed gender, and to imagine alternatives as they already consume it. It makes girls aware of gender stereotypes in ways few other media can, and it makes them able to play with them, and reconstruct them any way they like⁵.

An incident like the one I describe above, in which a parent discovers their child's preference for homo-erotic stories, does not have to be negative either. The girl I talked to was able to

5 I'd like to offer some of the ways in which these reconstructs happen, but since space here is limited: men that are decidedly masculine in their canon regularly end up pregnant in yaoi or slash fiction drawn/written by fans, so frequently that it gave birth to a separate subgenre: mpreg (abbreviation of male pregnancy). As ridiculous as it may seem at first glance, most of these stories are in fact not comedy or parody, but romance. I see it as a way for girls and women to deal with anxiety about reaching sexual maturity and control of their reproductive rights.

convince her parents that her manga are harmless, and it in turn made her think about why people like herself do not consider them controversial, but why others would.

Butler describes other ways in which women can subvert gender roles, like getting in drag, she calls this 'performative subversion' (p. 129). I argue that the consumers/producers of yaoi and slash get into drag too, but only in their imagination, in their stories, and the act is performative only through the publishing or making public of such material, which now can be done without great personal risk to the producer. We do not - or we avoid, for practical reasons mostly- to reinscribe our bodies, but we can reinscribe our imaginations, with much greater ease, and without being obvious. This may look like a cop-out, but as it offers an easy way of rethinking gender matters, it should not be readily dismissed. Easy does not equal worthless, on the contrary, since it is easy, it is an option for a great many more people than actually going out in drag and face the mob.

There remains the issue of, in spite of the internet's saturation with harmful pornography as described in part one, the involvement of women as consumers and producers of a kind of pornography that subverts the hetero-sexist norm being vulnerable to persecution and vicious critique, no matter how harmless.

It should also be pointed out that the yaoi and slash fan communities are hardly gender free, or sexism⁶ free even (though most sexism will be implicit rather than explicit), and that many fans - especially young fans - do not think about their hobby as a political or feminist activity. Many older fans however, who have been in a fandom for anything between thirty and five years, do consider themselves feminists to some degree.

(Designated Researcher / 特任研究員)

6 An important issue that keeps drawing attention is the overwhelming tendency of the more passive character in both boys love and slash almost invariably being the physically smaller, weaker, often lighter in complexion/hair color, also often younger and subordinate in terms of societal status or job - though recent trends go against the latter more and more; for all appearances de facto 'feminizing' the more passive character, which does not subvert but corresponds to traditional sexist psychotherapeutic theory that has women as passive and even masochist by nature.

References:

- Butler, Judith 1990 *Gender Trouble - Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, New York
- Fiske, John 1991(1989) *Reading the Popular*, Routledge, London
- 日合あかね 「『女性のマゾヒズム』再 ——アメリカにおけるSM論争を中心に——」、『女性学年報』第26号、2005、41-59頁、
日本女性学研究会
- Kinsella, Sharon 2000 *Adult Manga - Culture & Power in contemporary Japanese Society* Curzon
- Mortimer, Jane 1997 *The Advantages of Erotic Fan Fiction As an Art Form*, <http://members.aol.com/janemort/erotic.html>
(accessed 2005-12-03)
- 永久保陽子 2005 『やおい小説 -- 女性のためのエロス表現』 専修大学出版会
- Ramaswamy, Chrita 'Ani DiFranco' in *The Big Issue Japan*, 2005.12.01, p.9
- 高橋すみれ 「『やおい化』する視線、その戦略にむけて — 『DEATH NOTE』同人漫画を例に」、『女性学年報』第26号、2005、20-40頁、日本女性学研究会

ディシプリンという場：

「非一場」を生きる研究対象と、それへのアプローチ方法

樋上 千寿

<要旨>

東欧ユダヤ系美術家マルク・シャガールの芸術解釈において、時代や地域、流派などの区分を手がかりに作品と作家を位置づけるという様式論的解釈はあまり有効とはいえない。ながく流謫の身でありつづけ地理的にも精神的にも横断・越境を重ねてきたユダヤ人の芸術・文化は多層的である。このような不確定な場＝「非一場」を生きるものとしての作家や芸術作品の本質を捉えるには、様式論に代わる方法論の構築が必要になる。

筆者が研究対象としている作品群は、聴覚的要素（音楽）を内包する視覚的作品（美術）であるため、必然的に音楽の「実演」をも含めた視聴覚資料を用いたマルチメディア的なアプローチと成果発表方法が要請される。

特に「実演」は単に「理解」や「認識」に資するものという価値を超えて、心に響き、言語を越えて共有可能なものとしての価値を持つ。なぜなら、録音媒体では対象の実像に近づくにはあまりにも表面的に過ぎないからである。

<キーワード>

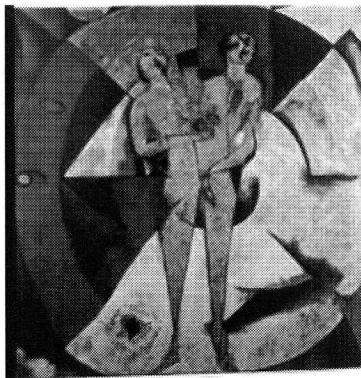
横断性、臨床性、マルチメディア的アウトプット、資料とその価値

自らのディシプリンについて、あらためて考えてみると、大学・大学院での所属が「文化学科美学および芸術学専攻」であり、指導教官の専門が「西洋美術史（北方ルネサンス美術）」であったため、公的には上述のような領域の研究者として認識されることになろう。ただし、研究テーマが「東欧ユダヤ系美術家マルク・シャガールの芸術解釈」である場合、このテーマが要求してくる研究領域は「西洋美術史」が扱ってきた範囲だけでは到底カバーできず、「ユダヤ文化研究」へと領域を広げざるを得なくなる。上記研究テーマに即して考えれば、美術史的方法論、つまり、ある時代、

ある国や地域、あるいは流派によって、作品と作家を位置づけるという美術史学では主流の様式史的手法では、作品と作家の本質を正確に捉えられないのである。なぜならば、エルサレム第二神殿崩壊後、ながく流謫（るたく=流浪）の民であったユダヤ人の作家を扱う場合、その作家個人が公式に属する国家や地域、生きた時代を画定することは出来ても、彼ら／彼女らの属する文化的な土壌には幾重もの層があり、また彼ら／彼女らは流動の途上にあるその「場」に一時的に居たにすぎないからである。そのような不確定な場、あるいは「非-場」を生きるものとしての作家や芸術作品の本質を捉えるには、様式論に代わる有効な方法論の構築が必要になる。

追放や禁教、同化を強いられる中で、「秘教」としてのユダヤ教信仰を生きなくてはならなかったユダヤ民族は、その文化表象を、表面には現れない「隠れ cryptic」という思想の中に表出せざるを得なかった。そこではもはや様式論的解釈方法は通用せず、精神的なアプローチが要請されるであろう。

例えば、《アポリネール礼讃》（図版1）という作品を解釈しようとする時、1910年代にエコール・ド・バリの画家たちの間で大流行だった「キュビズム」的構成や、原罪を犯したアダムとエヴァの姿を窺て取ることは出来ても、二人がなぜ下半身を共有しているのか、や、時計の文字盤のようなものに描かれた数字が意味するところや、崩れた円盤の象徴的意味など、いくらキリスト教美術解釈の方法や様式論を適用してみても、原罪のテーマをキュビズム的手法で描いた作品、という以上の解釈は得られない。というのも、これらのモチーフは、ユダヤ民族の追放と流謫の意味を問う「カバラ」、とくに16世紀末のカバリスト、イサーク・ルーリアのユダヤ教神秘主義「カバラ」の世界観を背景にもっているからである。



図版1 《アポリネール礼讃》
1911 / 12年

以下、研究領域の「横断性」と、成果発表の「臨床性」を問うた2つの成果発表の例を提示したい。

まず、'Absence of' or 'unconsciousness of' Jewish Art in Japan では、日本でのシャガール人気が高さにもかかわらず、ユダヤ人としてのシャガール理解度があまりにも低いこととの落差について概観したあと、その落差の要因のひとつが、日本の「ユダヤ研究」の蓄積の乏しさにあることを指

摘し、さらに、ユダヤ文化研究成果発表の方法として、樋上が実践中の「マルチリンガル（マルチメディア）」な手法を紹介し、その可能性を問うている。

ここで紹介している成果発表とは、2004年以來行っている、主に非専門家（一般）向けのレクチャー・コンサートのことを念頭に述べている。シャガールを「知っているつもり」だった人々と、彼の文化的背景についての知識を共有し、その芸術的本質を再認識する、という作業である。

なお、この発表例の受け手として想定しているのはユダヤ文化に関して一定の見解を有する専門家である。

いっぽう、「マルク・シャガール《ユダヤ劇場壁画》（1920）をめぐって—ハスカラ、「脱ユダヤ化」の潮流の中で—」は、モスクワにあったユダヤ劇場の壁画7点（現在、モスクワのトレチャコフ美術館が所蔵）について、先行研究を検討しつつ、より適切な解釈のための枠組みを提示した内容である。西洋美術史の専門家ではあるが、「ユダヤ文化史」に関しては非専門家である受け手を想定して、適宜専門用語の説明を挟みつつ、美術史では必然的に使用する図版のほか、聴覚資料としてCDからの音源と、自身の演奏の録音を使用し、理解に資するよう配慮した。やはり、シャガールを「知っているつもり」の受け手と、あらためて情報を共有し、再認識する作業である点で、一般の人々を対象に発信する「マルチメディア的アウトプット」の実践例と同種のねらいを持っている。

通常、視覚的資料=図版と、文章によって綴られる美術史の研究成果発表に、聴覚的資料を付加したのは、目新しさを狙った形態ではない。ここで研究対象としている作品は、聴覚的要素（音楽文化）を内包する視覚的作品（美術作品）であり、その立体的解釈と成果発表には、必然的に論文と視聴覚資料との組み合わせが要請されると考えたのである。とくに、聴覚的資料に関しては、音源（CDやレコード、カセットなど）の提示だけではなく、必要ならば「実演」を取り入れることがより望ましい。この場合、その「実演」の資料的価値とは、「理解」や「認識」に資するもの、という価値を超えて、「心に響くもの」であること、言語を越えて共有可能なものであることが望まれるだろう。というも、それは、そういうものとして存在したものだからである。

成果発表例①

‘Absence of’ or ‘unconsciousness of’ Jewish Art in Japan

I Researching of Marc Chagall

-Popularity of Marc Chagall in Japan : Chagall as a ‘fantastic French’ artist

In Japan Marc Chagall is very famous as one of virtuosos of twentieth century. Every year many exhibitions relating to Marc Chagall are constantly hold at museums and galleries in Japan. One month-long exhibition brings together 100,000 people. These phenomena shows, his art has been loved in this country. But why he is so loved? What of his art appeals to Japanese ? In order to grasp rough idea for Chagall in Japan, I tried to search on-line by keyword information about Chagall (and several keywords related to him), and I got such results as shown below.

This shows us somewhat vague but broad image, which Japanese people have of Marc Chagall and his artistic world. It says, he ‘*is*’ one of the biggest French artists, rather than being a Russian one. Moreover, knowledge of his cultural roots, that is to say, his hometown Vitebsk, mother tongue Yiddish, and religious background Chassidism, are almost ‘absent’ or seldom found in Japan. Despite it, he is loved very much as a ‘*fantastic French artist*’.

Keywords	Results
Chagall + France	11,255
(Chagall + France + gallery)	2,732
Chagall + love	7,415
(Chagall + love + exhibition)	2,973
Chagall + Russia	3,965
Chagall + fantasy	2,276
Chagall + jewish	1,789
Chagall + Vitebsk	122
Chagall + yiddish	29
Chagall + klezmer	17
Chagall + Chassidism	1

Keywords retrieval results (in Japanese):
(Yahoo! Japan, 09 Nov.2004)

I feel, this image is a result of some sort of misunderstanding. Now I would like to show you several paintings of Chagall [図版 2,3]. In Chagall’s canvas many Japanese can easily catch some images like flying lovers, colorful flowers, and small animals. But when it comes to facing works like mural paintings, Japanese are not be able to respond to their artistic message, although they have been already exhibited in Japan twice [図版 4-8]. As you know

well, you can find innumerable Jewish motives in these paintings, which had been once hung on each wall of Jewish Chamber Theater in Moscow.

One of the possible reasons for that might be that, they have almost no information about Jewish culture, which Chagall was part of throughout his life. Admittedly everybody is free to interpret messages from art works in his or her own way, and one can certainly enjoy himself or herself in flights of fantasy. However, another side of art appreciation is also decoding artist's message and namely that is what Japanese are not ready for. Unfortunately, understanding the message is more worthwhile than fantasizing.



図版 2 La Branche (枝) 1956-62



図版 3 Birthday (誕生日) 1915

II Why are Japanese unconscious of Jewish Art ?

-Systematic problem of academic system

After the opening of Japan for the world in 1868, which followed 250 years of isolation, the system of faculties, departments and subjects in Japanese universities was organized after the model of West-European academic system. Nowadays, it is changing again this time following North-American style. Originally university subdivisions were structured by each language and each nation/country or region, like west and east Europe, north and south America, and Asia, etc.. They were, moreover, categorized by each era, like Antiquity, Medieval, Renaissance, or Modern, etc.. Therefore, researching of humanities has been advanced in each field, which has been divided into confined disciplines. It is well known that, Jewish people have never really had their

own land or their own country. Ironically, the same thing happened to the subject entitled Jewish study. It was left out of any division by region, country or nationality. Thus it appeared to be 'diaspora', and in reality, very few things were known about Jewish phenomena.

Now, let us return to the topic of this presentation and think about Chagall. He was Jewish and what I said before applied to him too. Imagine that you want to learn about him — his birth place, his acquaintance with western modern artistic current, about his life in Paris, about the group of *École de Paris*, about his own style — which discipline will you study ? Of course you can choose French art or modern art. Such discipline will undoubtedly mention Chagall among all, but will not teach you exactly why Chagall was the artist he was. To make the things worse, there is a negligibly small number of university teachers who have canalized their study exclusively into Chagall.

III Suggestion of a method for researching Jewish Art

In order to change such 'unconsciousness' into 'consciousness', I notice musical motives in Chagall's paintings, that is to say, those of Klezmer musicians. If you explain to others something unknown or unconscious with words, you will be inevitable to use many technical terms for it, as traditional researching has ever continued. Of course, such method is essential to every researching, but I think, it is possible to be different way to approach Chagall's Jewish world. In these days, I am working on an experiment to connect his artistic sense with Japanese audience by using photocopies of Chagall's works and playing of Klezmer music by myself [=photos]. I think, through this attempt, they also feel his cultural background without any difficult explains. In fact, this experiment is still on the way of trial, but I would like to suggest such 'multilingual' method as new way of researching and producing.



Photos : 2004/5/15 at Gallery KINOKO (Ouji-park, Kobe)

成果発表例②

マルク・シャガール*¹ 《ユダヤ劇場壁画》（1920）をめぐって —ハスカラ⁺、「脱ユダヤ化」の潮流の中で—

（+1～6を付した用語に関しては「用語解説」で、*1～12を付した人物に関しては「人物解説」でそれぞれ説明した）

はじめに

ユダヤ劇場の成り立ち、

壁画の構成

壁画の解釈

ユダヤ劇場の指導者たち

ハスカラ、「脱ユダヤ化」の潮流の中で

おわりに

はじめに

マルク・シャガールのユダヤ劇場壁画は、これまで主に、彼の作品に特徴的なモチーフ解説の成果を応用することで、その解釈と意味付けが行われてきた。それは、美術史家による詳細な図像解釈のほか、イディッシュ語⁺²やヘブライ語による文字表現の言語学的解釈の成果をも盛り込みつつ、進められてきた。その結果、研究者によって多少の解釈が異なるものの、個々のモチーフ解説には一定の成果が見られる。しかしながら、その解釈も、受け手の文化的背景との距離が遠ければ遠いほど、等身大のリアリティを伴って理解することが困難になる、ということも否めない事実である。

本稿では、この難題を、解決しないまでも、理解の方向へと導くために、これまでの図像解釈の成果を参照しながら、それとは異なる角度からユダヤ劇場と壁画を捉え直し、新たな研究の枠組の可能性をめぐって考察してみたい。

ユダヤ劇場の成り立ち

ユダヤ劇場は、1918年の末、演出家のアレクサンドル・グラノフスキー*²によって「ユダヤ室内劇場」の名でベトログラードに設立された。1919年8月ヴィテプスクでの巡業を経た後、1920年11月にモスクワへとその本拠を移す。チェルニチェフスキー大通りに面した、革命後に亡命したユダヤ人実業家の住居を政府から譲渡され、2階のリビング・ルームと隣接する小部屋との壁を取り除いて

観客席とし、さらに隣接するキッチンをステージとしてリフォームされる。その際、名称も国立ユダヤ室内劇場と変更された。グラノフスキーが劇場監督を、美術評論家で美術史家でもあったアブラム・エフロス³が助言者的な役割を担い、エフロスによって招聘されたシャガールが美術を担当した。1921年1月1日の「ショレム・アレイヘムの夕べ」がこけら落としとなった新しい「国立ユダヤ室内劇場」の3つの壁面がシャガールの壁画7点で埋められ、さらに緞帳、舞台装置、衣装も彼によって制作された。

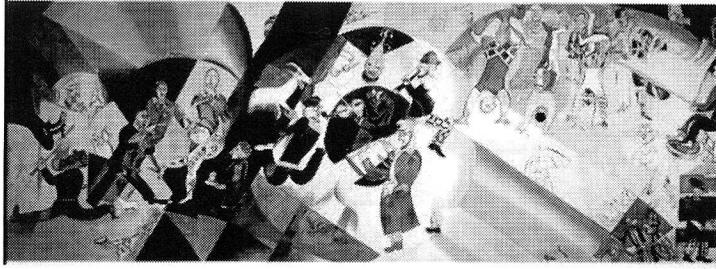
壁画の構成

ユダヤ劇場の壁画は次のような構成になっている。まず、劇場入り口を入れて左側、舞台の下手側の壁面全体に《ユダヤ劇場への誘い》(図版4)が掲げられる。そしてそれと向かい合うように、通りに面した窓側に4つの芸術ジャンルを表わしたパネルが配置される。入り口に近いほうから順に、《文学》(図版5)、《演劇》(図版6)、次に、《舞踏》(図版7)、そして舞台寄りの壁に《音楽》(図版8)、これらが窓をはさんで、右から左へと並び、4枚のパネルをつなぐようにその上部に横長のフリーズ《婚礼の宴》が掲げられる。ステージと向かい合う座席背後の壁には淡い色調の作品《舞台上の愛》が掲げられていた。緞帳も制作されたが、下絵が残るのみで現存していない。

壁画の解釈

これらの作品解釈に関しては、ズィヴァ・アミシャイ・マイゼルス(Ziva Amishai-Maisels)およびベンヤミン・ハルシャウ(Benjamin Harshav)の詳細な図像解釈を含む先駆的研究があり、必ずしも解釈が一致していない部分も多いが、ここでは両者の解釈に大きな隔たりが無い部分を中心に、大まかに見てみる事にとどめたい。

まず、観客が入場して最初に目に入るよう、シャガールによって意図されていた《ユダヤ劇場への誘い》(図版4)は、入り口に近い左端から舞台に近い右端へと観る者の視線が移動するよう構成されている。壊れたバイオリンを鳴らそうとする人物から人の流れは始まり、シャガールを抱えて大股で入場する批評家アブラム・エフロスと劇場監督のグラノフスキーが属する1つ目の輪から、青いシャツを着た主演俳優のシュロイメ・ミホエルス⁴と音楽家たちが属する中央の輪へ、そして3人の曲芸師が逆立ちを披露する三つ目の輪へと、左から右へと徐々に上昇する線を辿りながら、視線は最後に舞台へと移される。



図版 4 《ユダヤ劇場への誘い》

登場人物が明確に特定できるのは、ヘブライ文字で明確に名前が記されたエフロスト、シャガール、そしてグラノフスキーの三人だけであるが、画面中央で飛び跳ねる人物が俳優のミホエルと特定することはアミシャイ・マイゼルス、ハルシャウ両研究者と、その他の複数の研究者の一致するところである。

アミシャイ・マイゼルスによれば、壊れたバイオリンは、真の音楽を、そして芸術を生み出す事が出来ない民衆音楽家を表わす。いっぽうハルシャウは、心理的リアリズム演劇に安住する古いユダヤ演劇を表わしている、と解釈する。壊れた窓のある部屋でランプに向かって話す人物、あるいは壁に向かって拍手する人物などは、モスクワへ移る以前のベトログラード時代のユダヤ劇場が、冬の燃料にも事欠くほどの窮状に陥っていたことや、観客の反応が芳しくなかったことを表わしている。

大股で最初のスポットライトの中へとシャガールを抱えて入場するエフロストは、ここに描かれた通り、実際に右側のグラノフスキーのユダヤ劇場へとシャガールを招聘した人物で、シャガールは自らの芸術を彼に託すべく、パレットをグラノフスキーに委ねている。

山羊の脚を取って画面中央の輪へと参入する人物は劇場の主演俳優を務めたシュロイメ・ミホエルと特定される。彼はユダヤ演劇でも重要な役割を占めた東欧の伝統的なユダヤ音楽「クレズマー音楽⁺³」を奏でている音楽家の輪に加わり、彼が得意とした曲芸の跳躍で参入する。バイオリン、クラリネット、打弦楽器ツィムバロムは、主にユダヤ教の結婚式で、また場合によってはキリスト教徒の結婚式でも演奏されたクレズマーの音楽に典型的な楽器編成である。彼らの演奏した音楽は独特の魔法とリズムを持つ。

【音声資料 ‘Orient motive II’ ,

http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/groupage/wakate/20051222hinoue/oriental_motive_1908.mp3

および ‘A nakht in gan eydn (A night in Garden of Eden)’

http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/web/grouppage/wakate/20051222hinoue/a_nakht_in_gan_eydn.mp3

を参照】

回転運動を伴う彼らの輪は、さらに大きく、また一段と明るい光の輪へ、画面右方向へとその動きを受け渡す。三つ目の輪の上部では、3人の曲芸師が逆立ちを披露する。最初の曲芸師は、俳優にあらゆる体の動きを要求した劇場監督のグラノフスキーを思わせる風貌で、頭に被り物をせず彼がグラノフスキー同様にユダヤ人でありながらもユダヤ的な素養を持たない事を示唆する。

真中の曲芸師は被り物を着け、ショレム・アレイヘム^{*5}やイツホク・レイブシュ・ペレツ^{*6}などイディッシュ文学の巨匠の名を書いた、つぎはぎだらけのタイツと、腰にイディッシュ語の書きこみのあるパンツを履き、この曲芸師が街の広場で曲芸を披露するような道化として、イディッシュ世界に生きる者である事を示唆する。一番右側の曲芸師は祈祷時に身に着ける聖句箱を額と左腕に着け、明確に伝統的なユダヤ出自である事を表わしている。

人物の流れは、三つ目の輪の右端で、逆さまの白い牛の臀部に触れ、腰を掛けて脚を洗う人物で終わっている。《ユダヤ劇場への誘い》は、シャガールによる、新しいユダヤ演劇の在り方を問うた、絵画によるマニフェストである。

《ユダヤ劇場への誘い》に向かい合った、窓側には、4つの芸術ジャンルを表わしたパネルと、横長のフリーズ《婚礼の宴》が掲げられる。

まず、《文学》では、ユダヤ教の聖典「トーラー *Torah*」を想起させる巻物に、イディッシュ語で「*Amol iz*…、ある時…」と記され、物語の始まりを告げる。白い牛の口からはシャガールの名が叫ばれる。

《演劇》は、ユダヤ教の結婚式で式の進行役を務める司会兼道化役の「バドフン *Badkhn*」とよばれる男性が、花嫁に未婚時代との別れと結婚生活の厳しさを悟らせ、参列者を泣かせる文句を語っているところである。クレズマーを伴った「バドフン」や、彼が参列者を泣かせる場面は、20世紀初頭に東欧や合衆国で刷られたこのような絵葉書にも見られる。

つづいて《舞踏》では、クレズマー音楽家たちの演奏に合わせて既婚女性が踊る。

最後に《音楽》では、音楽家を代表してバイオリン弾きがユダヤの調べを奏でている。



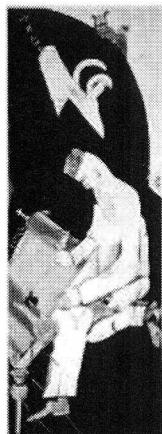
8 音楽



7 舞踏



6 演劇



5 文学

《図版5～8、文学、演劇、舞踏、音楽》

アマシャイ・マイゼルズは、これらのパネルはそれぞれ芸術ジャンルの一つ一つを表現すると同時に、シャガールが作者のシャロム・アンスキー*7から直接上演を依頼されたイディッシュ語の戯曲『ディブツク（悪霊）+4：二つの世界の間』の筋書きと関連させていると解釈している。実際、シャロム・アンスキーは1912年から数年間、ロシアと東欧のイディッシュ文化圏において民謡と民話の採録調査を行い、その成果として1917年頃までにイディッシュ民話に典型的な死者の霊魂を扱った戯曲『ディブツク（悪霊）：二つの世界の間』を完成させた。そして同郷の後輩であるシャガールには直接その筋書きを伝え、上演の依頼をしたという。

いったんは当時同じモスクワでヘブライ語による上演を行っていたワフタンゴフ*8率いる劇団「ハビマ」が、シャガールの舞台装置による『ディブツク』上演を企画したが、ユダヤ劇場が反面教師としていたスタニスラフスキーのリアリズム路線を支持するワフタンゴフとの溝は埋まらず、シャガールの案が不採用となった経緯がある。

『ディブツク』の筋書きは、おおよそ次のようなものである。シナゴークでカバラの研究に没入するあまり、命を落とした青年が、恋仲だった女性の結婚式の夜、悪霊となって彼女の身体に取りつく。女性の身体と一体化したディブツクを、ラピたちが悪霊払いの魔術を用いて引き離す。しかし、いったんは女性の体から解放された悪霊に、こんどは女性の魂が呼び寄せられて昇天し、幕となる。

アマシャイ・マイゼルズは、シナゴークで始まる最初の場面、結婚式の場面、悪霊払いの儀式、そ

して哀しくも神秘的なラストに至る、これらのシーンが4枚のパネルにほのめかされている、という。またこれらのパネルを視覚的につないでいるフリーズ《婚礼の宴》も、中央部分を境に、線対称に描かれた食卓が、地上の視点からと天上からの視点とで描かれており、この点においても「二つの世界の間」という副題を持つ『ディブツク』との関わりがあると解釈している。しかし、この解釈に対してハルシャウは『ディブツク』の初版が出たのが1919年のヴェリニユスであったことから、同年の暮れにすぐさま描かれることは時間的に無理があること、また距離的には隔たりがあるため、ここに『ディブツク』が描かれる可能性は低いとしてそれとの関連を認めていない。そして、単にユダヤ教の婚礼の諸場面を共通の主題として、それぞれの芸術ジャンルに関連させて描いたものに過ぎない、と反論している。

ハルシャウは、アミシャイ・マイゼルのイディッシュ語の解釈に誤りが多い事を指摘し、幾つかの図像解釈に対して反論を試みている。しかし、1917年のシャガールとアンスキーとの直接の出会いについては触れておらず、上述の根拠のみからこれらのパネルおよびフリーズと『ディブツク』との関連をまったく否定してしまう点には疑問が残る。

最後に、入り口のある壁面に、本物の舞台と向かい合うように、「描かれた舞台」としての《舞台上の愛》が掲げられた。グラノフスキーが新しいユダヤ劇場に導入しようとしたバレエを題材としながら、イディッシュ演劇にも欠かせないクレズマーのクラリネット奏者や黒子（プロンプター）が、舞台下のオーケストラボックスの位置に向かい合うように表わされている。

アミシャイ・マイゼルスとハルシャウは、シャガールが当時おかれていた状況と、人間関係を考慮しながら、図像解釈を行い、これらの壁画を総括してそれぞれ次のように述べる。

まず、アミシャイ・マイゼルスによれば、ユダヤ劇場の壁画は、様式上の観点から、ユダヤ民族芸術の伝統と、ロシアの伝統、それにシャガールが共鳴したドイツの演出家マックス・ラインハルト⁹の革命的西欧演劇理念が、シャガールがパリ時代に吸収し自らの芸術的レピズとしたキュビズムやフォービズムなどの様式によって溶け合わされ、西欧の先進的な藝術に匹敵する水準のものにまで昇華されている、と述べる。

いっぽう、ハルシャウは、シャガールのアヴァンギャルド芸術の理念と通じ合うモダンアートと、シュテートル⁵のユダヤ人の生命力を描いたショレム・アレイヘムのイディッシュ文学の世界がこの壁画において融合し、シャガール化された舞台と壁画とが反響しあっている、と述べる。

以上のような解釈は、しかしながら、さらに新たな疑問を投げかけて来る。

いったい、東欧のユダヤ伝統と、ロシアの伝統、そして西欧近代の芸術が、いかにして融合することが出来たのだろうか。それは、ひとりシャガールの特異性によるものだったのだろうか。

そして、ショレム・アレイヘムが描いたイディッシュの世界と、アヴァンギャルド芸術の理念に通じ合うモダンアートが、なぜ、シャガールにおいて結合したのだろうか。

これらの疑問を解明し、解釈を跡付けるためには、もうひとつの文脈、あるいは枠組が必要ではないだろうか。壁画が生み出される為には、シャガール以外に、少なくとも二人の人物の働きかけが必要であった。劇場監督のアレクサンドル・グラノフスキー、そして、シャガールを招聘したアブラム・エフロスである。次章では、シャガールを含む、これら三人のユダヤ青年の人物像に光を当てることで、前述の問いを解く鍵を探ってみることにしたい。

ユダヤ劇場の指導者たち

このユダヤ劇場を運営したのは、当時 30 代にさしかかったばかりの 3 人の青年であった。ひとり は 1890 年、モスクワのユダヤ人家庭に生まれながらも、ユダヤの伝統的な教育を受けず、西欧のドイツの教養を身につけた、いわゆる「同化した」ユダヤ人、アレクサンドル・グラノフスキーである。もうひとり は 1888 年モスクワに生まれ、1909 年、モスクワ大学在学中に旧約聖書の『雅歌』をヘブライ語からロシア語に訳すなど、西欧化に傾くロシアにユダヤ的伝統を取り戻そうとした教養あるロシアのユダヤ人、アブラム・エフロス。そして 1887 年、ロシアのユダヤ人シュテートルに生まれ、イディッシュ文化の精髓とも言うべき、ハシディズム⁺⁶の伝統の中で育ち、23 歳でエコール・ド・パリの仲間入りを果たしたマルク・シャガール、この三人である。

18 世紀半ばにモーゼス・メンデルスゾーン*¹⁰によってベルリンで始まったハスカラ運動は、ドイツ語によってユダヤ人を再教育し、西欧近代社会に適應させつつ、イディッシュ語からの離脱を目指した。中世高地ドイツ語を基礎としながらも、閉鎖的なユダヤ人ゲットーで独自の発達を遂げたイディッシュ語は、ドイツのユダヤ知識人にとっては「崩れたドイツ語」、いわゆる「ジャルゴン」でしかなかった。ハスカラを推し進めたユダヤ知識人にとっての「脱ユダヤ」とは、ゲットーからのユダヤ人解放だけではなく、「ゲットーの言語」として、しばしば反ユダヤ的感情の温床にもなったイディッシュ語を捨て去り、「正統な言語」としてのヘブライ語の復活を目指すものであった。1820 年代にこの啓蒙運動は、曲折を経ながらも、ヨーロッパ最大のイディッシュ語圏である東欧やロシアのユダヤ人居住地域に波及

し、19世紀半ばにはロシア語あるいはドイツ語による西欧化教育体制が整う。

ハスカラ、「脱ユダヤ化」の潮流の中で

ユダヤ劇場の創設者であるグラノフスキーは、東欧地域におけるハスカラ教育の第三世代に属する。彼はイディッシュ的素養をもたず、ミュンヘンに出て近代ドイツ演劇の中心人物の一人、マックス・ラインハルトの元で演出を学んだ。西欧志向から、のちにユダヤ演劇の刷新へと身を転じる。ユダヤ教では毎年三月にプリム祭、つまり仮装祭りがあり、風刺の利いた寸劇や仮装を楽しむ習慣がある。彼は、このプリム祭での素人芝居に因むイディッシュ劇を、芸術的で、国際的水準のイディッシュ演劇に昇華させることを目指した。

いっぽう、シャガールをグラノフスキーのもとへと招聘したアブラム・エフロスは、ハスカラ運動によって西欧化へと傾いたロシアのユダヤ人に、ユダヤ的伝統を再び回復させようと奔走した人物である。彼は、主に翻訳を通して、西欧的教養を持つユダヤ人芸術家に、ユダヤ的伝統を自覚させるべく、出版や新聞への寄稿を勢力的にこなしていた。いわば、西欧近代と、ユダヤ伝統とをつなぐ位置に、意識的に立っていた。モスクワのイディッシュ演劇集団を率いていた彼は、ペトログラードからモスクワへと移ったグラノフスキーのユダヤ劇場の助言者となる。

アブラム・カンプフによると、エフロスがシャガールを推薦した理由を、次のように整理している。すなわち、シャガールは、すでにユダヤ的伝統と、ユダヤ的教育、民間伝承と深いつながりを保持していたこと。さらに、ロシアのモダン・アート、フランスのキュビズム、ドイツの表現主義にも根を張り、吸収していたこと。ロシア・アヴァンギャルド演劇のメイエルホルド*¹¹の試みや、イディッシュ文学の巨匠、ショレム・アレイヘムの世界にも親しんでいたこと。さらに、ジョットのスクロヴェーニ礼拝堂壁画と、ハイム・ベン・イサーク・セーガル*¹²の手になるモヒレフのシナゴーク壁画の両方を知っていたからである。つまり、ゲッソーの解放後、ユダヤ人がイディッシュ語を捨て去り、西欧近代に向き合った後の時代において、なおもユダヤ・アイデンティティを犠牲にすることなく、ユダヤのフォークロアと西欧の芸術的形式との融合を実現していた人物だったからだ、という。

おわりに

ユダヤ劇場壁画は、確かに、図像解釈の成果に従えば、まったく新しいイディッシュ演劇の創出を目指したものであるということ、そして壁画どうしが、また壁画と舞台とが、相互に響き合うようにシヤ

ガールによって意図された、という意味付けは確認できる。しかし、そもそもこのグラノフスキーの革新的で、芸術的なユダヤ劇場が生まれた土壌はいかにして準備されたのか。それは、東欧のユダヤ伝統と西欧近代の間を、ロシアという場を舞台に行き来した、ハスカラの時代を経たからこそではないだろうか。そして、その結果、グラノフスキーの芸術的精神に共鳴したシャガールが、その精神を壁画において表現して見せたのではなかっただろうか。

《ユダヤ劇場への誘い》において、例えば、三人について、私なりの解釈を試みるならば、エフロスはロシア語の動詞 *Шарать* 「またぐ」にかけて、左側の古い世界と、これから新しく生み出されようとしている世界とをまたぐように、大股で入場する。シャガールはエフロスに抱えあげられて、自分の芸術を媒介するバレットをグラノフスキーに委ねる。そしてグラノフスキーは西欧風の上着を着込んで、ダビデの星が散りばめられた道化師のタイツをはき、バレエダンサーのようにしなやかな動作をして見せる。

西欧近代世界からユダヤ世界へと回帰したグラノフスキー。西欧的教養とユダヤ的伝統を橋渡ししたエフロス。そして東欧ユダヤ伝統と西欧近代とをその芸術において融合させたシャガール。壁画に描かれた彼らが見せるポーズを、等身大で受け留めるためには、彼らがハスカラの潮流の中で、いかにユダヤの伝統と、そして西欧近代とに向き合ったのか、その身の施し方を明確にしていくことが必要なのではないだろうか。

20世紀初頭、東欧、ロシアのユダヤ人社会が西欧近代文明と同化していくいっぽうで、伝統的なシュテートルのユダヤ文化は崩壊へと向かっていく。彼らの活動をこのような潮流の中に置き直してみることは、これまでの図像解釈によるメッセージ理解に等身大のリアリティと奥行きを持たせ、さらには彼らの共同宣言、マニフェストとしての壁画理解に有効なのではないだろうか。

(特任研究員)

用語解説

1. ハスカラ：(Haskalah, ヘブライ語、英語＝enlightenment)

ユダヤ人の西欧化教育。18世紀中葉、モーゼス・メンデルスゾーンによりベルリンで興る。ドイツ語による一般科目とユダヤ教伝統の再教育、ヘブライ語の復活とイディッシュ語の廃棄を目指す。1820年代以降、東欧へも波及。ただし、ヘブライ語の完全復活はシオニズム以後、1920年代にパレスチナにおいて実現。

2. イディッシュ(語)：(Yiddish)

中世高地ドイツ語を基礎として、ユダヤ人ゲットー内で独自の発達を見る。東欧ユダヤ人の日常言語。

3. クレズマー(音楽)：(Klezmer, ヘブライ語・イディッシュ語、Klezmorim=pl.)

東欧ユダヤ人の婚礼の場で演奏を受け持つ演奏家。その楽曲をも指す。軽快な輪舞曲 Freylakh、Bulgar、Sherや、名人芸的なエレジー Doina などの分類がある。楽曲は楽譜を用いず、耳から耳へと伝承された。ヴァイオリン(フイドル)やクラリネットが旋律を奏でることが多い。

4. ディブク：(Dibuk, Dibukim=pl, ヘブライ語・イディッシュ語、英語＝Dybbuk)

東欧ユダヤ民間伝承に現れる悪霊。生きた人間の身体に取りつき、その口を借りて語る。聖職者による魔術でもってのみ解放される。

5. シュテートル：(Shtetl, イディッシュ語)

東欧のユダヤ人町。反ユダヤ主義的政策により制限されたユダヤ人居住地域。西欧でゲットー Getto と呼ばれたものに相当する。

6. ハシディズム：(Khsidizm, ヘブライ語・イディッシュ語、英語 Hassidism)

18世紀中葉、バル・シェム・トーフ(Baal Shem Tov, 通称ベシュト Besht、本名 Israel ben Elieser, ca.1700-1760) によって興され、イディッシュ語圏のユダヤ人大衆を捉えた、神秘主義的信仰運動。ラビによる聖典中心の厳格なユダヤ教に反発し、日常生活における信仰の在り方を平易に説いた。歌唱と輪舞による陶酔の中で神との一体感が得られるとする。

人物解説

1. マルク・シャガール

Marc Chagall, 1887-1985

ヴィテブスク（現ベラルーシ）のシュテートルに生まれる。1906年より画家を志し1908年サンクトペテルブルグに留学、1910-1914年パリで活動。1918年ヴィテブスク美術学校を設立するも、同僚マレーヴィッチらに解職される。1920年末、グラノフスキーの国立ユダヤ室内劇場の壁画を制作。1922年まで美術監督の任務を請け負う。1923年ベルリン滞在を経て再びパリへ移住。

2. アレクサンドル・グラノフスキー

Alexandre Granovskii, 本名 Abraham Azarkh, 1890-1937

モスクワ生まれ、リガ（現ラトヴィアの首都）で育つ。サンクト・ペテルブルグで演劇を専攻、ミュンヘンでマックス・ラインハルトに演出を学ぶ。1919年ベトログラードでユダヤ室内劇場を創立。1921年より国立ユダヤ室内劇場（GOSEKT）の劇場監督を務める。1928-29年西欧巡業後、劇場を主演俳優シュロイメ・ミホエルスに委ね、西欧に留まる。

3. アブラム・エフロス

Abram Markovich Efros, 1888-1954

美術批評家、美術史家、翻訳家。モスクワ生まれ。1917年10月のロシア革命後、トレチャコフ美術館等でオーガナイザーの役割を担う。1918年、美術批評家ヤコブ・トゥーゲントホルド（Yakov Aleksandrovich Tugendhold, 1883-1928）と共に最初のシャガール論を出版。20年代、ユダヤ室内劇場、モスクワ芸術座に深く関わるほか、主にロシア芸術科学アカデミー（RAKhN）会員として活動。

4. シュロイメ・ミホエルス

Shloyme Mikhoels, 本名= Shloyme Vovsi, 1890-1948

ドヴィンスクのシュテートルに生まれる。シャガールと同じハシディズムの環境に育つ。サンクト・ペテルブルグにて法律を専攻。1918年グラノフスキーのユダヤ演劇団に入り、1921年モスクワの国立ユダヤ室内劇場設立時より主演俳優を務める。1928年からグラノフスキーの後任としてユダヤ劇場を主宰。1935年セルゲイ・ラドロフ（Sergei Radlov）演出の「リア王」などの名演で知られる。1948年1月13日粛清の犠牲となる。

5. ショレム・アレイヘム

Sholem Aleykhem =筆名, 本名 Shalom Rabbínovitch, 1859-1916

I.L. ペレツ, M.M. スフォーリムと並ぶイディッシュ文学三大古典作家の一人。

代表作『牛乳屋テヴィエ』（*Tevye der Milkhiker*, 1895-1916）など。

6. イツホク・レイブシュ・ペレツ

Isaak Leibsh Perez, 1851-1915

イディッシュ文学古典作家。『魔術師』など短編を書く。アレイヘム企画の『民衆文庫』（*Folks Bibliotek*, 1888-89）にも作品を寄稿。

7. シャロム・アンスキー

Shalom Anski =筆名, 本名 Shloyme-Zanvl Ben Aaron Hacoheh Rappoport, 1863-1920

ヴィテブスク生まれ。ハスカラの影響を受け社会主義運動に加わり国外追放、13年間独、仏などで過ごし1905年再入国。1912-14年、ユダヤの民間伝承の聞き書きと録音を行い、それをもとに『ディブック』を書く。ワルシャワで没。

8. エウゲニー・ワフタンゴフ

Eugenii Vachtangov, 1883-1922

アルメニア人の俳優、モスクワのヘブライ語劇団「ハビマ」(HaBimah)を主宰。1922年アンスキーの『ディブック』を初演。

9. マックス・ラインハルト

Max Reinhardt, 1873-1943

バーデン生まれ、ドイツ演劇の中心人物、俳優、演出家。リアリズム演劇を拒絶し、表現主義的芸術劇を目指した。1934年米国へ移住。グラノフスキーの師。

10. モーゼス・メンデルスゾーン

Moses Mendelssohn, (Moses ben Menahem), 1729-1786

ドイツのユダヤ人思想家、ハスカラの提唱者。聖書のドイツ語訳の必要性を唱え、ドイツ語を通じてのユダヤ人の再教育が、ユダヤ人啓蒙に不可欠であると説く。ゲットー言語であるイディッシュ語からの解放と、ヘブライ語の近代化を唱えた。

11. フセヴォロート・メイエルホリド

Vsevolod Meyerhold, 1874 ~ 1940

ベンザ市生まれ。ドイツ系ロシア人の父は富裕な醸造家。モスクワ大学中退。モスクワ芸術座の創立に俳優として参画したが、その自然主義に飽き足らず4年後退団、象徴主義に移行。10月革命後、メイエルホリド劇場を主宰、より「演劇的演劇」の実験を重ねた。舞台美術には構成主義を採用し、俳優の身体訓練法としてピオメハニカを考案。「形式主義」批判により粛清される。

12. ハイム・ベン・イサーク・セーガル

Chaim ben Isaac Segal,

1740年ごろ、モヒレフ(現ベラルーシ東部、ドニエプル川に臨む市)の木造シナゴークの壁画を制作。動植物などの図像が壁面を覆っていたとされる。

音声資料

Oriental Motive II, Josef Solinski (vl.) ,5. August 1908, Warsaw

A Nakht in Gan Eydn, Orkester Dreydel= 樋上千寿 (Clarinet)、白石雅子 (Accordion) ほか、

2005年3月28日、ムラマツリサイタルホール新大阪にて録音

主要参考文献

シャガールに関して

自伝

Marc Chagall, *MA VIE*, Paris, Stock, 1931, *My life*, Orion Press, New York, 1960. (邦訳『わが回想』三輪福松、村上陽通訳、朝日新聞社 1985年)

その他

Benjamin Harshav, *Marc Chagall on Art and Culture*, Stanford University Press, Stanford, California, 2003.

———, *Marc Chagall and his times, A Documentary Narrative*, Stanford University Press, Stanford, California, 2004.

Monica Bohm-Duchen, *Chagall*, Phaidon Press Limited, London, 1998. (邦訳書：モニカ・ボーム＝デュシェン『シャガール』、高階絵里加訳、岩波書店、2001年)

Sidney Alexander, *Marc Chagall, An Intimate Biography*, Paragon House, New York, 1989. (邦訳書：S.アレグザンダー『マルク・シャガール』、加藤弘和訳、芸立出版、1993年)

Susan Compton, Chagall's Auditorium: "An Identity Crisis of Tragic Dimensions", in *Marc Chagall and the Jewish Theater*, The Solomon R.Guggenheim Museum, New York, 1992, pp.1-13.

———, Marc Chagall: Love and the Stage, in *Chagall, Love and Stage 1914-1922*, exhibition catalogue, Merrell Holberton, London, 1998, pp.13-25.

ユダヤ劇場壁画に関して

Abram Kampf, Chagall in the Yiddish Theater, in in *Marc Chagall, The Russian Years 1906-1922*, Schirn Kunsthalle, Frankfurt, 1991, pp.94-106.

Alexandre Shatskich, Marc Chagall and the Theater, in in *Marc Chagall, The Russian Years 1906-1922*, Schirn Kunsthalle, Frankfurt, 1991, pp.76-88. (*Chagall, Love and Stage 1914-1922*, Merrell Holberton, London, 1998, pp.27-33. に改訂、再録)

Benjamin Harshav, Note sur l'Introduction au Théâtre Juif, in *Marc Chagall, Les années russes, 1907-1922*, Musée d'art moderne de la Ville de Paris, 1995, pp.200-204.

———, Chagall: Postmodernism and Fictional Worlds in Painting, in *Marc Chagall and the Jewish Theater*, The Solomon R.Guggenheim Museum, New York, 1992, pp.15-63.

Susan Tumarin Goodman, Chagall's Paradise Lost: The Russian Years, in *Marc Chagall: Early Works from Russian Collections*, New York, The Jewish Museum and Third Millennium Publishing, 2001, pp.13-69.

Ziva Amishai - Maisels, Chagall's Murals for The State Jewish Chamber Theatre, in *Marc Chagall, The Russian Years 1906-1922*, Schirn Kunsthalle, Frankfurt, 1991, pp.107-127, (*Chagall: Dreams and Drama, Early Russian Works and Murals for the Jewish Theatre*, The Israel Museum, Jerusalem, 1993, pp.21-39, および、Chagall's Wandgemälde für das Staatliche Jüdische Kammertheater, in *Chagall: Bilder-Träume-Theater 1909-1920*, Jüdisches Museum der Stadt Wien, 1994, S.22-56. に改訂、再録)

アンスキー『ディブク』に関して

原作

S.An-Ski, *Tsvishn Tsvey Velt Der Dybuk, in Poetry, Novels, Theatre, Essays and Studies on The Jewish Literature*, directed by Samuel Rollansky, Ateneo Literario en El IWO, Buenos Aires, 1964.

ש. אַן-סקי, צווישן צוויי וועלטן דער דיבוק, אין אויסגעקליבענע שריפטן, (原文イディッシュ語), ליטעראַטור־געזעלשאַפט ביים אַרײַנפיר און רעדאַקציע פון שמואל ראָזשאַנסקי, ירוּזאַלם (אַרגענטינע), 1964.

翻訳

Ed. David G. Roskies, trans. Golda Werman, *S. Ansky, The Dybbuk and other writings*, Schocken Books, New York, 1992.

エス・アンスキー『ディブッキ』中川龍一訳、『世界戯曲全集』第三十九巻 西班牙・猶太劇集 (世界戯曲全集刊行会) 1930年

ハスカラに関して

H.H.Ben-Sasson, *Geschichte des jüdischen Volks, Von den Anfängen bis zur Gegenwart*, Verlag C. H. Beck Munchen, 1995.
Encyclopedia Judaica CD-ROM Edition, Judaica Multimedia, Jerusalem, Israel, 1997.

クレスマーに関して

Henry Sapoznik, Pete Sokolow, *The Compleat Klezmer*, Tara Publications, Cedarhurst, N.Y.1988.

Rita Ottens, Joel Rubin, *Klezmer-Musik*, Deutscher Taschenbuch Verlag, 1999.

CD

Klezmer Pioneers : European and American Recordings, 1905-1952, Rounder Records, Cambridge, MA, 1993.

資料：2005年度個別論文検討研究会概要

*本報告書第一部に収録した各論文は、原則として、以下の各研究会に提出されたディスカッション・ペーパーが基になっているが、改訂の過程でタイトルが変更されたものがある。

第1回研究会

◆日時：2005年10月13日(木) 14:30～17:30

◆参加者：家高洋・伊藤遊・上田達・加藤敦典〔司会〕・加藤謙介・久保田美生(メディアスタッフ)・高阪香津美・Stella Zhivkova・田沼幸子・西田優子(メディアスタッフ)・Jessica Bauwens・蓮田隆志・樋上千寿・藤田加代子・森宣雄

◆提出されたディスカッション・ペーパー：

上田 達 「ナショナリズムの臨床的研究のための試論：マレーシア・ナショナリズムの言説分析」

蓮田 隆志 「『近世帝国』概念と東南アジア：世界システム論との対話」

藤田加代子 “Celebrating Colonial Encounters : Dutch Heritage and the Absence and Presence of Postcolonial Discourses in the Netherlands and Asia.”

◆概要

帝国主義とナショナリズムに関連する3本のディスカッション・ペーパー(以下DP)をめぐって討議した。1回目の研究会だったため、DP提出の遅れなど、開会前の混乱が大きかった。また、各DPが「臨床」「横断」の問題と結びついていない点を批判し、コメントを拒否するメンバーもいた。上田のDPは、マレーシアの愛国歌にみられる時間の表象を、とくに「未来」の描かれ方に注目しながら分析するものだった。上田のDPに対しては、ナショナリズムの言説分析にとどまること人類学のディシプリンのなかでどのような意義をもつのかについて質問が出された。蓮田のDPは、実証的な東洋史学と世界システム論のあいだの「横断」を試みるという専門性の高い内容であったため、そこでの「横断」が研究会での討議にむけて開かれたものになっていないとの批判がだされた。また、専門的な知のエッセンスをどのように非専門家(他分野の研究者、学生、一般市民)にわかりやすく伝えるかという問題が、「臨床」性の問題として話し合われた。藤田のDPは、オランダで2002年におこなわれたオランダ東インド会社設立400年記念行事における、さまざまな言説や展示をとりあげるものだった。とくに、記念行事の一環としておこなわれた劇場パフォーマンスで、インドネシアからの留学生たちが現地人労働者を演じる役を拒否したエピソードをとりあげ、この一連の記念行事のナイーブさを指摘した。コメントでは、オランダの学問的な制度のなかで声を上げられないアジアの学生について書いている筆者自身もまた、DPのなかでは自分の立場を語らない存在となっているという指摘があった。この指摘について、研究者として状況を変えるようなコミットメントをするには、まず安定した職が必要であり、そのためにはいまは語れないこともあるという「現場」の切実さが理解できていないとの意見がだされ、かなり激しい議論がおこなわれた。

(文責：加藤敦典)

第2回研究会

◆日時： 2005年10月27日(木) 14:30～17:30

◆参加者： 李吉鎔・家高洋・伊藤遊・加藤敦典・加藤謙介〔司会〕・久保田美生(メディアスタッフ)・高阪香津美・Stella Zhivkova・西田優子(メディアスタッフ)・Jessica Bauwens・蓮田隆志・樋上千寿・森宣雄

◆提出されたディスカッション・ペーパー：

加藤 敦典 「民主主義の人類学と人類学の民主化:臨床性のために」
李 吉鎔 「フィールドワークを内観する—フィールドの思いと声—」
高阪香津美 「(仮)学知の還元—調査報告会から学ぶこと—」

◆概要：

「研究の社会性」に関する3本のディスカッション・ペーパーが提出され、『研究者』と当事者との関係をめぐって様々な討議がなされた。冒頭に、司会者より、『臨床性』概念について、『社会性』、『有用性』、『臨床の衝撃によるディシプリンの問い直し』だけでなく、「それぞれのディシプリンが自身の学知によって社会／未来を如何に作るのか、その姿勢」としても捉えられるのではないかと提案がなされた。また、研究会での討議の仕方をめぐって、『テキスト』だけでなく、議論の場に著者の『生身のからだ』が参与していることにも注目すべきとの意見がなされた。

加藤敦典のペーパーでは、民族誌的实践をめぐる表象の『権力性』について、民族誌の実例を挙げながら論考がなされた。これを踏まえ、人類学者がフィールドを記述する際の『立場』をめぐって議論が行われた。特に、中立的に記述する立場と、ある視点から現場を記述するあり方について、権力性との関係について討議がなされた。

李のペーパーでは、社会言語学と内観の接続というアイデアが提示された。筆者より、このペーパーは社会言語学の学会では発表できないとの意見があったのに対し、このようなペーパーを提示して議論できる場こそ、この研究会ではないかと意見が出された。

高阪のペーパーでは、『インフォーマント／被験者』を研究参加者と位置づけ、研究参加者を巻き込んだ調査報告会の企画が示された。しかし、プランに調査協力者の視点が入り入れられていないのではないかと批判がなされるとともに、現場で問題とされている発言をそのまま引用してしまうと、引用者自身もその問題に加担してしまうことになるとの意見が出された。

(文責：加藤謙介)

第3回研究会

◆日時:2005年11月10日(木) 14:30~17:30

◆参加者: 家高洋・伊藤遊・上田達・加藤謙介・久保田美生(メディアスタッフ)・Stella Zhivkova・田沼幸子・西田優子(メディアスタッフ)・樋上千寿・藤田加代子・森宣雄〔司会〕

◆提出されたディスカッション・ペーパー:

家高 洋 「1970年代以降の科学社会学の展開 ~「横断性」の観点から」

加藤 謙介 「心理学における<横断的な知> —社会心理学の「歴史」を題材に—」

◆概要:

学説史を扱った2本のペーパーが提出されたが、どちらも《横断性》を強く意識した上での題材選択である。それゆえに単なる周辺分野との交渉史ではなく、学知の動向と現実社会の動向との強い連関が強調されている。家高は科学社会学、加藤は社会心理学を採り上げたが、いずれも《社会構成主義》のインパクトを受けてどのような動きが学知内部で生じたのかに焦点が当てられている。

家高ペーパーは科学論が《科学的言明の真理性をどのように担保するのか》をめぐる隘路に陥った後、様々な衝突や触発を経た上で、原因ではなく過程に注目する《ネットワーク理論》を取り入れることで危機を切り抜けるまでの過程を跡づけた。社会構成主義は人文諸学の各ディシプリンで様々に受け止められたが、敢えて各分野での影響の現れ方の比較とは異なる問題の建て方を求める意見も出された。また、簡便に各分野の「相場を知る」という学説史ならではの効用を評価する意見も出され、用語・概念の流用・共通理解構築に関わる議論へと展開した。

加藤ペーパーは社会心理学という領域が外界の動向を受けてどのように変容してきたかを跡づけた上で、自身の専門であるグループダイナミクスの枠組みを解説し、《アウトプット》の形態について問題提起している。とりわけ阪神・淡路大震災という《事件》を契機とした学知外部からの倫理的・道徳的批判のもつインパクトを大きく採り上げ、《「臨床」の衝撃》と呼称した。議論は意外にも《臨床性》の問題から出発し、さらに家高ペーパーとの対比の中で、情報提示方法の違いが対象理解のあり方の違いにまで通じる根本的問題として浮かび上がった。次いで学際的な研究が生まれる過程について議論は移り、加藤は《issue-oriented問題志向的》な態度を志向すべきと提起した。

今回は両者共に学説史を扱ったが、ゆえにこそアプローチや志向の違いが明確化するという思わぬ利点があった。両者の議論を往復・横断する形で《臨床性》、《議論のデザイン》、同じ言葉にディシプリン毎に別の語感が伴う《同音異義語》などのトピックについて、複眼的で質の高い議論を展開することができた。

(文責:蓮田隆志)

第4回研究会

◆日時:2005年11月24日(木) 14:30~17:30

◆参加者: 李吉鎔・家高洋〔司会〕・伊藤遊・加藤謙介・久保田美生(メディアスタッフ)・田沼幸子・西田優子(メディアスタッフ)・樋上千寿・森宣雄

◆提出されたディスカッション・ペーパー:

森 宣雄 「隠された歴史との対話 —歴史研究における歴史と現在の連帯」
伊藤 遊 「考現学から「臨床性」を考える」

◆概要:

沖縄現代史を扱っている森のペーパーでは、〈消滅の歴史学〉という新たな歴史学の方法論が提起された。〈消滅の歴史学〉とは、歴史の資料から実証的に捕捉できないものこそが実証的次元の歴史主体を主体として存在させているという論理的必然に基づいて、隠滅された歴史を捉えなおそうとする試みである。研究会では、森の提起の基本的意図は理解されたが、史料に述べられていない事柄をどのように叙述するのかということが問題とされた。しかし森の意図は歴史学の方法論的な革新というよりはむしろ、歴史家が過去の事柄を叙述することによって現在とつながり、未来への対話の回路を開くという「歴史叙述」の存在論的な意義に関わっているとみなすことができる。そしてこのことは、「叙述しているのは誰であるのか(作者への問い)」という現代の人文科学特有の問題圏に通底しているのである。

ところで、森ペーパーでは(つながり)が強調されたのとは対照的に、民俗学を扱っている伊藤ペーパーでは、〈他者〉との差異が中心的なモチーフになっている(柳田民俗学への批判など)。つまり、〈他者〉との差異を標定することや、絶えず新たな差異を作り出し、〈表現していく〉ことが伊藤の基本的なアプローチであると言えよう。伊藤のペーパーでは、考現学の戦前からの歴史的な経過と現在のいくつかの活動が述べられており、考現学の全般的な紹介のようにも見えるが、伊藤のもう一つの意図は、これまでの研究会での様々な発言や既出のペーパーにリンクすることにあった。このことは、単に研究会のメンバーとの関係を参照的に言及することだけではなく、〈論文〉作成のスタイル自身を変えることでもあり、その結果、〈論文〉での問いかけ自身も変えていこうとすることにつながっている。伊藤のこのような態度は、研究会でも冒険的で実験的であると評価された。

(文責:家高洋)

第5回研究会

◆日時:2005年12月8日(木) 14:40~17:30

◆参加者: 家高洋・伊藤遊・加藤敦典・加藤謙介・久保田美生(メディアスタッフ)・Stella Zhivkova・
田沼幸子・樋上千寿・森宣雄(司会)

◆提出されたディスカッション・ペーパー:

Stella Zhivkova "A Slightly Different Hamlet Soliloquy: To be or not to be ...interesting
- The choice of a Musician and a Musicologist"

田沼 幸子 「小さな、大きな物語:キューバの調査報告のための試論」

◆概要:

ジヴコヴァは、出身国であるブルガリアで人気のある音楽家Ilevの事例を、自らの研究上のジレンマを打破する糸口となる例として考察した。「コモン・ピープル」にもわかるように研究結果を提示するには、学問的な価値を犠牲にせざるを得ないと考えられがちである。しかし、Ilevは、クラシック音楽でも最高の評価を受けているにも関わらず、現在のブルガリアにおいて、人気はあるが通俗的な音楽という評価の、ロマ(「ジブシー」と呼ばれる人びと)の音楽Chalgaを演奏し、人気を博している。ジヴコヴァは、同じことが、研究論文を一般向けに書くときにも可能なのではないかと考えた。これに対し、Ilevがよい教育を受けた音楽家で、クラシックから通俗的な音楽へと流れたように、ジヴコヴァの研究も、アカデミックから一般へ、という流れがあるのではないかと、という指摘や、Ilevは本来、別のものを接合しているのではないかと、といった疑問や、アカデミックか一般か、ではない、第三の文体を考えだす方法があるのではないかと、という提案があった。これに対し、ジヴコヴァは、誰もが興味を持って読めるが、ある部分はわかり、ある部分は違うこともある、多層的な論文を書きたいと答えた。

田沼は、「インターフェイスの人文学」の別の論集で同時期に出版が予定されていた論文をDPとして選んだ。その理由は、このペーパーの誕生に、本研究会の議論が資していること自体を事例として描くエッセイを書く予定であり、このときの議論で得た考察を、更に寄稿エッセイに反映させたいためだと言明した。DPとして提出した「大きな、小さな物語」では、キューバ革命(1959年)時から、ユートピアが実現すると考えて育ってきた人びとが、現在、自分たちの状況をアイロニカルに語る様子と、経済危機後に調査を行い、その実態を「結局、革命は意図せざる結果に終わった」と描く(西側)人類学者とがアイロニカルに語る語法とが、似て非なるものであることを説明した。このDPの説明のなかで、人類学においては、しばしば、アカデミックな論敵には激しいアイロニーを用いた攻撃が加えられるが、コモン・ピープルに対しては、いかに非合理に見えようと、アイロニーを用いて論じるべきではないという暗黙の前提があることをあげた。そして、本DPはこれを転倒させる試みだった、ということが、議論の過程で、書いた田沼本人にも明らかになった。これに対して、アカデミックとコモン・ピープルを分けない書き方とアイロニカルな書き方にはつながりがあるのではないかと、という指摘などが出された。(文責:田沼幸子)

第6回研究会

◆日時:2005年12月22日(木) 14:30~17:30

◆参加者: 李吉鎔・家高洋〔司会〕・伊藤遊・加藤敦典・Stella Zhivkova・田沼幸子・Jessica Bauwens・樋上千寿・森宣雄

◆提出されたディスカッション・ペーパー:

Jessica Bauwens “Finding meaning in ‘yama nashi, ochi nashi, imi nashi’—women and girls creating alternatives to homosocial and heterosexist pornography”

樋上 千寿 「ディシプリンという場:「非-場」を生きる研究対象と、それへのアプローチの方法」

◆概要:

バウエンスのペーパーは、「ボーイズ・ラブ」とも呼ばれる〈やおい〉と〈スラッシュ〉を、フェミニズムの歴史的な経過を踏まえた上で評価したものである。70年代以降のフェミニズムにはホモセクシュアルとヘテロセクシュアルとの対立があったが、〈やおい〉と〈スラッシュ〉はこの対立を超えており、そのフィクショナルな性格上、(比較的)harmlessなポルノグラフィではないかということがバウエンスの主張である。研究会では、まずこのharmless / harmfulということが議論された(誰にとっての、何に対する害であるのか、その害は社会的にはどのようにみなされているのか、etc.)。また、マンガの読者層の変化も指摘された(「キャラクター」から「キャラ」へ)。いずれにしても、〈やおい〉と〈スラッシュ〉というサブカルチャーの動向に基づいて社会的な通念を問い直そうとするバウエンスの態度は、研究会にとって刺激的であった。

二番目のペーパーの筆者である樋上は、シャガールの研究者であるだけでなく、シャガールが生まれ育った東欧ユダヤ人社会の音楽(クレズマー)の演奏者でもあり、美術史学会の発表でも音楽を取り入れている。それゆえに(論文に代表される)言語的な表現様式と(音楽などの)非言語的な様式との関係についての議論が期待された。樋上によれば、クレズマーを演奏することはまず東欧ユダヤ人社会のイメージを共有するためであるが、それ以上に、音楽を実演することによって発表の場自身が変わり、発表への理解も進むという効果が生まれるということであった。また、音楽や作品の図像の歴史的解釈など多様なアプローチによってシャガールを解明しようとする樋上の態度には、シャガールに対する樋上の愛好・愛情がにじみ出ており、このために、シャガールに関心のない人であってもその研究の意義が理解しやすくなるとの指摘がなされた。

(文責:家高洋)